

僕、警備員大一郎です

桜田 靖

僕は鉄甲（てつかぶと）大一郎という、いかにも警備員に相応しい名前の男子です。見てくれも名前負けしていません。顔は鉄人と呼ばれても可笑しくない厳しさを備え、何と言っても電車に乗ると他人の頭の上に肩から上が飛び出す背丈なのです。これでも赤ん坊の頃は可愛かったそうです。店に来る買物客のオバサン達がお愛想に「いいいい、いい、ばあー」すると、この顔でキャツキャツと飛び跳ねて喜び、おんぶした母親が転びそうになったらそうです。家庭では、赤ん坊の頃から成人してもなおお大ちゃんと呼ばれて大事に育てられたので、父母へ恩義は感じて、これっぽっちの恨みもありません。しかし、我が人生にも夢はありません。生家の家業は東京下町の八百屋で、まだ壮年で元気な父母が店を切り盛りしていますが、儲かる商いではないようです、僕が店を継いだ晩には警備業を立ち上げ

て男を上げたいと思っています。しかし、今はいささか凹んでいます。一応休暇をとって実家へ帰る途上ですが、いつそのまま一旦八百屋の跡継ぎの実習をしようかと悩んでいます。ます。チンチン電車の外は轟々と風が吹き荒れています。高名な詩人の『あゝおまへはなにをして来たのだと：吹き来る風が私に云ふ』という高尚な詩文なんか似合わない荒天の日です。ロックバンドの『♪お前何した、何も生きている価値ないバツキヤロー死ぬのも怖い卑怯者：♪』とビートの効いたボーカルの歌声の方がずっと納得できます。鉄のお面を付けたみたいながくて面の皮の厚い青年が、ひとりセンチメンタルな心地に浸りながら都電の荒川線に揺られているのです。電車の窓外は低く垂れ込めた灰色の雲で覆われています。ここにしか僕の帰るべき居所がないようです。先々月に家を出てから、勤め先の会社に提出する身元保証書の署名を父親に頼んで何度か連絡はしていました。だから

突然帰ってもたいして驚かないだろうと思っ
ています。
鉄甲家は創業明治時代と聞く東京下町の八
百屋で、僕はその店の総領として生まれまし
た。鉄甲という珍しい苗字は、その昔々は『あ
かかぶと』なる読みだったとも伝えられてい
ます。いずれにしても人前で呼ばれたら、恥
ずかしく感じるものでした。学校での渾名は、
親しみをこめて苗字に因み『鉄っちゃん』が
普通でした。が、親しくなると『かぶと』とか
らかわれたり、陰では『鉄仮面』と笑われて
いました。先生から叱られる場合は上背の高
さに因み『電柱』と呼ばれていました。僕は
小さい時から、大きくなったら八百屋さんに
なるんだ、と無邪気に育ちました。でも近所
の商店街の幼馴染が皆、普通高校、大学と当
然のように進学するのにつられて一応大学ま
で通い経営学を学んだばかりに、下町の八百
屋の主になるのかと夢の卑小さに躊躇するこ
とになってしまいました。こんなことなら当

初から商業高校に通っていた方がよっぽどま
しだったと思います。やっと実家のある『荒
川区役所前』の電停に着きました。ホームに
降りた途端、いきなり台風の余波の雨風に打
ちのめされ、手荒くこの数ヶ月の波乱の出来
事を思い出しました。雨風を避けて電停にし
ばし佇んでいたら、やがて上空の雲も薄くな
り雨風は止みました。我が家に向かつてわが
身を進めると、上空の薄い雲からの光りで辺
りの風景が幻のようにほのかに白く霞んでい
ました。まるで白夜の下を歩いているような
底の知らない静けさを覚え、いつしか僕は恐
れ慄いてしまいました。
一秘めた白昼夢
大一郎は、名は体をあらわすに違わず、身
の丈はゆうに一メートル九十センチを越える
長身だった。ただ恰幅はなくヒョロツと痩せ
っぼちの単なるノツポだが、人混みではよく
目立った。幼児の時のことで記憶は全くない
が、一才の誕生日にまだ生存していた婆さ

んが「この子の面の皮は千枚張りじゃないか
ね。」と呆れたそうだ。小学生になったら自分
の顔が気にかかり洗面所の鏡でしげしげと我
が顔を見つめていた。確かに溶接工が顔面に
かぶる仮面みたいな頬骨の張った顔付きは年
頃になったたら写真に写ることはおろか、思春
期になったたら洗面時に鏡に映る自分を鬱陶し
く感じ、なるべく見ないようにした。あまり
の金属的な彼の顔に、道ですれ違う年配の婦
人達には、平気であきれた表情を露わにする
者もいて、ひどく凹んだものである。それで
も高校卒業時のアルバムで、将来なりたい人
物という寄せ書きには、茶目っ気精一杯に『切
られ役専門の時代劇の悪党』と自虐的に書い
て、「かぶと！鉄仮面にチョンマゲはついてな
いぞ。」となおかつ笑われるのだから世話はな
い。親しい友達からは昨日はどこそこにいた
ろう、などとよく言われ、ついつい頭一つ高
いところからキリンのようにキョロキョロす
る癖もすっかり身に付いてしまった。高校の

国語の時間なんか、教科書に近代俳句の高浜
虚子や正岡子規の句の中に、夏目漱石の『す
みれ程な小さき人に生まれたし』の句があつ
たが、その教員が悪戯心で「鉄甲君、この句
をどう思うか？」とニヤニヤした。急な振り
で黙殺していたら教室のあちこちから、可憐
なスマイレの花のイメージとの落差に堪らずク
スクスと忍び笑いが起きた。たまりかねたク
ラス委員のY君が、「先生！これはイジメです
よ。」と注意した途端、後ろの方から誰かの「か
ぶとは背が高いからヒマワリだな。もつとも、
ヒマワリの花はまん丸くて可愛いけどな。」と
野次をとばしたから、やがて教室いっぱい
大爆笑、自分も苦笑しつつ何気なく目にした
普段密かに思慕していたお澄まし顔の女子が
パカッと大口を空けて笑いのけ反る横顔にが
っかりした。平素の聡明さしか知らなかった
その子の歯茎まで剥き出しの黄色く薄汚れた
反っ歯に、淡い憧れも何もかも吹っ飛んで幻
滅の海に溺れてしまい、逆に悲哀感に悩まさ

れてしまった。背の高いことが返って彼にコンプレックスを生んでいた。中学生の頃からはじめたバスケットの部活も高校、大学と情性で続けた。だが店の売れ残りの野菜ばかり食わされて育った身の筋肉は鍛え甲斐のないもので、運動神経も鈍く渾名の一つの『電柱』のごとく、ただの突っ立った木偶の坊の有様で、俊敏な身動きもままならず監督から怒られてばかりいて、大学の二年次には退部した。辞めた発端は監督から部員全員の目の前で、この役立たずと罵（ののし）られたからだった。監督はチームが試合で負けてばかりなのを、当座の目障りな大一郎に八つ当たりし、自分のストレスとか憂さを少しでも晴らしていたのかも知れない。

「鉄甲！お前みたいな役立たずは『トスク』というのだ。」と怒鳴った。彼は何だか意味が分からず、黙って背を丸めて俯いているしかなかった。

「いいか、Tは背が高いからt a l l、Oは

臆病人、Sは慎重、Kは糞真面目だ。頭文字
をつなぐとトスクだろう。明日からお前は『電
柱』でなく『トスク』だ。少しは格好良い呼
び名にしてやったから気分を換えて頑張
れ！』と発破をかけられた。冗談じゃない、
何が電柱だのトスクだのとふざけるな、と直
ちに退部してやった。もちろん試合で活躍し
た思い出は何もないから全く未練もなかった。
『確かに偉い経営学の学士さんに、ちんけな
八百屋のオッサンなんて似合うもんじゃない
わな。』彼が卒業間際の頃、晩酌の冷酒をチビ
リと口にした父は口元を嘲るようにひん曲げ、
メガネの奥には皮肉な光りような笑みがあつ
た。彼が八百屋を継ぐ気はないと母親を通じ
て伝えたばかりの意趣返しであつた。
『まだ、あたし達が元気で働いているから、
大ちゃんは呑気にしているけど、あつという
間に年をとるからね。』と母がカレイの切り身
と白菜の煮付をモグモグ噛みながら口を尖ら
せた。「兄ちゃんが家を出るなら、わたしが家

業を継ぐわよ。」と妹が器用な箸さばきで焼いた干物のアジの身を骨からほぐしていた。妹も面長の長身で美人の片鱗もなかったが、陽気な性格でバレエ仲間からの人望もあり、女子高のバレエ部の主将として活躍するクラスの人気者であった。両親は普通の体格なのに、子供が二人とも超大柄なのはとうに亡くなっていた父方の祖父が昔『六尺』と渾名された大男だったことの隔世遺伝という奴だろうと家族の皆が納得していた。大一郎は、大男総身に知恵の回りかね、という諺ほどはないにしても、あまり先を見ることをしない性格だった。その場その場の対症療法のように、どたん場になつてから、ようやく何事も決めてたん場になつて就職活動も友人達が三年生の頃生きていた。就職活動も友人達が三年生の頃からやっていゐるのを脇目にしながら、自分は四年生の秋になつて、やつとアクションを起こすほどのんびりしていた。もともと就職願望は漠然としたものでしかなく、大学の四年生になつてから何か仕事に就かねばいけない

と 考 え 始 め た 。 と に か く 退 屈 し な い 人 生 を 過
ご そ う と 、 マ ス コ ミ 関 係 に 興 味 を 持 っ た 。 大
学 学 生 課 の 掲 示 板 に 張 り 出 さ れ た 求 人 情 報 を
も と に 、 関 係 数 社 を 受 け た が 、 夜 店 の 金 魚 が
紙 の 網 か ら ズ ル リ と 抜 け 落 ち る よ う に 箸 に も
棒 に も か か ら な い と い う ザ マ だ 。 で も 人 生 に
絶 望 し た わ け で は な い 。 彼 は 吞 気 な 夢 想 家 と
い っ た 方 が 正 し い だ ろ う 。 今 度 は テ レ ビ ド ラ
マ で 格 好 良 い 刑 事 に 懂 れ た 。 警 察 官 に な れ ば
夜 昼 な く 活 動 し 、 退 屈 し な い 人 生 を 過 ご せ る
と 思 っ た 。 交 番 の ポ ス タ ー で 大 卒 警 察 官 募 集
を 知 る と 、 お 巡 り さ ん に 教 え ら れ た 所 轄 署 で
願 書 を も ら っ た 。 指 定 日 に 受 験 し た が 、 学 科
試 験 の 合 格 発 表 は そ の 場 で 即 座 に あ り 、 彼 の
受 験 番 号 は 見 当 た ら ず 、 晩 秋 の 冷 た い 風 の 中
を プ ラ タ ナ ス の 落 ち 葉 を 踏 み な が ら 高 い 背 を
折 り 曲 げ る よ う に 帰 宅 し た 。 そ れ で も 夢 想 家
を 自 覚 す る 彼 に 絶 望 は な か っ た 。 彼 の 癖 は 白
昼 夢 を 見 る こ と だ と 言 え た 。 口 に は 絶 対 に 出
さ な か っ た が 心 の 奥 底 に は そ の 白 昼 夢 の 炎 を

揺らめかせていた。せめて色んな職業を経験し、社会を隈なく観察してからルポライター位にはなりたい、という下心はあった。これまで古今東西の英雄伝の乱読という程ではないが、織田信長、徳川家康の時代物や荒木又衛門、宮本武蔵の剣豪伝、又カエサル、ナポレオンなどの戦記物語や三国志など、小説でも劇画でも読んでその格好良い主人公の誰にでも心酔していた。とにかく生きてさえいれば何かの弾みでいつの日か自分にも運が巡つて来ないとも限らないし、いつの日か何となく何かの好運で有名人間になれるかも知れないという白日夢を見ているだけで、大学卒業までの日々は自己完結して満足な面があつた。しかし大学を出てしまったら現実の日々はコンクリートの壁に囲まれた牢獄さながらで、彼の白昼夢は押し潰されそうになつた。何処かへ飛翔しなけければいけないと、大一郎の夢の翼はもがいた。親の八百屋の店先に手伝いの店員として立つことさえ、自分なりのプラ

イドみたいな沽券が許さなかった。何といつても、同級生も何人かいる近隣の店々の主連中の目が気に喰わなかった。向かいの肉屋、斜向かいの乾物屋と焼き鳥屋、両隣の文房具屋と金物屋、小さい頃から背高ノッポの大ちゃん、目は立った存在だった。パラサイト、ニート、ちよつと働いてフリーター、何をして、も彼らから冷笑の視線をぶつけられるようで、外出さえも億劫になつてしまつた。立派に働きの口を見つけている幼馴染に較べられているようにで、修行という言葉を思い付いて、家を出ること、を父母に了承させた。これでともかく、近隣の商店主達やその家族、就職に成功した幼馴染達の嘲りの眼から逃れられると納得した。為徒食している大一郎を鬱陶しく思っているはずだったからである。父は大一郎の出立の前、晩、ビールで赤くした顔で珍しく柄にもない理屈を言つた。

「なあ、俺は自分の無学を恥じてせがれを大
学まで出したんだよ。だから、大ちゃんが好
きなように生きても何にも文句を言う積りは
ない。だが、生活に支えを持つていうか、
原点だけは失わないで生きろよ。俺に教えて
くれなくてもいいが、何か志は持つている
な。」と念を押すように言われた。大一郎は父
の言葉足らずの部分について問い質すべきか
とも思ったが、どうせ八百屋のオッサンの言
いたいののは、人の道を踏み外して世間に顔向
けできないようなことだけはするな、という
ことだろうと勝手に解釈し言葉を呑み込んで
うなづいた。自分自身の心には、夢だけはひ
とかどのジャーナリスト、それが叶わなくて
もせめて希望はフリーのルポライターになり
たいという原点にぶれないような生き方をす
るんだ、と自分の心に半ば無理矢理に納得さ
せ、黙ってお相伴のビールを喉に流し込んだ。
それがどうせ白日夢のようなものに過ぎない
とは妙に理解していても、心の隅っこに棲み

ついでいて、どうにもならない自分が情けな
かった。　　「東京にいたって、夢や希望を話しかける星
も見えないからねえ。」と大一郎は唐突に愚痴
を口にした。父は不意に嚙んでいたイカの刺
身をぷつと皿に吐き出すと、「おい、その面で
口にする科白かい。二枚目の役者じゃあるめ
えし、笑わせるなよ。」と又そのイカ刺しの端
切れを口に戻した。　　「そうだよ。文句があるならお月さんに言い
なよ。たまには見えるじゃないのよ。何不自
由なく育てたのにねえ。」と母が嘆いた。父は
すっかり酔っ払ったせいか前に言ったことも
忘れ、「だからぼうつとした子になっちゃった
んだよ。貧乏人の子の方が目先がすばしっこ
いから、世間に出たらお前なんか負け犬にな
るに決まってる。嫌になったら、いつでも
帰って来いよ。」と決め付けた。大一郎はその
父の言葉が夜も眠れぬほど口惜しく、何度も
大きな寝返りをうちながら絶対に家を出て成

功してみせてやると決意だけは固めた。
二 北の都へ苦渋の旅立ち
結局、居所を常に明らかにする、完全に経
済的に自立した生活をする、もし親が重篤の
病気に罹ればとにかく帰って来る、という条
件で彼は両親を納得させ家を出ることになっ
た。携帯電話は、とやかく父母から電話がか
かって来そうで持たないことにした。
「人生甘いもんじゃないと分かったら、すぐ
に帰って来い。自分から家を出るといったか
らには一錢も渡す金はないからな。何不自由
なく呑気に育ったんだから、思いつ切り苦勞
して来い。だが金に困ってもドロボウはする
なよ。お前さんみたいな図体のでかいのは、
悪いことをしても目立つからすぐに捕まっち
まうよ。新聞なんかに掲載したらみつともない
からな。」と父親から甚だひどいはなむけの言
葉をもらったが、ともかく親元を離れる解放
感の方が魅力的だった。自分には、古ぼけた
庇（ひさし）と庇の間の路地の狭い空の下で遊

びながら育った思いしかないもので、これから
広漠たる大空の下に暮らすことになるという
夢が叶ったことへの喜びが勝っていた。いつ
しか武者修行に出かける剣豪の卵の心境にな
っていた。季節は五月になつていた。子供の
頃から遊んだ下町の狭い空は見飽きていた。
先ずは北国の広い大地、北海道を目指そうと
考えた。これから夏に向かうが北の都は清々
しい心地に思えた。ただ問題は金だった。親
から一錢も渡す金はないと言われたからには、
意地でも何とかせねばと恥じも外聞も捨てて
幼馴染の連中に電話をかけまくり、この春、
初月給を手にしたばかりの彼らから何とか八
万円ばかりを掻き集めた。皆一様に何に使う
のだと訝ったが、そのうちに返すからと無理
矢理承知させた。「とにかく苦労しろ。金は自
分で稼いで自活しろ。」と父に突き放された時
は、北海道へ行くのを止めようかと落込んだ
が、これでもかく札幌まで行けば後は何と
かなるだろうと決心した。さすがに心配した

のか、旅立ちの朝、母が朝飯の後で父の目を盗んでそつと渡してくれた十万円の現金、これで総額十八万円、大卒の初任給には及ばずとも結構な額で勇氣百倍になり母心が有り難かった。父に突き放された時はやたらに腹が立ったが、人間窮地に陥ると火事場の馬鹿力のように力も湧いて金を掻き集め、同時に思おもよらなかつた母からの恵みにもありつけ、自分には天が味方しているのだ、と大一郎は呑気に考えていた。父が吐き捨てるように言つた「そのうち親の有難味が分かるようになるに推量りようもなかつた。」の真意は若い彼には推新千歳空港に降りたのは高校の修学旅行以来だつた。連休は明けていたが相変わらず觀光ツアー客で喧騒な空港ロビー、あちこちでツアコンが雑多な服装の団体に旅の説明を声高にしているのを横目にトランクを押して札幌行きのバスに乗つた。電車の方が速いのか、バスの車内は閑散としていた。沿線は緑の原

生林が減って人工の工作物が増えた気がした。
「次は『月寒』（つきさむ）」とテープのアナ
ウンスがあり札幌の郊外に來たという実感が
わいた。修学旅行の時、隣席の物知りの友が
「ここは、以前は『ツキサップ』といって、
アイヌ語の小川を意味するチキシヤフが元な
んだよ。」と教えてくれたことを懐かしく思い
出した。本当に賢い子だと感心したものであ
る。その友は都内の超一流大学に進学し、更
に大学院へと進んだと聞いている。エリート
という眩しい言葉と共に旧友の伶俐な横顔が
臉の裏に一瞬浮かんで消えた。「間もなく札
幌の市街地にバスはいます」と車内アナウ
ンスがあり、当てもない旅の現実に目覚め、
何処で降車しようかと思いをめぐらせた。東
京都心と遜色のないビル街が車窓を流れる。
テレビ塔が目に入った『大通り公園』で降り
てひとまずベンチに腰を下ろした。よく晴れ
渡った空だったが、北の陽光にはまだ冷たさ
があった。建物だけを眺めていたら、テレビ

の旅番組で見たことのある、どこかヨーロッパの街にいるような異国情緒に浸れた。しかし、それも束の間のことだった。これは単なる旅行ではないという現実には重たかった。公園の木々をそよぐ風音にさえ、父母や妹と離れて剥き出しになった孤独に塩をすり込まれるような刺激を感じてしまった。「安い宿を見つけよう。それから仕事探しだ。」自問自答しぶつつけ本番の厄介さに襲われた。友達から借りまくり、母がそつとくれた十八万円の支度金も、すでに航空運賃などで何万円か羽根が生えて飛んでしまったように消えた。一日くらいは札幌観光も良いな、などと甘い旅情も浮かびはしたが、すぐに厳しい現実には引き戻され夢は吹っ飛んだ。ここは我慢するしかないかった。大一郎の何となく派手さを忌み退け、粗衣かつ愚直に生きて来た性格が役に立ったのかも知れない。「原点が大事だよ。」と自分に言い聞かせた。白い時計台のある繁華街に近い裏通りの廉価なビジネスホテルに

宿泊した。取り敢えず二泊、前払いを要求された。小奇麗な部屋だったが、窓のカーテンを開けたら隣のオンボロビルの壁しか見えなかった。夕飯はコンビニの弁当で済ませた。本場の札幌ラーメンを食べても良かったが、東京で散々食べたもので、たいした代わり映えもないだろうと思った。ついでに夕刊のスポーツ紙を買ったら、案の定求人募集欄が大きく掲載されていた。配管などの工事人、清掃員、マンション管理人、配達員、警備員が多かった。丸つきり活躍はしなかったが、バスケットをやっていたので並みの者より体力はあり、どういう世界か見当はつかなかったが、警備ならすぐにでも出来る気がした。募集欄には『常駐警備員急募！独身寮あり、月収二十万円以上(株)鈴蘭警備保障』とあり電話番号の案内があった。正規の住居も定めていないのに、急募の文字に焦眉の焦りを感じた。鈴蘭という花の名を冠した社名も涼しげで好ましかった。

翌朝九時を待ちかねて鈴蘭警備保障に電話をかけた。ただ呼出音がするだけで胸騒ぎが起きたが、根気強く十分置きぐらいにプッシュボタンを押した。十時半頃ようやく野太い声の応答があった。息をはずませ求人欄の件を口にしたら、名前と年齢を尋ねられた。「若い人だねえ。それに鉄甲さんとは勇ましい名前だねえ。これはアルバイトじゃないよ。それに、うちは給料の前貸しはしないからね。」と電話の声はいきなり無礼な言い草だった。「長く勤めますのでよろしくお願いします。」大一郎はとにかく職を得たくて精一杯の建前を言った。飯なんか給料をもらうまではコンビニのお結びかパンかカップ麺で食いつなぐ覚悟は出来ている。生涯警備員を続けようと、は、これっぽっちもその気はなかった。色んな職業経験がルポライターになるのに役立つだろう位に算段していた。彼の若さを買われたのか、午後一番に面接するので履歴書を持

参するようになげられた。文房具屋を探しながら、仕事をするには履歴書がいるのだと今更気が付くとは、本当に自分は間抜けだと情けなくなつた。街の広場の無人証明写真サービスマシで履歴書用に顔写真を撮ったら、生来
の鉄仮面は仕方ないとしても、やけに陰影が濃く指名手配の犯人みたいな人相の写真が出て来た。面接で実物を見てもらうのだから勘弁してもらおうと思つた。写真は四枚セットだつた。履歴書には当然ながら住所欄があり、仕方なく宿泊中のホテルの所在地と室番号・電話番号にし、連絡先を東京の実家とした。会社は電話で教えてもらった通り中島公園近くの裏道にあつた。鈴蘭という社名から瀟洒なオフィスビルを頭に描いていたので、看板を見つけて驚いた。何年も塗装をしていない古ぼけたコンクリートの壁が剥き出しの小さな三階建ビルの一階の一室が『(株)鈴蘭警備保障』だつた。今更引き返す訳にもいかず、どうにでもなれと開き直つてドアの脇のチャイ

ムを押した。「鉄甲さんかね。珍しい名前だ。」と中からドアが開いた。六十年配の短軀で肥えた男が立っていた。応接椅子に座るよう促された。「いやあ、忙しくてね。この後、またすぐ出かける用事があるんだよ。」と鼻や額を手の甲でこすった。営業部長の石塚と名乗った男は、大一郎が差し出した履歴書を凝視した。分厚いレンズの黒縁メガネを時にずらして黙っている。愛想は悪く無さそうだが、ギトギト脂ぎった体臭が漂っているように感じ、大一郎は少々求職を早まったかと後悔したが、気に入らなければこちらにも断る権利があるのだと自分を奮い立たせながら質問を畏まって待った。部長は、「背が高く制服が規格外だな。特注は高いからな。」と大一郎には耳の痛いことを呟きながら、丹念に履歴書をチェックしていたが、突然顔を上げると彼の顔を上目遣いに舐めまわすように見つめ上げ質問を始めた。

「学校を出たばかりだね。就職できなかったのかね。」

「ええ、志望した先には入れませんでした。」

「住所がホテルじゃないかね。宿無しは警備員になれないぞ。」無礼な言われようだったが、

この事態では甘んじて受けるしかなかった。

今度は大一郎の頭のテッペンから靴の先までしげしげと眺め渡して質問を続けた。

「まさか、家出とか何か事件で警察に追つかけられているとか、そういうことはないよ

な！」そらおいでなさった、と大一郎は覚悟した。当然に不審に思われる点で、あらかじ

め返答は用意していた。

「ええ、そんなことは冗談でもありません。

自分は遠い先は家業の八百屋を継ぐのです。しかし、両親ともまだまだ元気でその必要は

ないので。大学の時のゼミの仲間が北海道出身で、札幌は良いところだと聞いていまし

たから、この地に仕事を見つけないやって来ました。」と殊勝な態度で答えた。

「札幌の何処が良いと友達に言ったのかね。」
と部長ははじめて顔を綻ばせた。
「はい、夏は涼しく冬も暖房で暖かくて、じ
めじめと嫌らしい梅雨もないそう、何より
カニや牛肉やジャガイモやミルクなど何でも
美味しいそうです。」
「あんな、旅行社のキャッチフレーズじゃな
いよ。本当に甲（かぶと）の似合いそうな顔で
面白いことを言う人だね。」と部長はプツと吹
き出すと大きな顔全体をしわくちやにした。
部長はこれから営業のアポがあるからと断つ
て、明朝の九時にホテルに採用の可否を電話
連絡するから部屋で待つようにとのことで、
ものの十分もかからぬ面接時間で帰された。
帰り道で、やはりどこかアパートに落ち着い
て住民登録を済ませてから職探ししないと不
審人物扱いされると反省することしきりであ
った。北の都の空は清涼に澄んで燦燦と午後
の陽が照っていたが、風にはまだ冷たさが感
じられた。特にやることもなかったの、中

島公園の中を散策したり、ようやく若草が萌えはじめたばかりの豊平川の畔を行ったり来たりベンチにしゃがんだりして時間を流しや、夕刻の七時過ぎ、近くの大衆食堂で焼肉定食を食べると、少しは北の都の観光でもしようにと灯りの照りはじめたスキノ繁華街方向へ歩みを進めた。それにしてもまだ白々と陽光が残っていて、いつになつたら今日の一日は暮れるのか、と大一郎の心はやつと旅人の情に漬かった。

三 幻影の新任警備員教育

朝八時過ぎにけたたましく電話の呼出音が響き、彼は用便中の洗面室から飛び出した。あわてて額をしたたたかに鴨居の上にぶつつけた。フロントから女性の外線取次ぎの案内があつた。

「鉄甲君だね、残念だが社長の審査で不採用と決まったよ。」石塚部長の無機質な声を虚ろに聞き流し、おでこをさすりながら大一郎は住居を定めてから求職活動すべきだったと改

めて後悔した。父母の顔が浮かぶと実家が無性に恋しくなった。住居といつても不動産屋を訪ね身元保証人がいなければ信用してもらえないだろう。大一郎はすっかり憂鬱になつた。彼は何だか面倒臭くなり、小樽や函館の観光をしたら、実家に詫びの電話を入れて戻ろうと思つた。北海道名物の新鮮な毛ガニや生寿司をたらふく食べて金を使い果たし、家に帰つて八百屋の手伝いをして暮らせば良いだろう、と投げ遣りな気持ちちが勝つた。チェックアウトして札幌駅に出ると小樽行きの電車に乗つた。電車の窓に海の波が輝いていた。しかし目に沁むばかりの五月の光りと裏腹に三日坊主で志を折るショックで大一郎の胸の内は真つ暗闇のようだった。鬱々と鉄路のガタゴト鳴る音を聞き流しているうちに小樽に着いた。重いトランクは駅の手荷物預かり所に置いた。昼時には早かったが駅のそばの魚料理屋に入ると、それまで碌なものも腹にしなかつた鬱憤で生寿司を鬼のように頬張つた。

腹が膨れたらあてもなくレンガ街をぶらつき、
さして興味もない文学館で時間をつぶし、通
りかかったタクシーを拾い鯁御殿の見学を終
わつても、なお初夏の日は高かった。函館に
行くのが何だか億劫になった。札幌に戻りも
う一泊し市内観光をして帰京しようと思ひが変
わつた。母からもらった十万円はともかく、
友人から借り集めた八万円は早々に返した方
が良いに決まっている。大一郎は自分ながら
計画性もなければ堪え性もない人間性に呆れ
果てていた。まだ日が高々と照っている札幌
駅に戻った。トランクを又手荷物預かり所に
置いて身を軽くすると近くの北海道大学の構
内を目的もなくうろついて時間をつぶし、や
つと夕刻、札幌駅で実家に連絡をする気持ち
になつた。いきなり帰つても親は驚くだろう
から、公衆電話から予告しようと思ひボタンを
しかけた時だった。
「鉄甲君、君は背が高いから目立つなあ。」
脇から肩を叩かれ、一旦手にした電話器を元

に 戻 した。石 塚 部 長 が 立 っ て いた。

「 あ れ か ら 一 時 間 た っ て いた かな あ。ホ テ ル

に 電 話 し た ら チ ェ ッ ク ア ウ ト し て いた ね え。

あ ん た に ピ ッ タ リ の 仕 事 が あ る よ。う ち の 社

は 社 員 寮 も あ る か ら 住 居 の 心 配 を し な く て 大

丈 夫 だ。良 か っ た ら 明 日 待 っ て いる よ。」

「 何 時 に お 伺 い す れ ば 宜 し い で し ょ う か？ 」

「 そ う だ ね。午 後 一 番 で 良 い だ ろ う。」

今 度 は 採 用 し て く れ る 口 振 り だ っ た の で、大

一 郎 は 承 知 し 同 じ ホ テ ル に も う 一 泊 予 約 を 入

れ る こ と に し た。石 塚 部 長 は 通 勤 の 帰 り で、

「 じ ゃ、明 日 だ よ。」と 重 そ う な カ バ ン を 提 げ

て 改 札 口 に ゆ っ た り と 歩 い て 去 っ た。

翌 日、指 示 さ れ た 通 り 午 後 一 時 に 会 社 に 着

いた。一 昨 日 と 同 様 に 部 長 だ け が 待 っ て いた。

ひ な 壇 に 部 長 の デ ス ク と 向 か い 合 わ せ に 一 対

の 事 務 机 が あ る だ け の 狭 い 事 務 所 だ が、そ れ

に し て も 会 社 に し て は 不 気 味 な 程 ほ か に 人 の

気 配 が な い と 大 一 郎 は 思 っ た。

「 正 直 に 言 う け ど、お 父 さ ん に 電 話 さ せ て も

らうよ。身元をしつかり確認しないと常駐警備員にはなれないからな。大切な顧客の財産を預かるのだからね。分かるだろう。」

「ええ、そうですね。」

「家出だったらこの話はないことにするからね。」

「そんなこと百パーセントありませんよ。社員寮はどちらになるんですか？」ホテルをチェックアウトし大きなトランクを抱えてやって来た大一郎は急に今夜の寢床の心配をした。

「そうだな。まずはあんたのその全財産を置いて来て来るとするか。ちよつと付いて来なさい。」立ち上がった部長の後ろからトランクを転がしながら行った。ビルの外に出ないで廊下を階段まで歩くので妙な感じがした。二階へとあごでしゃくられた。階段では大きなトランクを抱え上げるのによろろと足どりもおぼつかなく、我が荷物ながらあまりの重さに部長について行けずにいると、「見かけによらず力はないのだな。会社の中に寮があつて

便利だろう。」と振り向きながら笑われた。住まい探しの手間がなくなり、確かに思いもかけぬ僥倖だと思った。二〇五号室の前で鍵と南京錠を手渡された。ドアの鍵は理解できたが、南京錠には不思議な感じがして部長の顔を黙って見つめた。二DKで台所と風呂と便所は共用だが、中の二室は相棒とのシェアで、そのための南京錠だと説明してくれた。一相方が夜勤明けで寝ているかも知れないから静かに入りなさい。南京錠の付いてない方があんたの部屋になる。荷物を置いたら部屋に南京錠をしてこの玄関の施錠も忘れず事務室に戻って来なさい。」と部長は階下にさっさと降りていった。トランクを部屋に入れたついでに押入れを空けてみたら、手回し良く業者に頼んだのか、真新しい毛布や蒲団などの寝具が詰め込まれていた。大一郎は信用の置ける会社に就職できたようで、先程の四苦八苦したトランクの重さも忘れて嬉しくなり足どりも軽く事務所に戻った。

「この警備員採用の一件書類を準備してもら
うよ。いわゆる入社手続きだよ。」といきなり
紙片を手渡された。警備員登録に必要な書類
の一覧表だそうで、忙しいのか早口でまくし
立てられた。
「履歴書は先日預かったものがあるけど、こ
れは使えないよ。」と新しい履歴書用紙を渡さ
れ、写真は剥いで貼りかえるように指示され
た。
「住所欄はここの住所と社員寮の部屋番号を
書き込んでおけばいいだろう。それと電話番
号は、この会社の電話にしておきな。それ以
外は、今日の日付で同じように記入しておき
なさい。それと欄外に大体で良いから身長と
体重を書いといてくれよ。住民登録はもちろ
ん東京のままだな。お父さんに転出の手続き
をして書類を送ってくれるよう頼みなさい。
それが届いたら公休の日にここの区役所に転
入の手続きをして、住民票を交付してもらえ
ばいいよ。その時、本籍を省略しないように

してくれよ。このアルコールや麻薬の中毒者でないという診断書も、休みの日にこの辺の町医者に行けばすぐに作ってくれるよ。顔写真も出してくれよ。他の書類は、この住所真は四枚セットで撮ったろうから、残りの三枚も出してくれよ。他の書類は、ここでお父さんに郵送で署名と判子を押せば済む書類だよ。ああ、そうだ。身元保証書も東京のお父さんに郵送して送り返してもらいなさい。」と誓約書、身分証明書申請委任状、成年被後見制度の登記事項照明書申請委任状、身元保証書、それに一度提出した履歴書を渡された。あらためて履歴書の顔写真は、警察の指名手配犯人みたいな悪相で自分の顔ながら目をそむけたいほど恥ずかしい気がした。身分証明書って、もう学生証は切れていますけど：。」と一つだけ訳の呑み込めなかった大一郎は口ごもった。一般に世間の人は『身分証明書』を知らないけど、役所の戸籍課が禁治産者や破産者でないことを証明してくれるものだよ。」と部長

は笑いながら説明した。『誓約書』とは、未成年者でなく、禁治産者や破産者でなく、成年被後見人でなく、禁錮以上の刑に処せられ五年を経過しない者でなく、最近五年間に警備業法の規定などに違反した者でなく、暴力団員でなく、アルコールや麻薬の中毒者でなく、精神機能にも障害がない、と誓約する警備業独特の書類だった。警備員は重要な仕事をす

るのだから、鬱病やノイローゼの患者でも駄目だ、と説明してくれた。

「先方さんはあんたを連れて、明日の朝一番で来てくれと言っている。わたしは夕方まで出かけるから、あんたは書類作成が済んだら研修室でこのビデオを見ていなさい。見終わったら本に目を通しておきなさい。」と指示し、警備業法の解説、常駐警備実務、自衛消防活動、警備員の礼式、護身術のビデオ五巻と警備員必携という冊子を手渡された。研修室とは名ばかりで事務所の片隅をボードで仕切った狭いスペースにホワイトボードと長机、三

脚の折りたたみ椅子、ビデオセットがあった。
「電話が鳴っても出なくて良いからな。もし
来客があったら、わしは夕方戻って来ると伝
え、何か伝言があったら聞いといてくれ。相
手が待つと言うなら待ってもらっても良い
ぞ。」と応接椅子を指差した。ずいぶん無用心
な警備会社だと思ったが、金庫も見当たらな
いし、金目のものは置いていないようだった。
それにしても客商売の八百屋に育った彼には、
会社が本当に営業しているのかまだ半信半疑
だった。結局、電話もかかって来ないし来客
もなく夕刻になった。大一郎は、言われた通
りビデオデッキを操作し、立て続けに二時間
半位かけてビデオの再生画面を見続けた。賢
いA警備員とドジなB警備員による日々の勤
務がドラマ仕立てになっていて初心者の彼に
はなかなかの参考になった。警備員必携の冊
子をペラペラとめくっていたら部長は帰って
来た。住所、氏名を記載し押印を済ませた誓
約書と住所を訂正した履歴書に残りの顔写真

三枚を取り敢えず手渡した。身長は一メートル九〇センチ、体重は六五キロと大雑把に記入しておいた。

「あのう、写真、撮り直しましょうか？」大一郎はまだ拘っていた。

「こんなもんで良いよ。実物通りで変わりないじゃないかね。」

「そうですか。」大一郎は安心と同時に自分の容貌に失望した複雑な気分になった。

「ビデオは見たかね。ためになっただろう。」と目を細めた。

「ええ、この警備員必携の方はまだ読みかけです。」と正直に答えた。

「そこに書いてあることはそのうちに自然と体で覚えるから心配しなくて良い。今日は部屋に戻って荷物の整理をなさい。明日は八時にここを出かけるからな。多分泊まりになるからタオルとか洗面道具の用意をして来なさい。ご苦労さん。」と帰された。いきなりビデオテープという幻影を見ただけで警備実務

に着任とは驚いたが、当分は見習い勤務だろうと思つて黙つて事務所を出て二階の自室を開けた。

白髪頭の六十年配のズングリムツクリの男が上は茶色のジャージー、下はパッチ姿でフライパンのウインナーソーセージをジュージューと音を立て匂いもまき散らして炒めていた。

相部屋の人だとピンと来たので、すかさず挨拶をした。

「このたび入社致しました鉄甲大一郎と申します。よろしくお願い致します。」

「ああ、『鈴蘭』の兄さんかね。聞いていたよ。それにしても勇ましい名前だねえ。戦争でもおつ始めるのかね。まあ、よろしく。それにしても馬鹿に背が高いなあ。この前辞めたばかりのぼおつとしたオッサンと同じ位あるよ。それにしても若くて羨ましいなあ。」と目尻を細めたが顔は笑つてなく少し不気味に思つた。

「自炊なさるんですか？」馬鹿だけは余計だろ

う、とちよつと癪にさわつたが、新入りの

身の上を案じると仕方のないことで率直に聞いてみた。

「俺は網走にカマドがあるんだ。外食なんて贅沢はできないさ。あんたも自炊するなら冷蔵庫を買いな。これは俺の私物だからな。」と念を押された。風呂は共同で使うが、ガス代は二人で折半になると説明された。洗濯機は設置されていないので、近くのコインランドリーを使え、ということだった。それにしても、電気代と水道代は会社持ちとは助かった。

大一郎は近くのラーメン屋にでも入ろうと歩く道々、相部屋の者は大先輩だろうけど名前も名乗らないし、世間の常識の通じない少しヤクザな業界なのかなと心配になった。それに、「カマドがある」とは土地の言葉だろうが、初めて聞くことではつきりと意味は分からなかった。多分、網走に妻子のいる世帯があり出稼ぎの身だということだろう、と納得した。

しかし、石塚部長以外に社長はおろか社員の姿も見ず、奇妙なところに身を投じた不安は

ぬぐいきれなかった。
四　　嘆きの警備員配置
　　翌朝、やはり事務所には石塚部長が一人出
勤していただけだった。
　　「さあ、出かけるぞ。洗面道具の用意はして
来たね。」と念を押す部長は待っていたように、
缶コーヒ―をグイッと飲み干した。
地下鉄に乗って札幌駅で降りた。駅の近所の
大きなビルへ入った。エレベーターで五階に
上がった。大きなオフィスで玄関ドア脇にS
警備保障株式会社の看板があった。受付の呼
びボタンを押すと事務服の女子職員が現れた。
しきりに電話が鳴り人声が喧騒だった。この
雰囲気が本来の会社というもので、鈴蘭警備
保障が何とも不思議な会社に思えた。部長が
用件を伝えると小さな会議室に案内された。
「課長を呼びますからお待ち下さい。」と事務
的に告げると、女子社員はさつさと部屋を出
ていった。大一郎は自分が馬鹿でかく人相が
悪いので、女の子に愛想がないのではと勝手

に憂いていた。やがて若い課長がむつつりと
部屋に入って来た。部長は立ち上がって愛想
笑いをしながら、しきりにペコペコと叩頭し
っぱなしの様であった。
「いつもお世話になってる竹中課長様だよ。
鉄甲君、挨拶しなさい。」と命じられた。大一
郎が立ち上がって一礼すると、
「若いし、背が高いのも前任の親父に負けて
ないじゃないかい。鉄仮面みたいな顔も警備
員向きだな。まあ、制服が無駄にならないで
助かるよ。鈴蘭さんもなかなかの人物を見つ
けてくれてお世話になるね。」大一郎は、鉄仮
面との言われ方は仕方ないにしても、制服が
無駄にならないとは妙な言い草だと思った。
「課長様、本当に毎度お世話になります。今
夜は空いていますか。例のところで一席設け
させて頂きますよ。」と石塚部長は卑屈な態度
で最敬礼をした。
「そう、いつも悪いね。」と竹中課長は始めて
顔を少々綻ばせたように見えた。大一郎は、

今夜は泊まり勤務と言われていたので、自分の就職祝いの席ではないと分かった。この就鉄甲君だったね。凄いな名前だ。これから派遣先に連れて行くけど、しつかり仕事を覚えてくれよ。このところ、警備員の質が悪くてお客さんの機嫌が悪いんだよ。」と言う課長の手には『警備員派遣届』という標題の書類が見え、大一郎のひどく悪相に写った顔写真が貼ってあった。それが目に入って大一郎は又憂鬱な気分にな襲われてしまった。竹中課長に連れられて札幌駅から地下鉄で行った先はA大学に程近い大きな病院だった。新築の病院で植栽はまだ伸びていなかった。処々に置かれたプランターには鈴蘭の花が咲いていた。季節ごとに花を取り替えるだけで大儲けしているんだ。それに較べて警備は苦労ばかりして儲けのない仕事だ。」竹中課長が唾を吐き捨ててるような口振りで愚痴ったが、警備員初心者の大一郎には意味が分かり様もなかった。

通用口から防災センターに入った。面と向かった壁に貼られた大きな模造紙に下手なマジックインクで手書きの太い文字が目飛び込んだ。

警備員心得

一 お客様には親切に接しましょう。

二 あいさつを励行しましょう。

お早うございます。今日わ。今晚わ。

失礼します。お大事にして下さい。

三 仕事には誠意と真心をつくしましょう。

彼は、「今日わ」と「今晚わ」は、「今日

は」「今晚は」の間違いだろうに、と誰が書い

たのか衆人の眼にも触れる場所に臆面も無く

貼ってあり国語力の弱さにあきれた。

「課長、お早うございます。」とデスクから太

った制服の中年男が飛び出して来た。

「山田隊長、新入りを頼むよ。このところ、

三日や一週間で辞められてばかりで嫌になっ

てしまうよ。」

「課長、普通の人を連れて来れば勤まるので

すよ。変なのばかり連れて来るからですよ。」
と隊長はへらへら笑って話を続けた。
「背のでかい子ですねえ。この前辞めたオヤ
ジの制服がそのまま使えますよ。大口班長に
専属で面倒みてもらいましょう。」

「今の若い子は体格が良いよ。警備員は見栄
えも商品なんだ。爺臭い隊員ばかりではお客
さんの印象が良くないだろう。皆が寄ってた
かって、勝手に色んなことを言うから新人が
パニックになって潰れて育たないんだよ。指
導者を指定してやってくれよ。」と竹中課長は
隊長を叱るように言った。他に三、四人の警
備員がデスクでモニター監視などをしている
様子で、新入りの大一郎を冷ややかな目付き
で一瞥した。みんな五十代から六十代の年配
者ばかりで覇気も生氣もない汚い肌をしてい
た。大一郎の指導者になる大口班長は正面口
ビーに立番中とのことで、彼は山田隊長に更
衣室に連れて行かれた。

「先日、君に負けない大男が辞めたばかりで、

その制服がとってあるんだ。具合は着てみな
いと分らないよ。寸法が合わなかったら課
長と相談しよう。警備員は外観が大事だから
な。警備員の存在そのものが一つの商品なん
だよ。あんたの鉄の仮面みたいな顔は警備員
に向いているよ。」と自分のズングリムックリ
の肥満体を忘れたように山田隊長は厚顔無恥
だった。大一郎は、前任だった男のお下がり
の制服に体を通した。制服の丈の長さはピツ
タリとフィットしたが、痩せ型の彼には若干
ダボダボした。お下がりの帽子は各サイズが
揃っていて、頭の大きさは普通なので丁度合
うものが見つかった。胴に巻きつける帯革と
いうベルトも痩せ型の彼には、どれでも間に
合った。山田隊長は、彼をチラリと眺めた
けで、「みてくれは、まあ、まあだな。こんな
もんだろう。若いから大飯食って肥れば大丈
夫だ。」と勝手に納得しそのまま防災センタ
ーに連れ戻された。大一郎は制服の寸法が間に
合って安堵したが、鈴蘭警備保障という会社

に入社したはずの自分が、S警備会社のネー
ムの入ったワッペンの制服を着用することに
は合点がいかないまま黙っていた。
「今日からシフトに入る新人だ。鉄甲君と言
うそうだ。」
言うそうだとはい何なのだ。今日から同僚に
なる人物に使う言葉だろうか、大一郎は山田
隊長の仲間ではなく他人扱いみたいないな紹介振り
を変えてここに思った。皆は一旦ジロリと彼に目
線を当てると何の興味もないといった風情で
又それぞれ元の位置に顔を戻したので、その
冷淡な無反応が心配になつて隊長の紹介なん
か忘れてしまひそうになつた。心の動揺を鎮
めようと、しばし壁にびつしりの防犯防災機
器に目をやっていた。大体、鉄甲などという
珍名を聞けば、普通の人は顔を綻ばせたり、
ニツと歯を見せたり、何らかの反応をするも
のである。様々な機器からのノイズが絶え間
なく空耳だったかも知れなかつたが、お結び
顔の警備員と禿頭の警備員が顔を見合わせた

時に、どちらかが「もぐりだってよ。」と口にした気がした。

「何だ、昨日のノツポじゃないか。奇遇だな。」立番を交替して防災センターに戻って来た男が、竹中課長に敬礼するや否や目玉を見開いた。大一郎も、寮の相部屋のズングリムックリの男が制服姿でいるのに、もっと驚愕し頭の中が真っ白になり言葉を失った。彼の指導者になる大口班長だった。

「鉄甲君、これから当分あんたを指導する大口班長だよ。敬礼！」と山田隊長が気合を入れた。帽子をかぶったままだった彼はそのままお辞儀した。

「おい、帽子を脱いで頭を垂れるんだよ。」と大口班長に一喝された。

「鉄甲君、ここでは室内では帽子を脱ぐ、廊下やロビーは室外とみなして帽子をかぶる、いいね。」と山田隊長が教えた。そうだったら最初と言えよ、と胸中では反発したが、彼は我慢するしかない身分だった。

「隊長、鉄甲君を事務課長に頼んだよ。」と竹中課長がくだんの警備員派遣届を山田隊長に手渡した。

「課長も鬼塚さんは敬遠ですか？」と山田課長が皮肉たつぷりにニヤリとした。鬼塚とはこの病院の事務課長で、日々の警備業務の窓口であつた。

「そんなことはないさ。よろしく伝えといてよ。次の現場でお客さんが待っているから。」

課長はそそくさと逃げ去るように防災センタ―を後にした。

「大口班長、鉄甲君を鬼塚さんに案内してやってよ。」と山田隊長も事務課長には逃げ腰の様子である。

「俺は班長だけど、今日の当務勤務の責任者だから、仕事中は当務長と呼んでくれよ。」

大一郎は、大口当務長に同道されて帽子を脱ぐと病院事務室の大部屋に入った。制服姿の若くて背が高くごつい顔の新人警備員が入室した一瞬、男女の事務職員らから好奇な目が

一斉に注がれた。事務課長のデスクはひな壇の最右翼にあった。眉が濃く太い目がすわった。厳つい中年男が書類をチェックしていた。二人がデスクの前に立っても顔を上げようとしなかった。課長さん、すみません。失礼します。」大口当務長が声をかけたら上目遣いに一瞥された。顔を上げたなら噛み付きそうな表情をしていた。「敬礼はどうした。警備の基本がなっていない。」と大声を出された。周りの事務員の視線が一斉に大柄な新任警備員の大一郎の背中を向いた気がして、集中砲火を浴びている思いで恥ずかしかった。「それは失礼しました。気を付け！敬礼」と当務長の号令で二人並んでお辞儀をした。「もっと背筋をピンと伸ばして、腰を折るように十五度の敬礼をするのが警備員の礼式だろ。何だ、その田舎道で婆さん同士が出会ったような肥え溜め臭い挨拶は！」と叱られた。クスクスと事務室のあちこちから男女の

失笑が聞こえた。大一郎は教育ビデオの中で、警備員が何度もキビキビと礼をしていたシーンを思い出した。しかし大口当務長は鬼塚課長の叱責にも、蛙の面に小便さながらの慣れた様子で顔色ひとつ変えなかった。「すみません。今日から配置の鉄甲君です。警備業法の新任警備員三〇時間の受講を終え、今日から実務研修に入ります。」と隊長から預かった警備員派遣届を差し出した。大一郎は新任教育三十時間とは、ずいぶんとサバを読んだものだと思われて聞いていた。鬼塚課長は目の前に出された書類を右手で引っ手繰るように取ると、貼付された顔写真と大一郎の顔を見比べて、実物の方が少しはましじゃないか、写真だけだったら容貌魁偉じゃないかと、容貌が怪しく異なる方の怪異だな、それに又鉄甲なんて戦国時代みたいな珍名だな、と呟いてフンと鼻を鳴らした。容貌魁偉とは大柄で剛健な外見の男への誉め言葉だが、やはり顔写真が怪異と言われて大一郎は写真

館できちんと撮影してもらうべきだったと後悔した。
「これまでも木偶の棒とかトドみたいなのとか腐ったリングみたいなばかりだな。今度も又背の高い男の子を見つけて来たのかい。前の奴さんの制服が勿体なくて、わざわざ同じ背格好の者を採用したんだな。本当にここに配置される警備員に気の利いたのはいないな。今度も駄目だったら直々に営業部長に電話するからな。警備は体でするものだが、その体に指令をする頭脳もまともであって、やっど一人前の警備員なんだ。あとで様子を見に行くから今のところは分かった。戻って良い。」ずいぶんと横柄で威張った人だな、と大一郎が腹の底から驚いて踵を返そうとしたら、大口当務長に袖を押さえられ、帰りも敬礼をするのだと囁かれたが、正面を向いた時にはもう課長はデスクに座ってなかった。
五　泣き笑いの実務研修
「竹中課長も山田隊長も逃げる訳が分かった

だらう。」事務室を出て警備帽をかぶると大口
当務長は若干胸を張ったように話し掛けて来
た。廊下で医師やナースかとすれ違う度に彼
が挙手の敬礼をするので、大一郎もそれに倣
った。見上げる程の身長の新顔の警備員に医
師やナースも一瞥はくれたが、何の答礼らし
き仕草もなかった。
「私の前任者が何を仕出かしたのですか？」
と大一郎は何かあったと確信して、大口当務
長に探りを入れた。
「気にするな。あの課長は喉が渴いたらしい
な。酒が飲みたくなったら警備員をいじめて
悪者にし、本社にただ酒をたかるんだよ。こ
れから地下の中央監視室へ行つて所長に挨拶
をしよう。この人は温厚で良い人だよ。その
時に教えてやるよ。」と地下二階まで降りた。
中央監視室の標示があつた。この建物の心臓
部で、電気設備、ガス設備、給排気、給排水、
防災防火などの設備を管理する巨大な機械室
があるとのことだつた。周囲を見渡すと色ん

な機器類に取囲まれており、各所で設備員がモニター監視をしたりデータを読み取ったりしており、彼は又別世界に迷い込んだようで気が重くなつた。」「今度も又大きな人だねえ。」「合田所長が感心したようにニコニコ笑顔で迎えてくれたので、大一郎はやつと人心地ついた。敵陣から自陣に戻つた安堵感を覚えた。所長に言われたのか若い設備員が缶コーヒをポンと机に無雑作において機械室に入つた。ドアが開いた一瞬ゴォーと低い音が室内に響き渡つた。」「警備課長はすぐに帰つたのかね。月に一回位は事務課長に挨拶だけでも良いから顔を出し、私のところにもついでに雑談でも良いかなら来れば助かるのになあ。」と所長は嘆き顔になつた。」「山田隊長とは打ち合わせするでしょう。」と当務長が口を出した。」「朝の定例報告には二人揃つて事務課にがん首を出すけどね。私に何も相談しないで、い

きなりお客さんに警備報告をするからヒヤッ
とすることがあるね。先日の『靈柩車事件』
も私には事前になかったからね。ま
あ、うちの会社に責任のあることじゃなかつ
たから我慢するしかないかね。あなた達の警
備隊と、うちには別会社だけど防災防火の設備
管理はこっちの仕事だからね。総合的に病院
管理をしていかないと、お互いに印象が悪い
よ。下手をしたら、S社さんもうちの会社も
共倒れで管理契約を破棄されるよ。」所長の話
も小言めいて来た。当務長は老獺に剣呑な気
配を察したのか話題を大一郎の方に振った。
「所長さん、この鉄甲君は東京出身ですよ。」
「そうだったのかね。珍しい名前だね。東京
はどこにいたのかね。」と大一郎に微笑みかけ
た。
「荒川区です。東京の下町育ちで広い北海道
に懂れて来ました。」と所長の人柄に安心した
大一郎は暗雲が晴れたようにハキハキと答え
た。

「東京では大きな再開発ビルの現場事務所を幾つも担当したね。思い出を語ったらきがないけど、定年後は生まれ故郷の北海道に帰って来たよ。小樽に実家があるからな。たまに東京に行ったら新宿界隈をブラブラし、自分が係わっていたビルを眺めて楽しんでいるよ。『思い出横丁』って知っているかな。そこでホルモン焼きやモツ煮込みで昔の同僚の顔を思い浮かべながら一人酒だね。思い出横丁って入口に綺麗な名前の看板が出ているけど、そんな品なんかないよ。『小便（ションベン）横丁』ってみんな言っていたな。」と懐かしそうな眼で大一郎を見つめた。

「合田所長はゼネコンのお偉いさんだったんだぞ。」当務長が大一郎の方を見て愛想を言った。

「昔は昔さ。とうに過ぎてしまったよ。定年後はこんな穴蔵で安月給取りの老いぼれだよ。」と所長は自嘲した。

「札幌の街の方が東京よりずっときれいで、

どこか外国の街にいるようです。」

大一郎は、やっと良い人に巡り会えて嬉し泣きしそうになるのを堪えた。先ほどいきなり事務課長から愚弄され傷ついた胸の痛みも消散すると自然に顔が綻んだ。

「最初のうちは旅行気分だから、そんな気もするだろう。まだ旅情の中にいるんだよ。そのうち住み慣れたら何変わりない日本にいる感覚になるさ。まあ、何も用がなくてもここに顔を出しな。」と所長が人の気配に気づいて大一郎から顔を逸らした。何か報告で年配の設備員が所長のそばに来たのを潮時に、二人は敬礼をして廊下に出て帽子をかぶった。防災センターに戻ったら、大口当務長は早速書棚から『事故顛末書』を取り出し、すぐに巡回に出るが、その前にさっきの話にあった『霊柩車事件』のくだりを読んでおくように言いつけた。

霊柩車事件報告書

○年○月○日、午前十一時半頃、心不全で

死去した患者柳ヶ浦サキ七七歳の亡骸を引き取りに朝日葬儀社の霊柩車が来たので、その旨を遺族控室に伝えるようにナースセンターから電話連絡があった。電話を受けた出川警備員は新任のため要領が分からず先輩の及川警備員に遺族控室の内線電話番号を聞いた。及川警備員が「いち、れい、れい、れい、ご、だ。」と教えたのを「しち、れい、れい、ご」と聞き間違えた前記出川警備員が内線で七〇〇五番にダイアルし、電話に出た特別個室入院患者の〇〇商事社長山内吾作六五歳に、いきなり「霊柩車が来ました。」と伝え、縁起でもない、不愉快千万と激怒されたものである。この後に、反省点とか善後策や懲罰や事後の顛末まで延々と記載してあったが、当務長が巡回に出るぞ、と声をかけたので閉じて渡した。一昼間の巡回だから、マスターキーと無線機でいいか。」と当務長は自分に言い聞かせているようだった。帽子をかぶって通用口から外

に出た。「さっき見せたのが、あんたの前任の者がしでかした霊柩車事件だよ。新任のオヤジさんだったけど、遺族控室かどうか相手も確かめず、いきなり『霊柩車が来ました。』はないだろう。人生の果てにある死という厳粛な事実を前にして伝える言葉の重さを自覚していない。平素の人生心得が軽率極まりないのだ。警備員というより、先ずは人間としての資質の問題で、事務課長から腐ったリンゴやら木偶の棒やらトドやられでも返す言葉がないだろう。」

「はい、全くその通りで気をつけます。」と大一郎は応じるしかなかった。察するに背の高いい警備員が霊柩車事件とやらで辞めさせられ、後任としてその特注の制服が無駄にならない体格の自分に白羽の矢が立ったようであつた。「当務長さんは若いときからこの仕事をやっていのですか？」若葉が芽吹きはじめた庭園の樹木の下で尋ねた。「いや、警備員をやるのは五十過ぎからだね。」

ずっと炭鉱の町で大工みたいな修繕の仕事を飯の種にして生きて来たがね、次々と閉山では仕方がないよ。」深呼吸とも溜息ともつかぬ大きな息をした。立ち止まると大一郎に早速巡回警備の心得を伝授した。十階建ての宏壮な病院の真上に、五月晴れの紺青の大空が一面に広がっていた。ひとひらの雲も見当たらない快晴の日だった。

「散歩じゃないからな。服装などから怪しい奴がいはいか見回すのだ。病院はドロボウが多くて困っているのだ。それから壁なんかに落書きがないか、要するに普段と違う異常を見つけるのが目的だよ。」と言って歩き始めた。

くると病院を一周すると正面玄関から院内へ入った。

「この前もあつたけど玄関脇の植込みなんかで犬に糞をさせ、そのまま行ってしまう奴もいるんだ。そんなのを見つけたら清掃の部屋に行つて道具を借りて自分で片付けるのがベターだ。掃除の小母さんが片付けると言つ

たつて、いつになるか分からないし、お客さんが見たら気分を害するからな。早く始末するに越したことはないさ。」

「さつき所長さんが言ったように、力を合わせて総合的に仕事をするのですね。」

「おお、馬鹿でかい背格好は変わらないけど、前任のおっさんより良いね。仕事のテリトリーはお互い尊重するけど、急ぎの時は別だよ。防火活動はガードマンが中心だけど、自衛消防隊と違って、全職員で消防活動に当たるって新任教育で習ったばかりだろう。」

大一郎は、一人ぼっちの会社の研修室で見た教育ビデオの消防活動で、ナレーターがそんな風なことを言っていたことを思い出した。

「地下二階から順番に屋上まで巡回するが、非常階段で上り降りる時だけエレベーターを使うのだ。一当務で三万歩以上あるから良い運動になり健康増進だ。」と当務長は張り切っている。地下一階には遺体安置室があった。当務長は霊安所と呼んだ。

「仕事は慣れだからな。これまで霊安室を見ただけで、次から上番しなかつた新任もいたからな。」と当務長は大一郎の顔をジロリと見た。
「別にお化けが出るわけないでしょう。」心なしか大一郎は自分の声が途中から震えた気がした。
「ところが出るんだよ。」と当務長が故意に息を殺した低い声で言った時、大一郎は睾丸が縮み揚るのを自覚した。
「エッ、嘘でしょう」
「この病院の敷地の一部が、元は墓場の上に建っているんだよ。魂抜きやら御祓いやらはきつちりやつただろうが、それでも気色悪いと柱の中にお経を埋め込んだり、梵字を浮き彫りにして慰霊しているのさ。それでもたまには出るぜ。その時は般若心経を唱えれば幽霊は退散するそうだよ。」
「当務長さんは見たことあるんですか？」今度は完全に声だけでなく膝がガクガク震えた。

「ワツハツハツ」と当務長は大笑いで誤魔化して答えてくれなかった。取り敢えず通り一遍の巡回コースを教わり防災センターに戻った。当務長に言われて山田隊長に巡回見習を終わった旨を報告したら怖い顔で、敬礼を忘れるな！と叱られた。昼食は当務長に連れられて病院の職員食堂で干物定食を食べた。合田所長と同じビル管理会社から派遣になっっている清掃の小母さん達と合席だった。あんたも辞めたばかりのオヤジさんに負けない大男だね。ご飯足らないでしょうに。おやつにパンをあげるから後で清掃控室においてくださいね。」

「俺も一緒に良いかい。」当務長が嬉しそうな顔をした。

「あなたは、もう賞味期限切れよ。」

「違うわよ。消費期限が切れているよ。」

「男は三十代限りで、ご用済み！」

「うちの亭主なんて、ダスターシートに放

り込んでやりたいわ。」

「映画『タイタニック号』の泣かせる場面を見たでしょう。あたしだったら助けるどころか、うちのろくでなしの背中を押して海の中に突き落としてやるわ。」

「ところで今度の新人さんは顔が長いわね。あそこも象さんの鼻みたいに長いでしょう。

イヒヒヒヒ！」と六〇年配の清掃婦が汚れた

乱杭歯と口の中の嚙んだ干物の魚肉を剥き出

しにして、それが引き金で笑いの洪水が起き

た。「ワハハハハハ！」「オホホホホ！」「ウ

フフフフフ！」「エヘヘヘヘ！」他にナース

や事務職員もそれぞれがテーブルごとに溜ま

って坦々と食事をしていたが、大一郎の周辺

の小母さんが馬鹿に元気よく大騒ぎをしてい

たので、振り向いて目を向ける者もいた。職

員食堂は地下一階にあり、窓はなく白い壁の

静物画や風景画や人物画などの額入りの絵画

だけが、殺風景な景色から食堂利用者を和ま

せる小道具になっていた。

六 試練の実務研修

午後からは防災センター内の機器の操作マニユアルを教えられた。

「あんたは本来、もう実務研修の身じゃないよ。法定警備員教育の『新任教育三十時間』には、八時間の実務研修を含んでいるし、それを終了したという『鈴蘭さん』のお墨付きを病院側に提出したのは今朝のこととで分かっていているだろう。」と初っ端から当務長は意地の悪い口振りをして話を続けた。

「だから、これは実務指導というのが正しい言い方だと思うよ。でも警備員教育は正確には『三十時間以上』と規定されていると聞くから、その『以上』の分の研修を続けることにやぶさかじゃないさ。」大一郎には、そんな警備業法という法律のことは意味不明だった。

「これはデジタルだ。画面はプラズマだ。」当務長は防災盤を指差して嬉しそうに横文字を口にした。コンピューター関連の難しい講義があるのかと思っただけ、要するに最新型の防

災盤で、発報があったら警報音響と共に火災信号やガス漏れ信号が表示窓にその場所とセンサー番号を電光表示するということだった。

旧型の防災盤はアナログで、火災信号は当該場所のランプが点灯する仕組みになっていると説明されたが、防災盤なんて生まれて始めて目にする大一郎には訳が分からなかった。

「警報がなったら主音響のスイッチを下ろし、この部屋に鳴る音だけは止めなさい。そして表示窓に、例えば六階会議室火災、六一一二と出ていたら、それを素早くメモ紙に書き取り、室内の者に大声で知らせるんだ。原則は、マスターキー、消火器、無線機を持って六階会議室に駆けつけるのだ。その時、必ず階段を使うのだ。何故だか分かるだろう。」

「すみません。分かりません。」と大一郎が正直に答えたら、山田隊長や他の上番している当務員がモニター監視から目を放して一斉にジロリと睨んだ。

「『鈴蘭』で何を教わったのかね。火災と停電

は付き物だから、エレベーターが止まって閉
じ込められたら大変じゃないのかね。」と少し
怒気を含んだ声音だった。

「ビデオを見ただけですみません。」と大一郎
の声は消え入りそうだった。

「次、行くか。ここに残ったものは、この案

文の『非常ベルが鳴っていて警備員が調査中』

という方を、このマイクを使って放送するの

だ。このプレストークボタンを押してゆつく

りと二回繰り返し返して話すのだ。ちよつとボタ

ンを押した積りでやってみな。」大一郎は棒読

みに放送案文を読み上げた。全員が失笑した。

「たぶん『鈴蘭』は何にも教えてないな。」と

山田隊長が苦い顔で呟いた。

「要するに、火災信号が鳴っても火事とは断

定できないのだよ。なぜなら色んな事情で誤

報だらけなんだ。あくまでも現場で火事か否

かを確認して無線機で知らせるのだよ。」

ろくに教育も受けずに大一郎が配置されてい

るのを察知した当務長は少し優しい態度に変

わった。
「火事と分かったら、この非常放送の案文を
二回ゆっくりと繰り返し返すのだよ。」
今度は当務長が模範の空放送をした。火災発
生を病院内に知らせ、自衛消防隊に消火活動
や避難誘導活動を命令する内容だった。大一
郎も真似をしてみたが、何から何までぎこち
なく、本番の火事だったらどうなるのだろう、
と自信喪失すること甚だしかった。自分には
警備員は勤まらないように暗澹とした。
「火事でなかったら、このお詫びの放送案文
を使うのだ。」大変お騒がせして申し訳ありま
せん、という内容だった。これも同じように
当務長が模範を示した後に、大一郎が練習し
た。だんだん慣れて調子が上がって来たが、
機器のミスを何で警備員が謝らねばならない
のかと素直になれなかった。
「ちよつと、あんたには難しい説明かも知れ
ないが、火災信号の受信と非常放送は連動に
なっているんだ。だからプレストークボタン

を押している間は非常ベルが止まって、警備員の放送の声だけがお客さん達に聞こえるのだ。ところが、プレストークボタンを戻すと防災センターにウー、ウーとサイレンの音が鳴り響くのだ。吃驚してプレストークボタンを押すと、サイレンは止むけど、この部屋の大騒ぎが病院内に丸聞こえになるだろう。その時は、連動スイッチを一旦切れば良いのだ。再び放送する時は連動を復旧すれば良いだろう。そんな風で、訓練不足の奴は、サイレンの音にパニックになって冷凍マグローミたいに硬直してしまい何も出来ないのだ。ちよつと熟練のいる高等戦術だけど、俺なんかみたいになベテランになると画面を見ただけで工事関係者が間違えて天井裏の配線を切断し誤報のベルを鳴らしたとか、一瞬に判断できる場合もあるから、その時は主音響も地区音響も一緒に止めてしまおうさ。まあ、一度には頭に入らないけど、少しは耳に残しておいてくれよな。」

大 一 郎 に は 、 ほ と ん ど チ ン プ ン カ ン プ ン だ っ
た が 、 当 務 長 が 口 角 泡 を 飛 ば し て 熱 心 に 喋 る
の で 、 何 と な く う な ず い た 。 当 務 長 は 最 後 に
部 屋 の 隅 の ガ ス の 緊 急 遮 断 弁 の 操 作 方 法 を 教
え て く れ た 。 間 違 っ て 操 作 し な い よ う に 二 段
式 操 作 に な っ て い た 。 英 語 で 失 敗 し て も 安 全
と い う 意 味 の シ ス テ ム を 『 フ ェ イ ル セ ー フ 』
と い っ て 、 大 事 な 装 置 に は 人 が 勘 違 い し て 操
作 し て も 作 動 し な い よ う に 安 全 装 置 が 施 し て
あ る と 、 彼 は 自 慢 そ う に 鼻 の 穴 を ふ く ら ま せ
て 喋 っ た 。 ガ ス 漏 れ は 、 で き る だ け メ ー タ ー
コ ッ ク な ど で 、 そ の 地 域 だ け の ガ ス 栓 を 閉 止
す る の が 原 則 だ が 、 や む を 得 な い と 判 断 し た
ら 、 こ の 大 元 の 栓 か ら ガ ス を 遮 断 す る 最 終 手
段 だ そ う だ 。 こ れ を し た ら 施 設 全 体 の ガ ス 供
給 が 完 全 に 止 ま る の で 、 復 旧 す る の が 大 変 だ
と の こ と だ っ た 。
「 追 々 、 覚 え れ ば 良 い さ 。 」 と 山 田 隊 長 が あ き
ら め た よ う な 顔 で 言 っ た 。 こ の 後 は 、 シ ャ ッ
タ ー の 遠 隔 操 作 要 領 と か 、 防 火 戸 の 仕 組 み と

か、図面上で色々と訓練を受けたが、大一郎にはおぼろげにしか理解できなかった。午後三時になった。当務長が「隊長、すみません。ちよつと禁断症状の予防です。」と外に出ようとし、大一郎にも付いて来るように言った。何のことはない通用口の外で喫煙タイムだった。外は明るい五月晴れの空が広がっていた。午前中にはなかつたそよ風が吹いていて高空には白い雲が流れていた。「あんたはタバコを喫わないのかね？」と当務長は彼にタバコを一本勧めた。大一郎は喫煙の習慣がない旨を言い、好意を手で押し止める仕草で丁重に断つた。「タバコは火事の原因の一位か二位だよ。警備員は防火が主な仕事のひとつなんだけど、皆よくタバコを喫うなあ。こうして交替で表に出てタバコを吸っているよ。タバコの煙が防災センターの機器に悪影響があると合田所長が言ってから、防災センターは禁煙になつたよ。タバコの煙が美味いとは思わないけど、

こうしているストレスから解放される気が
するんだ。当務の二四時間は長いからね。あ
んたもそのうちタバコを喫いたくなると思う
な。」と皮肉な顔をしてニヤリと笑みを見せた。
そこへ昼飯時に同席した清掃の小母さん軍団
が通りかかった。
「あら、ガードマンさんは良いわね。タバコ
を喫うと言っては仕事を放れ、おおっぴらに
サボって怒られないのだから。でもタバコを
喫っても精はつかないよ。」と先頭にいた年増
の一人が話しかけた。後ろに続く女連中も卑
猥丸出しの顔で声立てて笑った。
「俺達は明日の朝まで長い勤務なんだ。この
くらいの息抜きは勘弁してくれよ。こんな年
になつて、もう女なんかには用はないからよ
う。」と当務長は真顔になり言い返した。昼食
時、象の鼻みたいに男の持ち物も長いだろう、
と冗談で大一郎を冷やかした最年長の老女が
最後に通る際にかけた言葉は、もっと強烈で
グサリと内臓を包丁で抉（えぐ）られた魚の心

境にされた。

「あんたは若い盛りで雌の象さんを見ただけで、ここが大興奮だもんね。女だったら誰でも良いんだもんね。ほら、チン！」と大一郎の股の一物をポンと叩いた。又もやキャーととうに花の盛りを過ぎた女達が一斉に笑い声をあげた。

「僕は若い女にしか興味ありませんよ。」おもちゃみたいに関心もにされて少々むかついた。

「あら、そう。あんた、守衛さんなんかやっていたら、お嫁さんの成り手がないよ。」と

老女の清掃員も売り言葉に買い言葉の態度で言い返した。

大一郎は先程来から無礼なこの老婦人を無視することにして、視線を遠くに聳える山々に逸らすと、どうせ一生警備員をやる気は更々ないよ、と自分自身に言い聞かせて、気分を取り直した。

「鉄甲君、あんな婆さん達の言うことなんか

気にするなよ。女の年寄りが自分の見てくれを忘れ、色気だけは若い娘の頃のままの積りだから始末に悪いよ。」当務長は二本目のタバコを口にしたらイタゝの火を近づけた。炎が揺らめくので、よく見ると微かに彼の指先が震えていた。その後は、防災センターで鍵の保管や出し入れの管理の説明を受けたり、身体障害者用トイレからの警報ブザーへの対処要領などの説明を受けているうちに夕方になつた。七夜勤のピカソ女騒動の日直から夜勤に変わるのは、午後五時で夕礼の集まりをする。通常、隊長は日勤勤務で夕礼の指示が済むと私服に着替えて帰路につく。シフトの警備員は二四時間勤務だから、昼間から引き続き夜勤に上番するわけである。大口当務長から、夕礼とは、いよいよ夜間の勤務体制に入るといふ心構えと夜間の警備任務遂行という責任を自覚するけじめで大切なものだ、と諭（さと）された。

夕礼には、大一郎を含め夜勤の警備員六名のほかに中央監視室の夜勤の代表者や病院のナイトシフトの代表者も加わり、その夜の当直医師の所属・氏名、入院患者数などを初めとする参考事項の情報伝達がなされる。大一郎はあくまでも研修中の身であるが、決して余剰の要員にあらず、一人分の独立したポストに着いていた。精々三回位の当務に従事したら一応の仕事をこなせるようになれば、と山田隊長から命じられたばかりであつた。この日は、鬼塚事務課長も立ち会つていた。彼の噛み付きのような表情は朝と一緒で、これがこの人の地顔かと大一郎は思った。夕礼の内容はすっかり形骸化しており、要するに明朝まで事故のないようにしましょう、と顔合わせするのが一番の目的と言えた。

「では、明日の朝、警備日誌に異常なし、特記事項なし、と記入できるように頑張ります。」

当務長が決まり文句で夕礼を締めた。立ち会

つていた鬼塚課長が解散になった途端、新人の警備員の消防訓練をしないと言い出し、大一郎を防災盤の前に呼びつけた。――これから新任教育を終了した効果テストをする。」

課長が首を反らし意地の悪そうな目を光らせて大一郎の顔を睨み上げた。他の夜勤の警備員はそれぞれの位置に戻りシラツとした感じ丸出しのまるで他人事のような態度をしていた。大口当務長はマスターキーを手に一廻り、第一次の施錠確認と不要箇所の消灯に出かけた。

「鉄甲君と言ったな。名前も顔も警備員らしくて好ましい。だが、警備は名前や顔で出来るもんじやないからな。顔面配備では防犯に

も防災にもならないのだ。病院で一番怖いのが火事の発生だ。病気で体の身動きのままな

らない入院患者でいっぱいだろう。火災発生時に医師が手術をしていないかも知れないだろう。う。いかにしてそんな人達を無事に避難させ

るか高度な自衛消防活動をしなければ、大変なことになるのだ。素早い消火活動、非常放送設備を使って避難放送の呼びかけ、消防への――一九番の緊急通報など瞬時に手分けして当たるように、病院は君達警備員に高い金を払っているのだ。火災警報が鳴った時のガー・ドマンの立ち上がり、ことの成否がかかっているのだから、例え訓練でも無様は許さないからな。」と脅かすようにまくし立てた。

「はい、頑張ります。」と小声で答えたものの、大一郎は蛇に睨まれた蛙のように意気消沈していた。

「そら、六階の印刷室で火災警報だ！」と課長が大声を出した。大一郎は一瞬ポカンと呆気にとられていたが、午後一番の当務長の防災盤説明を辛うじて思い起こした。

「ええ、主音響停止、皆さん、六階が火事です。」と大一郎は主音響スイッチを下ろすと囁くような声を出した。

「こら！何だ、その今にも死にそうな蚊の鳴

くような声は！電柱みたいな図体をして、や
つぱり木偶の棒だな。それに火災信号だけで、
現場も見なくて火事と断定する馬鹿がある
か！」
他の警備員は大一郎らを一瞥すると、あわて
てにやけた顔をモニター画面に戻した。大一
郎の目の端にもそんな同僚の有り様が入り、
何の助け舟も期待できないその冷淡さに嫌味
をたっぷり覚えた。
「現場確認に行つて来ます！」とやけくそに
叫んでロビーの階段の方へ走った。
「こら、痩せノッポ！ちよつと戻つて来い。」
五、六歩走つたところで、課長の怒鳴り声が
彼の細長い背中にホースで水をかけるように
浴びせられた。彼が背を屈めてすごすごと引
き返すと、課長の眼は草原の野獣さながら血
走つていた。
「お前もやっぱ腐つたりンゴか？」本気の
怒気をはらんだ声音で、防災センターの他の
警備員達の顔にも緊張が走り、凍りついたよ

うにモニター画面から視線を外さなかった。
「手ぶらで現場に行くな！印刷室に鍵が掛か
つていたら入れないだろう。もし火が燃えて
いたら手で消すのか、消火器はどうした！火
の気が無かったら誤報だから無線機でここに
連絡し、六階と七階にワンワン鳴り響いてい
る非常ベルの音を止めないと、入院中の体の
不自由なお客さん達は生きた心地しないのが
分からないのか？」
課長の言うことは、真に正論で大一郎には一
言の弁解も出来なかった。
「すみません。最初からやり直します。」
「もういい。すっかり習っておきなさい。」と
鬼塚課長は唾を飛ばして吐き捨てるように言
うと、さつさと防災センターを出て行った。
「交替で飯でも食うか。」とあごがしゃくれた、
うらなりのキュウリみたいに生白い顔をした
五十年配の小柄な警備員が立ち上がり、もう
一人同年輩の色黒でお結びみたいな顔貌の警
備員が従った。大一郎はどつと疲労が出たよ

うに空いた椅子に腰をかけ、ぼんやりと人影の少なくともった一階ロビーを写す画面に見入った。そこは七時で消灯になるとモニターも終了だ、と隣にいたピーナッツみたいにあごの突き出た痩せこけた警備員が囁いた。小柄で禿頭の七十近いように見える警備員は無言で大一郎の存在など眼中にない様子だった。大一郎は先輩達に話しかける気力も失せてむつつりしていた。課長の手荒い洗札を受けたかね。」と大口当務長が戻って来た。うや。」当務長はすっかりしよげ返っている大一郎の姿から察して、優しい気遣いをした。職員食堂に向かっていたら、最初に出かけたキュウリとお結びの二人が戻って来るところだった。何か美味しいものがあったかね？」と当務長が声をかけた。

「別に。」と二人からにべも無い返事が返って来た。ただけだった。大一郎は、夕食という食欲の話題にすら反応のない無機質な警備員の有り様に、夢はますます淋しく凋（しぼ）んでしまっそうだった。二人で黙々とスパゲッティのナポリタンとリンゴ一個のセットをそそくさと平らげると、コップの水を飲み干して食堂を出た。旨いとも不味いとも何にも舌に感覚のない夕飯だった。腹だけは一応膨れて不思議な味気なさに襲われた。重い足取りで防災センターに戻りがてら、大一郎はさつきから気になっていたことを訊いてみた。

「今晚一緒に当務の先輩も中途採用で警備員をなさっているのですか？」

「ああ、そうだとも。今日は、元は下駄屋の親父さん、居酒屋の主、車の巡回魚屋さん、それに寿司職人だな。皆、店が左前になってハローワークの世話になったものばかりだよ。」

本来の職を失った人達ばかりとは納得できた

が、それにしても心機一転の警備業務に魅力
がないせいでは、皆に覇気がないのか、それは当
務長に尋ねるのは失礼で遠慮するしかなかつ
た。二人が防災センターに戻ったのを見て、
最後にピーナッツ顔と禿げ頭の警備員が食堂
に向かった。キューリ顔の警備員は、第二次
の施錠の巡回に出て、お結び顔の警備員は同
じく消灯に出かけた。当務長が何を指図する
でもなく、体が覚えていのように黙っていて
もバネ仕掛けの人形のように動く感じで出か
けた。
「今日は遅寝だからな。午前二時の丑三つ時
まで起番だ。午後十時の巡回で施錠したら、
出入りできるのはこの通用口だけになる。」
「夜間でも出入りがありますか？」
「馬鹿だなあ。ここは病院だぞ。救急車はい
つ何時来るか知れたもんじゃないし、患者さ
んの容態が悪くなったら深夜でも家族や親戚
の者が集まって来るに決まっているじゃない
か。」

「その通りです。すみません。」自分ながら幼稚な質問をしてしまつて、彼は恥ずかしくなつた。
「午後十時には、消灯してしまふ箇所が多いんだ。一緒に行くからよく覚えておけよ。省エネと言つて無駄なエネルギー消費を抑えるように病院側が要望し、それに応えて中央監視室の合田所長がプログラムを作つたんだ。警備のマニュアルもそれに協力する形になつてゐる。日常のちょっとした電気のスイッチ操作でも、無駄を省くと年間に五百万円程度の電気代が控えられるそうだ。」と当務長は得意満面で省エネ知識を披瀝した。そんな巡回も何事もなく終えて、日付が変わつた午前一時に又深夜巡回に当務長と出た。先ずは外周、大一郎が懷中電灯を点けたら、外灯で十分に明るいから消すように注意された。何か暗くて正体が分からない時に照らすそうだ。
「時々は立ち止まつたり、振り返つたりして怪しい人影がないか確認するんだ。それが隠

密の心得だ。もつとも、あんたみたいに背が馬鹿でかいと相手が先に気がつき隠密になれないよな。」と当務長は高々と笑い飛ばした。「いいえ、背が高いから、こっちが先に見つけますよ。」馬鹿は余計だろうと思いつながら大一郎はむきになって反論した。「なるほど、一長一短というやつだな。」当務長が妙な感心をした。

不審者、不審物、壁の落書き、大きなゴミもなく、「外周異常なし」と当務長は喚呼し胸を張って館内に入った。通用口の受付には、お結び顔が仏頂面で前を見ていたので、大一郎が会釈したが、眉一つ動かさず無愛想この上ない。この人の血管には温かい血が流れているのか、と腹立たしくなった。最上階までエレベーターで上がった。下の階から上の階へと上がって行くのとその逆と、週交代で変わるそうだ。施錠や非常照明などを確認しながら七階の個室病棟に降りた。七一〇号室の前まで来たなら、消灯の室内から呻くとも泣く

とも知れない怪しい声がする。当務長が生唾を呑んでドア際に立ち、聞き耳をそばだてた。「警備員は病室には勝手に入れないのだ。俺がナースセンターに行つて来るから待つてろ。」と当務長が一旦その場を離れた。大一郎も中が気になり耳をドアにくっ付けた。成人映画そのままの小鳥の鳴くようなやり声に相違なく、大一郎の股の一物に男の血が滾り眼を瞑り夢中で耳を傾けていた時だった。「ちよつと、あんた、何してるの。」正気に戻り目を見開くと、派手な和服の女が高級そうなハンドバッグを手に立っていた。顔中の厚化粧で目玉が三つありそうなピカソの描いた女の顔の絵にそっくりだった。「いいえ、あのどちら様でしょうか？」しどろもどろで言葉を返した。「この病室に主人が入院しているのです。どきなさい！」といきなりドアを開くと点灯した。パツと室内が明るくなつたが、ドアがパタンと閉められ中の様子は

見えない。男の怒鳴り声と女の悲鳴とドタバ
タ争うような物音に大一郎は途方にくれた。
病室には勝手に入れないし、中では明らかに
異変が起きている。千秋の思いで当務長を待
っているしかなかった。やっと当務長が当直
のナースを連れてやって来た。
「大変な騒動のようです。」と伝えた。
「ほら、守衛さんも一緒に！」ナースも中
騒ぎに困惑顔でドアを開けた。
部屋の隅っこで、パンツ一丁の茶髪の中年男
がおろおろとした様子でさっきのピカソの絵
のような女の肩に手をかけ、その陰には全裸
の若い女が髪を捉まれてしゃがみ込み「ごめ
んなさい。もう、しません。」とシクシク泣い
ていた。
「守衛さん、先生を呼んで来て！」と中年の
ナースは当務長を指差し、当直責任者の医師
を呼びに行かせた。そして、啞然としている
大一郎に二人の女を引き離すように命じた。
彼が、ピカソの女を羽交締めにして引き離す

と、患者の男が泣いている全裸の若い女に「ほ
ら、早く服を着ろ。」と衣服を渡した。その女
はイの一番に素早くスカートをはき、ブラジ
ヤーで大きな乳房を隠した。ピカソの女は大
一郎の腕の中で、なおも掴みかかろうとして
暴れ、患者の男はふて腐れてベッドに戻り横
たわった。
「あんた、どこを触っているの？この手を離
さない」と訴えるわよ。このど助平が：「とピ
カソの女は強烈な香水の匂いをプンプンさせ
首を曲げて大一郎を三つ目で睨み上げる。彼
は、若い女が服を着けて早く外へ出てくれな
いかと願いながら「静かにしてくれたら離し
ますよ。」とおどおど助けを求めるように当直
のナースを振り向いた。
「山本さんだったわね。あなた、非番で何を
しているの。もうすぐ先生が来ますから、正
直に喋るのですよ。」と彼女は若い女を叱りつ
けた。その女はようやく服装を整え、最後に
思い出したように床にぼろきれのように縮じ

こまったパンティを拾い足首を通すと、開き
直るようにスカートを捲り上げ太腿を丸出し
にしてパンティーをたくし上げた。何と、こ
の病院のナースが、入院患者とベッドで睦言
を交わし情を通じていたのであった。そこへ
当直医師が駆けつけた。若い女が服を着たら、
ピカソの絵のような顔をした女もステージが
変わったのを感じ取ったように身体力を抜
いたので、大一郎は羽交締めを解いた。その
瞬間だった。
「こいつ、何しやがったんだ。出て行け、守
衛！」とピカソ女の前蹴りが彼の下腹の辺り
に飛んで来た。着物の前がはだけて、長い脚
の太股までも剥き出しになり、大一郎は無様
に尻もちをついてかわした。
「あなた達は外に出て良いですよ。」と当直の
ナースは困惑顔で言い、医師は「守衛さん、
このことは胸に納めて何も記録に残さないよ
うにしてくれないか、事務課長には私の方か
ら報告するからね。」と念を押した。室外に出

た当務長は「警備の極意は、見ざる、聞かざる、言わざるの三猿だよ。ナースの独身寮が最上階にあるから、夜中に降りて来て馴染みになった金持ちの患者とチンチンカモカモななんて以前もあったわな。」と諭しているのか面白がっているのか、とにかくフウーと大きな溜息を吐き出した。入院患者はスキノのクラブオーナーで、浮気相手はこの病院の若い非番のナース。ベッドで大胆に薦のような絡み合いをやっているそこへ、店のママが閉店後の深夜見舞いで、とんだ修羅場となったわけであつた。当務長と巡回を終えて防災センターに戻ったら午前二時ピッタリだった。大口当務長がお結び顔に「ピカソみたいな女を通したろう。時間外見舞いは断れよ。」と注意したら、「先輩、分かっていますよ。でも『家内ですけれど仕事柄、深夜しか見舞いが出来ません。』と訴えられたら誰だつて通すしかないでしょう。」と反駁した。当務長は、仕方ないかとぼやくと「さあ、交代で仮眠だ。」と起きて

制服を整えている寝ぼけまなこの連中に「異常なし！」と告げて大一郎を連れて仮眠室へ入った。蒲団は汚いシートで生暖かく、しかも湿っていて気持ち悪かった。しかもムツと鯁（す）えった臭いがたちこめていて気色悪かった。だったので、豆ランプの灯りを頼りにキョロキョロ付近を見回したら、大口当務長が枕元に自分の脱いだ靴下を並べて干していて、それが悪臭の発生源と分かった。大一郎はしばらく鼻をつまんで堪えていたが、そのうちドツと疲れが押寄せてすぐに睡魔に襲われた。結局、翌朝も何事もなく八時の当務交代時に、その日の当務長以下シフトの連中に『異常なし、特記事項なし。』と記載された警備日誌を申し送ると、山田隊長に一列横隊に並んで挨拶して下番した。最右翼がズングリムツクリの大口当務長でお結びやハゲやキュウリやピナッツ、末尾に頭一つ以上ノツポの鉄仮面が並んだ何とも不揃いのチームで、病院の事務課長が機嫌悪い原因の一つかも知れなかった。

た。八 蜜にたかる蟻んこ
は 交代した六人の当務のメンバーに、大一郎
は 新入りの鉄甲君だと簡単に紹介された。変
った名前だなぁ。」と誰かが囁いたのが聞こえ
た。大一郎は、全員の顔を一瞥し、一人ひと
りに頭を垂れた。全員が中高年か老年の警備
員ばかりで、昨夜の大口当務長のチームと五
十歩百歩だった。山羊谷と名乗ったその日の
当務長はドングリ眼で名前通り山羊みたい
白いあごひげを生やした変な顔に見えたし、
配下の退院も猿や狸に似た面白い顔もいれ
虎に似たイメージの怖いのもいた。最後に頭
を下げた相手の顔は一番残像として残ってい
る。イタチみたいいな顔付きで油断できな
るさを直感したからである。とにかく当務勤
務は終わった。大一郎は仮眠から起床した時
に顔だけは洗った。どうせ馬面の悪相でとう
に洒落っ気はなくヒゲも剃らず頭髪も濡らし
た指でなぞって形を整えただけである。彼が

さっさと制服を脱ぎ背広姿でじっと待っている間、大口班長は丁寧にヒゲをあたり、薄い髪に油をつけてクシで分け目を入れ、やっとう味噌汁と香の物の朝定食を口にしたら。勤務外だから大口班長と呼ぶことにした。直属の上司である上に、同室をシェアして住むからには、何かと気を遣わねばならない心の重荷を感じながら、病院の近所の地下鉄の駅から札幌駅に出て中島公園方面への地下鉄に乗り継ぎ、会社の寮へと向かった。大口班長は車内の網棚に置き残されていた週刊誌を手取る。と無言で水着姿のグラビアアイドルなど写真のページだけペラペラめくり会話もしなかつた。班長の老獪なところは一当務の仕事で垣間見えたとし、青臭い世間知らずの大一郎には公私ともに教えてもらうことばかりの人生航路の熟練者に思えた。「中島公園駅」で降りると大口班長はゴミ箱に週刊誌を捨てて大一郎に声をかけた。

「当務明けは、特別な用があれば仕方ないが必ず寝ろよ。あんたみたいに若いうちは寝なくて平気かも知れないが、確実に肺を痛めるからな。」

「こんな五月晴れの良い天気、昼間に眠りこけるなんて勿体ない気がしますよ。」

「でも俺は明けの日に別のアルバイトをしたり、競馬や競輪通い、それにパチンコ玉をはじいて遊んだ奴が、終いにや医者、の世話になつてしまったのを何人も見てきたからな。警備員はマンパワーと言つて健康一番、肉体が資本だからな。仮眠が四時間といつても起きた番の交代やら何やらで、三〇分位はつぶれたろう。実質はそんなに寝ていないからな。」

「そうですね。体を壊したらクビですね。」やつと大一郎は納得できた。

「眠り薬を買おうぜ。」と班長は酒屋の前の自動販売機からワンカップの清酒を取り出した。硬貨のお釣りを手に数えていたので、大一郎の分も買つてくれるのかと様子を見ていたら、

「あんたも何か好きなものを買いなよ。」と促したの、「ええ。」と生返事をして、心中でけちな親父さんだと舌を打ちながら缶ビールを購入した。しかし班長が最初に出会った時、俺は網走にカマドを持っている、と言ったことを思い出し、家族に仕送りするため、相当切り詰めた生活振りをしているのだと見直した。ダイニングに向き合って座った。

「ツマミなんか食うとアルコールの効きが悪いからな。しかしこの一口がたまらなくうまいなあ。寿命が伸びる気がするぜ」と顔をくしゃくしゃにした。

「昼飯は抜きですか？」

「一々飯のために起きられるかね。夕方までぐっすり寝れば一日二食で安上がりだろう。」

「そうですね。」と彼は妙に納得した。

「あんたが何でうちの会社の警備服を着ているかわかるかね？」コップの酒が半分位になっ
て少しいた。酒焼けしたような頬が赤味を帯び
て少し酔いが回った感じだった。目が据わっ

て何か長話をしそうな予感がした。眠り薬は
大一郎の方に効いて来て、必死で睡魔と戦う
羽目になつていた。
「分かりません。仕事を覚えるのに神経を使
つて、制服のことなど忘れていました。」
とぼけた答えしか出来なかった。
「あんたはもぐりなんだよ。」班長の一言で睡
魔がぶっ飛んだ。鈴蘭警備保障に採用された
自分がS社のワッペンの付いた警備服を貸与
されたことが脳裏に浮かんだ。それに奇妙に
よそよそしかつたお結び顔らの同僚の態度も
気になつた。
「もぐりなんて誰から聞いていません。」大
一郎は開き直つた。
「そりゃ、誰も言わないさ。」チヨビツと清酒
を口にすると班長は口元に歪んだ笑みを浮か
べて話を続けた。
「あんたが悪いことをしているわけじゃない
から気にしないで聞いてくれよな。警備員の
貸し借りは警備業法違反なんだよ。でも大抵

の会社がやっているのが実態なんだ。」
「どうしてですか？」大学で経営学を学んだ
大一郎でも丸つきり理解できないことであり、
ビールをグツと喉に流し込むと気色ばんで訊
いた。
「気にするなっって言っているじゃないか。要
するによだれが垂れるほど美味しい思いをし
ている奴さんがいるんだよ。俺が言っただけで
絶対に言うなよ。S警備はあんたを借りた外
注費の五十万円を鈴蘭警備に毎月払うんだ。
鈴蘭警備はあんたにそこから給料を出すけど、
警備員の相場はたいした額じゃないだろう。
仮に三十万円残ったにしても、それが全部鈴
蘭さんの儲けにはならないんだな。」大口班長
は空っぽにしたカップを手で揉みながら話を
続けた。
「バックマージンって知ってるかい。鈴蘭の
石塚さんからうちの竹中課長にお返しがある
はずだよ。それも鈴蘭さん持ちの昼飯か或い
は夜の接待か知らないけど、あんたをだしに

蜜にたかる蟻んこみたいに甘い汁を吸っている連中がいるってことよ。」

「この業界の悪しき慣行なんですか！」大一郎は自分に係わり、陰で不正があると聞かされ、いささか癪にさわったせいで声を荒げた。

「俺は中年からこの業界に入り色々と耳にしたが、一朝一夕に片付く問題じゃないよ。うちの病院の新入りオッサン警備員が急に辞めて、あんたがその穴埋めに来たんだが、シフトに穴を空けないで回すのは大変なんだ。募集から教育実施とその間、現場の警備員に連続当務とかばかりさせていたら、そのうちくたばってしまいうからな。かといって警備員を現場に入れるのに、三十時間以上の新任教育とこういうことで、座学だけでも最低四日位は実施しないと警備業法違反になるんだ。たった一人の新任教育に四日も五日も指導教育責任者が張り付いておれるかというのが、会社の本音だろう。」班長の眼が寝不足と酒酔いで真っ赤になっっていた。

「僕を借りて配置するという方法が手っ取り早いのですね。」

「そうなんだが、鈴蘭さんみたいに新しく新任教
育もしない者を回すのも困ったもんだね。」

あんたが悪いんじゃないから気にするな。」と
班長はぼやいた。

「すみません。色々と教えて下さい。」と大一
郎は長い背中を縮こめるしかなかった。

眠くなつたと大口班長が立ち上がったので、
大一郎も就寝の仕度に取り掛かった。

九 煩わしい給料形態と憂さ晴らし
大一郎は短時間だが爆睡し夕方近く目覚め

た。共用のダイニングルームに出たら大口班
長の部屋から鼾が聞こえた。例によつて班長

は自炊だろうから、彼は中島公園の散歩で時
間をつぶし弁当を買つて帰ることにした。こ

んな麗らかな昼間を寝て過ごしたことは勿体
ない気がしたが、夜中ろくに寝ないで仕事を

していたのだから仕方ないかとあきらめた。
燃えるような夕焼け雲が色褪せて黒っぽい昆

虫のようになつた頃、北国の肌寒さを感じたので飛び込んだコンビニで弁当とペットボトルの日本茶を買つて帰路についた。寮に戻つたら班長は起きて炊事をしていた。フライパンを器用にあおり肉と野菜を炒めていた。「あんたも料理を覚えた方が良いよ。そんな弁当ばかりの食生活をしていたら栄養のバランスを崩し病気になるぞ。」とお皿に出来上がつた料理を移した。その素朴な匂いに東京の実家の母親の顔が浮かんだ。今時家賃五千円だけで、電気代も水道代も会社持ちの寮なんてないから助かるよ。」班長は若い時の酒の飲み過ぎで、糖尿病の気があつて晩酌は控えていると言いながら炊飯器で炊いた飯を茶碗によそつた。慣れたものでいつもの間にか味噌汁も出来上がつていた。「味噌汁を分けてやりたいがお椀が一つしかないから勘弁してくれよ。あんたも生活道具を揃えたらどうかね。」と食事にはしをつけた。大一郎も弁当を買つた時の割箸を手にして食

事を始めた。
「班長さんの給料って多いでしょう？」
「この道の大先輩が幾ら月給をもらっているのか気になつた。」
「若いから何も知らないな。あんとたいして変わらないよ。大抵が色んな事情で五十前後から警備員になるのが普通だから、給料は上がりようがないよ。俺は大工だったが、大手建設会社の建売住宅販売のせいで商売が立ち行かなくなり守衛さんになつちまつたよ。」
「新人の僕でも二十万だそうですから、班長さんは五十万位かと思いました。」
大一郎が無邪気に口にしたら、班長は最初怒つたような表情を浮かべたが、すぐに情けないように眉をしかめた。
「あんたは鈴蘭警備という零細企業で臨時雇いの日給月給という奴をもらうのだよ、多分相場は、一回の泊まり勤務が単価一万八千で月に十二回のシフトだから、十二倍すると二万六千円になるな。俺もそれに毛の生えた

程度だよ。ただしだよ、あんたが何十年勤めてもお情程度しか給料は上がらないよ。」テーブルの上の何か広告の裏に数字を書き込み計算してくれた班長の言葉に、大一郎は若干シヨックを受けたが、すぐに男子一生の仕事で選んだつもりは更々ないので氣を取り直した。

「S警備会社の給与形態に興味があります。これでも大学で経営学をかじった身ですからね。」と彼は呑気に暮らした学生時代を懐かしく思い返した。

「何にも知らないから教えてやろう。試用期間の三ヶ月間は、今のあんた同様日給月給とという形でもらうのさ。その後、正社員登用となってからが面倒臭いのだ。まずは基本給が十万さ。毎年のベースアップは三千円程度の雀の目に涙というもんだろう。それに變動給という奴が曲者なんだよ。」

「變動給って何ですか？」

「経営学を修めた大一郎にも初耳だった。」

「勤務手当のことだよ。会社によって違うだ

ろうが、勤務手当の相場は日勤で二千五百円、夜勤で四千円、当務で六千五百円位かな。つまり仕事に従事した数だけ加算されるのだよ。

俺達は病院勤務で当務専門だから、大体月に十二回泊まるようにシフトを組まれるよ。だから、当務十二回分を加算すると思うだろう。」と少し勿体ぶった言い方をした。

「そうだと思います。」と大一郎は分かりかねないながらも相槌を打った。

「ところが、そうはイカのフンドシ、いやキンタマだったかな。一日の標準労働時間が八時間で一週間の標準労働時間が四十時間だった。知っているだろう。」

「いや、実家は八百屋で親父は朝早くからヤツチャ場に仕入れに出かけ、おふくろも早起きに付き合うし、夕方遅くまで店を開けていますからね、定休日も商店街の決まりで月に二回しかなく、四十時間なんてもんじゃないですよ。」

「大学出たにしては馬鹿だな。自営業と一緒に

にするなよ。」と班長は声をあげて笑った。

「すみません。」大一郎は、とにかく謝っておけば間違いないだろうと思った。

「いいか、朝の八時から翌朝八時まで二四時間拘束されるけど、昼飯時の一時間と夕飯時の一時間は休憩時間だろう。」

「そうですか？飯を食いに食堂に行っただけで、皆戻ったらすぐに何か仕事をしていましたよ。」彼はありのままの光景を言った。

「そりゃ、その通りだけど、建前では休憩になるんだな。それに丸つきり四時間眠れる訳ではないけど仮眠時間も労働に従事していないだろう。だから、一当務で十八時間が労働に從事したとされるんだ。ええ、面倒だな。」

と言いながら班長は又さっきの紙切れに鉛筆で数字を書きながら説明した。

「いいかい。週に四十時間の労働と言ったつて、月給をもらうのだから月間の標準労働時間を決めなければならいね。一ヶ月がピツタリ四週間というのは、閏年でない二月だけ

だからね。大の月、小の月があつて凸凹して
いるのを均（なら）すしかないよ。日勤だけで
土日は休みの山田隊長は通常勤務で、これを
参考にするんだ。週に四十時間労働とは、日
勤勤務者は二日間勤務で百六十八時間を標
準にするんだ。」

「変型労働つて聞いた覚えがありますよ。」

「たまには良いこと言うじゃないか。甲（かぶ
と）さんよ。」

「えっ、もう渾名で呼ばれているのですか？」

大一郎は、こうなったら電柱でも痩せノッポ
でも腐ったリンゴでももぐりでも勝手に呼ん
でくれ、と開き直りを覚えた。

「まあね。俺達みたいに当務ばかりをする者
はまさに変型労働といつて、一回十八時間の
泊まり勤務を九回やったら百六十二時間に達
し、週に四十時間の基準をクリアしたとみ
なされるんだ。」班長は数字に強そうに計算式
を汚れた裏紙に書き込みながら得意げに小鼻
を動かした。

「あとの当務三回分はどうなるんですか？」
十二回泊まったら残りの三当務分はどうなる
かは単純な疑問である。
「さすがに学士様だ。あんたの前任のオッサ
ンとは背の高いところは同じだけど、頭の切
れが違うね。」班長は妙な感心をした。大一郎
は頭の中で幼稚園生並みの引き算をしただけ
なので、馬鹿にされているように感じた。班
長は爪楊枝で齒間をほじるとお茶を一口ふく
み、頬をクチャクチャさせ口をゆすいで喉に
流し込んだ。
「鈴蘭の社員には関係ないと思うけど、参考
までに覚えておきな。単純に言えば十八時間
×三当務で、五四時間の超過勤務代をもらう
んだ。」班長の書く数字で紙が数字で埋まっ
た。
「ところがそうは：」
「イカのフンドシ、いやキンタマですか？」
「ワハハハ、あんたも面白いところがあるじ
やないか。人間ユーモアが大事だよ。」大一郎
はユーモアとは、もっとと高尚なもので、こん

な下卑た物言いに何をいつているんだい、と
心では嘲笑しながら、黙って話しの続きを聞
いた。
「昨夜は、午前二時まで起番だったろう。実
は、午後十時から午前五時までは深夜勤務と
いって、時間単価の一・五倍の手当てになる
んだ。一・二五倍の通常の超過勤務手当より
割増なんだよ。そうすると、一四時間の普通
の超過勤務と四時間の深夜勤務手当に分けら
れるだろう。」
班長は書く余白がなくなつて、自室から別の
紙切れを持ってきた。街頭で配られるサラ金
のチラシであつた。本当にこの人は始末屋だ
と感心した。自分が作った味噌汁一杯どころ
か、お茶の一杯も分けてくれないと恨めしく
思ったが、自分も食器はおろか湯飲み茶碗ひ
とつ持つてないことに思いをめぐらし、人を
誤解してはいけないと反省した。
「ところが明日の当務では、俺もあんなも早
寝たぜ。十時に寝て二時に起きるんだ。そう

すると深夜勤務は二時から五時までの三時間になるだろう。つまり、通常の超過勤務が十
五時間と深夜勤務が三時間になる。シフトに
よって深夜勤務が一時間の差がつくのさ。」
「それは、きちんと計算されて支払われるの
ですね。」

「会社は、そんな面倒臭いことを嫌うのだよ。
もう一律に超過勤務が十五時間、深夜手当が
三時間と慣行が定まっていってどうにもならん
よ。それに、昼と夕方の一時間ずつの休憩だ
って飯を食う時間だけでまるまる一時間は休
んでいないだろう。これもなし崩しで誰も文
句を言わないよ。」

「どうしてですか？」休憩とは労働者の権利
で、それが無いがしろにされてクレームがな
いとは大一郎には不思議に思えた。
「それは経営者が上手なんだよ。あんたみた
いな日給月給者には関係ないけど、俺達は一
応正社員だから手当が付くのだよ。だから月
給の中身は、十二回泊まったとして基本給十

六千五百円の当務変動給が九回分、超過した
三回で四五時間の超過勤務手当と九時間の深
夜勤務手当が時間単価に乗じてもらえるよ。
それに、家族手当、食事手当、現場手当だな。
それから俺は班長手当が一万円余計にもらえ
るよ。通勤の交通費は別だよ。正月のモチ代
は警備員だけの特権だな。人が一斉に休む時
期にも働く仕事の性質上のもんだな。だから、
いつの間にか誰も面と向かって会社に文句は
言わないんだよ。」
「陰では言うのですか？」大一郎は冷やかす
ように尋ねた。
「そりゃ、そうさ。誰も現状には満足してい
ないよ。ボーナスが出ると言ったって、安い
基本給だけをベースにもらうのだから雀の涙
だよ。超過勤務手当のベースの時間単価だっ
て警備員を何年やろうが、一律に千ナンボと
決まっていってトータルでもたいしたことはな
いよ。税金や健康保険や厚生年金も源泉徴収
で差し引かれるからな。あんたは若いのか

ら何か技術を身につけて転職した方が利口だよ。うちなんかに来た若い人で能のある奴は皆、何か資格を取って辞めていったよ。」

「大手の警備会社はどうでしょうか？」

「大一郎はみみっちい給与計算の話にすっかり心底まで腐ってしまった。」

「大手は幹部候補生としてピカピカの新卒の大学生を採用し、その連中だけが偉くなるシステムさ。あんたが運よく大手に採用されても、もう中途採用扱いで他の警備員と昇進試験で競争し、手柄を立てたり競争で生き残って行く自信があれば別だよ。それに何と言っても警備員の仕事の中身は変わらないし給料も同じようなもんだ。そうだよ。大手の方が看板を背負っているぶん勤務規律は厳しいのだぞ。もつとがっかりさせて悪いけど、定年になつたお巡りさんや自衛隊の幹部、それに消防のお偉いさんで辞めた人達が上級のポストに直接滑りこんで来るから、下から這い上がるのは大変だぞ。精々隊長クラスまで行けたら満

点で、本社の管理職なんて夢の又夢みたいなもんだよ。」

班長は脅かすように言うところ俺の部屋でテレビでも見ようや。」と大一郎を誘ったが、彼は丁寧に遠慮して街の灯を見物にスキノへ出かけた。班長の給料の講釈が良く理解できたわけではないが、将来的に希望のある話ではなかった。給料日は月末と聞いていた。手元に残っている金は十万円を切っていたが、無性に憂さ晴らしをしたかった。華やかなネオン街をぶらつき、厚化粧の若い女に行く先々で袖を引かれた。金もたいして持っていないなかったの助平心は抑えた。彼は、リトル新宿みたいな猥雑な都会の雰囲気に触れただけで早々に寮に戻ろうとしたが、母親くらいいの和服の女に声をかけられた時はさすがに参ってしまった。――お金はないよ。」と言いつつ誘われるまま静かな店内のボックス席に座った。ビール一本だけ飲んで帰れば大した値段でもない

だ　ろ　う　と　思　っ　た　。　す　ぐ　に　乳　房　の　谷　間　を　誇　示　す
る　よ　う　な　ド　レ　ス　の　女　の　子　が　お　し　ぼ　り　と　乾　き　物
の　籠　を　テ　ー　ブ　ル　に　置　き　な　が　ら　脇　に　座　っ　た　。「背
の　高　い　人　、　大　好　き　！　り　ん　ご　を　剥　い　て　あ　げ　る　わ
ね　。」と　愛　想　笑　い　を　す　る　と　胸　の　大　き　な　膨　ら　み　を
彼　の　顔　に　こ　す　り　つ　け　な　が　ら　立　ち　上　が　っ　て　果　物
籠　に　手　を　伸　ば　し　た　。　彼　を　誘　い　込　ん　だ　年　増　の　女
も　隣　に　ピ　ッ　タ　リ　寄　り　添　っ　て　座　る　と　香　水　の　匂　い
を　プ　ン　プ　ン　嗅　が　せ　な　が　ら　「喉　が　渴　い　て　る　の　。
坊　や　、　お　ビ　ー　ル　頂　く　わ　。」と　勝　手　に　自　分　の　グ　ラ
ス　と　女　の　子　の　グ　ラ　ス　を　黄　金　色　の　液　体　で　満　た　し
三　人　で　チ　ン　と　グ　ラ　ス　を　合　わ　せ　た　。　小　瓶　で　す　ぐ
に　空　に　な　り　、「お　ビ　ー　ル　追　加　よ　！」と　別　の　ホ　ス
テ　ス　に　頼　ん　だ　。「ア　ラ　、　も　う　こ　ん　な　に　テ　ン　ト　を
張　っ　て　。　早　く　出　さ　な　い　と　体　に　毒　よ　。　撫　で　撫　で
し　て　あ　げ　る　わ　。」と　年　増　の　方　は　大　一　郎　の　固　く　な
っ　た　股　の　一　物　を　撫　で　な　が　ら　チャ　ック　に　指　を　か
け　た　。　若　い　女　の　方　が　お　し　ぼ　り　を　開　い　て　スタ　ン
バ　イ　し　て　い　て　、　こ　こ　で　パン　ツ　の　中　を　し　ご　か　れ
る　と　大　金　を　ボ　ッ　た　く　ら　れ　る　の　は　火　を　見　る　よ　り

明らかなこと、田舎の純朴な青年と違って東京育ちの彼には常識だったので、「明日の朝は超早いんだ。又来るから勘定してよ！」と逃げた。年増の女が持参した紙片には『60000』と鉛筆でアラビア数字が記入されていた。彼はむかついたので「内訳は？」と邪険に訊いたら、「坊や、泣きそうな顔をしちゃ嫌。こういうところでは、男らしく潑刺とした態度をするものよ。おビールが二本で一万円、チャームとおりんごで一万円、ボックス代と私たちのサービス料が四万円、分かったでしょう。」と艶っぽい笑窪を見せた。彼は仕方なく全財産の入っている財布から万札を六枚渡した。残りの三万円で給料が出る月末まで二日間にコンビニのお結びやカップヌードルで過ごす覚悟を決めた。帰途に早速コンビニに寄ってカップヌードル二十個のまとめ買いをした。

十洋菓子の恨みつらみ

翌朝、大口班長と一緒に出勤した。出がけ

にカップラーメンを啜った。班長はまめに目玉焼きをつくり昨夜の残りの味噌汁を冷や飯にかけて喉にかき込んでいた。地下鉄は東京にかけではないが満員状態であつた。頭ひとつ突き出た大一郎の顔を見上げて班長が訊いた。「糞はして来たか？」「地下鉄の騒音があるとはいえ、周囲の者にもはつきりと聞こえる声に彼は閉口した。ここ数日ろくな食事はしていないので便秘気味であつたが、そんな話題に乗って声を出すのも恥ずかしく軽くなはずいて応えた。」

「制服でオ―ナーさんの便所を使うのは最小限度にするんだ。小便は良いとして、大の方

はなるべく我慢し、どうしようもなかったら

外の公園の公衆便所にしろよ。」

又もや大一郎はうなずいたが、朝っぱらから

話題にするんじゃないだろう、と恨めしく

思い班長と反対側に顔を捻じ曲げ話しかけら

れないように配慮した。

職場の病院の防災センターに入ると明番の

顔ぶれがいかにも疲れたという眼で待っている。
制服に着替えたらずぐに朝礼だった。シフトは当務と明番を三回続けて公休になるという基本パターンはあったが、もちろん日によってメンバーは入れ換わった。前月の二十日までに公休の希望日を隊長に告知しておく、と面倒を見てくれると教わっていた。その日、シフト表上は前回と同じ当務チームだったが、朝早く角谷という例のお結び顔の警備員から電話があつて、母親の容態が悪いと急に休んだそうで、伊達というイタチに似た顔の警備員が連当（連続当務）でシフトに入るとのことだった。伊達は、すでに隊長の了承を得て前夜からの泊まり勤務の疲れを抜くために午後三時まで仮眠室で休息中だった。部屋の隅っこのキーボックスの前では虎みたいな顔をした怖い顔の警備員が青屋というキュウリ顔の警備員に鍵の申し送りをしていた。別席の机では日誌を広げ、ドングリ眼の山羊谷当務長が本日の大口当務長に事務の申し送りを行な

つていたが、すぐに終わると山田隊長の前に、
当務員は整列した。
「急なことで午後三時までは五人になったが、
それまで私が伊達君の代わりのワークをする
から心配はしないでよい。もっとも六人と言
つても、一人は見習いだから実質五人だから
しつかり頼むよ。昨日の当務は異常なしだっ
た。警備は何といつても異常なしに限るから
な。明日の朝、警備日誌に異常なしと書ける
ように頼むよ。以上！」と隊長は最後に首を
回して、コイツ大丈夫かな、と言わんばかり
に列の末尾にいる大一郎の皆より頭一つ以上
高く長い顔をしばし黙って見つめていた。隊
長の挨拶が終わったと察するやゝ気をつけ！
敬礼！と大口当務長の威勢の良い号令が防
災センター内の空気を振るわせた。
「鉄甲君、一人にして悪いがロビーの立番を
してくれ。何かあったら受付の電話を借りて
内線で電話してくれ。」と初っ端に大口当務長
から下命を受けた。誰かが小声で、戦争でも

ないのに鉄甲だつてよ、と言うのを背中に聞
きなながら防災センターを出た。大一郎は九時
の受付開始を待つ老若の患者で混み合うロビ
ーの玄関口に立った。病院の待合ロビーはス
リや置き引きが多いから不審な動きをする者
に目を見張れと指示されていた。滅多にいな
いがタバコに火を点けた者には喫煙ルームを
案内し、携帯電話を使う者には玄関口で通話
するよう注意するようにも念を押された。受
付はあらかじめ整理札が配付されていたから
列を乱す者もなく整然としていた。人間、一
箇所にとつといるのも苦痛だということで、
立番の場所は適宜移動してもかまわないが、
いつもロビー全体に目が行き届くようにしろ
とも言われていた。正しくは『立哨勤務』と
教えられた。背の高い大一郎の制服姿は確か
によく目立ち、皆から一瞥の視線は浴びたが、
それでどうということもなく、病院の客達は
自分の受診の案内画面に見入っていたり、本
に目を落としていたり、頭を抱えこむように

俯いていた、すっかり顔馴染みになった患者仲間の輪ができてお喋りに夢中になっていた。たり、様々な人間模様があつた。一時間位は経った気がした時だった。ロビーの奥に移動したら、ごま塩の髪をした年配の女が公衆電話の前で四苦八苦している様子だった。プッシュボタンを押しては受話器を置き、戻った硬貨を再度ぎこちなく電話機の入金口に突っ込む動作を何度も繰り返すので、さすがに見ておれず、「どうかなさったのですか？」と尋ねた。

「すみません。眼科に通っていて電話のボタンがぼんやりとしか見えないのです。家に電話しているのですが数字を間違えて押しているみたいで、さつきは何度間違ひ電話をかけると男性の声で怒鳴られて怖かつたです。」

薄くアンバーの入ったメガネの下顔は今にも泣き出しそうに曇っていた。恐らく大一郎の顔も輪郭がぼんやり見える程度の視力だろう。

うと思った。しかし、白杖もついていないし、
外見からにはわかには眼が不自由な人には見え
なかった。

「ご自宅の電話番号をおっしゃって下さい。

僕がプッシュボタンを押して差し上げます

よ。」

「ご親切にすみません。」と婦人が番号を告げ
たので、その通りに押したら自宅につながり、
ほっとした顔で迎える車を頼むような会話を
していた。長電話になりそうだったので、彼
は軽く会釈してその場を離れて更に奥の方へ
移動した。婦人からは何の仕草も返されず、
彼の会釈はその人に見えなかっただろう。

大一郎は何か一仕事したような充足感を覚
え、少し胸を張り睥睨するようにロビーを眺
め渡した。それからロビーの片隅を立番の位
置を適宜少しずつ変えながら一時間位して一
番最初に立った玄関口に戻った。最前列の座
席にいた白いワンピースの少女と目が合った。
脱色したような長い茶髪に眉を剃り落とした

白塗りの厚化粧の顔、スカートの丈は極端に短く膝を高々と組んでいたもので、嫌でも視線がスカート奥へ這うように入り込んだ。その子がまるでバネ仕掛けの人形のようにピョコンと立ち上がると彼の方に歩み寄って来た。」「ガードマンの小父さん！」「と話しかけられて、小父さんはいだろうと思ったが、反射的に「アッ、はい、何でしょう？」と返事した。間近に見たら濃いアイシャドーにアイラインでパッチリと目を描いて、まるで人形のキューピーさんの目を貼り付けたような顔をしていた。」「あたし、お祖母ちゃんを連れて駅まで来たけど、急にむかついて喧嘩したの。」「それで：」と平静を装って少女の目の高さに合うように背を曲げた。」「あたし、今日学校だったのだけどお、ドレメ（ドレスメーカー）の学校よ。」「幼いもの言いが可愛い年頃だった。彼女の要領を得ない喋

り方をまとめると、今日はクラスメートと
約束の各自が思い思いの奇抜な衣装や格好で
集まる仮装のコンテストの日で、どうしても
学校へ行きたかったのに祖母の目の治療の日
で、パート勤務に出かける母からこの病院ま
で目の不自由な祖母を連れて行き、診療がす
んで帰宅まで同道するように厳命されたとい
う。大一郎が話しを理解したと悟ると、大き
な布バッグの中からプロレスラーが被るよう
な白地の覆面を取り出して見せた。よく広げ
ると顔面全体に鮮やかな朱色の大筆の×印の
描かれたものだった。
「あたし、これできっと優勝だったわ。」
彼はコスプレのコンテストでもあるのだと思
い、このお尻スレスレの短いスカートに赤い
×の覆面姿で女子プロレスラーのパフォーマ
ンスでもするのかと想像したら可笑しくなっ
た。
「それでえ、意地悪と思ったけどお、駅に着
いた時にい、今日は自分が特別に犠牲になっ

てやったからお小遣いをねだったら、お祖母
ちゃん的眼と学校とどっちが大切なのって断
られたのよ。」

「そりゃ、僕に関係ないよ。」と大一郎はうん
ざりした。

「ねえ、聞いてよ！あたし、むかついてお祖
母ちゃんを放って又電車に乗って学校に向か
ったの。あたし眼も悪いのよ。両目ともコ
ンタクト入れてるの。眼の悪いのは隔世遺伝
するって聞いたわ。お祖母ちゃんが悪いのよ。
あたしの眼、いつかそのうち潰れてしまうの
よ。」と今度は大きな瞳を潤ませたので、大
一郎は呆氣にとられて言葉が見つからなかつた。

結局、駅で祖母を突き放してみたものの、無
事に病院に着いたかどうか心配になつて引き
返して来たようだった。

「眼科の受付に行つてお祖母さんが来診して
いるか、名前を言つて確認してみたらどうで
すか？」全く常識的なことであり彼は腹立ち
を感じた。

「小父さん、代わりに訊いてくれます？ 喧嘩
したばかりから癪にさわって嫌だわよ。」
「小父さんはないだろ。僕だってこの春大学
出たばかりで若いんだよ。」大一郎も変に腹が
立って不愉快そうに言い返した。この少女が
言う祖母とは、たぶん、さつき自宅に電話す
るのを自分が手助けしたごま塩の髪の毛の婦人の
ことに違いなかった。
「不親切ねえ。いいわよ。もう頼まないから。」
とその子は自分で眼科の受付に行つて何事か
尋ねている様子だったが、すぐに脇目もふら
ず病院の玄関口から外へ出た。祖母が受診の
受付を済ませたのを確認したのだろうと思つ
た。大一郎も一呼吸しにちよつと外に出た。
大きく深呼吸して五月の北の都の大空を見上
げた。東京ではあまり見かけなかった広々と
した空間を感じた。さつきの白いワンピース
の少女の後姿がアカシア並木通りの角を曲が
つて消えるところであつた。駅で突き放した
祖母が自力で無事に病院に到着したのを確認

し、勝手に帰宅路も大丈夫だと判断し、学校へ向かったのだろう。

ロビーに戻ったらキュウリが立っていた。

交代に来たようだ。腕時計を見たら十一時半を回っていたから、いつの間にか二時間半も立番させられていた。

「駄目だよ。ロビーの中をちゃんと見張つてないと：事務課長に見つかったら雷が落ちるぞ！何しろ、名前が鬼さんだからな。」と最初は口を尖らせていたが、終いの方には歪んだ笑みを口元に浮かべていた。

防災センターに戻ってほつとしようとしたら、いきなり、

「おい、帽子は脱いで、隊長に立哨勤務を終わった挨拶をしな。」と大口当務長から叱声を浴びた。二時間半も放り出して、そんな言い方はないだろうと思ったが、新人だから仕方ないかと我慢して山田隊長に敬礼した。

「ただ今戻りました。」と首を垂れた。いつも

の隊長のデスクでなくモニター席にいて、「異

常があつたかないか報告するんだよ。それに、敬礼は十五度、首筋は曲げない、どんな教育を受けて来たのかね。」と頗る機嫌が悪かった。売り言葉に買い言葉で、教育なんか受けていません、ビデオを見ただけです、と言いつ返しなかつたが、さすがにそれを口にする勇氣はなかつた。「異常ありませんでした。」と極めて簡潔に報告しながら、目の不自由な老婦人の姿や白いワンピースの少女の面影が脳裏を過ぎつた。「そうか、ご苦労さん。それじゃモニター監視代わつてくれよ。」と隊長は立ち上がった。病院は建物の用途上出入口が多く、固定カメラの画面もあれば、パラパラと本を捲るようになつた。十秒おきに病院の内外に係わらず要所各所の景色が変わる画面もあつた。ロビーの画面は望遠カメラをリモート操作でき、全体像からどこか一点に焦点をあて大寫しにクロームアップも出来た。ロビーの客のハンドバッグの柄まで明瞭に浮かび上がらせることさえ

出来た。最新鋭のセンサーは火炎の光り具合や人が闘争するような非日常の光景を捉えると警報ブザーが鳴るそうで、その性能はここには付いてないとのことだった。

「かぶと、オモチャじゃないから、女の子の顔ばかり大写しにして興奮するんじゃないぞ。」

隊長がもう彼を渾名で呼捨てにして冗談を言うのと、禿げが「隊長が一番好き者って評判ですぜ。さつきから女なら誰れかれかまわず顔を大写しにしていたじゃないですか。スカートの膝を開いた女がいたら股を写していたじゃないですか。」と冷やかして破顔したが、大

一郎はその警備員の前歯の抜けた貧相な容貌に気分が滅入った。十二時半を回った頃、「かぶと君、飯まだじゃなかったかね？食って来な。」と隊長から言われるまで、大一郎はロビーの画面を夢中で操作していた。ちょうど、彼が電話のボタンを押して手助けした初老の婦人が、中年の婦人に手を引かれて、よろよ

ろと頼りない足取りでロビーから出て行く姿が映っている時だった。

職員食堂はピークを過ぎて空いていたが、メニューも残るのはカレーライスだけになった。ていた。片隅で顔見知りになった女性清掃員達がお喋りに熱中していたが、一人が背の高、い大一郎を目敏く見つけると、「若い守衛さん、こっちにおいで。」と手招きした。

「頑張るのよ。あんたの前任のオヤジさんも体が大きかったけど、『霊柩車事件』とやらですぐにクビになったからね。」とその最年長のお婆さんが気の毒そうに言った。彼は無言でうなずき、ガツガツとカレーを口に入れた。朝はカップヌードルだけで食べ盛りの胃袋は食い物に飢えていた。それを見て斜向かいの六十前後の小太りの小母さんが目を細めて言った。

「あんた、食べっぷりが若くて凄いわね。体の毒をよく出すというから、コンニャクを食べて体に気をつけるんだよ。わたしの初孫は

七（ななつ）の時に肺炎で死んだけど、この人
みたい顔が長かったねえ。冬の寒い夜なん
か、真っ先にわたしの寢床に潜り込んで来た
から股で挟んで暖めてやったもんだよ。」この
小母さんが何歳の頃の話か分からなかったけ
ど、こんな年配の婦人から抱きしめられるイ
メージが脳裏に浮かび嫌悪感を覚えただけだ
った。ちよつと視線を上げたら目の前に、こ
の中では一番若い色白のポツチャリした中年
婦人がいて目が合った。この人に抱きしめら
れるのなら気持ち良いだろう、と一瞬妄想が
下半身に走った。
「深夜の勤務なんか怖くないの？ 病院だから
嘘か本当か知らないけど、色んな噂を聞くわ
よ。」とその人は愛嬌のある笑窪を浮かべ声を
潜めて言った。
「アラ、駄目よ、野本さん。そんな怖い声色
を使っちゃ！ この人のキンタマが縮みあがつ
てしまうじゃないの。」とさっきのお婆さんが
大きな声を出したら、皆がドツと笑い声をあ

げたので、他のテーブルで食事していた者の視線が一斉に大一郎のいる方に向けられた。彼はすっかりペット扱いされているようで長居する所じゃないと思ひ、皿を持ち上げスプーンで残りのカレーライスをかき込むと一気にコップの水を飲み干して立ち上がった。「ゆっくりしていきなさいよ。そんなシヨベルカーミたいな食べ方をしたら体に毒よ。」とその場の誰かが言ったが、彼は辟易として軽く手で会釈して早々にその場を立ち去った。防災センターに戻ったら、机上に空になったシヨートケーキの紙箱があつた。「いやあ、うまかつたなあ。良いデザートになつたなあ。」隊長は機嫌良かった。「鉄甲君、病院の警備は差し入れがよくあるんだよ。ケーキが五個しかなくて、あんたまで回らなくて悪かつたなあ。箱を捨てておいてくれ。」と大口当務長に言われた。近所の病院御用達みたいなケーキ屋から、目が不自由な婦人とその連れの女性に頼まれたと配達され

て来たものだそうである。大一郎は、これは
自分に対して差し入れられた洋菓子じゃない
かと腹の虫が暴れだしそうになったが、隊長
に『異常なし』と報告したからには今更その
話を蒸し返すわけにもいかず我慢した。生ク
リームが付着した甘い匂いのするセロファン
を見ただけで、口の中に唾が自然とあふれ出
たがゴクリと喉を鳴らして飲み込むと、白い
紙箱をたたみ潰した。その時、箱の脇腹に小
さな白い封筒がセロテープで止めてあるのが
目に入った。封筒の中の便箋を取り出すと、
『守衛さんの皆様、いつも母がお世話になり
相済みません。今朝は母が電話をかけるのに
困っている時、助けていた下さい、地獄で仏様
にあった気分です、と母が喜んでいまし
ました。ほんのわずかな御礼ですが、今後と
もよろしくお願い致します。かしこ』という
内容の礼状だった。彼は何かやけに虚しく
なつて、黙つて潰した紙箱に折り込むと一緒
に屑籠に放り込んだ。見ず知らずの人からの

到来物をろくに経緯も確かめもしないで、ゴキブリみたいに貪り食うなんて、その程度の人間だから警備員をやっているのかと、罵りたくもなり恨めしくもなり、トホホな気分です。分で濁った心が陽炎のように揺れ動いた。十一お化け大騒動

午後三時になってイタチが合流し、隊長が本来のデスクに戻った。既定の警備指令書のマニユアル通りに業務が回った。夕礼が終わると当務長と行動を共にした。消灯をしたり、逆に点灯をしたり、シャッターを降ろしたり、施錠を確認したりが、場所毎に時間が異なり神経を使う仕事だった。

「最新のビルでは、マイコンの端末を使い、時間を指定して自動的に電気を点けたり消したりできるんだがね。ここは建てる時に病院側が予算をケチって削減し、安い設備代で施行したから人間がやるしかないんだ。そのくせ院長室なんか重要な箇所の鍵の開け閉めだけには防災センターのリモコン装置でも出来る

んだから、そのうち教えてやるよ。しかし、何ととってもマンパワーが警備の基本だからな。」と当務長はしたり顔で説明した。十時の早寝は大一郎と当務長とイタチの三人だった。

「眠り薬だよ。」イタチがニヤリとして仮眠室の手前の自分のロッカーからウイスキーの小瓶を取り出すと、グビッと一口あおった。蒲団を敷くのは地下の中央監視室に詰めている用務員の仕事で、すでに設（しつら）えてあった。一足遅く入って来たイタチが「ヨウ、若いのに、蒲団からずいぶん足がはみ出しているじゃないか。規格品の寸法が合わないのも大変だなあ。」と酒臭い息で話しかけて来た。

「どこの生まれだい？」

「東京の荒川区です。」

「そりゃ又、都会だね。俺は山形の新庄だよ。民謡で有名だから知っているだろう。」

「いえ、知りません。」

「♪私しゃ、真室川の梅の花
コォーリヤあなただよこのまちの鶯よ♪」

とうとう大口班長が、うるさいから早く寝ろ、と低い声で注意した。

「寝酒でもしたのか。この前、本社の重役さんか来たとき、皆で天地神明に誓って寝酒はしていませんと言ったばかりじゃないか。」と班長はブツブツこぼしながら寝入ってしまった。大一郎がウトウトして無意識に腕時計を見た。見たら、午前二時五分前を指していた。すでに懷中電灯を照らして禿げが立っていた。

「すみません。ボチボチ交代の時間です。」学生時代、バスケット部の有志で禅寺の修行の体験をしたことを思い出したが、それよりも早起きだった。

「ああ、金をやるから、もうちよつと寝かしてくれ。」とイタチが目をこすった。

「そうかい。五千円くれたら起番代わってやるよ。」と禿げが応じた。イタチは、冗談に決まっているだろ、と跳び起きた。寝ぼけ眼で制服を着て防災センターに出た。それまで起きていたキュウリ達は、口々に異常なしと言

って仮眠室に向かった。
「俺が受付をやるから、二人で巡回に行つて
来い。」と当務長が命じた。大一郎はイタチと
一緒に防災センターを出た。四時までの二時
間かけて病院内と外周を隈なく巡る深夜巡回
だった。奇数日の夜間は下階から上階へと巡
回コースを辿ることになっていった。手始めに
地下二階を巡回したが、夜間は無人の清掃員
控え室の前に来たら、イタチがマスターキー
で開きライトを点けた。
「ちよつと休もうぜ。安い月給であくせくす
るこたあない。世の中は要領だよ。調子よく
やりや良いんだよ。」と靴を脱いで畳にごろ寝
した。「先輩にたて突くわけにもいかず大一郎
は黙つて部屋の上り口に腰をおろした。
「全く婆さん達は、食うか喋つとるかのだつ
ちかだなあ。清掃の女達の中で、まだ見られ
るのは野本とかいうオツパイの大きな未亡人
だけだよ。でも、そのうち婆さん達に叩き上
げられて妖怪みたいにな化けてしまふよ。時間

の問題さ。ああ、野本さんが座った座布団が
どれか分かったら枕にするんだがなあ。」と部
屋の隅に積み重ねられた座布団を恨めしそう
に目を遣っていた。昼食時に大一郎の目の前
に座っていた色白の品のある婦人のことであ
った。その人が普段ここで休憩していると思
うと又ぞろ、その母性に抱かれてみたい妄想
が浮かんでは消えた。イタチは部屋の隅の小
さな冷蔵庫まで這い寄り勝手に扉を開けて目
ぼしいものないところ、そばの机上のセンベ
イ袋を目敏く見つけボリボリかじった。大
一郎に「もう一人で巡れるよな。俺は少し休
ませてもらうから四時近くなったらここに寄
つてくれ。無線器はスイッチを断にしておけ
。何か言われたら不感地帯にいたと言いつ
く。ここは不感地帯だから心配するな。」と
態よく巡回に出された。地下一階に上がると

奥の霊安室が気にかかった。一階に上がる非
常階段は、その前を通らなければならなかつ
た。この夜は仏様が安置されている情報もな
かった。ので、何事も慣れだと思ひ直して歩を
進めた瞬間だった。霊安室の前に白い影が突
如立った。それまでしゃがんでいて目に止ま
らなかつたのだらう。目を凝らすと長い髪
の女で、なよなよと風に揺れる柳の枝のよう
に手招きしているではないか。大一郎は腰が抜
けそうなのを我慢して、運よくそばにあつた
便所にヨタヨタと逃げ込むとヘタヘタと座り
込み、ドアを必死で押さええた。消灯してい
る便所の中では廊下の微かな明かりに返つて恐
怖感が募り頭髪から全身の皮膚まで総毛だつ
た。彼は目を瞑つて息を殺し時間の感覚がな
くなつた。やがて、弱弱しくドアがノックさ
れ、細かい声が聞こえた。助けて頂戴とも、
恨めしいとも聞こえた。彼の総身はガタガタ
と音を立てて震え、ナンマイダー、ナムアミ
ダブツ、ナンミョウホウレンゲツキョウ、マ

カハンニヤハラミタ、と立て続けにお経の文句を唱えていた。これは悪い夢を見ているのだと自分に懸命に言い聞かせている最中だった。　「おい、血痕がずっと先まであるぞ。」と中央監視室の者らしい声が奥の方へ遠ざかって行った。男の声がしてやっと落ち着いた大一郎は、時間差をみてそっと便所を出るとすっ呆けて、「何かあったのですか？」と霊安室付近で腰を屈めて床を調べている中央監視の作業着の男達の方へ近づいた。　「警備はどこにいたんだい。」と年配の方から棘のある言葉を返された。　「すみません。巡回していたのですけど慣れなくて：」と曖昧なことしか言えなかった。　「ナースがコールの帰りにエレベーターに乗ったら、リストカットした女の子が座りこんでいたんだよ。集中治療室を一人で探し回って見つからなくて、へたり込んでいたんだ。受付は誰がやっているんだい。」と若手の設備

員が言つて、明日の朝の報告は大変だぞ、と
ニヤリとした。人の不幸はいかにも楽しいと
いう黒い腹の中が見えた。

大一郎はとにかくイタチのいる清掃員室に
駆け込んだ。ドアを開けて名前を呼ぼうとし
たら、何と言う本名だったかとおさに思い出
せず、「大変です！」と呼びかけた。すぐに、
漢字で『私たち』と書く伊達（だて）だったと
名前を思い出したが、そんなことはどうでも
よかった。

「何だい！」帽子を顔に被せて寝ていたイタ
チも驚いて起き上がった。大一郎が知ってい
る限りの事を知らせると、「ちよつと困ったな
あ。それにしても大口さんは何をしていたん
だろう。とにかく戻るから無線器のスイッチ
を入れる。」と自分が巡回をサボっていたこと

は棚に上げてものを言つた。

防災センターでは大口当務長が頬を怒つた
猿みたいになつた。赤に膨らませて、「何で無線に
応答しないのか！何回呼んだと思つてゐるの

か。」と怒鳴った。とつくに中央監視室やナー
スセンターからの連絡で事件を知っていた。
「今、女の子の家に電話したばかりだ。昨日
の昼間、眼科に婆さんを連れて来たらしいが
駅に放っぱり出したまま家に帰って来なかつ
たそうだ。代わりに母親が婆さんを迎えに来
て、帰りにケーキ屋から差し入れをしてくれ
たくれた人だ。とにかく様子を見て来るから
待機しといてくれ。」と防災センターを早足に
出て行った。大一郎は、昨日の目の自由な
白髪が多い婦人と白いワンピースの少女のこ
とだと判った。何も知らないイタチは「ケー
キの差し入れがあったのかい。」と不服そう
な顔をした。すぐに戻って来た当務長は、「チェ
ッ、大きな地雷を踏んじまったなあ。とにか
く落ち着いてまとめよう。」と開き直ったよう
で顔から怒色は消えていた。
「女の子の傷は浅く命に別状はない。二時過
ぎに通用口を入っているなあ。この近くの公
園で、腕時計の針が午前二時を指すのを待つ

て、思い切って手首を切ったと言っているんだ。その後、死ぬのが怖くなって病院に入り込んだらしいのだが、受付の警備員の小父さんさんが眠っていたから通過して、緊急治療室を探し廻ったと言っていてやがるんだ。俺がうつかりウトウトした時に入り込んだんだなあ。傷は浅いんだ。軽くリストカットの真似事をした。ただけだ。」と眉を顰めて情けない顔をした。「とところで、あんた達の巡回コースはどうだったんだい。」と訊かれて、イタチはシャアシヤアと「あっしは、先に一人で非常口から出て外回りを点検し、新入り君とドッキングしたんでさあ。なあ、そうだよなあ。」と大一郎に目配せをした。彼は本当にこの男はイタチの化身みたいだと感じた。何だか嫌気がして黙って俯いていたら、イタチは更に立板に水をかけたふうに話を続けた。「傷が浅いっていうことは、初めからその娘に死ぬ気はなかったんですよ。目の悪い婆さんを放り出して遊び、親から叱られるのが嫌

になり、死ぬ氣をちらつかせて責任逃れをしたんですよ。自殺騒ぎをすれば、親が許してくれると猿公（えてこう）の浅知恵ですよ。」

昨日、少女と会話した大一郎は、イタチの推理が的を射ていることに感心したが、余計な口出しはせずだんまりを決め込んでいた。『女の子は鉄甲君の姿を見ているんだぜ。背の高いガードマンの小父さんがいたので、手を振って助けを求めたのに、何処かへ隠れたそうじゃないか！』と当務長がピシヤリと鞭打つように言った時は、心臓の動悸が早鐘を打つように感じた。靈安室の前で白い影を見たことを報告していなかったからである。彼は覚悟を決めて正直に話した。『地下一階まで行ったら奥の方に突然白いお化けを見ました。最初の日に当務長さんから聞いていた時々出るお化けだと思ってトイレに逃げ込みました。』

『何だよ、ふざけて冗談を言っただけで、そんなものが出た例（ためし）はないのに、真に

受けたのかね。馬鹿だなあ。よし、分かった。
あんたは下痢の腹痛で便所に駆け込んで何も
見てませんで通せ。」

「分かりましたけど、全身真っ白でしたよ。」

「うろついている最中にランドリーがあり、
ドクターやナースが使い汚しの白衣を投込む
ボックスがあるんだ。寒気がしたから、そこ
から取り出して着込んだそうだ。」当務長は吐
き棄てるように言った。そこへ中年の男女の
顔が受付の窓口から室内を不安そうに覗いて
いるのが三人の目に入った。

「電話をもらった山之内です。夜分、娘がお
騒がせしてすみません。面会簿に記載すれば
良いのですね。」と男が言うのと、「家内です。

昨日は母がこちらの守衛さんのお世話になり、
ほんの気持ちだけ洋菓子を差し入れさせて頂
きました。今夜は娘までがご迷惑をかけて本
当にすみません。」と色白の奥さんが丁寧に頭
をさげた。当務長は、伊達警備員に夫妻をナ
ースセンターへ案内するよう命じ、大一郎に

は電話機の方をあごでしゃくり、右手の拳を耳にあてる仕草で、ナースセンターへ電話するよう合図した。

朝、「お早う。」と笑顔で出勤するや同時に大口当務長から夜間の不始末を聞いた山田隊長は渋面に豹変し黙って更衣室へ消えた。八時の事務引継ぎと朝礼が済めば、通常だったら明番員は下番するのだが、この日だけはそうは行かない。午前九時、中央監視の合田所長、山田隊長のほか、大口班長、伊達警備員と大一郎も、鬼塚事務課長の前に首を並べなければならなかった。あらかじめ山田隊長から、どんなに雷を落とされても弁解するな、と指図されていた。鬼塚事務課長は、今にも噛み付きそうな相を顯わにしていたので、大一郎は目を逸らし窓の外雲の流れを見つめていた。山田隊長は大口班長作成の報告書を提出すると、ぼそぼそと説明した。

「女の子はお父さんやお母さんから叱られるのが嫌で、それを帳消しにして同情してもら

おうと手首を剃刀で傷つけたようですが、
元々死ぬ気はサラサラないのでリストカット
の真似事みたいなものです。これは警備とし
て防ぎようのない事故だと思います。」

「コラッ、ノッポ！お前、ポケットと何処を見
てるんだ。他人事じゃないだろ、のろま野

郎！」隊長の報告を遮って課長から早々に雷
が落ちた。あわてて大一郎は課長の顔を見た

が、毒虫でも噛み殺したように眼が爛々と燃
えていて、生まれて初めて見るイグアナ顔負

けの不細工極まりない表情に、すぐに目線を
ちよつと下げ課長のネクタイの結び目辺りを

見つめた。隊長は首を回して、端っこに立つ
ている大一郎をチラッと一瞥しただけで話を

続けようとした。課長はそれを見無視して大
声をあげた。

「それでも受付で居眠りしていたのは大口君
じゃないか。チャンと起きていれば、女の子

が助けを求めたはずだ！」
「女の子が一言、声をかけてくれたら問題は

起きなかつたのですよ。」と大口班長が恨みがましく言い訳するのを肘で制して、山田隊長は説明を続けた。

「患者のお祖母さんは眼科の通院患者で、いつもお世話になります、と昨日の昼なんか警備に菓子差入れがあつたほどでして、警備員はいつも親切にお客様に接しています。

今回だけは、とんだ失態で申し訳ありません。」と頭を下げたので、他の三人もあわててパラパラと頭を垂れた。

「それだけじゃないだろうが。そこのろくでなしの木偶（でく）の棒なんか、女の子が助けを呼んでいるのに知らんふりして便所に入つたそうじゃないか！」腹の底から頭の天辺を突き抜けて天井に衝突するような課長の怒鳴り声だった。

「課長さん、ですから報告書に書いてあるように、鉄甲警備員は腹をこわして下痢で便所に飛び込んだので誤解ですよ。」

「鉄甲が何だ！肝っ玉のちっちゃな臆病者が

：、夕飯をパクパク食って元気な男が急に下痢なんかするか。それなら職員食堂で夕飯を食った者全員が腹を痛めて食中毒になっていてもおかしくないじゃないか？」と課長の声がかますますボルテージを上げた。そして、憤懣遣りかたないといった顔で、
「キミは、明日から来なくてよい！」と大一郎を又もや怒鳴った。課長の近くの席の女性事務員の何人かが吃驚して思わず立ち上がった。た程の大音声だった。大一郎は自分が夕方カレ―ライスをペロリと平らげたことまで、すでにリサーチ済みとは課長の情報収集力に舌を巻いた。
「課長さん、S警備はこの病院の常駐警備を請負っています。鉄甲君の雇用関係も人事権も我が社にあります、課長の勝手には出来ませんよ。」と山田隊長が水を打ったように平静を装った声で言った。すると課長は手の平で机を思い切り叩くと立ち上がった。頭に体中の血の大半が頭に上ったみたいで、猿も睨み負け

する真っ赤な顔になっていた。大一郎は顔を
ますます下げて机上に目線を落としたら課長
の手の甲も真っ赤になつていた。
「雇用とか請負がどうした。請負らしい仕事
ができているのか。お前らチンピラが笑わせ
るな。ここの警備は防犯も防災もレベルが低
過ぎるぞ。プロ意識の欠片もないお前らの人
的警備なんか無くたつていい。機械警備だけ
で十分だ。なあ、いいか、今回のことは、お
前らの出る幕じゃない。もう本社に電話した
が、警備管理部長が、うちの事務部長に謝り
に来い！社長にも直々に病院長に始末書を出
してもらうからな。分かつたら警備は部屋に
戻って仕事しろ。」と追いつ返され、中央監視室
の所長だけが残された。
防災センターに戻ったら、鈴蘭警備の石塚
部長からの電話メモがあり、制服一式と所持
品を寮に持って帰るように指示されていた。
大口班長も大一郎もほとんど無言で私服に着
替えると朝食もとらず病院を後にした。急に

今朝から天候が崩れ、外は雲に覆われ肌寒かった。女の子がリストカットをしたという地
下鉄駅付近の公園にはライラックの花が咲い
ていた。彼女は家に帰れず途方に暮れて、行
き場もなく深夜のこの公園に戻って来てリス
トカットを思いついたのかも知れない、死ぬ
のが本気でなかったら病院の近くでやるに限
る、と大一郎は考えた。ライラックはリラの
花ともいう。リラ冷えの街、まだ札幌にやっ
て来たばかりなのに、そんな旅情みたいなも
のは、とつくに雲散霧消し微塵のかけらもな
かった。
十二 現任教員八時間なる百鬼夜行
夕方、石塚部長が呼びに来て、事務所に連
れて行かれた。
「病院とホテルの警備は難しいから心配はし
ていたけどな。まあ、気を落とさず頑張っ
くれ。明日は公休をやるから住民票の転入手
続きとかやることがあるだろう。仕事は何と
かするから明後日は泊りの予定をしておけよ。

どこかビルの常駐警備を見つけておくから、明日の夕方ここに来てくれ。」と言いつけられた。彼は、石塚部長からも大目玉を食らうのかと覚悟していたので若干拍子抜けがした。翌日、大口班長は公休が二日続くと言つて、早朝から「たまには母ちゃん顔を拝んで来るよ。」と網走近くの町の実家に帰省した。大一郎も折角北海道に来たのだから日帰り観光でもしたかったが、何しろ先立つ金がないので区役所で住民登録をしたら、近所の中島公園でも散策したり、自室でごろ寝して過ごすしかないと思った。コンビニのお結びとカツプヌードルの朝食とも昼食ともつかぬ食事を済ませ、とりあえず区役所での用事を済ませた。夕刻、事務所に顔を出したら石塚部長が待っていた。手書きの見取図を彼に手渡しなが

ら、

「明日、この札幌駅前ビルの管理室に行つてくれ。山下さんという管理事務所の職員が

待っているから八時までには着くようにしろよ。多分泊まりになるから、制服のほかに泊まり用のグッズ一式も持って行きな。仕事のことは、うちの社員にもなっているから心配しなくて良い。」と妙な部長の言い方は不透明で理解できない部分を感じたが、「分かりました。」としか彼は返事の仕様がなかった。

「ところで、病院勤務は難しかったかね。」と部長は平然と尋ねた。

大一郎は、きちんと警備員教育を済ませて配置して欲しかった、と答えたかったが、今更何の愚痴を言っても始まらないと思ったので、「はい、もう懲り懲りです。」と正直に心境を告げた。なんともトホホ：な情けない気分になった。

翌日、一人カップラーメンを啜るとそそくさと寮を出た。大口班長は今夜にでも帰ってくるのであろう。札幌駅北口から徒歩で五分のところ到大規模な再開発ビルが建っていた。

正面玄関で立哨していた若い警備員に来意を告げると裏手の通路口から地下に降りて駐車の場の管理室に行くように言われた。山下さんは、三十代の機敏そうな雰囲気の人だった。一石塚さんが竹中課長に猛アタックをしたようだね。とにかく今月いっぱいには私の方で面倒みるよ。別に人員は足りているから勿体ないけれどダブル配置で先輩の補佐をすればいいよ。それにしても背が高いな。よく目立つから交通事故誘導に向いているけど、経験がないと事故を起こすからやめとこう。」

S警備の社名と社章の刺繍された小奇麗なジャンパー姿の山下さんは知性的で温厚な人柄のようで大一郎は安堵した。理想的な人物像とは、威厳があり聡明で情愛に満ち信念があること、と高校時代の友達が作文に書いていたことに感心したことを思い出した。山下さんはそんな理想の人物に思えた。管理室には他に制服の警備員が二名詰めて場内のモニター監視画面に見入っていた。モニターを見な

がらお客さんに指示や注意もできるとのこと
だった。
「何の仕事をするのですか？」
「そうだな、最初はここにいて私の話し相手
でもしていな。仕事は駐車場の管理だよ。精
算機の料金回収とか機内の釣銭の調整とか計
算とか細かい仕事もあるけど、すぐにいなく
なるのだから覚えたって仕方がないだろ。出
入口の配置と精算機のそばに詰所があつて二
人ずつ配置があるよ。ここを拠点に交代でや
つているが、そのうち誰かとダブル配置でや
つてくれれば良いよ。」と笑つた。
「事故なんか起こるんですか？」とんだお化
け騒ぎで病院をクビになつた大一郎にとって
一番の心配事だつた。
「たまにはあるさ。事故やトラブルは人間の
社会からなくなることはないさ。最近では、
暴力団の若い衆が釣銭が出なかつたと女の警
備員に絡んだり、場内を無灯火でぶつ飛ばす
我が儘親父さんがいたり、ギアを間違えて壁

に激突させたり、車止のコンクリートに躓いて膝を怪我したお客さんがいたり、料金を払わずバーをぶっ壊して逃げた車もあったなあ。バーの修繕だけなら安いもんだが、精算機の中。の電子部品まで壊れていて釣銭機能の不全さ。I C 部品交換で五百万円だぜ。オーナーに直接叱られる身になってみる、と本社の奴に文句言ったよ。」

穏やかに見える朝の駐車場だが、結構色んなことが発生しているものだ。と大一郎は変に感心をしていた。

「後で駐車場の警備隊長のところだけは紹介しておこう。短期の応援という形だから施主さんや他の会社なんかは挨拶の心配は要らないよ。」

「大きなビルですね。」

「そうさ、広い駐車場とコンベンションホール、大小の貸会議室、デパートに名店街に歯科医やクリニックもある商業ビル、それにプール付のスポーツジムにマウンテン棟もある

から凄い複合施設だよ。S社は駐車場管理だ
けだから警備業でなくとも良いが、まあ、外
観とどうか見栄えを考慮して制服の警備員を
配置しているんだ。警備業でやるからには、
交通誘導だけでなく防犯や防災にも責任が生
じるがね。私は現場監督という立場でこんな
作業服を着て制服の警備隊長の上にいるが、
会社には警備員登録はしているよ。本社の係長
待遇だよ。この穏やかな顔付の人は滔々と説
明してくれた。
「色んな会社で管理しているのですね。」
「設備管理会社、清掃会社、ビルの常駐警備
はゼネコンの子会社やっついて、管理が煩
雑だから管理事務所を設置してあるんだ。事
務所のお偉いさんはこのビルのオーナーさん
側の人ばかりだが、スタッフには元警察署長
や消防署長もいて錚々たるものだよ。私も一
応末席に形だけの席のある身分だが、こうし
て管理室にいる方が気持ちいが安らいで精神衛
生上良いよ。」と初めて白い歯を見せた。彼は

管理室のロッカーの裏で制服に着替えて来るように指示された。

「鈴蘭さんはきちんと警備員教育したかね？」

制服姿で戻ったら開口一番質問を受けた。

「はい、初日にビデオを四、五本見ました。」

警備員教育の何たるかを知らない彼は正直に体験を口にした。

「やっぱりそうか。私は頼まれて鈴蘭さんの

警備員指導教育責任者に選任されているんだ

よ。会社の入口に警備業認定書と並んで私の

警備員指導教育責任者証のコピーが額に入っ

て掲示されていたはずだ。」

「それは気がつきませんでした。会社は石塚部長以外に誰もいないようです。」

「そうだろう。社長は昔の女のマンションに

転がりこんで入り浸りというし、石塚さんし

か従業員はいないよ。」

「事務机はありましたよ。」

「以前は電話番号の女の子くらい雇っていたみ

たいだが、今は必要ないのだろう。石塚さんが社長のコネであつちこつちの警備会社に頭を下げて廻り、よその仕事をもらつては人を採用して送り込んでいるだけだからな。もらった仕事をするを自前でやればまだましなのに、めぐりこませてばっかしだからな。気をつけないと鈴蘭さんはサブマリン屋と評判になつているよ」

「社長は力のある人なんですネ？」

「北大の出なんだ。北海道では東大卒なんかめじやないからな。北大を出て地元の建設業界にいたから顔が利くのだよ。建築会社はとつくにたたんでしまつているな。」と一息溜息をつく、「印鑑を預けるんじゃないやつたよ。新任教育実施簿とか現任教育実施簿なんかやりもしないで、やったことに作つて勝手に私の印鑑を押しまくっているんだろう。教育実施状況なんて書類もそれに符合させて作つているんだろう。これみんな警備員名簿の付属書類なんだからな。」

「それって犯罪ですか？」大一郎は軽い会話の乗りで訊いた。積りだった。が、山下さんは初めて険しい表情を見せた。私文書偽造罪じゃないか。警備業法で決まってる。法定教育をやってもいないのに、やったように見せかけていいはずがないだろ。その文書に勝手に自分の印鑑を押されて良い気持ちはないだろう。」

「大丈夫ですか？」

大一郎は、あまり訳が分からなかったが、一応お愛想を言った。

「うちの会社にもいるが、偉いお巡りさんで辞めた人を顧問とか参与とかの職名で置いて保険代わりになっているのさ。大きなところは、ほとんどそうしているよ。だから、私も余り騒がないようにしているよ。」と山下さんはやや落ち着いたようだった。その時、モニター画面を見ていた警備員がアナウンスした。突然の発声で大一郎は思わず振り返った。「函館ナンバー三九一八のお客さま、ライト

が消し忘れですよ。お車にお戻り下さい。」

山下さんも振り向きながら「気が付いたか
ね。」と確認したら、その警備員は黙ってうな
ずいた。

「あんたの履歴書見せてもらったけど、実家
は荒川区だね。」山下さんは大一郎との面談を
続行した。

「はい、東京で唯一つ残っているチンチン電
車の荒川区役所前という電停で降りた付近で
す。」

「南千住に近いのかね。有名な遊女の投込み
寺の近くにあるA寺に、僕の兄貴が小さい時
に養子に入って、今じゃそこの住職さんだ
よ。」

「エッ、僕の家はそこの檀家で、しよっちゆ
うお墓参りに行きましたよ。和尚さんの顔も
知っていますよ。」

頭は丸めているが、言われてみれば山下さん
とA寺の中年の和尚さんの顔は似通っていた。

「そうか、世の中は狭いもんだなあ。鉄甲つ

て珍しい名前だから兄貴に聞いたらすぐに分
かるだろうな。兄貴は父方の伯父さんに子
がなかつたから貰われて行ったんだ。」
「前の和尚さんも顔だけは覚えています。確
か息子さんは駒沢大学の学生さんだと聞きま
した。」
「それが僕の実の兄だよ。伯父さんもうに
亡くなつたからなあ。子供の頃一度遊びに行
つたきりだよ。浅草と上野と銀座と新宿を案
内してくれたよ。東京は広過ぎるよ。」と山下
さんはしんみりした。
「ところで、現任教育って何ですか？」
大一郎は新任教育とは前に聞いていたが、さ
つき聞いたばかりの現任教育は初耳で尋ねて
みた。
「現任教育は、四月からの上半期と十月から
の下半期のそれぞれ半年に、八時間ずつ実施
するようにな法律で決まっている。正式に言え
ば八時間以上ずつやるんだなあ。これが理想
を追っかけて、とんでもない結果をつくって

いるんだよ。まあ、あんたの場合、採用され
たばかりだから下半期からの現任教育を受け
ることになるよ。」

山下さんは立板に水のように喋った。労働者
の基本的な労働時間が一日八時間だから、官
僚が気軽に一日教育の意味で半期に八時間と
いう数字を出したようだ。しかし、いざ法律
を運用する段になると、休憩時間は教育時間
に含まれないから仕事みたいな訳にはいかな
い。朝に始業して昼食の休憩をとり夕方まで
働いて帰る八時間労働の俸給者の感覚で現任
警備員教育を考えたのが混乱と違法の横行を
招いてしまった、と一気に説明してくれたが
大一郎には何にも理解できなかった。

「夕方には終わるようには出来ないのです
か？」

「会社は警備業という商売をやっているのだ
よ。企業とは利潤を追求するものである以上、
現場に穴を空けて警備員を研修に招集するの
は最小限度にしたいのさ。何度も教育で警備

員を呼び出していたら交通費の支給もかさ張
り経費節減にもならないだろう。出来るだけ
勤務明けの者を招集するのが、現場に負担が
ないだろう。」
平素は各現場に派遣している警備員を一堂に
集めると、当然に社長や重役や顧問や警備部
長達が偉そうに何か話をしたがるから、実際
に警備員教育が始まるのは十時を回ってしま
うのが珍しくない、と山下さんは珍しく口角
泡を飛ばすように言った。
「あんたは何も知らないが、主に法律関係の
基本教育三時間と普段の実務に係わる業務別
教育五時間をやるんだぜ。昼には相当の食事
休憩、授業の合間には十分位は休憩がなけれ
ば小便も出来ないじゃないかね。法令に沿っ
てきちんとかやれば、終わるのは夜中になっ
てしまふよ。警備業協会なんかでも現任教
育は委託を受けてやっていくが、きつちり八
時間やってくれるところはほとんどないよ。
六時間程度は行うけど、教育を受けにやつて

来ているのは、大抵が夜もろろく寝ていな
い。当務明けの警備員だ。こんな状況でまとも
に教育を受けられるかね！聞いたところでは、
受講の警備員はグースカ、グースカよだれを
垂らして寝ているのに、講師は無視して自分
の時間を喋りまくって教室を出て行くそう。
だ。足りない二時間分は自社で補充教育とは
建前で、ほとんどの会社が教育実施簿の書類
上のテンプレートで誤魔化しているのが実態だよ。
こんな現任教育で警備員教育の効果があるの
かね。立派に警備技能を向上させることがで
きるはずもなかろう！訳も分からない官僚が
思いつきで八時間と法定教育時間を決めたこ
とが元凶で、警備員教育は滅茶苦茶の台無し
になっっているよ。指導教育責任者は泣く泣く
時間を誤魔化して記載し、私文書偽造の犯人
になるのを余儀なくされているのだよ。」と温
厚な山下さんの口調が怒気を帯びていた。
「でも、大手の会社はちゃんとやっているの
でしよう。」

「さあね。警備業協会のパーティーに何度も
出たことがあるんだが、酒が回ると皆舌の滑
りが良くなつて本音を聞いたことがあるよ。
昼食に弁当を出して、その食事費の領収書が
午後からも教育したという証拠になるそうだ
な。色んな誤魔化しの手口を聞いたよ。昼か
ら三時間程度で解散し、残りの時間は別の日
に実施したようにするとか、東京の本社から
講師が出張して来て四時間程度実施し、残り
の四時間は自分達がもう一度別の日に召集し
て実施したように書類だけを作成するとか
ね。」
「研修交通費の支給や勤務シフト表を照らし
合わせてれば、どこかに矛盾が出て嘘がばれる
でしょう。」
「あんたはさすがに経営学を学んだだけのこ
とがあるな。警察の係員が公安委員会の代わ
りに立入の査察に来るけど、そこところは
元署長とかのお偉いさんがうまく抑えるのだ
よ。」大一郎が話しについて行けず黙っていた

ら、山下さんは更に話を続けた。相当な不満を警備業界に抱えているように思えた。「警備業協会が新任教育や現任教育を頼めばやってくれるが、あらかじめ教育日程が決まっ
ていて突然警備員が辞めたら、空いた穴を埋めるのに間に合いませんよ。しかも三十時間のうちで実地教育以外の二二、三時間をやってくれるが、会社によつて警備の現場はまちまちで千差万別だからピントのずれた講義ばかりで何の役にも立たないのが実態さ。例えば、この駐車場に警備員を配置するに例え協会の講義は実務とほとんど関係ないから念仏みたいで眠たいだけだよ。現任教育も、さつき言ったように八時間は無理だから、六時間位実施したような証明書をくれるらしいけど、講義を受けているのはろくに夜も寝ないで来た明番の者がほとんどで、何回も同じことくどく言うけど、堂々と机に突っ伏してグースカ、グースカ寝ているガードマンの頭の上を講師のマイクの声が素通りしているそ

うだ。こんな警備員教育に何の意味があるのかね。」と山下さんは自分の言葉に興奮し、憤懣やり方ない顔付をした。

「教育実施簿というのが百鬼夜行のように乱舞しているのですね。」

「そうだよ。八時間の呪いを解かないと、警備員的能力は何も向上しないよ。私見だけど、いつそ十二時間実施に法改正すれば、当然一日で済まそうとする業者はいなくなるし、正常な現任警備員教育が実現すると思うがね。」

やっと、山下さんは穏やかな元の表情に戻った。

十三 奇怪な鵠（ぬえ）の顔

制服の上着を脱ぐように言われ、山下さんに誘われてビルの名店街のラーメン屋で昼食をとることになった。山下さんがいきなり千三百円もする豪華な五目ラーメンを大盛りで二つオーダーしたので、懐具合の乏しい大一郎は一瞬ギョツとしたが、多分彼が奢ってくれるのだろうとたかをくくって心の動揺を隠

した。結局、彼がこれも何かの縁だとラーム
ン代を奢ってくれたので、財布の中身を心配
しながら麺を啜っていた。大一郎は予期してい
たとは言えほっとした。午後からは精算機の
そばの詰所で見習いをするようになった。山
下さんは、横田という警備隊長に大一郎の身
柄を引き継ぐと「気楽にやりなよ。」と告げて
管理室の方向へ戻った。横田隊長は、頭髪も
薄く好々爺という感じの細身の人だった。も
う一人小柄で小太りの同年輩の警備員も詰め
ていてニコニコと愛想良かった。椅子は二つ
しかなかったが、この隊員がすぐに詰所の奥
からパイプ椅子を持ち出して来て、「まあ、座
りなよ。」と勧めた。大一郎が病院の常駐警備
からここに飛ばされて来た経緯は皆がお見通
しという気がした。
「ここは地下二層の平面駐車場で収容スペー
スは約四百五十台だね。出入口はここだけで
発券から精算まで自動で機械がするから、特
にやることはないよ。別棟にマンション住民

とテナントさんの使う立体駐車場があるけど、
あなたが今月いっぱいでないかなら操
作を覚えてもしょうがないだろう。まあ、一
回位、後学のために見学させてやるよ。」と隊
長の語り口は優しかった。
「何かトラブル発生のために詰めているだけ
で、特にやることはないけど、一時間に一回
の場内見回りに連れて行ってやるよ。」と小太
りの警備員も大道とみずから名乗って親切そ
うで安心した。
「ロールペーパーの交換時に客が来ると、手
扱いで料金を徴収するのが仕事らしい仕事だ
ね。ところで、この春に大学を出たばかりだ
そうだね。背が高いから表の道路で車の誘導
をすれば格好が良いいけど、慣れないと事故の
もとだからな。交通誘導の教育なんて受けて
ないのだろう。」
「タコ踊りなんて、その気になつたらすぐに
覚えるよ。」大道という警備員が自嘲的に交通
誘導をタコ踊りと言いい、一人で大笑いした。

駐車場出入口のボックスに交通誘導員が二人
詰めていて、交代で路上に出て車と歩行者が
人身事故を起こさないよう誘導しているそう
であつた。
「それにしても何で鈴蘭みたいな零細警備会
社に入つたのかね。」と隊長は心配そうだつた。
「東京で警察官の試験に落ちたのです。民間
企業の入社試験も駄目だつたから何だか実家
に居辛くなり出たんです。友達からパライ
トなんて馬鹿にされるのも癪ですから。」
「家出したのかね。」と大道警備員が真剣な眼
差しをした。
「大道さん、それはないよ。」と事情を聞いて
いるらしい横田隊長が注意した。
「実家は八百屋で一人息子です。親の許しを
得て社会勉強に出してもらいました。何とな
く懂れていた札幌に来て、夕刊のスポーツ新
聞を買ったら求人蘭に警備員募集が掲載され
ていたのです。」
「へい、そうかね。それで応募したのかね。」

そりゃあ又気楽なご身分で：。」と大道警備員
は軽蔑したように大一郎を見た。
「鉄甲君、人生は長いよ。そんな挫折でくよ
くよするなよ。私も正直に言うけど好きでこ
の道に入ったわけじゃないよ。以前の会社で
経理部長をやっていたけど、信頼していた部
下に大金を使い込みされてね、おのれが虚し
くなつて辞めて、五五才でハローワークから
警備員採用の身だよ。本当は東京のW大の法
学部卒なんだけど、履歴書には高卒までしか
書かなかつたさ。現場の警備に学歴が役に立
つかね。これから高級取りになつたり、出世
があるはずもないだろう。我が青春の日々は
終わったと悟るしかないさ。日々是好日の平
安を願うだけだよ。」
大一郎は、そうですね、と相槌を打つわけに
もいかず、黙つて鉄仮面みたいな硬い顔に金
属的な笑みを浮かべていた。
「あなたは、まだまだ春秋に富む身で、この
先洋々たる人生航路が待っているから色んな

ことに恐れずチャレンジすることだね。」と隊長は説教した。「そうだよ。しかし、目の前の仕事には全力を尽くしなよ。手抜きはご法度だからね。」と大道警備員からも釘を刺された。特にやることもなく三人で目前を出入りする車両に視線を当てるだけだった。業務上は出入交通監視というそうだった。入る車が音声ガイドに従ってチケットを抜き取ると自然とバーが上がった。車は空車スペースを見つけて駐車し、その一部始終を管理室の職員がモニターし、駐車場の空きスペースなどを必要があればアナウンスで指示しているのであった。用が済んで出庫する車のドライバーは運転席から手を伸ばして音声ガイドの言う料金を投入するとバーが上がり出て行った。「たまに左ハンドルの外車が来たら出て行つて手伝ってやるのさ。何しろ、サービス業だからな。当たり前前だろうという顔をする者がいたり、馬鹿丁寧に恐縮されたり、人はそれ

ぞれで人間芝居は面白いよ。金持ちのお婆さんで、いつも左ハンドルだから恐縮するのか、来る度に饅頭の菓子折りを差し入れてくれるので、すっかり仲良しになって楽しみにしているよ。」

前の病院の常駐警備でも大一郎が食べ損なつたショートケーキの差し入れがあつたが、社会の裏舞台にいる人々にとっては、このような気遣いが何よりの励みになるようである。「私は面と向かつて本社の人間に何も言わないが、この業界は鵜のような顔をしていると感じているよ。」と隊長は新顔の青年を見て嬉しそうに蘊蓄を垂れだした。

「ぬえって何ですか？妖怪みたいなものですね。」

「大学出ても何も知らないんだねえ。学力の低下は確かに酷いもんだ。」

隊長と大道警備員は顔を見合せて笑った。

「鵜の鳴く夜は恐ろしい。」と大道警備員がおどろおどろしい声を出して、自分一人で大笑

いした。大一郎は、映画かテレビドラマのナ
レーションで聞いたことを思い出した。
「何でもない鳥なんだけど、夜中に藪の中な
んかで人が笛を吹くようにピーという声で鳴
くから正体が分からなくて不気味がられたん
だ。だから、得体のしれないものを鶴という
んだ。」
隊長の説明によると、この広大な再開発の複
合施設の管理は鶴のような容貌をしていると
言う。この駐車場管理もS社が入札で落とし
たが、警備の部長の耳には何にも入れず、営
業部が勝手にA実業社と水面下で手を握って
いて、いざ管理開始の段になると半分は管理
費をA実業社に渡すことになっていたそうだ。
社長にだけは、そつと耳打ちしていたようだ。
ここのオーナーはS社に入札で管理委託した
わけだから、S社の警備服で駐車場の管理を
しなけばならない。A実業社の警備員がS
社の警備員に化けて、もぐりで仕事をしてい
るのだそうだ。

「地上の駐車場口で交通誘導しているのは、
実はA実業社の連中だよ。たまには向こうに
人が足りない時に頼まれて手伝いはするがね。
それから別棟に立体駐車場があるけど、そこ
もその連中の仕事だよ。表向きは、うちのS
社の警備服を着ているからインチキだよ。」
「それって違反ですか？」
「私も会社の問題でどうでも良いけど、法令
を調べたらどうも芳しくないな。警備業は派
遣が絶対に禁止の業種なんだよ。うちの制服
を着ているということは、連中がS社に派遣
されていることになるだろう。それでいて、
月給は別々だし、警備員の法定教育だってそ
れぞれ別々にやっているし、それでも警備業
法で定まっている警備員の指導監督は、うち
の山下さんがやっているのだから、ちよつと
変だと思わないかい。」
「S社に出向とかできないのですか？」
「良いことを言うねえ。だてに大学の経営学
科を出てないじゃないかね。」と横田隊長は褒

めてくれた。隊長によると、S社人事課から形式的にこの駐車場に勤務するA実業社の警備員の採用発令通知が出ているそうだ。それでも、日によって連中は勝手に顔ぶれを代えてメンバーは一定していないという。だから、実態はA実業社の警備員がS警備保障社に派遣されて駐車場の共同管理していることに変わりなく、これは正しく労働者派遣法違反で警備業法違反として国家公安委員会規則に規定する『重大な違反』に該当するそうだ。大一郎は隊長の長口舌を聞いているうちに、自分自身の身分も怪しいと思い、勇気を出して尋ねてみた。

「ところでもぐりは罪ですか。私も鈴蘭警備の人間で、この制服を着ているのが億劫になりまして。」

「私は正論を言っているだけだから気にするなよ。世の中はきれいごとばかりでも渡れな

いからな。江戸時代に田沼意次が賄ろを横行させたので、白河藩主の水野の殿様が老中に

な　　っ　　て　　改　　革　　し　　た　　ら　　、　　今　　度　　は　　、　　白　　河　　の　　水　　の　　清　　き
に　　住　　み　　か　　ね　　て　　元　　の　　田　　沼　　の　　濁　　り　　恋　　し　　き　　と　　落
首　　が　　あ　　っ　　た　　こ　　と　　は　　知　　っ　　て　　い　　る　　だ　　ろ　　う　　。」
「　　病　　院　　の　　警　　備　　隊　　に　　い　　た　　時　　、　　皆　　に　　も　　ぐ　　り　　と　　陰　　口
を　　叩　　か　　れ　　馬　　鹿　　に　　さ　　れ　　て　　い　　た　　よ　　う　　で　　気　　に　　な　　り　　ま
し　　た　　。」
「　　何　　だ　　よ　　。　　で　　っ　　か　　い　　図　　体　　を　　し　　て　　気　　の　　弱　　い　　こ　　と
言　　う　　な　　！　　」　　と　　大　　道　　警　　備　　員　　が　　ニ　　ッ　　と　　白　　い　　歯　　を　　見
せ　　て　　笑　　っ　　た　　。　　そ　　の　　時　　、　　管　　理　　室　　で　　モ　　ニ　　タ　　ー　　監　　視
し　　て　　い　　る　　警　　備　　員　　か　　ら　　の　　、　　走　　行　　中　　は　　ヘ　　ッ　　ド　　ラ　　イ
ト　　を　　点　　け　　る　　よ　　う　　に　　注　　意　　の　　間　　延　　び　　し　　た　　声　　の　　ア　　ナ
ウ　　ン　　ス　　が　　場　　内　　に　　響　　い　　た　　。　　隊　　長　　は　　場　　内　　に　　ち　　よ　　っ
と　　視　　線　　を　　向　　け　　、　　「　　そ　　う　　か　　い　　。　　説　　明　　し　　て　　や　　る　　よ　　。
法　　学　　部　　の　　出　　だ　　か　　ら　　、　　こ　　の　　辺　　の　　こ　　と　　は　　興　　味　　本　　位
で　　研　　究　　し　　た　　さ　　。」　　と　　長　　口　　舌　　を　　又　　始　　め　　た　　。
「　　鉄　　甲　　さ　　ん　　っ　　て　　名　　前　　だ　　っ　　た　　ね　　。　　あ　　な　　た　　の　　身　　分
は　　外　　注　　警　　備　　員　　だ　　ね　　。　　虫　　の　　害　　虫　　と　　違　　う　　よ　　。　　警　　備
業　　界　　で　　は　　よ　　く　　あ　　る　　ん　　だ　　が　　、　　誰　　か　　が　　急　　に　　辞　　め　　て
そ　　の　　一　　時　　の　　穴　　埋　　め　　に　　よ　　そ　　の　　社　　の　　警　　備　　員　　に　　応　　援
を　　も　　ら　　う　　の　　さ　　。　　警　　備　　業　　法　　で　　新　　人　　に　　は　　特　　例　　教　　育

の規則もあるけど、通常は、募集をかけやつのこと採用しても四日間の座学と一日の実務研修という三十時間以上の新任教育を行わないと現場に配置できないのだから、その間、抜けた警備員の穴埋めをやりくりするのが大変で、安易に外注警備員で埋めるのが慣わしなのだね。それでも、その外注の会社の制服や装備品で勤務し、指導監督もその会社の指導教育責任者がやってくれば問題ないのだよ。ところが、どうしてもオーナーさんの目を誤魔化そうと自分の会社の制服を着せるから違反になるのだね。とにかくバラバラの警備服が勤務していたら見栄えが悪いからな。自分がもぐりつてのは、どんな鈍感な奴さんでもすぐに気が付くさ。うちの会社の例で言え、もぐりには給料振込の明細書も渡されないし、月に一度出る社報の『アカシア並木』も配付されないからな。」と隊長は得々と語ってくれた。

「僕は鈴蘭警備に採用され、S警備さんの制

服を着て仕事しているから、もぐりと言われるのですね。僕の前に辞めた人が背の高い人で、その特注の警備服が勿体なくて着せられていたことを隊長に告げた。

「警備服の経費って警備会社には馬鹿にならない実情もあるさ。冬服、夏服、盛夏服をスペアを含めて二着ずつ、それに防寒服に雨合羽などの貸与経費は警備費用に重く押し掛かって来るからね。女性警備員の制服となると、膝丈の紺のスカート、これにキュロットスカートやパンツルックや活動しやすいカジユアルスタイルの服を作ったりして、お洒落な格好にするから厩大な予算が要るそうだ。特に女性警備員は見栄えが商品だからな。」

「もぐりの違反について訊きたいのですが：」と大一郎は隊長の話が脱線したので改めて尋ねた。

「それは、さっきのうちの会社とA実業社の問題と同じだよ。ただ、大勢の中に一人紛れ

込んでいるから、もぐりと言われるのだよ。」
「すると、労働者派遣法違反で、国家公安委
員会規則の重大な違反に該当しているわけで
すね。」と初めて大一郎は自分の立っている位
置が確認できた。
「気にするな。この施設全体を警備している
道南ビルメンも、メンバーの半分は東京に本
社があるMビルメンの警備員が道南ビルメン
の警備服で勤務しているさ。警備業の責任者
には何にも知らされないで、蓋を開けたら営
業の連中が水面下で手を握っていたのだよ。
道南ビルメンの警備管理部長も困ってしまっ
て苦肉の策で、ここだけの仕立ての制服とワ
ッペンを作り、両者が共通の格好でオーナ―
の目をくらませているが、中身は二つの会社
の警備員が一緒に仕事をしていることに変わ
りない。警備員教育は会社ごとに別々にやり、
普段の指導監督は道南ビルメンの警備員指導
教育責任者の手によるのだから戻れたもんで
好ましくないに決まっている。それにこのビ

ルの防災システムが最新鋭のものだから、連中のレベルが低過ぎて使いこなせてないんだ。この前なんか、ちよつとした弾みで清掃の小母ちゃんの手が非常電話の送話器に触れて床に落ちただけで、もうコンピューター音声の『火災放送』が始まったのだ。」

「その上、連動で館内のエレベーターが全て停まってしまい、ガードマンはただウロチョロするばかりで何も出来なかったそうだけ。お客さんはあきれてしまうし、オーナーさんは激怒するし、本当にうちの会社の管理でなくて良かったですね。」と大道警備員がばかに嬉しそうな顔で口を挟んだ。

「たったそれだけのことで、もうパニックってしまい仕事にならない有り様だ。だから、連中は何もかも防災盤との連動を切ってしまった、それぞれの装置の起動を手動に切り替えて、折角の最新防災システムの威力発揮の意味がないのだよ。」と隊長は断言した。話の続きによろと、設備管理も清掃業も同様に一つの元

請会社から色々な会社の下請けだの孫請けだの
の酷いものになると曾（ひこ）請けだのと再委託、
再々委託のピンハネがあつて、種々雑多な会
社の人間が集まつて日常の施設管理業務が行
われてゐるそうである。
「隊長、よその会社の悪口ばかり言えないで
すよ。うちでも大チョンボの『泡踊り事件』
をしないでかしたじゃないですか。」と大道警備員
が話題を変えた。この会社でもこの駐車場管
理早々に、荷物を高く積み上げたトラックが
入場して来て、天井の泡消火設備の放射ノズ
ルを壊し、消火液の泡を吹き出させた事故が
あつたそうだ。誰も泡の噴射の止め方を知ら
ず、右往左往したり傍観するだけで、タンク
一杯の液を全部吐き出し、辺り一面泡の海に
してしまつた。と隊長と二人で腹を抱えて大
笑いをしてゐた。隊長は脱線した話を元に戻
した。
「ただね、設備も清掃も労働者派遣業が禁止
ではないから法的にはたいしたことはないだ

ろう。しかし、警備業では絶対に派遣禁止で
許されてないからな。もし、何か大きな事故
があれば明るみに出て大問題になるぜ。オー
ナーが管理事務所を設置して各社の代表を集
めているから、一応表向きはかき揚げのテン
プラみたいの一つの顔をしているが、中身は
正に得体の知れないものがグチャグチャ練り
込まれて奇怪な鵜鳥の顔をしているのだよ。」
「鵜の鳴く夜が来るぜ。」と大道警備員が帽子
を脱いで毛の薄くなつた前頭部を撫でた。
「法律の話のついでに参考までに教えておく
よ。駐車場の管理は警備業でなくても出来る
んだよ。なぜなら車は公安委員会から運転技
能を認められた者が、免許証をもらつて運転
しているから、交通誘導なんかしなくても良
いだろう。すべて運転者任せにし作業服で監
視するだけで、料金徴収事務や簡単な案内だ
けやるなら警備業でなくとも良いという判例
もあるからな。」と隊長は説明してくれた。し
かし、オーナーから交通誘導や防犯・防災の

要望があれば警備業で行わざるを得ないそうである。

大一郎は大道警備員と当務勤務に当たった。

駐車場の閉門時間は午前零時で、その後は

朝の六時の開門まで緊急に出庫の運転者にの

み対応し、門まで出向いて手動でシャッター

を揚げ降ろしすることがたまにある程度だそ

うである。原則としてその間は営業停止で、

午後十一時半を過ぎたら、午前零時から明朝

六時まで閉門となるから、館内に出庫を促す

アナウンスのテープを何度も流した。その夜

は起こされることもなく無事に朝を迎えるこ

とができた。

十四二人の女ガードマン

五月の末日も近かった。泊り勤務で管理室

に出勤した。

「鉄っちゃん、最後の勤務だね。」檀家寺の縁

ですっかり仲良しになった山下さんが心なし

か名残惜しそうな口振りだった。晦日の夕方

に鈴蘭警備の事務所に月給を貰いに行くこと

になつていた。コンビニのお結びとかカップヌードルばかりで何とか給料日近くまで凌いで来た大一郎も、トンネルの出口の光りが明るく見えている心地だった。

「最後に立体駐車場勤務を見学していきな。隊長から聞いているかも知れないが、格好は一緒にでも別会社の警備員が勤務しているんだ。私の方からよく言っておくから大丈夫だ。

後々で何かの役に立つことがあるかも知れないから見ておいた方がいいに決まっている。」

と言つて、勤務シフトを見ながら、女性ガードマンがパートで半日ずつ勤務し、男性警備員の一人が当務勤務、夕方から夜勤の男が上番になつていと説明してくれた。

山下さんに連れられて別棟のスポーツジムやマンションの高層ビルの立体駐車場に行つた。二人勤務のポストだという。

「ああ、こりやどうも、異常ありません。」と五、六歩先から中年の肥えた警備員がヘラヘラと笑いながら山下さんに帽子をとつてお辞

儀した。頭髮はクシヤクシヤで櫛を入れた跡はなかった。大一郎は何か不潔感を覚え黙つていた。――あなた、背が高いわねえ。」

いかり肩で幅もあり、胸の厚みはもう馬鹿馬鹿しいと言うしか表現のしようがない小山のような盛り上がり様で、牛みたいな短軀の小母さん警備員がニコニコと笑顔で迎えてくれたのにも驚愕した。

「隊長はいるかね？」と山下さんが尋ねた。「マネージャーは公休です。」と男の警備員が分厚い唇を開いた。A実業社では、警備員はセキュリティテイスタッフ、隊長はセキュリティマネージャーと横文字で呼称していた。女性警備員はセキュリティテイレディだそうであつた。名称だけ聞くと証券会社の品のある女性の営業スタッフみたいだ。と大一郎は思った。しかし、目の前には黄色に赤のストライプの派手なブルゾンの上衣を着用しているが、牧場で乳搾りしている方がよく似合う頑強そ

うな女性であった。男性の警備員の夏服はグ
レー、冬服は紺一色の地味な制服なのに、女
性には実に派手な格好をさせて、雉鳥や孔雀
鳥の雄雌の逆バージョンだと大一郎は感じた。
「こちらは鉄甲君だ。今日一日だけ仕事を見
学させてやってくれないか。さつき、私から
あんたの会社の警備管理部長に断っておいた
からよろしく頼むよ。」
「本社が了解しているなら結構です。どうぞ
気の済むまで見物して下さい。」と原黒と名乗
った警備員は答えた。彼は自分の名前を気に
しているようで、原っぱの原に黒真珠の黒と
ご丁寧に名前の漢字説明までしてくれた。耳
から腹黒いと聞こえて嫌なのであろう。山下
さんが足早に去ると女性警備員が話しかけて
来た。
「まあ、鉄甲さん、背も高く素敵な名前だわ
ね。あ、この鉄甲がおつきくて茎が長いと気
持ち良いわよね。東京の学生さんだったから
アレ上手でしよう。エヘヘヘ……」と白姫彩子

と名乗ったセキュリティレイデイは蓮っ葉に笑
った。名前と現物が釣り合わなくても偽装表
示にもならない人間社会は面白いと大一郎は
心中で冷笑するだけだった。原黒警備員にも
耳に聞こえるイメージのような腹黒い人でな
いことを願った。
立体駐車場はボタン操作だけでコンピュ
ター管理され、ビル内に効率よく車両を収納
できる優れたものである。難点といえ一台ず
つしか処理できず、連続して車の出入がある
と通行を整理しなければならず、人件費が無
駄なようだけど二人配置しないと完全な事故
防止にならない点である。運転者が来て出庫
させる段になると、一人が入庫車両側を一定
のラインで抑え、出庫車両が出て行くのを待
たせねばならない。単純作業ではあるが、ぼ
んやりして一歩間違うと、車同士がかち合い
警備員は叱られる。ひたすら、ヘイコラ、ヘ
イコラするのが月給になるというのが、原黒
警備員の言い草であつた。こういう職場だか

ら、多少の不始末があっても運転者が不平不満をグツとこらえてくれる付加価値を持った女性警備員の配置が重宝になるのだ、と大一郎は思った。

「ボタン操作ひとつで仕事になると言っても、これまでに失敗はあったよ。」と原黒警備員が教えてくれた。警備員同士がお喋りに夢中になつて、運転者が降りて来ないのに移動ボタンを無意識に押ししてしまい、暗いビルの空間を空中遊泳させてしまい、二人とも即他の現場に飛ばされたそうである。乗客があつたら、駐車口の扉を開ける前に降車させるから、宙に高く舞い上げられたのは運転の者だけで、高いところから「おい、助けてくれ！」と大声を上げてても埒があかず、携帯電話で一〇番に救助を求めたため大騒動になつたそうである。朝のうちは利用者も少なく三人とも無口になつた。

「鉄甲君、あんたも若くて力があるかも知れないけど、この小母さんは強いぞ。」と原黒が

沈黙を破って言った。

「エヘヘヘ、嫌だよ、原黒さん！あたし、自慢したくなるような、恥ずかしいような……」

白姫元嬢は五十前後と思われる厚化粧の顔をクシヤクシヤにして顔にひび割れが入るやに思った。

「だって、俺はあんたの試合をテレビで見たことがあるよ。」と原黒が冷やかした。

「あたし、女子プロレスをやっていたの。」と小母さん警備員は意を決していうか、半ば自慢気に話を始めた。

「鉄甲さんなんか生まれるずっと前のことよ。リリー・ターザンって今思えばふざけたリングネームだったわね。」

「テレビでは惜しいところで負けてばっかしだったな。」と原黒は又冷やかすように高笑いをした。

「違うのよ。始めからシナリオがあるの。ちよつとでも可愛い顔をした子が勝つようになつていたのよ。ベビーフェイスとヒールに分

けられ、私はいつもヒールの負け役だったの。
何のテレビ放送もない田舎の広場の興行では、
ガチンコのセメント勝負の試合になり、相手
が泣いてもやっつけてやったのよ。」ベビーフ
エースとは善玉、ヒールは悪玉で、確かに世
の中はこの両方がいないと面白くも可笑しく
もないものである。
「オオ、怖ッ。しかしブスは損だね。」
「ブスだけは余計でしょ！」と白姫小母さん
は原黒の背中を思い切りピシヤリと平手で叩
いた。叩かれた原黒は返って嬉しそうにやに
下がり、大一郎に顔を向けると帽子を脱いで
頭を搔いた。
「何年位レスラーをなさったのですか？」
「まあ、鉄甲さんったら、『なさった』なんて
シロモノじゃないわ。当時の女子プロレスな
んてお客さんの目から見たら、ストリップ小
屋の踊り子さんと同じようなものだっただよ。
あたし達の剥きだしの股ばっかし狙って写す
卑猥なカメラ小僧もいたりしてね。とにかく

旅から旅の旅鴉よ。早寝早起きで練習はきつ
いし、男は一切禁止だし、高校出て三年位や
ったけど、すぐ辞めて北海道の田舎に帰り、
実家のある村の牧場の跡取り息子だった今の
主人と世帯を持ったの。ところが酪農が不景
気で牧場は人手に渡るし、札幌に出て主人は
失対（失業対策事業）の土方、あたしはパー
警備員をして子供を大学に通わせているの
よ。」と一氣にまくし立てたが悲壮感はなく陽
気な喋り方だった。そこへ、間違えて大型の
外車が入って来た。白姫警備員はあわてるよ
うに席を立ち、紺のスカートが今にも張り裂
けそうな肉のボリリュームのある腰をプリプリ
振りながら車に近づく。と左から首を伸ばした
外人に顔を寄せると何事が囁き、車のバック
に回り笛でピーピーと路上まで後退させ
た。
「大型乗用車はゲージに入りきれないから、
平面駐車場に案内するのだ。」と原黒が腕組み
をし、欠伸を噛み殺しながら呟いた。入口の

道路に大型乗用車はお断りの大きな看板が出
ているが、間違って入って来るのは日常茶飯
事だそうである。こういう時は、後続の車が
来ないうちに素早く誘導してバックで道路に
戻すのである。立体駐車場のゲージへは車は
頭から入っているから、出る場合はバックで
ターンテーブル上まで誘導するのが原則であ
る。しかし、原黒らの仕事を見ていると、扉
が開いて出てくる運転者に自席に座ったまま、
オーライ、オーライ、はい、ストップと声か
けだけで済ませていた。後は回転ボタンを押
せば車はくると百八十度回転し、ヘッドが
表の道路を向くので、「有り難うございまし
た。」と大きな声を張り上げていた。月極め
の契約車両がほとんどで現金の精算がない
だけ。楽な面もあった。正午のチャイムが鳴
った。「お早うございます。」と今風の長い
茶髪のギヤルがツカツカと表から入って来
て、見慣れない大一郎の顔を一瞬アイシャ
ドールの濃い付けまつげをした意地の悪そ
うな目つきで見張

ったが、何も言わずに従業員控え室兼更衣室の方へ向かった。大きな金メッキの輪っかのピアスが両の耳で揺れていた。午後からのパートの女性警備員で、交代で食事をとるので一時まではトリプル配置になっていた。「美香ちゃんよう、もうちょつと早く来いよ。正午の時報が鳴る時には、勤務態勢で制服を着てここにいなければならない就業規則だろう。それにその牛の鼻輪みたいなピアスは外して来いよ。」と彼女の背中に向かって文句を言いながらも、原黒の顔は目尻を下げてデレッと緩んで見えた。「小父さん、ごめん。食堂が混んでオーダーのラーメンがなかなか出て来なかったのよ。」と言いつつ、今見たばかりの女の子の脚の太股まで完全に透けて見える短いスカート姿の残像だけが臉の裏に焼き付いた。中肉中背のスタイルで、美人ではなく若くて色白さだけが取柄で、つりあがり気味の目と尖がった

小さなあごが特徴的だった。

「あの子は料理の専門学校に籍があるらしいけど、真面目に通っているのかなあ。夜はスキノのキャバクラでバイトに精を出しているみたいだぜ。さっきのド派手なネールアールト見えたかい。」

その女の子が制服に着替えに行っている間に、原黒が説明してくれた。

「お金を貯めて何かすることを考えているのよ。若いうちは夢を見られるのが花よ。あたしなんか夢も希望もどつかへ飛んで行っちゃまったよ。」白姫元お嬢さんが嘆いた。

「まあ、あんたにもあんな年頃はあったのだから、過ぎた昔とあきらめることだね。美香もすぐに戻って来るから先にチャッチャッと弁当でも食って来な。」と言う原黒の言葉には労わりとも慰めとも嘲りともつかぬ微妙な言い回しがあった。

「こちら新人さん。」と美香という女性警備員が派手なブルゾンに紺のスカートの警備服に

着替えてやって来た。制帽もベレー帽で小母さん警備員のキャップよりお洒落に見えた。馬子にも衣装とは古臭い言葉だが、そうとしか言い様のないこの年頃の女の輝きの眩しさがあつて、大一郎は思わず目を伏せて顔の紅潮を覚えたほどである。

「はい、鉄甲と言います。ウツフン、フン。」となぜか末尾の声がしわがれたので照れ隠しに咳き込んで誤魔化した。

「この背の高い兄ちゃん、今日一日だけの見学だよ。」原黒が口を挟んだ隙に彼は喉の奥の唾をゴクリと呑み込んだ。

「鈴田美香でえす。パートで働いていまあす。」と明るいい口調だった。

「鉄甲です。よろしくお願いします。」と大一郎は反射的に立ち上がり、もう一度畏まった挨拶をした。

「ドヒヤツ、珍しい名前！でもお店のお客さんにも大砲（おおづつ）さんっているわ。その人、あつこの筒も大っきいのよ。ウフフフフ

：「と卑猥な目付きをした。

「コラッ、美香！真っ昼間からふざけるんじゃない。」と原黒警備員がたまりかねて叱った。

「小父さん、怒っちゃ嫌よ。もうお給料が出たのだから、お店に来て指名してね。」と美香と呼捨てにされた女性警備員はあっけらかんとしている。年のころは二十歳前後で大一郎より若い。そうこうしているところへ弁当を食べ終えた白姫元お嬢さんが戻って来た。お腹を揺すりながら歩く姿は豆タンクといった景色である。

「原黒さん、あたし早飯かき込んで来たわよ。どうぞ、ごゆるりとお休み下さい。」

「ほんじゃ、ちよつと飯でも食わせてもらおうか。」と原黒は立ち去った。大一郎は若い女と五十女という妙な取り合わせではあるが、両手に花といった格好になって、尻の辺りがムズムズするようで居心地は落ち着かなかつた。

「原黒さんは名前の通り、お腹の中が真っ黒

け　な　ん　だ　か　ら　。　あ　た　し　に　は　さ　っ　さ　と　食　事　さ　せ
る　け　ど　、　自　分　は　い　つ　も　一　時　ギ　リ　ギ　リ　ま　で　戻　つ
て　来　な　い　の　よ　。」　と　白　姫　警　備　員　は　原　黒　の　姿　が　消
え　た　途　端　に　口　を　尖　ら　せ　た　。　一　時　ま　で　の　パ　ー　ト
勤　務　で　、　彼　が　戻　っ　て　来　た　ら　下　番　す　る　と　の　こ　と
だ　っ　た　。　お　喋　り　好　き　な　よ　う　で　、　す　ぐ　に　年　下　の
鈴　田　警　備　員　に　、　「　美　香　ち　ゃ　ん　、　学　校　に　行　っ　て　、
夜　の　お　勤　め　も　し　て　、　こ　ん　な　と　こ　ろ　で　バ　イ　ト　だ
な　ん　て　し　て　い　た　ら　体　を　壊　す　わ　よ　。」　と　早　速　年　寄
り　ら　し　い　お　節　介　を　言　っ　た　。

る　の　。」

「　何　の　夢　よ　。　言　っ　て　ご　ら　ん　。」

「　お　金　を　貯　め　た　ら　東　京　に　行　く　の　。　秋　葉　原　で　メ
イ　ド　し　た　り　、　渋　谷　や　原　宿　を　歩　い　た　ら　ス　カ　ウ　ト
が　寄　っ　て　来　て　、　女　優　さ　ん　に　な　れ　る　か　も　知　れ　な
い　わ　よ　。」

大　一　郎　は　、　こ　の　女　の　お　頭　（　つ　む　）　は　相　当　い　か
れ　て　い　る　と　思　っ　た　。

「　僕　は　東　京　か　ら　札　幌　に　来　た　ば　か　り　だ　け　ど　、　こ

の街の十倍以上もある大都会の暮らしは甘くないよ。女優なんて、A V 女優になるのでもヤクザ絡みで怖い目に遭うよ。」

「最初はアダルトビデオの女優さんでも、そのうちテレビタレントになった話をいっぱい聞いているわ。大丈夫よ。」と彼女はにべもない返事をする、白姫元嬢に向かって、「小母ちゃん、昔強かったんでしょ。プロレスの技を教えて！今度キャバクラ対抗のローションプロレスゴッコがあるの。優勝したら三十万よ。」

「三十万もらって何に使うの？」と白姫警備員も半ばからかうような口振りをした。

「美容整形するのよ。女優になるには顔を綺麗にする必要があるでしょ。美香は、バストはあるし胴はくびれ、お尻はプリツとカッコ良いといわれてるから、スリーサイズのスタイルは負けてないのよ。あとは顔にお金をかければアイフルと言つて、街の皆が振り向くような好い女になれるのよ。」と幼稚な話し振

りだった。
「ヤレヤレ、そんな端金（はしたかね）で顔の美容整形が出来るわけないでしょ。まあ、頑張った形だった。
一時のチャイムと同時に原黒警備員が戻って来た。
「原黒さん、あたしは一時には私服に着替え
ていて、ここを出て良いのが就業規則よ。も
うちよつと早く戻ってくれたら、着替えが済
んでいるのに意地悪ね。」と白姫警備員はズケ
ズケと文句を浴びせ下番するため立ち上が
った。
「ああ、そうだったかい。そうだ、新人さん
は飯食ってないだろう。お前さん達よ、気が
利かないなあ。この人に飯を食べに行くよう
言わなかったのかね。」と原黒は悪びれたふう
もない。大一郎は表の通りにあるコンビニで
弁当を買おうと控え室でそそくさと喉にかき込
みすぐに戻った。ギャル警備員が勤務してい

ることが、そうさせたのかも知れない。

午後からは原黒とギャル警備員のコンビになった。専ら車の扱いはギャル警備員がして、原黒は彼女の働き回る若い肢体を嘗め回すように腕組みで眺めてばかりのようだった。若い女の警備員の応対に客もニコニコと愛想が良かった。

「新人のお兄ちゃん、給料ももらったでしょう。後で名刺渡すから遊びに来てね。」美香が大一郎の顔を見上げ擦り寄るように話かけて来た。

「新人さん、気をつけな！この子の店に入ったら、尻の毛までむしり取られるからな。おまけに美香のカラオケのマイクを握る手付きは嫌らしくて、マイクの先を舐（ねぶ）るように唄うから、こっちの股までピンピンして来るぜ。」そういえば、カラオケ店のマイクは長くて先っぽが丸く膨らみ男根の勃起時によく似ていると大一郎は気が付いた。

「小父さん、下品で嫌い！お店では社長さんと呼んで良い思いさせているでしょ！」

「たまには無料招待券でもくれよ。お前さんのいる店はガードマンの安月給で遊べるところじゃないぞ。」と原黒警備員は仏頂面をした。時々車の出し入れの客が来るだけで、のんびりした昼下がりで、さして明るくもない駐車ホールに朝から閉じ込められ、人の仕事を物しているのは退屈極まりなく感じられた。壁面の時計を見遣ったら、間もなく三時になろうかという頃だった。「と原黒が席を立った。ちよつと小便して来るよ。」と原黒が席を立った。すぐに営業マンのスーツ姿の若者がお客さんらしい紳士を連れて出庫にやって来た。美香は営業マンと顔馴染みのようで、「お店に遊びに来てね。」と夜の営業の誘いもしながらボタン操作で駐車場の扉を開けた。美香とピッタリ肩をくっ付けて立った営業マンは彼女の腰のあたりに卑猥な指先を曲げた手付きで撫で回しながら、ガラガラという金属音の中でで自分の車の積載されたゲージが来るのを待っていた。原黒警備員がいらないと、美香の態

度が何となく威張っているように感じられた。
「新人さん、お客さまをターントーブルから
離してあげて！」と振り返り偉そうに指図し
た。営業マンの連れの客の片足がターントー
ブルに乗っていた。大一郎が美香に言われる
ままその客を慇懃無礼に後方に退かせた、そ
の時だった。表からホールにアメ車のクライ
スラーのどでかい車体が静かに滑り込んで来
た。このままでは、鉢合わせで出庫車が出ら
れないのが大一郎にも分かる。
「アッ、新人さん、何してるのよ。早く表の
道に誘導するのよ。」ヒステリックに叫んだ。
「はい、」朝からぼんやり見物ばかりしていた
大一郎には、今日始めてのアクションだった。
ぼうっとのぼせた頭に思考力はなく、図体の
大きなアメ車を忘れ、「すみません。車が出ま
すので。」と左ハンドルの運転席の品の良い白
髪の人老人に断ると、朝から見ていた出庫車両
のヘッドを表に向ける操作を見様見真似でし
た。ターントーブルの回転ボタンを何も考え

ずに反射的に押した。馬鹿でかいクライスラーを載せたターントーブルはゆっくりと回転を始めた。「アッ、バカ！止めなさい。」とギャル警備員が叫ぶと同時にすっ飛んで来て赤いストップボタンを押した。が間一髪遅かった。「キヤッ、」美香が目を瞑り指で耳の穴を塞いだ。落雷のようなバリバリガシャーンという大音響がホールも吹き飛ぶかのように鳴り響き、壁面がバラバラと崩れた。午前中、女豆タンクがやったように、大型乗用車は背後に回りバック誘導をしないと、ヘッドの方向を回転させればボディと壁が衝突してしまうのである。「おい、大変なことを仕出かしたな！」と小用から戻って来た原黒の顔が青ざめていた。しかし、さすがに原黒は事故の修羅場に慣れていた。いて、白髪のクライスラーの運転手に帽子を脱いで謝ると、素早く誘導しバックでクライスラーを表の道路に避難させ、大声で美香

にお客さんの車を出庫させるよう指示をした。
「あんた、バカよ！」と美香は涙ぐんでいた。
原黒警備員が内線電話で管理事務所の山下さ
んを呼んだ。すぐにやって来た山下さんは渋
い顔をしたが、大一郎を叱るような口振りも
素振りもなかった。
「新人さんには見学だけで、機器類には一切
触れるなと何度も注意していたんです。」と原
黒は殊勝に山下さんに弁解していたが、大一
郎は嘘をつくな、と腹立たしくなった。本当
に名前と同じように腹の中まで真っ黒い男だ
と軽蔑したが、何としても一番のドジは自分
だから黙って堪えるしかなかった。沈黙は金
なりの格言を通した方が良いと思ったので、
慣れない新人に中途半端な指図をしたギャル
警備員にも文句を言う筋合いはなかった。全
部自分が悪いのだ、とひたすら頭を下げて恭
順を貫く覚悟をしていた。
「表に大型車は駄目だという看板があるのは
知っていたよ。うつかり間違えて入った自分

にも落ち度があるから、ガードマンさんを責めないでくれ。車は自分の金で修理するから心配しないで良いさ。」

金持ち喧嘩せず、と言うが、当事者の白髪の紳士は物分りの良い人で、大一郎は助かった。この紳士と山下さんとは旧知の間柄だそうで、札幌市内の設備業の経営者で、この再開発施設の大株主の一人であることも大一郎に幸いしたようだ。

「壁は、オーナー保険で直しますから、また後ほどお会いしましょう。」と山下さんが頭を下げたなら笑顔で手を振って紳士は運転席に戻った。ボディの前部の塗装がやや剥離していたが、目立っていた凹みもなく、アメ車は本当に頑丈にできている。山下さんは、原黒に備付のデジタルカメラで表に待ってもらっている。アメ車の傷や駐車場のホールの損壊状況の写真から清掃員を呼んでスレートの破片を片付けさせながら、破壊された壁を隠すように修理

業者を手配するなど、八面六臂の見事な采配の事故処理振りであつた。我を忘れたように、茫然と高い背中を丸めてしよげ返っている大一郎のそばに、カメラを手にした原黒が来て耳元で囁いた。

「昔、小林旭の自動車の名前がいつぱい出て来る歌があつたろう。若いから知らないのかなあ。」

「ええ、知りません。」彼は泣き出しそんな声で答えた。

「お前さんもそうだが、俺だって♪クライスラー♪だよ。」と原黒は節をつけて事故のアメリカの名を言った。小林旭の『自動車ショー歌』の文句に、♪ベントツにグロリア寝転んで、ペレットするなよヒルマンから、それでは試験にクライスラー♪、とあるのをもじつたのだ。が、若い大一郎には通じなかつた。クライスラーのクライには、英語で大泣きするという意味がある。

大一郎は、山下さんに連れられて駐車場管

理室に行く、簡単な事情聴取を受けた。大
一郎の説明が終わってもまだ五時前であつた。
「最後の最後にとんだ魔物が潜んでいて大暴
れしたみたいだな。これもあんたがこれから
生きていく肥やしになるから自棄（やけ）にな
るな。今日は泊まり無しにしよう。日勤扱い
で石塚さんに報告しておこう。これでこの
仕事は終わりだな。あんたは他人みたいな気
がしないから、何かあつたら遠慮なく相談に
来なよ。」と慰められ帰された。
夕刻ではあつたがまだ日は明るかつた。制
服や泊りのグッズの入つた大きなバッグを手
にトボトボと札幌駅の方角へと歩いた。暗い
駐車場のホールに一日いたから、北の都の五
月の陽光が目眩しかつた。あるマンション
のベランダの真つ赤なゼラニウムの花弁が
目に泌み込んできた時だつた。
「鉄甲のお兄ちゃん、さつきはごめんね。」と
私服になつたギャル警備員の美香が追いか
けて来た。

「夜勤の小父さんが早く上番してくれたから交代して来たの。」

昼間の出勤時には彼女の透けた短いスカートに目を奪われたが、帰りに素早く化粧を直したのか、さっき見たばかりのゼラニウムの花にも負けない、やけに真っ赤な唇に見惚れてしまった。美香は押し黙っている大一郎に咳き込むように話を続けた。

「これからお店に行くのよ。ねえ、遊びましようよ。」

「給料前でお金がないよ。」

「どうしてよ、もう給料は出たじゃないの？」

「うちは晦日に出るのだよ。」

「エッ、同じ会社じゃなかったの。変なのね、原黒の小父さんと同じ制服を着ていたわ。でも、そんなことどうでも良いわ。お勘定は付けでいいのよ。お店ではランジェリーに着替えてサービスするわよ。午後七時半までは割引値段だから心配無用よ。」

「明日の昼には給料もらえるから付けにして

くれるかい？」石塚部長から晦日の昼に給料をもらいに事務所に来るように言われていた。当務明けで顔を出す予定だったが、先ほどの事故のことから急遽日勤になり、今宵はパツと憂さ晴らしをしたくなつた。「嬉しいわ。〇お店に案内するわよ。甲を磨いてあげるわ。」と美香は大一郎の腕にぶら下つて絡み付いて来た。何の香りのスプレーか茶髪のような気配だつた。ススキノの美香の勤める店内に客は誰もいなかった。「おビールを飲みながら待っていてね。」大一郎を店の端っこのカウンターに案内すると、彼女は店の奥へ消えた。彼は手持ち無沙汰にボーイが運んできたビールをチビチビと口にしていた。十五ススキノの女天国と地獄大一郎は翌朝遅く頭の芯のズキズキする痛みと喉もとの悪寒で目が覚めた。寢床から起

き上がる気力も失せて昨晚の記憶を追っていた。どうやって蒲団に這入ったのか覚えは全くない。よろけながら階段を上がり、部屋のトイレでゲゲゲと飲み食いしたものを何度も吐き戻したことを思い出した。店の車で送られる「ここに鈴蘭警備保障と看板が出ているわよ。」と美香が見つけて降ろされたことまで記憶が遡った。付け馬を兼ねての送りだった。店では何人かの濃い化粧と咽返る香水の匂いをつけた裸身が透き通って見える下着姿の女達に囲まれ、調子に乗ってウイスキーのボトルを注文し拍手を浴びた光景が疼く頭の中に思い浮かんだ。やたらに喉の渴きを感じたので、仕方なく立ち上がって台所の水道の蛇口をひねって両手で掬ってゴクゴクと喉を鳴らして吞んだ。大口班長は当務勤務で留守だったに違いない。泥酔し相当な騒音を出したのだから、自室にいたら驚いて起きて来たに違いない。玄関に出てみたら制服などの入ったバッグが放り投げてあった。吐気をもよおし

てあわててトイレに飛び込み、そのままバツグを忘れて自室まで足元が千鳥足によろけてドアや壁のあちこちにドシンドシンとぶつかりながら入ったことも思い出した。店でだいぶ酔っ払ってしまっただが、年増の肥った女と激しく唇を合わせ首に丸太ん棒みたいな腕を巻きつけられて長椅子に押し倒され、誰か別の女にお絞りで股間をしごかれ、あつという間に精気を吐き出し果ててしまっただことも思い出した。芋蔓式に昨夜の光景が手繰り寄せられた。ボックス席でカラオケをデュエットした美香のマイクの丸い頭を舐めるように唄う仕草は原黒警備員が指摘した通りで、男の劣情を刺激されてしまい、それからは強くない酒を呷って頭脳が痺れ麻痺して記憶が薄れて行ったようだ。唄った『中の島ブルース』は覚えている。さんざめく店内の余韻と一緒に、正しく幻聴の低い歌声が耳の穴の奥にこだまして来た。

♪ 赤いネオンに身をまかせ

燃えて花咲くアカシアの

あまい香りに誘われて

あなたと二人散った街

ああここは札幌

中の島ブルースよ ♪

（作詞 斉藤保）

「明日のお昼にお邪魔するわよ。」と暗がりの
会社の看板のそばで囁いた美香を、夢中で固
く抱き締めて夜目にも酔眼にも赤かった唇を
奪った記憶が鮮やかに蘇えた。その女が勘
定書きを持ってやって来るのだろうと思うと
気が滅入ってしまった。女ガードマン美香に
見事にしてやられ散らされた街、札幌のブル
ース、トホホ。
二日酔いの頭痛は昼前には消えた。お湯を
沸かし買い置きのカップヌードルで腹ごしら
えを済ませると階下の事務所に降りた。何と、
すでに透け透けルックの美香が応接椅子に座
って待っていた。大一郎と視線が合うと、ニ
ッと笑みを見せたが彼女のつり眼のせいか愛

嬌のない意地の悪そうな女に感じられた。
「お客さんだよ。夕べはパアツとススキノで
遊んだのかね。」と石塚部長がニヤツと笑った。
大一郎は昨晚濃厚なキッスをしたばかりの付
馬の女の子がいて照れ臭くなり、チラツと見
遣って会釈すると頭を掻いて意味もなく笑み
を浮かべていた。
「五月分の給料だよ。まずは借金を済ませな
さい。」石塚部長が紙袋を手渡した。厚みの手
触りで現金が入っていると分かった。
「幾ら？」ぶつきら棒に彼女に訊いたら、黙
って小さな紙片をくれた。鉛筆で1000
0と横書きにアラビア数字が並んでいた。十
万円の請求だった。
「0が一つ多くないかい？」彼はしかめっ面
で真剣に尋ねた。
「美香がマスターにお願いして、めいっばい
負けてもらったのよ。鉄っちゃん、気前よく
年代物の高価なウイスキーをご馳走してくれ
るのですもの。これ位が相場よ。」大一郎は頭

の回路が混線し、どうしても良いから、早くこの女の子に帰ってもらおうと思った。紙袋の封を破り一万円札を十枚数えると黙って渡した。

「部長さん、有り難うございました。」と美香は深々と腰を折り石塚さんに礼を述べるとさっさと部屋を出て行った。大一郎は折角稼いだ金を筆記取られたようで情けなくなり、嫌味の一つも言ってもやろうと玄関先まで彼女を追いかけた。

「鉄甲のお兄さん、東京の人にしては初心（うぶ）だったのね。坊やが帽子を被っていたから店のお姉さんが脱がせて、甲を磨いてあげたでしょ。ちよっと遅い端午の節句だったわね。」と振り向いてケラケラ笑われたら何も言う気がしなくなつた。真昼の光りの照る下で見ると美香は、愛くるしさの欠片もない平凡な顔をした女の子で、魔性の夜のネオン街の雰囲気に吞まれ、こんな女を狂おしく抱き締めていた自分が惨めになつた。ただ、虚しさと

こみ上げる腹立たしさを堪え事務所に戻った。
「あんたはアルバイトだから、今月限りで終
わりにしようと思ったけどなあ。色々と賑や
かな問題も起こしてくれたしなあ。まあな、
幸い仕事が一つ獲得出来たからもうひと働き
してもらおうか。」
石塚部長か勿体をつけて喋った。その言葉を
聞いて、大一郎は、東京から出てきて僅か一
ヶ月でクビを切られてたまるかと開き直った。
「ちょっと給料明細書を確認して良いです
か？」と彼は気を鎮めて、事務机の上に現金
を取り出した。
「明細は紙に書いてあるだろう。説明してや
ろう。当務一回の単価が一万八千円だから十
回分の十八万円、最後の日は日勤だったから
八千円で、合計が十八万八千円になるだろう。
それから光熱費込みの寮費の五千円を天引し
たから支給額は十八万三千円だね。間違いな
いだろう。」確かに美香にさつき支払った昨夜
の飲食代十万円の残りの八万三千円が机上に

あつた。財布の中には小銭しか残っていないはずだから、これで又一月間コンビニのお結びやカップメーダルの世話になると思うと美香が恨めしくなった。

「あのう、税金とか健康保険とか社会保険とかは引かれないのですか？」

「大一郎は色んな弱みもあり質問を躊躇したが、部長の飾らない人柄に惹かれて思い切つて率直な疑問をぶつけてみた。

「あんた、この春まで学生で無収入だから今年度は住民税なんか関係ないだろ。それに試用期間中の身分だから雇用保険もかけないよ。健康保険や国民年金のことは、役所の国保などの窓口で相談して来なよ。」と歯牙にもかけられなかった。

「分かりました。」彼は何か面食らった気がしたが、仕方ないといった態度で返事をした。

「明日からの仕事は旭川だ。鉄道の切符とバス賃は用意したから寝坊して乗り遅れないようににな。旭川の駅前からバスに乗り神居古潭

（カムイコタン）で降りるんだ。バス停から宿舎までは略図で分かるよ。市の事業でインフラの整備があるんだ。交通誘導で作業員さんの安全を守るのが業務だよ。交通誘導の二号警備だから簡単だろう。車を運転する者はみんな免許証を持った運転技能の持主だから大丈夫だよ。制服が立っているだけで良いんだ。あんたの鉄仮面みたいな顔面配備だけで車が避けて通ってくれるよ。まあ、冗談だけどな。」

「やったことがありません。」と大一郎は不安を訴えた。

「なあに、ビデオを一回見ておけば大丈夫だ。車なんかろくすっぽ通らないところだし、夜間勤務はないから心配無用だ。赤くて長いライトか小旗を振って、たまに来る車の通行から歩行者を守ってやるだけだよ。人も滅多に歩いていない田舎だ。なあ、旗なんかを進行方向に振れば車はそっちに進むし、前に突き出せば車は停止するさ。車同士が鉢合わせするような地域ではないが、その時は先に来た

車を優先して通し、遅れて来る方にストップの合図をしておけば済むじゃないか。ビデオを見て確認しておきな。それと向こうには賄いつきの宿舎があるから寮の部屋は一旦空けるといってくれないか。食事の心配が要らなくて最高の職場だろう。荷物が増えているなら宅配便で宿舎に送っておく手もあるぞ。」

「いいえ、トランクと制服を入れるバッグしかありません。」

「じゃ、先方には伝えてあるから、明日は現場監督の金桐（かなきり）さんを訪ねて行ってくれ。」

石塚部長は用事があると言って外出の準備を始めた。外注費五十万の仕事で、約三十万円をピンハネするとは美味しい仕事だ、と大一郎にもやつとからくりが見え始めた。忌々しくも覚えたが、それは口にできる立場でないことも口惜しかった。

十六 旭川の荒くれ男達

翌日、鉄甲大一郎は残ったカップ麺二個も

忘れずトランクに詰めると有金約九万円を懐
に旭川行の特急に乘っていた。石狩平野は雄
大で若葉の緑が目にも沁みた。車窓に光るのは
石狩川の流れ、北海道に来てようやく味わつ
た北の大地らしい旅情だった。
旭川は札幌に較べるとずいぶん小さな都会
に見えて妙な安心感を覚えた。まだ思い出し
ても口惜しいが、スキノの歓楽街で二度も
ボッタクられた東京育ちの自分という男が情
けなかった。駅前バス発着場から意外に早
く神居古潭に着いた。人家も疎（まば）らで略
図の横道に入ったら人の気配もしなかった。
すぐにプレハブの簡易宿舍が見つかった。草
の疎らに生えた砂利を敷いた空き地の片隅に
『石狩開発公社神居古潭事務所』の看板があ
った。宿舎というより飯場といった方が似合
った。一階が事務所で在室していたのは現場
所長の金桐さんだけだった。ドアを入っても
見向きもされなかったが、大一郎は初めが肝
心とツツカツカとデスクに歩み寄り、警備員の

礼式通りの敬礼をして到着の挨拶をした。金桐さんは書類から目を放すとメガネを少しずらし、上目遣いに大一郎を凝視した。「ご苦労さん。今日は天気も良いし、皆出払っていて夕方まで帰って来ない。」

金桐さんは、カマキリと覚えた方が早そうなの、大きな黒縁の丸メガネをかけ上背のある猫背で顔色のすぐれない痩せぎすの姿をしていた。

「背が僕より遥かに高いな。君は東京出身だけれど珍しい名前だな。僕も東京の工業大学で土木を勉強したよ。もう三十年も前のことだがね。」と無愛想に言ったが、人柄の冷たさは感じられなかった。

「昼飯はどうした？」

「はい、旭川の駅前でラーメンを啜って来ました。」

「そうかね。札幌ラーメンとどっちが美味かったかね？」と現場主任の片頬がはじめて緩んだ気がした。大一郎は、カップヌードルばかり啜っていたので、どの種の札幌ラーメン

を食べたか思い出せず答えに窮した。札幌に着いたばかりの頃、一度だけススキノ近くの小路のラーメン店で醤油味、塩バター味、味噌味のラーメンの券売機でチケットを購入して食べたことまでは思い出した。

「ええと、どっちも美味しいです。」

「そうかい。極めて優等生的な回答だな。僕は旭川の生まれだから、ご当地ラーメンを応援するけど、旭川ラーメンなんてこの頃のこ

とで、子供の時には食った覚えがなな。」と初めて白い歯をのぞかせた。

「これから半日でも仕事して慣れておくかい。制服に着替えて来いよ。そこの階段を上

と部屋があり、君のネームを書いたロッカーがあるから使いなさい。ヘルメットと誘導灯も置いていたから持って来な。鉄甲をかぶるんじゃないくてヘルメットを着用するからな。」

所長は生真面目に表情も変えずに言うので、冗談のつもりか本気で言っているのか彼には察しがつかず、「はい。」とだけ返事をして二

階に行った。
事務所を空けて、所長の運転するライトバン
で走ること十五分、現場で降ろされた。
「今日から仲間の警備員の鉄甲君だ。」
丁度昼の休憩が終わり午後の作業が始まる前
で、六、七人の中年のメンバーが揃っていた。
いかにも技術者という神経質そうな顔をした
人も何人かいたが、大半が日焼けした頑丈な
体格の肉体労働者といった風情だった。金桐
所長の名前の紹介で皆がドツと笑い転げた。
小声で「鉄甲！自衛隊にいた時被ったけど重
かったなあ。」「珍しい、そんな名前が世の中
にあるのかね。」とあちこちで哄笑が続いた。
札幌の病院の警備隊に初めて配置された時の
警備員達の冷淡さとはずいぶん違うメンバー
のリアクションであつた。現場は道路を掘り
返して水道管の点検作業をしているそうであ
つた。資材車と作業車とトイレットカーの三
台が道路の片側を塞いでいた。大便をもよお
した時は仕方がないが、小便は人目につかな

いような場所を見つけて垂れるよう初っ端から注意された。また誰かにやむを得ずに大便の用を足した場合の便器や便槽の清掃は警備員の仕事だ、と決め付けられた。技師達は盛んに機器を使って土中の配管の点検をし、作業員の男達は轟音のするコンプレッサーを操作したり、ツルハシを振るって道路の掘り起こしや穴埋めに精を出していた。一道路使用の許可は警察からもらっているがね。警備員を配置することが許可の条件になっっていたから、君が到着するのを首を長くして待っていたんだ。これで正直ほつとしたよ。」と所長が小声で言った。そばに立っている作業員が「朝から車一台通りませんぜ。」と交ぜ返すように言うと、別の一人が「いや、内緒でオマワリが見回っているそうだから、気を付けないと駄目ですよ。所長！」と茶坊主のように金桐さんに擦り寄った。とりあえず大一郎は、所長を敬礼して見送ると、見通しの良い道路の反対側に立った。

午後三時に小休憩があり、道路の端にしゃがみこみ缶のお茶や缶コーヒーに口をつけたり、タバコに火を点け一服する者もいた。道路の反対側に立って遠慮していた大一郎に、「オイ、オイ、若いの、こっちに来てコーヒーでも飲め。一本余っているぞ。」と缶コーヒーを手にと呼んだ。大一郎は神妙に頭を垂れて缶コーヒーを受け取るとプルトップを引いた。「オイ、座って飲めよ。車なんか来やしないから。来たってちゃんと避けて通るよ。」その男の顔をマジマジと見たら、剃ってはいるがヒゲの剃り跡が青々として何よりもブルブルの眼の色に驚いた。缶コーヒーを握る指は軍手のように太く、肩幅はガッチリし胸の厚みも岩盤のように逞しかったので、この人はシベリア系の民族の血の入った人だと大一郎は思った。「兄ちゃん、東京の人だそうだね。東京は良い女だらけだなあ。歌舞伎町でもう一度遊びてえなあ。それにしても兄ちゃん、顔はごっ

ついでに頼りな
いなあ。何だか都会の若者はモヤシみたい
ひ弱な感じがするなあ。しっかり体を鍛えて
病気になるんじゃないぞ。」と一方的に喋りまく
られたので彼は辟易とした。
「今夜は新人歓迎会ですな。」と誰かが声をあ
げたら「カッコいいこと言うな。酒盛りじゃ
ないか。」と隅っこの方から声がかかり皆で大
笑いしていた。午後五時ピッタリに終業とな
り、いかにも技術者といった理知的な風貌の
現場責任者の指揮で資材の撤収や工事中断箇
所にロープが張られたりウマという移動用の
簡易な鉄柵が置かれたりした。大一郎は何を
手伝っていいのか見当もつかず突っ立ってば
かりいたが、誰も何にも言わなかった。昼間
の事務所兼宿泊所に戻ったら、通いの小柄で
太った老婆の賄婦が来て夕飯の用意をしてい
た。事務所の隣に簡易の台所が設置されてい
た。ご苦労さん。」と作業員達をムツツリしたカ

マキリ所長と丸いニコニコ顔をした賄いのお婆さんが出迎えてくれた。「このガードマンさん、若いのねえ。本当に背が高く、鉄仮面みたいな顔だよ。大抵がヨレヨレの汚い爺さんばっかしなのねえ。」とお婆さんが所長に話しかけているのが彼に聞こえた。夕飯前に一風呂浴びて汗を流すことになった。バスユニットはこのプレハブの建物の裏にある小屋の中にあつた。定員は三人だ。そうで交代で入浴する。大一郎は当然ながら最後の組であつた。例のブル―の眼の色をした中年作業員と顔は若いが髪に白髪が多く交じつた作業員と一緒にだつた。湯舟は狭く大人三人は一緒に浸かれないので、大一郎は黙って洗い場で先に身体の汗と垢を落とし。た。湯舟の中で中年男二人は「ああ、気持ちいいなあ、生き返るよ。」などと口々に言い合。い世間話をしていた。二人がザア―と音を立てて一緒に揚がった時には、彼は身体を洗い終わっていた。交代で湯舟に入ろうとしたら、

ブルーの眼の親父が話し掛けて来た。胸毛は無論、指の先から腕から尻から脚の先まで毛むくじゃらで毛蟹ならぬ毛男に目を見張った。大一郎はタオルなど入浴用具をトランクから取り出して、ちよつと遅れて来たので脱衣場では一緒になつていなかった。「辰つつあんよう、この東京の兄ちゃん、遊びに現（うつ）を抜かしてないか検査してやろうぜ。」とニヤリとした。「よござんすね。」と辰つつあんと呼べた親父が調子を合わせた瞬時だった。毛男の豪腕が大一郎の首に巻きつき、彼は素っ裸のまま首投げの要領で風呂場の合成樹脂製のソフト床に転がされ袈裟固めに組み敷かれた。「この青い眼の男の首を挟む腕力は物凄く、大一郎はジタバタしても適わないと早々に悟りただただ固めを解いてくれるよう懇願した。そのうち毛男は「鉄の仮面を磨いてやろう。」と夕方になつてタワシのようには伸びてザラつ

く顔のヒゲをゴシゴシと大一郎の顔中に擦り付け、大一郎が痛がって身悶えするのを面白がっていた。「辰つつあん、どうかね。」と青い眼は体勢を保持したまま相棒の方に顔を向けた。「こりゃ、真面目だよ。ツルン、ツルンで剥きたてのゆで卵、きれいなもんですぜ。」

「そうか、少し鍛えあげてやれ！」

「ようがす。」

辰つつあんは、満面に笑みをたたえ手にたっぷりのシャンプーを擦り付けると大一郎の長い一物の先端部分を握り締め、リズムカルに揉みしごき始めた。

「止めて下さい。」もう蚊の鳴くような声で彼は哀願し続けた。「やがて彼の硬直した大筒の先っぽからピューッと泡が吐き出すと同時に両足がバタバタと宙に地団駄を踏んだ。」

「まるで鯨の潮吹きだぜ。ワッハッハッ：」

と辰つつあんが笑った時、大一郎は思わず知らず目の先にある青い眼の毛人の耳たぶをギ

ユツと齧っていた。
「おや、おや、この若い衆、本気でイッてし
もうたよ。」と青い眼は袈裟固めを解いた。
二つある洗い場で何事もなかったように二人
の中年男は何ごとやら話し続けていた。大一
郎は湯舟の隅っこで、自分は大学の経営学の
学士課程を終えて、何でこんな荒くれ男達の
居場所に身を置いているのか分からなくなり、
ただただ意味もなく大粒の涙がこぼれ頬をつ
たつてお湯の中にポトポト落ちる音を聞いて
いた。旭川も又トホホの街になるのか、と
情けなくなつた。
十七カムイコタンの呪い
　　賄い付きの宿舎で懐具合は大丈夫と分か
彼は何より安堵した。財布の中身は十万足ら
ずだが、ここにいる限り寝場所と三食の食
っぱぐれはなく支払い額もたいしたこと
はな
かろう、と思つた。彼は食事をしながら、こ
こに詰めている男達は一目で二種類に分かれ
て
いる
こと
が
分
か
つ
た
。
技
師
達
は
一
様
に
メ
ガ

ネを掛けて華奢な体付きで寡黙であつた。頑丈な男達は土工で愛想がよくお喋りが好きで声高だつた。土工同士の喋りは東北弁のようなきつい訛りや抑揚があつて、そばにいて聞こえる。大一郎には意味不明だつた。ただ技師達や大一郎に話しかける時の言葉は普通で分かり易かつた。彼らは、ほとんどが東北出身の季節労働者で夏季は北海道、冬は首都圏などへ出る季節労働者だから標準語らしいものも喋ることができたのである。青い眼の毛男だけは稚内の出身で道産子だそうである。土工は、親方が山さん、それに青さん、辰つつあん、祐ちゃん、青い眼の男は、単に親父さんと呼ばれてゐた。ツルハシを振るつたり、コンプレッサーを使い道路を掘るのが任務であつた。大一郎の寝所はこの土工と一緒に部の屋であつた。飯を炊き料理を作るのは、もちろんろん賄いのお婆さんだが、二階の食堂兼居間に運び上げるのは、新入りの大一郎と土工の中で比較的若手の辰つつあんと祐ちゃんの役

目であつた。食事が済んでから酒盛りとなつた。普通、晩酌と言つて食事の前に飲酒するのだが、一日の労働の後に空きっ腹で飲むと悪酔いするので、ここでは食事の後半に、冷や酒が一升瓶ごと二本ドンとテーブルに載せられた。土工達は、グローブみたいな手でビンの首を握ると所長や技師達にしきりにお酌したり、勝手に自分の湯呑茶碗にグビクビと注いで一気に飲み干したりしていた。最後に大一郎も真似して自分の湯呑に注いだが、酒は底の方に僅かにしか残つていなかった。所長がよろけながら立つて何処から又一升瓶を持つてもつれるような足どりで戻つて来た。いつもは、皆で金を出し合つて近接の深川市の酒屋に電話し乾き物のツマミと一緒に酒を配達させるそうであるが、今日の清酒は大一郎の歓迎会ということで、所長の差し入れであつた。―最初の酒が北海道の地酒れ『北の誉』、これは秋田の酒、『大平山』ら。―とカマキリ所長

はだいぶ酒が回って呂律がすっかり怪しくな
ってしまい、地肌の土気色が頬の辺りだけ赤
身に変色していた。
「大平山ですね。こりや偉い人にしか飲めな
い、我々土方には勿体ない酒ですよ。」と辰つ
つあんが所長に向かって媚びるようにお世辞
を言った。

「焼酎がどっかにあったろう。」大一郎の隣席
に陣取った青い眼の親父さんは、酒の臭いの
息をプンプン周辺に発散させながら顔色一つ
変っていなかった。すぐに祐ちゃんが立って、
これまた下町のナポレオンとレットルのある
焼酎の一升瓶を抱えて戻って来た。一昨晚、
ススキノで反吐の出る程飲んだくれたばかり
の大一郎は辟易としたが、自分の歓迎会とい
う名目の酒宴であることを思うと座を立つわ
けには行かなかった。所長や技師達は、焼酎
を見ると、「もう少し残業があるから。」など
と言いついてそそくさと席を立った。
「所長は糖尿持ちだからあまり飲まないよ。」

と親方の山さんが大一郎に話しかけて来た。
話しかけたというより、いわゆるズーズー弁
の早口で、そんな意味に聞こえた。大一郎は
チビリチビリ焼酎を舐めながら酒宴のお開き
が早く来るのを待っていた。それにしても東
北弁と思われる作業員同士のお喋りはサッパ
リ理解できなかった。青い眼の親父さんは道
産子なのに、この言葉が分かっているようで、
何だか時には叫ぶような声を出して会話に加
わっていた。疲労の溜まっていた大一郎はい
つの間にかテーブルに突っ伏し、よだれを垂
らして眠りこけていた。
「オイ、寝るぞ！」と親方に揺り起こされた
時には机の上は綺麗に片付けられていた。辰
つつあんと祐ちゃんの後片付けを済ませたの
であらう。根は優しい人達で、荒くれ男と一
概には言えない宿舍の仲間達だった。
寝室は、酒の臭いはもちろんだが、汗臭さ
や壮年の男達の出すホルモンのような鱧（す）
えった臭いが充滿して鼻をついた。誰かがす

でに窓を開け放っていた。
歯を磨いてベッドに入っても、したたかに酔
っ払った青い眼の親父さんが、しきりに話し
かけて来るので寝付けなかった。
「兄ちゃん、トイレは外で真っ暗闇、何とや
らが出て怖いからな。朝まで我慢しろよ。」と
故意に低いぐもった声で脅かされた。
「近くのカムイコタンは恐ろしいとこだぞ。
アイヌ人の神様が住んでいるご神域でな、昔
は荷駄を運んで石狩川を下る舟が難破し、ど
っさり人が死んでいるんだぞ。日本のローレ
ライだぞ。夜には成仏できなかった人魂がヒ
ョロヒョロ飛んで、霊能者が見てな、自縛霊
や浮遊霊だらけだと言ったなあ。」ようやく寝
息をたてたので、やっと寝込んだかとほつと
したら又口を開いた。
「あそこは以前鉄道が通っていたからなあ。
生活苦やら失恋やらで列車に飛び込んで死ん
だ奴の靈魂が怨霊になって迷い出るんだ。ず
っと昔は旭川の師団から脱走した兵隊と女郎

屋の女が車内で追ってきた憲兵に見つかつて
手をつないで窓から飛び降りて死んだんだ。
今でも兵隊と女の亡霊が『助けてえ』と出て
来るそうだ。』
大一郎も夢現の狭間で聞くとはなしに聞いて
いたが、誰か別の男の真剣味を帯びた声がし
た。
「俺も聞いたぞ。名前は忘れてしもうたが、
自転車旅行の若い衆が旭川の街からサイクリ
ングロードをとばしていて、途中で日がとつ
ぷり暮れてしまったそうだ。必死でカムイコ
タンの入口の吊り橋を目指したが急に自転車
のペダルが重くなり後ろを振り向いたら、荷
台に真っ赤に口の裂けた女が長い髪を振り乱
して乗っていたんで、吃驚しゃつくりしてハ
ンドルを離し飛び降りて転んで大怪我をした
んだってよ。』
そんな与太話をエンドレステープのよに何
度も繰り返すうちに、青い眼の親父さんは熊
みたいな獣がかくような大軒で眠りに落ちた。

ほかの連中も大きな寝息をかき始めた。大一郎は、この土工連中とは先程の酒盛りの最中に少々会話をした程度だが、彼らは東京の南千住も知らないし山谷のドヤ街にも行ったところがないそうである、いわゆる専門の日雇労働者とも違う人達だ、と暗闇の中でぼんやり考えているうちにいつしか眠りに落ちていた。実際、連中は東北各地の郷に父母や妻子を置いて出稼ぎに来ており、荒くれ男達ではなく、根は純朴なお人良し揃いであつた。仕事は雨が降ったら休みになるそうだった。北海道の六月は梅雨がなく作業は例年順調に捗っているそうである。今年も好天氣が続き、折からの木の芽の芳香に現場一帯が包まれていた。肌が洗われるような心地のする風が吹いては去っていった。緑のそよ風とはこういういのを言うのか、と都会っ子の彼は思った。突貫工事でないの、で土日は休みだった。平日は、朝食、弁当、夕食を賄いの老婆が作ってくれたが、休みの日は各自で自炊するかイン

スタント食品を食べて過ごすしかなかった。
食費は月末に四万円徴収すると金桐所長から
言われた。毎晩のように飯時に酒盛りをした
が、いつも五百円から千円の範囲内の飲み代
の徴収で間に合っていたので財布の中身の心
配はしなかった。大一郎は、真面目に現場の
二号警備（交通誘導警備）に従事していた。と
いっても、ろくすっぽ人も車も通らず、現場
の端っこに佇んでいるだけというのが正しい
かも知れない。ある晴れた日の弁当時間に、
辰つつあんが「鉄っちゃん、よう、あんたは
突っ立っているだけで銭が稼げて好い商売だ
なあ。」と嘲るように話しかけて来た。親方
の山さんが「なあに、立ちん棒もつらいよ。な
あ、鉄よ。」慰めるように言ってくれたのが大
一郎に救いだった。
「そうだよ。俺達も土方とかドカチンとか人
夫とか、陰じゃろくな呼び方されてないよな」
と青い眼の親父さんも合いの手を入れた。
「年寄りから人足とかニコヨンと呼ばれたこ

とがあるよ。」辰つあんがタバコに火をつけた
顔が何かしら淋しげに見えた。
「職業に貴賤なしだよ。」

タバコを吸っていた現場責任者の技師が神経
質そうな細面でとりなした。

「でも、わしみたいな肉体労働者に較べ、
綺麗な部屋で何だか算数みたいな事務をして
いる月給取りは羨ましいなあ。わしらは田ん
ぼや畑を耕すだけでは食えないから、いつの
間にか出稼ぎが本職になったんですぜ。親や
女房、子供を養うにはこれしかないんですよ。
う。」と山さんが恨めしそうに言った。技師達
は黙々と弁当箱に箸をつついて話に加わらず
無視していた。

大一郎も黙々と飯を口にしていたが、毎日
の仕事振りは脳裏を過ぎった。確かに、その
日の午前中も十数名が徒歩や自転車で現場の
前を通っただけで、車といえど宅配の軽トラ
ック一台が通っただけだった。しかし、いつ
までもこんな閑静な現場ばかりが続くはずは

なかつた。作業箇所によつては、幹線道路への車の抜け道のような通行車両の頻繁なところがあるに違いない、と彼は一抹の不安を募らせてはいた。午後三時過ぎだった。作業員達がタバコを一服したり、缶コーヒードで一息入れ、現場責任者の指図でその日の仕舞の一仕事に取り掛かった直後、珍しく軽乗用車が作業現場の路地に入つて来た。大一郎は、定位位置の現場の端で形式的に赤い誘導棒を車の進行方向へブンブンと振り回した。別に何も合図をせずとも車は勝手に通つて行くだろうが、折角立っているのだから、何か動作をしないと仕事をしているのだから、嬉しくなり氣負つて大袈裟な仕草をしたようだ。その車はゆっくりと進行して来ると、彼の真横で停止した。「鉄甲のお兄ちゃん、こんな所で働いていたのね。知らなかったわよ。美香はお姉さんに実家まで送つてもらつているところよ。」

何と札幌のパートのガードウーマン美香が
助手席の窓を降ろして顔を見せた。
「又遊びにおいでね。」と運転席から声をかけ
て来たのは、丸太ん棒みたいな腕で大一郎の
首根っこを絞め、長椅子のソファに押さえ込
んだホステスだった。彼が背を丸めて車内を
覗き込み目を合わせると、目尻にカラスの足
跡どころか鷹の足跡みたいな深い皺を寄せて
笑った。お姉さんじゃなくて小母さんの方が
正確な言い方だろう、とあの狂ったようなス
スキノの夜を思い出しむかつきを覚えた。
「お姉さんの実家が深川市なの。でも近いか
ら旭川の美香のお家にまで送ってもらうの
よ。」相変わらず幼い口の利き方だった。ただ、
札幌にいる時と違い地味な格好をしているの
は、里帰りで真面目な料理学校の生徒を演じ
るためだと分かった。つけ睫毛もしていない
し、口紅をひいている程度の薄化粧で話しか
けられなかったら見過ごしていただろう。意
地の悪そうなつり目と小さな尖ったあごは紛

れもない美香であつた。
「美香ちゃんじゃないか。」青い眼の親父さん
が仕事の手を休めて寄つて来た。
「アラ、小父ちゃん！鉄甲のお兄ちゃんと一
緒だったの。又美香に良いもの買つて頂戴
ね。」
「ああ、良いとも。飯場に遊びに来いよ。」
「良いわよ。じゃあ、後でね。」と手を振つて
美香の車は走り去つた。
青い眼の親父さんによると、美香は賄いの老
婦の孫娘だと言うことで、彼は心底から仰天
してしまつた。美香の実家は宿舎から程近い
そうだった。この親父さんは去年もこの近辺
で、別の会社の現場作業で雇用され美香と顔
見知りだった。道路は毎年のように掘り返さ
れるものである。他の技師や作業員達は美香
を知らない様子で、大一郎と親父さんが女の
子と親しげに話をしているのを仕事の手を休
めて好奇な目を向けていた。
夕刻五時、本日も順調に業務は終了した。

夏至の頃でまだ日は高々と照って山の緑を輝かせていた。事務所兼宿舎に戻るといつものように順番で風呂を浴び、六時過ぎには夕飯となった。やはり、美香が来ていて台所で祖母の手伝いをしていた。美香は平凡な素顔の持主だが、黄色いワンピースに着替えていて、色白さとスタイルの良い若鮎のような今にもピチピチと跳ねそうな肢体は、若い女から縁遠い暮らしをしている男達の野卑な眼を否応なく惹きつけていた。風呂にいる時から辰つつあんは、「堪りませんなあ。あの子の生足に塩でも振りかけてムシヤムシヤ食ってみたいよ。」と興奮していた。青い眼の親父さんも「美香のスカートの中の尻（けつ）周りは年々でつかくなるなあ。押さえつけて泣かせてやりたいなあ。」と一度や二度は美香の風俗の店に顔を出した様子だった。

美香は食堂に上がって来て給仕までしてくれたので、いつもは陽気で酒を飲む作業員達も若い娘に変に気を回し寡黙に食事をした。

きつと頭の中では卑猥な妄想が渦を巻いてい
るに違いなく、酒どころでなかったのである
う。いつもは夕食が済んでもグデグデと酒盛
りを続ける者がほとんどだったが、その日に
限って、闖入して来た女の若さの魔力に気圧
されたのか、六時半には食卓は綺麗に片付け
られていた。技師達は例によつて残業のため
に事務所へそそくさと降りていた。
「野球中継でも見るか。」と親方の山さんがテ
レビの前に陣取ると皆つられるようにそちら
へ移動した。青い眼の親父さんが氣を使つて、
「鉄と美香ちゃんよう、若い者同士で散歩で
もして来な。まだしばらく明るいぜ。」と唆（そ
そのか）したら他の連中も「そうしなよ。」と
口々に言った。
「鉄兄ちゃん、神居古潭を案内してやるわ。」
「こんな時間だぜ。」
「アラ、北海道は緯度が高いから、夜の八時
過ぎまで明るいのよ。それに今は一番日が長
い時季なのよ。ここから歩いてすぐのところ

よ。」

「明るいうちに戻って来るんだよ。」と賄いの

お婆さんが二人を送り出した。

美香は女の子にしては背が高かったが、肩

を寄せて歩くと大一郎の肩より低い位置に頭

があった。吊り橋を通って石狩川を渡った。

ほかに人影は見当たらなかった。閑散とした

公園を抜けると函館本線の神居古潭の旧駅舎

があった。宿舎から意外に近かった。鬱蒼と

した森の中に小奇麗な駅舎が往時のままの姿

で保存されていた。駅の待合室もそのままの

状態で保存されていた。駅の周りに花が植え

てあるのも誰かが丹念に手入れをしているか

らであろう。何の花か白や赤や黄など鮮やか

な原色で、小振りだが瀟洒な駅舎に彩りを与

えていた。

「線路の跡はサイクリングロードで旭川の市

街地まで走れるのよ。ちよつとそこまで歩き

ましよう。」と珍しそうに駅の中をウロウロ歩

き回ったり、ペンキ塗りのベンチを撫で回し

ている大一郎を美香が散策に誘った。深川市
方向はすぐにトンネルで行き止まりになって
いる。そうだった。旭川方面に向かつて右手は
深い溪谷の断崖で樹木の緑に遮られ、石狩川
の流れは見えなかった。美香の話によると左
手の急峻な山の中を函館本線のトンネルが走
っているとのことだった。右も左も崖で藪に
覆われていて人が歩けるのは線路跡の道だけ
だった。七時前になっていたが空だけは明る
く照っていた。時折、自転車がチリンチリン
とベルを鳴らして追いついた。すべて
夕方の運動をしているという感じの中、高年男
達であつた。
「橋はあるの？」
「彼は何となく訊いてみた。
「このだいぶ先に一箇所だけあるけど、何か
の業務用で通行禁止になつていたわよ。その
辺までなら大丈夫よ。」
と美香はスタスタ歩い
た。右手の深い谷間がカムイコタンに違いな
かった。やっと山間の道を抜けると平地にな
り、川幅の広い石狩川が現れた。少し先に休

憩所のような小さな空き地と白い橋が見えた。

「ここから旭川の街までどの位あるのかなあ。」

「さあ、歩いたことなんかないわよ。何時間もかかるわよ。もう帰りましょう。」と美香は引き返した。あわてて大一郎は追いついた。日が、すでに夕闇の気配は忍び寄っていた。日暮れの近いのを察した美香が突如急ぎ足になっ
ていた。遠出し過ぎたことを後悔しているかのように無口で急いでいた。すると、行く手の山道に大きな蛇が横たわっていた。頭から尾っぽの先まで丁度道幅と同じ長さで通せんぼしていた。
「キャッ、これって大嫌いだわ。お兄ちゃん、どけて！」と美香はヒステリックに叫んだ。都会育ちの彼も始めて見た大蛇の生態だった。
動物園でニシキ蛇を見たり、テレビや図鑑の写真で蛇は何回も見たことはあるが、自然の中に生きている蛇は生々しく不気味で、しかも大き過ぎて、彼にはどうして良いか分から

なかつた。

「鉄っちゃん、男でしょ！何とかしてよ。」

美香がせかせるので仕方なく辺りから小石を拾って蛇に投げつけてみた。蛇は素早く反応

し道の真ん中にトグロを巻くと鎌首を持ち上

げて二人の方に顔を向けた。

「ねえ、棒切れないの、早く探して！」と美

香が大声で騒ぐので、大一郎は両脇の崖をキ

ョロキョロ探したが藪笹ばかりで小枝一つ見

つからない。そこへ旭川方面から初老の男が

自転車であって来た。

「何だ、青大将じゃないか。何もしやしない

よ。」と自転車を止めた。

「小父さん、神居古潭のバス停まで乗せてち

ようだい。」

「ああ、いいよ。乗んなよ。」と初老の男の目

尻が下がった。

美香はちゃっかりその男の自転車の荷台にま

たがった。美人でないとは言え、スタイルの

立派な若い娘さんから頼まれて、男は嬉しそ

うな表情を満面に顕わにしていた。
「鉄っちゃん、悪いけど、あたし先に帰って
るわ。今夜は深川でカラオケするから、お姉
さんが車で迎えに来ているのよ。」と彼女は意
地の悪い目付きで言った。二人乗りの自転車
は蛇の脇をすり抜けてスイスイとサイクリン
グロードを走り、あっという間に夕闇の迫っ
た木立の陰に消えてしまった。大一郎は一人
ぼっちにされ弱り果てた。毒のないおとなし
い蛇といわれても、長さも胴回りの太さも気
色悪く、自転車がそばを通ったせいで、ます
ます興奮して鎌首を高く持ち上げた感じがし
た。彼は、そのうち蛇もいなくなるだろうと
考え、一旦さっきの白い橋の辺りまで引き返
し気を取り直そうと思った。そうこうするう
ちにも時計の針は容赦なく進み、辛うじて八
時を回っているのが読み取れる位に日は暮れ
てしまった。旭川の市街地まで歩くには何時
間もかかるような美香の話だった。やはりに
き返すしかなかった。山道にさしかかる頃に

は真っ暗闇になってしまっていた。月も星も見えなかった。頭上には黒い木々の影があり、夜になつて風が騒ぎはじめた。視界は鼻をつままれてもわからない墨で塗つたような暗黒だけになつた。ジャラジャラと何か固いものを洗う音がした。漫画で見た妖怪の小豆洗いを思い出し背筋が寒くなつた。目の前を激しい勢いで過ぎる物体があつた。何だか知らないが、カマイタチというものでないか、と股間の袋と玉が縮みあがつた。青い眼の親父さんの言葉が耳の中で蘇えつた。昔、カムイコタンで舟が難破して死んだ亡者の地縛霊や浮遊霊が闇の中を飛び交っている気がした。左手の溪谷からピーと笛の音がした気がした。鵠（ぬえ）が出た。大一郎はだいぶ正気を失つていた。目が全く見えないから右手の崖の藪を手探りに進んだ。左手は一步間違えば、足を踏み外して絶壁を落下するに決まっている、と分かつていた程度は正気が残っていた。前方に軍服の兵隊さんと着物姿の遊女が立って

いるような幻影を感じ、時々立ち止まって聞
を透かした。何度も道路の段差のようなもの
で、ドツテンと転んで全身をしたたかに打つ
た。木の間隠れに赤いものや黄色いものが見
えたり消えたりし、生臭い風が頬を掠めて行
った。これが狐火というものだろうか。髪を
振り乱した女がパタパタと足音を立てて追
かけて来る幻覚を覚えた。思わず知らずに小
走りし、今度はスッテンと顔から転んだ。起
き上がって額をぬぐったら、ヌルリと生温い
手触りがした。イツキキキ：と女の笑い声
の幻聴がした。又走って転んだ。
「鉄甲！」と遠くから声がして我に返った。
宿舎の仲間達が心配して探し回っていること
に気がついた。美香が大一郎を山中に置いて
来たこと位は言い残しただろうが、一本道で
迷い様がないので放っておいたら、いつまで
も戻って来ないので探索に来たのであろう。
「おい、鉄甲！」と辰つつあんの叫び声が
近くでした。

「ここです！」と彼はへたへたと地面にしゃがみこんだ。サーチライトや懐中電灯の光りが一斉に彼の全身を闇の中に浮き彫りにした。た。お前、いじめられていたから脱走したのか。と思ったぜ。」と親方の山さんの声だった。鉄甲君、すっかりしろ。こんなに怪我をして、でも宿舎は近いから歩くのは平気だな。救急箱があるから手当てしてやろう。一体、何があったんだ。」と金桐所長の声だった。大蛇が出たのですよ。」と彼は安心したのか涙声になった。ワハハハハ、ここで八岐大蛇は出ないぞ。ママシくらいはいるがな。」

「あれは捕まえて食うと精がつくぞ。女を見たら追っかけたくなるくれえにな。」

「賄いの婆さんでもか！」

「ありや駄目だ。幾らなんでも使用期限済みだがね。」

四、五人はいる土工らの哄笑が夜の山峽にこ

だましました。神居古潭の旧駅の全容がほんのそ
ばで灰明かりの中に浮かんでいた。
十八 赤い棒と温泉猿女
六月も末頃だった。大一郎の額や頬の絆創
膏もとれ、全身のかすり傷や打ち身もだいぶ
治った。しばらくは、正に満身創痍というみ
つともない姿で現場の立ちん棒をしたもので
ある。知らない歩行者が、このガードマンは
飯場で酒に酔って喧嘩でもして暴れたんだろ
う、と冷笑しているように思えた。その後、
幹線道路の付近に工事現場は移動し、最初来
た時よりも人の通行も自動車の交通量もあつ
て、大一郎の仕事もかつての渾名の電柱みた
いに立っているだけでは済まされない場面に
出くわすことがあった。道路の工事現場部分
だけが片側一車線に狭まるので、双方から車
がやって来たら、当然に片方を停止させ、も
う一方を通せば良いという理屈は何も難しく
ない。右手から現場の前を通り過ぎようとす
る乳母車がやって来た。馬鹿に大きなバギー

で今の流行かも知れない。祖母が孫を乗せて
押している様子だった。左側からも乗用車が
来たが、別に双方が何の支障もなく通行でき
る幅員は十分にあったので、バギーにも自動
車にも進行の合図の棒を振った。
「ちよつと、あந்த、危ないじゃないか。車
がこちらに突っ込んで来たらどうしてくれる
の。」と彼の前で止まったお婆さんが金切り声
を上げた。大一郎が見おろすと顔に縦皺だら
けの婆さんが三白眼で睨みあげていた。
「このくらい大丈夫ですよ。僕が立って安全
を確認して交通誘導していますから。」
「何を言ってるんだよ。新聞も読んでないの
かい。テレビのニュース位見ているだろう。
毎日のように車がよそ見なんかして突っ込ん
で、悲惨な交通事故が起きているじゃないか
ね。交通弱者の乳母車を守っておくれよ。車
なんか一旦止めてしまえばいいじゃないか。」
と毒づいて食い下がったので、彼はすっかり
弱ってしまった。後に続いた歩行者が迷惑そ

うに眉をひそめて大一郎を見ながら、バギーを避けて大きく車道にはみ出して通った。反対側を大型トラックの運転手が、大一郎を今にも怒鳴りつけそうな顔で睨んで徐行して行つた。道路の反対側は小川を挟んで畦道があり、その向こうに低く青々と野菜畑が地平の果てまで広がっていた。

「すみません。危ないから前に進んで下さい。」と彼は懇願するように老婆に促した。

「あたしや、あんたが謝らない限り、金輪際ここを動かないよ。」と三角の眼になった頑固な唐傘婆さんだった。バギーに乗った子は体も大きく、身体障害児でない限りとつくに歩ける年令である。

「ばあ婆、ボクちゃん、歩きたい。」と子供がねだっている。

「駄目だよ。ここはブーブーがいつぱい通つて危ないから乗ってなさい。ばあ婆が押してあげるからね。」孫らしい幼い子を見ると、婆さんの干乾びた眼が皺の中に隠れた。祖母と

いうのは、こんなに大きな歩ける子を過保護に
するほど孫が可愛いのであろう。散々甘やか
かして駄目な大人にするのが落ちで、その頃
には自分には冥土に行つてしまつていて無責任
なものである。居座られても彼は困り果てる
だけだから、面倒臭くなつて「すみません」
と一言だけ告げた。
「ボクちゃん、しっかり勉強しないと、この
小父さんみたいに道路の立ちん棒しか仕事が
ないからね。」と全く似合わない娘のお下がり
みたいな原色の柄の洋服を着た老婆は、大一郎
に聞こえよがしに大柄な幼児に話しかけると、
脇目も振らず前へ進んだ。腰を曲げて重そう
にバギーを押す貧相な婆さんのケツを真つ二
つに割れる程蹴つ飛ばしてやりたいのを、彼
は必死で我慢した。僕だつて大学位出ている
のだ。職業で勝手に人を決め付けるな、この
恥知らずの無知婆！と心の中で罵つていた。
一旦交通が途絶えたので、道路脇に置いて
いたペットボトルのジュースをゴクリと飲ん

だ。緑の森の合間に新しい文化住宅が点在し、
いかにも新興都市の郊外という景色が広がっ
ていた。道路は直線で左右の見通しは良かつ
た。左右からそれぞれ自動車が現場に近づい
ているのを認めた。右から来るのはセダンの
ようで、左からは小型トラックであつた。放
つておいても二台の車は時間差をもつて現場
付近に着き、お互いにスピードを調整し譲り
合つてすれ違うものである。大一郎は面倒臭
いと思ひながら一応仕事だから、夜間には
赤い点灯もできる柄の部分だけ黒く、先はず
つと長い赤棒を手作業現場の端つこの道路
際に立っていた。ぼんやりと雲一つ見えない
青空を眺めながら双方の車を待っていた。左
右の道路をキヨロキヨロしているうちに、ど
ちらを停止させたか焦つた。どちら
もスピードを緩める様子もなく作業現場に近
寄つて来た。彼の立っている場所から双方の
車の距離感はほとんど等しかつた。あつとい
う間に両方から車が現場の領域に入つて来た。

大 一 郎 は す っ か り パ ニ ッ ク っ て し ま い 、 手 に
し た 赤 い 棒 を 頭 上 で 左 右 に ゆ ら ゆ ら と 振 っ た 。

近 づ い た ら 両 方 の 車 と も ボ デ イ の 小 さ い 軽 乗
用 車 と 軽 ト ラ ッ ク で あ っ た た め 、 ど ち ら の 運
転 手 も 譲 ら ず 徐 行 し て 離 合 し よ う と し た 。 大
一 郎 が 眺 め て い た ら 、 丁 度 す れ 違 う 辺 り で バ
リ バ リ ガ リ ガ リ と 金 属 音 が 響 い た 。 二 台 の 車
は 停 車 し た 。 ボ デ イ 同 士 が 真 ん 中 付 近 で 擦 れ
合 っ た に 間 違 い な か っ た 。 右 側 か ら 来 た 軽 乗
用 車 の 若 い 女 性 ド ラ イ バ ー が 、 助 手 席 の 窓 ま
で 身 を 乗 り 出 し て 「 ち ょ っ と 、 今 の 合 図 は 何
な の よ ？ 進 ん で 良 い の か 、 停 ま る の か ハ ッ キ
リ し て よ 。」 と 貧 相 な 頬 を 朱 に 染 め て 文 句 を 言
っ た 。 髪 が 縮 れ て い て 学 生 時 代 に 合 宿 し た 長
野 県 の 湯 田 中 温 泉 に 程 近 い 地 獄 谷 の お 湯 に 浸
か っ た 温 泉 猿 み た い な 顔 を し て い た 。 左 方 か
ら 来 た 軽 ト ラ ッ ク の 中 年 の 農 夫 風 の 運 転 手 は
し ば ら く 軽 乗 用 車 の 運 転 席 を 覗 き 込 ん で い た 。
事 故 が 起 き た に し て は 柔 和 な 顔 付 だ っ た が 、
す ぐ に 助 手 席 側 か ら 降 り て 大 一 郎 で な く 女 性

ドライバーの方に毒づいた。
「この下手くそ女、もういっぺん自動車教習
所に行つて練習して来い。俺の方の車輪は端
つこの小川まで一杯一杯だが、お前さんの方
にはこんな道幅が残っているじゃないか。」
と大一郎のそばで言った。
「何言つてるの。このガードマンが進めの合
図をしたから行つたのよ。あなたの方がどう
して停まらなかったのよ。」と女も助手席側か
ら降りて来た。薄手のピンクの格子縞のシャ
ツを着ていたが、顔に化粧つけもなく髪もザ
ンバラであつた。
「フン、気の強いアマだ。お前さんのみつと
もない格好見たぞ。運転席に四つん這いで、
スカートの中のパンツが丸見えだつたぞ。ケ
ッ、お面を見なけりや良かつた。まずいツラ
で反吐が出そうだ。一応女なら外に出る時く
らい身綺麗にしろ。もつとも化粧品の無駄使
いだがな。とにかく女の端くれなら、はした
ない格好をするな。」

「スケベ親父が何を抜かすの。」お面相と同様にレディには程遠い口振りだった。
プープーとけたたましく甲高いクラクシヨンが鳴り、いつの間にか軽トラックの後方に三台も乗用車が滞っていた。中年の農夫は、
「もうちょっと車を左に寄せろ。そうしたら俺はこの先に車を停めて来るから。これじゃバックは出来ないからそうするしかないだろ。」と車に戻った。

「鉄、何やってんだ！」と親方の山さんが血相変えてやって来た。女性ドライバーは眉間に皺を立てて車に乗り込むと、ハンドルを左に切り、「ちょっと人夫さん、その柵を下げてちょうだい！」とヒステリックに山さんに叫び車を現場の前方に停めて戻って来た。小汚いジーンズのスカートのスリットが入っている。大一郎のそばで又言い合いが始まった。
「私の車は買ってまだ半年よ。傷痕がみつともなくて走れないじゃないの。あなたのトラックは元々古傷だらけで今更塗装して修理す

る意味がないでしょ。」と更に毒舌を吐いて怒り心頭に達しているようだった。
「何言ってるんだ。お前さんの運転未熟で事故が起きたんだ。警察を呼ぼうじゃないか。」
と男は応酬した。女は、「大体、このガードマンがいい加減なのよ。ボヤーと突っ立って出ンがいに棒を振って何てザマなの！」と大一郎鱈目に棒を振って何てザマなの！と大一郎に矛先を向けると、バッグから携帯電話を取り出して百十番に状況を通報していた。山さんは、警察に任せれば良いさ、と本来の作業に戻った。
先程来のこの女と軽トラックの農夫のやりとりを耳にして、彼女はこの界限に住む若い主婦で街に買物に行く途中だと分かった。
時々ジロジロと様子を見ながら車のろのろと現場を通り過ぎて行った。大一郎はその度に赤い棒を車の進行方向へ振っていた。やがて、パトカーがサイレンを鳴らさずに赤色灯を回転させ、フロントガラスの上部の警告ランプを大袈裟に点滅させながらやって来た。

二人の警察官は双方の車の物損状況を確認すると、それぞれ女と男の運転手を別々の場所に連れて行って双方の言い分を聞いていた。それが済むと今度は警察官二人して大一郎のところへ事情聴取に来た。

「棒を頭上で振った時、どちらの車の方を向いていたかね。」と五十年配の方が尋ねた。

「はい、道路の正面を向いていました。」と彼はありのままを語った。

「おい、それじゃ、何にもならないや。停めようとする方の車に正対しそんな動作をして停止予告になるのだぞ。」

「そうでしたか？」と彼は又正直な感想を口にした。

「エッ、そうでしたか？ そんなことも知らないで『交通整理』をしていたのか。」と年配の警察官の声に怒気が籠っていた。

「あのう、お言葉ですが交通整理は警備員には禁止で、交通誘導ならできるそうです。」と辛うじて警備員教育ビデオのナレーションを

思い出して大一郎が返事した。
「そんなことはどうでも良いんだ。一体、ど
つちの車を最初に停めようとしたのかね。」
「さあ、覚えていません。」
「こりゃ、話にならん。君の会社は何処だ。
社名と電話番号を言ってみろ。」と若い警察官
が怒って、彼が言う社名などを手帳に乱暴な
書体でメモをした。
「まったく札幌の鈴蘭警備なんて聞いたこと
もないな。君の名前と生年月日も教えてく
れ。」と若い方の警察官はまだブツブツ言っ
いたが、実は彼らが外勤のお巡りさんだった
のが大一郎には幸いした。大一郎の警備服に
はS警備保障社のワッペンが二ヶ所も付いて
いるので、専門の防犯係員だったら即座にそ
の矛盾に気が付いて、本署に連行されていた
かも知れない。これから交通事故の実況見分
を始めるようで、年配の警察官から大一郎は
応援を要求された。
「この警備員、頼りないが仕方ない。計測の

ため上下線とも車を停めるから、ちよつと手
伝つてくれ。笛を吹いてその赤い棒を前に差
し出したら、車はみんな停まるからな。それ
じゃ、簡単に図面を作っておこう。」
「長さん、こんなガードマンと一緒に殉職は
御免ですよ。」
「フン、署に戻ったら鈴蘭とやらの会社に一
発きつい気合を入れてやろう。」
二人の警察官は、運転手二人から事情聴取し
ながら、路上に置いていた番号札の距離を計
ったり、若い方が近くの電柱まで巻尺を持っ
て走ったりして、事故の見分をごく短時間で
終えた。二人の運転手も解放されたが、猿み
たいな不細工な顔をした女性ドライバーの方
は、トラックの農夫と大一郎をまるで仁王様
のような炎がメラメラと燃え立ちそうな眼で
交互に睨むと無言で立ち去った。
その日の夕方、宿舎に戻って食事をしてい
たら、賄いのお婆さんが、「所長と鉄甲さん、
お客さんですよ。」と階下から叫んだ。事務所

に石塚部長がヨレヨレの今にもくたばりそう
な爺様を連れてやって来ていた。夕刻、現場
から戻った時に、金桐所長から石塚さんが明
朝やっつて来る予定だとは聞いていたが、今日
こんな早くやって来るとは所長も知らず大
一郎は驚いた。部長は何と自分で自家用車を
運転して来たのであった。
「鉄甲君、これからすぐ帰るからな。六月分
の食費は立て替えて所長様に払っておくから
早く支度をしな。」といきなり言われて彼は又
面食らった。
「所長様、こちらは弊社の交通誘導のベテラ
ンの田野畑警備員です。これが派遣届です。
明日から早速よろしくお願い致します。交通
誘導の検定資格を持っていますから、新任教
育は免除の即戦力で、どうかご安心下さい。」
と太った身体を縮こませ卑屈にペコペコと
叩頭した。日焼けか肝臓の病気か判別のつか
ない、面の皮がどす黒く油気のない白い蓬髪
の老警備員も黙ってペコペコしていた。

親方の山さんや青い眼の親父さんや辰つつ
あん達は大一郎が来客でちよつと中座したく
らいに思つていて酒盛りの四方山話で盛り上
がつており姿を見せなかつた。彼はお喋りに
夢中の皆を横目に、そつと部屋からトランク
を運び降ろし乗用車の後部座敷に押し込むと
助手席に窮屈に座つた。金桐所長と残業の手
を休めて車のそばに來た技師さん達に「兄ち
やん、達者でな。」と見送られ、石塚部長と大
一郎の乗った車はようやく夕闇の迫つた石狩
開発公社の現場事務所を後にした。彼は食堂
に上がつて、この一ヶ月間の仕事仲間の土工
の山さん達に簡単に別れの挨拶をしたい、と
後ろ髪を引かれたが、所長が自分から皆によ
ろしく伝えておくから心配するな、と制した
のであつた。所長にとつても今日の事故のこ
とはちよつとした異常事態であり、早く厄介
払いをしたい気持ちがあつたのであろう。
「後釜探しで走り回つて今日は疲れてしまつ
たよ。以前うちで働いたことのある者に電話

を かけまくり、やっと、さっきの爺様に来て
もらったんだぞ。」と石塚部長は現場を離れる
と愛想笑いを消して無然とした。その日は、
近くの深川市内の定宿に宿泊するとのことだ
った。宿というよりモルタルアパートを改装
した貸間だった。部長は夕飯を済ませて来る
と言つて、宿に着くや早々に外出した。部長
は夜更けてもなかなか戻つて来なかったので、
大一郎は待ちくたびれて床を敷いて寝てしま
った。
翌朝、焼いた切身の塩鮭と味噌汁と三切れ
の沢庵に一膳飯の簡素な宿の朝食だった。三
千円の宿賃だからこんなものかも知れなかつ
た。飯場で賄いのお婆さんが用意してくれた
朝食の美味しかったことを思い出すと、大一
郎の目から涙がこぼれた。親方の山さん達に
別れの挨拶もさせてもらえなかつたことが恨
めしかつたが、身から出た錆と諦めるしかな
かつた。部長も不始末をした大一郎の後釜を
間髪入れず現場に送り込めて安心したのか、

昨夜は深酒をしたようで、無言で食欲もなさげに飯をばくついていた。道央自動車道を通って、あつという間に札幌の会社に着いた。「怪我の功名だったぞ。」

鈴蘭警備保障の事務所に着いて、初めて石塚部長は多少皮肉っぽい笑顔を見せた。あのカムイコタンの近くの交通事故現場で、彼が警察官から事情聴取を受けた時に、社名を『S警備保障』と告げていたら、所轄署の防犯係員からS警備保障社の方へ照会があっただろうとのことだった。

「君が出鱈目な交通誘導をしたのが事故の要因の一つだとお叱りの電話があつたぞ。もしかしたら警察の特別査察があるかも知れないから、警備員名簿や教育実施簿や警備員指導監督票を整備しておかないとヤバイなあ。しかし、S警備の方に電話されていたらジェンド、一卷の終わりだったな。」と渋い顔をした。

大一郎はまともな警備員教育を受けた覚えもないし、カムイコタンの現場で巡回の指導監

督なんてなかったの、部長は変なことを言
っているなと訝った。
「S警備保障の警備員だと警察官に言ってい
たら、僕はどうなっていたのでしょうか？」
と大一郎は後ろめたさがあつたが、興味が勝
り思い切つて尋ねてみた。
「S警備に照会されたら、担当の竹中課長が
在席していたら何とか誤魔化したらうな。
課長だけには、あなたの警備員名簿のコピー
を渡してあるからな。けどな、課長も外を出
歩いていることが多く、人事の者が電話に出
ていたら、そんな名前前の警備員はいませんと
回答し、てんやわんやの大騒ぎになつていた
ぞ。」
「すみません。」大一郎は、会社の言うままに
したただけだが、何か自分も悪の片棒を担いだ
ような錯覚に陥り謝つてしまった。
「ところで、一日早いけど今月分の月給を払
うよ。デズラ（出勤簿）で勤務状況は調べたか
らな、日当八千五百円で二一日分の十七万五

百円が給与だ。昨日、食費を立て替えて所長に四万円を払った分を差し引いて、十三万八千五百円が袋に入っているから調べてみな。」と紙袋を渡された。カムイコタンの宿舍で使った金は、毎晩の酒代と休日の食事代を合わせて四万円程度で済んだから、財布には五万円は残っていた。これと併せて約十九万円の有り金となり、金銭的には少し余裕を感じた。しかし、石塚部長の次の一言で心中の晴れかった空が突然暗雲で曇った。「アルバイトは、もうないよ。この前、寮の部屋は明け渡したから何も置いてないよな。それじゃ、制服とか警笛とか貸与品一式を返してもらって、この退職届に署名と印鑑を押してもらったら終わりだ。ご苦労だったね。」と平然と言われ、彼は部長の蝦蟇蛙（がまがえる）みたいな面輪を毒気に当てられたようにしばらく見つめていた。

十九 大阪への再出発
鈴蘭警備保障の事務所を出たその足で、札

幌 駅 前 の 再 開 発 ビ ル の 駐 車 場 管 理 室 に 山 下 さ
ん を 訪 ね た 。 山 下 さ ん は 書 類 に 何 か 書 き 込 ん
で い た が 、 ト ラ ン ク を 押 し て 来 た 大 一 郎 を 見
る と ウ ン 、 ウ ン と う な づ い て 微 笑 ん だ 。
「 竹 中 課 長 か ら 聞 い た よ 。 あ な た が 悪 い の じ
や な い 。 社 会 に 出 た ば か り の 純 真 な 若 者 を 、
欲 の 塊 み た い な 奴 が 悪 さ を し て 食 い 物 に し た
の だ よ 。」
「 僕 も 研 究 心 が 無 く て 済 み ま せ ん で し た 。 毎
晩 、 飯 場 の 人 達 と 酒 を 飲 ん で 憂 さ を 晴 ら し て
ば か り で し た 。」
「 い や 、 き ち ん と 法 律 に 決 ま っ た 新 任 教 育 も
し な い し 、 実 務 指 導 も 監 督 も ろ く す っ ぽ し な
い 会 社 に 罪 が あ る か ら 気 に す る な 。 大 体 、 警
備 員 を も ぐ り に し て 外 注 費 で 飲 み 食 い し た り 、
儲 け よ う と す る 発 想 が 間 違 っ て い る ん だ 。」
山 下 さ ん の 説 明 に よ る と 、 石 狩 開 発 公 社 と 交
通 誘 導 警 備 契 約 を し て い る の は S 警 備 保 障 社
な の で 、 そ の S 警 備 保 障 が 石 狩 開 発 公 社 の 了
承 を 得 て 鈴 蘭 警 備 保 障 と き ち ん と 再 委 託 契 約

をし、鈴蘭警備保障社の警備員が自社の制服で請け負って勤務していれば何も法的にも道義的にも社会的にも問題はないそうであつた。

「この問題が表沙汰になつたら、僕も罰せられるのでしょいか？」

何となく不安を覚えた大一郎が一番知りたい核心に触れた質問をした。

「なあに、警察もそんな暇はないさ。物件事

故だつたのだろう。人身事故だつたら突き上

げ捜査があり、もぐりの警備員だつたとバレ

たら、S警備には是正勧告があるかな。何し

ろ、うちには警察のお偉いさんだつた人が顧

問でいるから頼りにしているのだよ。私だつ

て頼まれて鈴蘭警備の警備員指導教育責任者

として選任届を出しているのだから、下手し

たら資格者証の返納という事態になるんだ

よ。」と顔を歪め肩を落とした。

「最悪、鈴蘭警備はどうなるのですか？」ど

うでも良いけど、この際訊いてみた。

「まあ、公安委員会、実体は警察からの営業

停止処分、色々調べられて悪質だったら廃業
届まで追い込まれるな。」

これを聞いて大一郎は、ザマア見ろ！廃業に
なつてしまえ、と今頃になつて腹の虫がおさ
まらなく暴れまわつて来そうだった。山下さ
んは、彼が東京に帰るのかと思つたらしかつ
た。

「折角北海道に来たのだから、四、五日道内
を観光して帰つたらどうだい。アカシア並木
の甘い香りが今は最高だろう。今が一番良い
季節だよ。」

「いいえ、東京を出てからまだ二ヶ月も経つ
ていませんよ。今、家に帰つたら親から笑わ
れます。」と大一郎は何か仕事がないか、多少
の縁のある山下さんに今にも泣き出しそうな
顔で懇願した。山下さんは見る見るうちに気
の毒そうな顔になつた。
「そうだ、叔父さんから転勤の挨拶状をもら
つたばかりだよ。おふくろの弟さんなんだ。」
と机の中から上白紙の角封書を取り出した。

山下さんの母方の叔父は、東京の渋谷区にあ
る大手ゼネコン本社の管理部長だったが、六
月の株主総会の結果、子会社のビルメンテナ
ンス会社の取締役西日本支社長として大阪へ
赴任していた。
「きちんとした法定教育を受けたら警備員は
すぐに勤まるさ。設備管理は何と言っても先
立つ技能や技術の資格を持っていなないと採用
は無理だからな。警備員だって、しっかりと勤
めて警備員指導教育責任者とか検定合格者と
か機械警備業務管理者とか防災防火の資格を
取れば、大きなビルメン会社だから警備管理
部の係長や管理職に昇任する道だつて拓けて
いるよ。何と言つても試用期間が済んで正社
員に登用されたら福利厚生がしつかりしてい
るから安心だよ。叔父にあなたの採用を頼ん
でおくから、今日はどこかビジネスホテルに
泊まつて、明日の朝又ここに来なさい。」
大一郎は胸の暗雲も黒い霧も少しずつ晴れ上
がって行くようだった。その夜は、駅前のビ

ジネスホテルに泊まって早めにベッドに横臥した。ススキノの美香の風俗店も気になったが、これからのことを思うと懷を暖かくしておく必要があったし、何よりも不美人の美香の顔にカムイコタンの温泉猿みたいな女ドラマイバーの顔が重なり、若い女への誘惑は断ち切られ、夢一つ見ることなく眠りこけた。翌朝、札幌駅近くの駐車場管理室に、縋る思いで山下さんを訪ねた。北海道も夏の最中だ。けは暑いからなあ。」と山下さんは晴れ晴れとした顔で、大一郎を待っていた。山下さんの顔を色を見て、自分の就職話がうまく行ったようにに直感した。パソコンのインターネット画面から印刷した、大阪の伊丹空港から新梅田のJサ―ビス西日本支社までの交通手段と所要時間などの表を渡された。叔父さんも機嫌よかったよ。子会社に出されるのは織り込み済みで、すすきりしたみたいだね。何しろ、本社に残っても旧帝大系の

出身者がひしめいて、いつそお山の大将の方が新制大学出の叔父さんには性が合っているのさ。」と山下さんは自分のことのように喜んでいた。

「僕の仕事の話も大丈夫だったでしょうか？」と大一郎は恐るおそる首をすくめた亀のように訊いてみた。

「私が口を利いてやったから、大丈夫に決まっているじゃないか。だから、会社の地図を渡したのだよ。」と頼もしい答が返って来て彼は安堵した。山下さんは笑顔で話しを続けた。

「まずは大阪の住吉区の社員寮の住所を教えるので、区役所に転出申請を済ませてから行くんだよ。向こうに着いたら支社長室に行つてくれ。話はついていくから心配はいらない。

叔父とは挨拶だけで、すぐに人事部長とか警備管理部長とか警備指導教育課長とかの面接という手筈になっているはずだ。今日のところは履歴書の必要はない。五月にここで働いた時の派遣届をファックスしておいたから大

丈夫だ。」と山下さんは、大一郎に一万円札を手渡し、夕張メロンを空港の売店で土産に買って叔父さんに渡してくれと頼んだ。

「とにかく昼前の伊丹空港直行便に乗ってこれ。そうすれば四時には会社に着くから急いでくれ。」と急かされ大一郎は札幌の街の思い出に浸る余裕もなく、区役所に寄っただけで慌ただしく新千歳空港行のＪＲ電車に乗った。

いよいよ北の大地を離れるという感懷も湧かなかった。深夜の病室での女の痴話喧嘩騒ぎ、院内でのお化け騒動、噛み付きそうな鬼塚課長、口の達者な大口班長、お結びやキュウリやイチヂをはじめ変てこな顔をした病院の警備員達、助平な婆さん清掃員、狡猾な立体駐車場ホール勤務の腹黒い警備員、意地悪なアルバイト警備員の美香、転がった方が早そうな豆タンク小母さん警備員、石狩開発公社の飯場にいた酒好きな季節労務者達、カムイコタンの大蛇、交通事故を起こした温泉猿女、

北海道のことは山下さんを除いて、今はすべて記憶の外に流し棄ててしまいたかった。大阪の街はバスケットボールの大学対抗試合で何度か来ていたもので、おぼろげながら地理関係は頭に入っていた。午後四時を回った頃、新梅田の高層ビルの中にあるＪサービス西日本支社に到着した。七月一日、大阪の街は真夏日で、背広姿の大一郎は滝のような汗を拭きながら受付嬢に来意を告げた。すぐに支社長室に通された。支社長は柔和な感じの六〇年配の白髪紳士だった。―遠路遙々、ご苦労さん。鉄甲君って珍名だね。家系を調べたことはあるかね。―東京の下町で明治時代から続く八百屋ですが、先祖のことは聞いたことがあります。―そうだね。若いから、そんなことにまだ興味がないだろうな。そのうち除籍簿とか檀家寺の過去帳を調べれば、自分のルーツが分かるかも知れないな。和夫君から聞いているかも知れないが、わたしの苗字は越前屋という

んだ。これも珍しい名前だろう。生まれ育つた苗字は山下だったが、訳あって婿入りした家内の実家の苗字が越前屋だったのだよ。江戸時代から続く日本橋の商家だったが、明治時代に戸籍をつくった時に屋号を苗字にしたのだろうよ。」和夫とは甥っ子の山下さんの名前だった。

「左様でございますか。」饒舌な支社長の前で、大一郎はガチガチに緊張していた。子供心に八百屋の父が何かの調査で保健所か税務署の人が店に来たときの口振りを覚えていて、咄嗟に口から出た言葉であつた。支社長はぷつと吹き出すと、「おい、呉服屋とか反物屋じゃないから、左様でございますか、はないぞ。それとも、君の先祖はサムライで、左様でござる、などとお城で言っていたのかな。」と一人、豪快に笑い飛ばした。

「ところでタバコは吸うかね？」大一郎が吸いませんと答えると、得たりとばかりに、「タバコは精神の疲労回復とか気分転換とか

嗜好品とか、何だかんだと理屈はあるが、体の中になんか、わざと毒素を吸い込むだけでなく、火事の原因のトップ争いというワースト面や周りの人に受動喫煙の健康被害を与える側面があるから、安全安心産業に従事する警備員が、警備員のお大半が喫煙をするんだな。人生に挫折して警備員になる者が多いと聞いているから、それでタバコのみが多いのかなあ。」

と思案気な顔になった。大一郎は神妙に支社長の前で言葉を傾けていた。

「君は背がずば抜けて高いし、見栄えのする警備員になれるさ。鉄の仮面を付けたみたいにな顔も怖そうだから、立っているだけで防犯効果があるぞ。ただ、機転のきく警備員であつてくれよ。先日問題になった警備員は、ビルのお玄関で立哨警戒中に館内が停電で薄暗くなつてしまつていたのに設備員にも連絡せず、ただ一生懸命立っていただけだったから、ビルオーナーから会社もひどいお叱りを受け

たんだ。警備の指導者連中は、本人の資質の問題で教育の限界からはみ出していると弁解したけど、私はそんな逃げ口上は聞きたくなかった。怒ったんだ。社会人としての常識力をつけさせるのが指導者の責任だろう、と苦言を呈してやったよ。君も、今度はうちの会社の警備員教育をきちんと受けて、防災・防犯の実力を身につけたら大丈夫だ。警備のプロフエッショナルになるのだぞ。火事の原因のタバコなんか吸わず、模範的な警備員になってくれよ。では、応接室で人事部長達が待っているから面接を受けて来なさい。」

大一郎は警備員の礼式を思い出すと、勇み立つように勢いよく立ち上がって、バネ仕掛けの人形のように節度のある敬礼をして支社長室を出た。秘書の女の子に案内されて応接室に入った。人事部長、警備管理部長、指導教育課長、進行役の若い事務員の四人が待っていた。進行役の青年が大一郎の前に並んだ。三人を紹介し、自分も東京本社から転勤で来

た者です、と付け加えた。人事部長も警備管
理部長も五〇年配で東京の親会社から下って
きた人だった。六十年配の皺の深い骨ばった
顔をした指導教育課長は近畿地方の警察のO
Bとのことだった。事務員はこの会社のプロ
パーで三〇前後の感じだった。
「私はこれだけ済ますと引き下がりますか
ら。」と瘦身の人事部長がビデオデッキを操作
し五分程度の会社紹介のビデオ映像を流した。
『昼夜街を見守る！発展を続けるJサービ
ス』という題名で、設備管理業務、常駐・雑
踏・交通誘導警備業務、機械警備業務、マン
ション管理業務、清掃管理業務、内装・外装
業務、建物総合管理センターの活動状況が映
し出された。現在、全国すべての都道府県に
支店か営業所が設置され、管理物件は大小お
よそ三百件、社員は四千人を越え、売上は年々
右肩上がりで五百億に肉薄する勢いだそうだ
った。人事部長はビデオ放映を終えると会釈
してそそくさと出ていった。次は顔の怖い指

導教育課長の番だった。あらかじめ大一郎の前社での情報を得ていたようで、北海道は甘くなかったようだね、と開口一番ニヤリと齒を見せた。そして、社内では標準語を使うのが決まりだからと言い訳して説明を始めた。警備員の欠格事由というのがあつて、要するに十八歳未満でないとか、かつての禁治産者などや破産者でないとか、成年被後見人や被保佐人でないとか、精神機能に障害がないとか、履歴書に嘘を記載していないかなどを調べて、確認書を自分が作成すると言つた。「君は警察の世話になつたことはないよな。」とその時だけ、きつい目を突如光らせて上目遣いに念を押したので、大一郎は首を横に振りながらも狼狽し目線を宙に踊らせた。先日のカムイコタンの近辺での交通事故の失態を、頭に思い描いてしまつた。「うちの会社は法律通りにきちんと教育をすすめるから自信を持つて現場で実力を発揮しなさ

い。この研修センターで一日六時間の警備員教育を四日間、それに管理物件の現場で実務研修を一日たっぷり受けてもらおう。初日に実務研修をやると、どうしても研修でなくて勤務と施主さんが勘違いなさるからな。早速、明日は御堂筋の本町のビルで実務の指導を受けてもらうことになる。そのビルは流行の省エネのクールビズをやっておリ、服装は私服でノウネクタイ、白のワイシャツで良いと言われ、黄色地に黒文字で入った『Jサービス』の腕章を渡された。地下鉄御堂筋線の本町で降りて、本町通りを大阪城方向へ少し歩いたところのビルの警備員室に明朝八時前までに行くと、白紙に鉛筆書きの略図を手渡された。ビル名は平仮名で『たくわんビル』と記されていたので、漬物の協同組合の建物かと思った。大手のB銀行とコンビニに挟まれたビルで、すぐに分かると言われた。そこで大阪支店の警備係長の巴さんという女

性の実務指導を受けるとのことだった。
「それでは私の番だな。」と小太りの警備管理
部長が待ちくたびれた様子で口を開いた。
「私は警備実務について素人だけど、数字に
は減法強いから心配するなよ。君達を安い警
備料金で働かせたりしないように心に決めて
いるからな。私がこのポストに着任する前は
ひどかったのだよ。警備員をオマケに付けま
すから、ビル管理の仕事を下さいと言った調
子の営業姿勢だったから、今ではその尻拭い
に苦労しているよ。部門別の売上から給与を
出すのが原則で、警備管理部門はまだ大赤字
なんだ。会社全体で利益が出ていれば良いと
いうのが、営業の連中をはじめ経営者の考え
なんで困ったものだ。」と一人で苦笑した。部
長は先ず十数枚の書類を手渡し、研修期間中、
これに履歴書と住民票と診断書を添えて、警
備管理部の事務員に提出してくれ、とのこと
だった。札幌の鈴蘭警備保障会社で作成・提
出したものと同じ書類もあつたが、こちらのの

会社の書類の数の方が吃驚するほど多かった。説明を聞いているうちに、三ヶ月の試用期間後の正社員登用時の書類があつて、こんなに書類の数が多いのだと判つた。――採用に当たつての簡単な健康診断書も必要だが、会社で研修中に面倒みるから、この近くのビルにある会社指定のクリニックで簡単な診察をしてもらいなさい。その時、その書類の中にある警備業法の精神機能に障害がないとか、アルコール、麻薬の中毒者でないという診断書も作成してくれるからな。その費用だけは悪いけど自己負担だからね。」――三ヶ月の試用期間の満了前に、社員登用のための精密な健康診断を受けてもらうよ。こっちでは会社が費用負担するから金の心配はいらない。」と指導教育課長が口を挟んだ。「あなたは若いし大丈夫だと思うが、年配の採用者には、フォアグラみたいな肝臓の持主がいたり、今にも胃袋が裂けそうな古傷持ちがいたりして、会社も苦勞しているんだ。」と

部長が苦笑すると、指導教育課長も若い事務員もゲラゲラと笑った。部長は、律儀にこれからとの給与体系を説明し始めた。試用期間中は日給月給、正社員採用後は、基本給に変動給に諸手当で二十万程度から出発になるそうだった。札幌の寮で大口班長から聞いた話と寸分違わぬ感じで退屈極まりなく聞こえた。警備会社は大手も中小も同じような仕組みで給与計算と支払いをしていることがよく理解できた。この長たらしい説明が済むと面接は終わりとなった。――遅くなったけど、これから採寸を済ませましょう。この方の体格では既製の警備服はありませんから、すぐに制服屋にファックスしなないと間に合いませんよ。」と若い事務員に連れられて倉庫のような制服保管場所で身体にメジャーを当てられた。やつと解放されてビルの外へ出たら、ビル街の狭い空に夕映えがあつた。社員寮のある長居駅は地下鉄の御堂筋線一本で行けると知っていたが、地下に潜

るのが鬱陶しく、大阪駅のバスターミナルから難波までは、久方ぶりの大阪の街の夕景を車窓から楽しもうと思った。御堂筋のイチヨウ並木の青葉の茂りには木の下闇が迫っている。だが、大江橋と淀屋橋を渡る時は視界が一気に開け、堂島川と土佐堀川の水面に夕陽が射して、遙々と水と橋の都にやって来たという。小さな興奮を覚えた。中之島・北浜のビル街の屋根という屋根に赤々と黄昏が迫っていた。心斎橋、道頓堀にはネオンが灯り始め、帰路を急ぐ夥しい数のサラリーマンやOL風の男女の姿や、これから難波の繁華街をそぞろ歩きするアベックの姿が否応なく彼の目を惹いて、この大都会で自分が一人ぼちなことにやっと気がつかされた。二十魅惑的な女性指導員翌朝、早めに本町に着いた。略図のビルは銀行とコンビニの間にあって、すぐにここだと見つけたが、七時半を回ったくらいで玄関口は、まだシャッターで閉ざされていた。

所在無く御堂筋をぶらついて八時前にビルに着いた。いつの間にか玄関は開いていた。受付のコーナーはまだ無人で、すぐ脇の警備員室の窓口から中に声をかけた。

「すみません。こちらは『沢庵ビル』で宜しいでしょうか？実務研修で来ました鉄甲と申します。」

「なんやて、けつたいな奴やな。もう一度、表のビルの名前を確認して来（き）いや。」四〇前後に見える肥った警備員が来てバリバリの大阪弁で文句を言った。大一郎は怪訝に思いつつ玄関のビル名を読んでみた。『宅一ビルディング』と刻銘してあった、一をワンと読ませるのかと悟った。初っ端から蹴躓（けつまず）いた様で、大阪も前途多難になるのかと不穏な気配を覚えた。

「失礼しました。たくわんビルでした。」とこの際低姿勢に徹し、懇懃に首を垂れた。

「オホホホホ：お入りなさいな。」と巴さんと思しき若い女性の声が奥の方から聞こえたの

で、ドアを押して室内に入った。
「おもろい兄ちゃんやんけ。背がようけ高いし、ウルトラマンみたいな顔をして鉄甲かいな。天井にどったま（頭）ぶつけんなよ。」と先程の警備員がケラケラと笑った。
「ちよっと、弥次さん！新人さんいじめは駄目よ。」
「係長、いじめとちやいまっせ。わての挨拶でんがな。兄ちゃん、気にせんといてや。」
「はい。」と大一郎は畏まってみせるしかなかった。
巴係長は長い黒髪を首の後ろで括った大きな瞳の健康かつ聡明な感じの美人であつた。膝を組んで座つていたので、紺のタイトスカートの下のすらりと長くて白い脚が重なり合つて眩しく、彼は視線を上げて女性係長の顔に目を当てたが、そのキラキラ光る星のような瞳に又目のやり場がなく壁のポスターや掲示板をキョロキョロ見る羽目になつてしまつた。
名前は巴三智子と名乗つた。

「係長は、新人研修となると、わてのビルを
よう使いよるけど、ホンマは仕事の邪魔でつ
せ。」
「まあ、弥次ちゃん。今度一杯奢るから堪忍
よ。新任さんには、丁度この規模のビルが教
えやすいの。」
「いやいや、ありがたいう言葉で！わても相
棒の喜多が辞めてから愚痴っぽくなって悪う
おますな。」と弥次警備員は一旦相好を崩した
が、すぐに神妙な顔付をした。このビルは新
築のテナントビルで極力省人化してあった。
警備員はオーブン当初こそ二人勤務であつた
が、一年足らずのうちにオーナーの要望で仕
様書と保安警備契約書を変更し、出入管理だ
けの一人勤務体制になつた。鍵管理も各テナ
ント職員が自分で行う最新式のカード暗誦シ
ステムで、開門前と閉門後の時間外や休日の
通用口の出入りも、カード暗誦システムと機
械警備のコンビネーションで警備員は不要だ
つた。喜多警備員は他の物件に異動となつた

が、新しい仲間との折り合いが悪く退職して、別の警備会社にいるとのことだった。ここは、朝の八時から夕方六時までの平日のみの通常勤務で、拘束十時間、実働九時間だから一時間の超過勤務手当がつく。昼の休憩時間だけは中央監視の設備員が代わりに来てくれるそうだった。因みに、このビルは七階建てで二階から六階までがテナント室、最上階はオーナーの宅一（たぐはじめ）さん一家の住居だった。ビル名は、オーナーの氏名の宅一と書いて『タクワン』と読ませたのである。やはり、郵便物には、聞き間違えて「沢庵ビル内〇〇会社御中」といった宛名書きもあるそうだった。た。弥次さんと喜多さんで良いコンビだったのね。警備は出入りが激しくて、新規採用と研修の繰り返しばかりで大変なのよ。」と巴係長も憂鬱そうな表情をした。ちよつと愁いを帯びた顔も魅力的に感じられた。八時半過ぎからテナント社員の出勤姿が目立ち、指定さ

れた社員だけが警備員室前の鍵保管箱から暗
誦番号を押して鍵を持ち出しエレベーターへ
向かった。警備員は挨拶の声かけだけをして
立哨もしなかった。九時になったら隣の受付
カウンターの案内嬢が挨拶に来た。ピカピカ
の若さに輝く女性達の笑顔が眩しかった。
「また新顔さんの研修なのですか。」と大一郎
の鉄のお面みたいな顔を見上げて一瞥し、巴
係長に一礼してカウンターへ戻った。人材派
遣会社から来ているそうだった。常に若い女
性を受付案内に座らせるには、こういう方法
が一番だろう。人は誰でも老ける。三〇才を
過ぎたあたりから顕著に衰える。ビルの顔、
受付嬢にふさわしくなくなる。そうだった場
合に首切りはご法度だし、彼女らが内勤や営
業外交の業務に上手に溶け込んで行くとは限
らないからである。社員の出入りが一段落し
た九時過ぎから実務研修を受けた。
「弥次ちゃん、壁の機器類を説明してあげて
よ。」と巴係長が座ったまま言ったので、大い

郎は氣を利かせて立ち上がり、弥次警備員のそばに立った。――ほんまに背の高い兄ちゃんやなあ。わての首がきついがなあ。最初に言うとかけどなあ、係長は美人やさかい男にもてるんや。でも東京に旦那さんのいてはる單身赴任者やから、惚れてもしようないでえ。」と余計なことばかり喋ったが顔は笑っていた。彼の説明は、分かりやすいかった。札幌のA大学の近くの病院の防災センターの機器に比較すると、使い勝手の良い簡単な操作のものばかりだった。しかも、本体は地下の機械室の設備員が監視していて、警備員室に設置のものは副受信盤などサブ的なものばかりだった。しかし、大一郎はこの大阪でこそ、警備員としてしつかりと出直しをしようと考えていたので、熱心に質問しながら疑問点の残らないようにした。――係長、この兄ちゃん、大丈夫でっせ。なんでもよう知つとりますがな。」――まあ、良かったわ。それなら今日は早めに

終わりました。午後には住民票の手続きと
か履歴書の写真準備とか、医師の診断とか色
んな用事をしたらいいわ。」
しばらく弥次警備員を交えて三人で雑談を
した。
「この兄ちゃん、大岡越前守の親戚やて、ほ
んまでつか？」越前屋支社長のことを陰では
こんな呼び方をしていた。
「いいえ、親戚じゃありません。」大一郎はあ
わてて否定をした。
「弥次ちゃん、支社長に強いコネクションの
ある人の前で、そんなニツクネームを使った
らまずいでしょ！」と係長は優しく諭すよ
うに言った。
「でも、わてらはＪサービスで働いていると
いう気がしませんのやねん。ここのビルオー
ナーが雇主という感覚ですわ。たまに現任教
育で本社の会議室に入っても、右見ても左見
ても、前も後ろも知らんオツチャンばかりで
すから、けったいな感じですよ。」

「それはこの業界の特徴で、どこも一緒だと
思うわ。会社として何か皆さんのコミュニケ
ーションの方策を考えていますわ。警備部門
だけで『警備の極意』というコミュニケーシ
ョンの冊子を発行しようと研究しているところ
よ。」
圧倒的に男社会の警備業界で男性警備員を指
導し、あしらっている巴係長の器量は優れて
いると大一郎はしきりに感心していた。
午前十一時になった。巴係長に連れられて
地下の機械室の見学とビル内の巡回に出た。
機械室で設備員から電気関係、給排水関係、
冷温水など空調関係の説明を聞いたが、騒音
もあり専門用語が多く使われ、彼にはほとん
ど理解できなかつたが、例の鉄仮面の無表情
でうなずき回り、分かつた振りを通した。実
は前もって、巴係長から、何でも知っている
ような様子を示すように指示を受けていた。
ビル内を巡回といつても、所々に設置の消火
器や屋内消火栓や防火シャッター、排煙装置

などの説明で、彼にはすでに承知のことばかりであつた。巡回はエレベーターを使わず非常階段を昇つたが、先を行く係長のボディコン風の白ブラウスに紺のタイトスカートの身体ラインがシャナリシャナリと悩ましく揺れて、大一郎の若い血は赫々と血管の中で沸騰していた。階段の踊り場で時々休息をした。

「私は東京本社からの出向組よ。夫を残して单身赴任しているわ。大阪支店は一昨年まで警備を他の会社に丸投げしていたの。それは違法ではないわよ。再委託ということで下請業者に警備を任せていたの。でも、施主さんの方から自前でやったらどう、との声が大きくなつて、警備業を立ち上げたばかりなの。支店の警備が独り立ちするまで当面倒を見なければならぬのよ。」

「東京にはよく帰るのですか？」

「そうですね。二ヶ月に一回くらいだわ。その時は子作りに励んで来るの。」と初めて清楚な花の顔ばせに、ちよつと淫靡な含み笑いを浮か

べた。

「わたしは東京の女子大を出たのよ。陸上部で走り高飛びの選手だったわ。高校までは学校の花形選手だったけど、大学に入ると上には上の強い人がいてね、神宮の国立競技場の大学選手権大会で決勝まで残ったのが最高の成績かしら。」

「警備会社は第一志望だったのですか？」大一郎も大卒なので思わず訊いた。

「それは、いいえ、志望した会社は駄目でした。」と口澀んで大きな溜息をついて話を続けた。

「体力に自信があったから思い切って女性ガードマンの募集に応募したの。これでも女子大にいた時にテレビに出たことがあるのよ。」

「へえ、凄いですね。」さすがに美人は違うと思った。

「そんな感心する番組じゃないわよ。」女子大生水着大相撲大会』という深夜番組よ。それでも優勝よ。」

「強いのですね。」

「ところが裏話があるのよ。後で分かったのだけど、ディレクターが他の女の子には、わたしにわざと負けるよう根回ししていた片八百長だったのよ。わたしよりずっと体格の良い子が急に力を抜いたり、大して押しもしないのに簡単に土俵を割って外に出るから薄々おかしいと思っていたのよ。」

「テレビタレントのスカウトとか来ませんでしたか？」

「色々来たわよ。でもアダルトビデオの女優とか、ストリップ劇場の踊り子さんとか、ヘアヌードモデルの写真集を出さないとか、そんなのばっかし、それで真面目な仕事を選んだわけよ。東京のイベントホールで三年間常駐警備の勤務をしたわ。そして、警備実務三年の実績で警備員指導教育責任者講習の受講を会社に申し込んで受けさせてもらったわ。」

「その試験に合格したのですね。」

「もちろんよ。きちんと勉強して受けたら落ちるような問題じゃないのに、なぜか不合格になる受験者が多いのよね。それで会社が警備職から総合職のキャリアに身分換えしてくれて内勤になれたわ。」

「僕も大学卒だから、『警備員指導教育責任者』の資格を取ったら道は拓けますよね。」

「もちろんよ。支社長と強いパイプを持っていてるのでしよう。希望を持ってやるのよ。」

「分かりました。」初めて大一郎は虹色のような希望の光りを見出した。

「しかし、こうして、あなたと話をしているところ、上を向いてばかりで本当に首が疲れるわ。」と彼女は笑って歩き出した。巴係長も女

性にしては上背があつたが、身長が一メートル九十を越える大一郎が相手の立ち話は、首が疲れてもつともだった。

「最近ビル内が全面禁煙になって、返ってこういう所に灰皿を持って来て、隠れて吸う人もいるのよ。タバコの煙は上へ上へと昇る

から、結局はオーナーの居室にまで煙が臭つてしまい、テナントさんに注意するよう頼まれたばかりよ。」と歩きながら珍しく実務の話をした。昼食は弥次警備員も誘い、三人で近所のラーメン屋で済ませた。食後に喫茶店で雑談をしたが、もう大一郎は宅一ビルには戻らず、午後は住民登録手続きや健康診断の受診など入社準備をして過ごし、夕方六時に西日本支社と同じビル内にある大阪支店の警備課に来るように巴係長に指示され別れた。二十一呑兵衛で女好きの上司能の障害がなく、アルコール、麻薬の中毒者でないという医師の診断書を持って、大阪支店の警備課に顔を出した。登記事項証明書と身分証明書は委任状を書いて提出し、会社が取り寄せてくれることになっていた。身元保証書については、早速父親に郵送で頼んでいた。面接に立ち会った若い事務員に声をかけた。

て手元の書類を渡した。履歴書に添付した顔写真は、街角の写真サービス機でなく、写真屋に行つてスピード写真で撮影したものだつた。写真屋に修正機能を活用してもらい、札幌の時の顔写真よりも抜群の出来映えに仕上がつていたので、自信を持つて提出できた。警備員名簿、警備員派遣届、正社員登用のために使うための別の三枚も差し出した。「課長が待っています。」とひな壇の警備課長席に案内された。四十過ぎに見える苦味ばしつた浅黒い顔に眉の太いのが特徴の人だった。「鉄甲君だね。」と名刺をくれた。JとSの会社の頭文字のロゴマークが鮮やかな水色でカラー印刷されてあつた。肩書きは大阪支店警備部警備課長で氏名は神田透とあつた。そこへ巴係長が帰社して課長の前のデスクに座つたので、大一郎は如才なくそばに行き昼間の研修の礼を述べた。「係長が別嬪さんやんけ、鉄甲君も驚いたろう。」と課長が背後からすかさず声をかけた。

「まあ、課長ったら、東京の人が無理して大阪弁を真似しなくても良いのですよ。」とコケチッシュユな色目をして子供を叱るように睨んだ。神田課長も大阪支店の自前の警備業立ち上げ支援で東京本社から大阪に妻子を置いて単身赴任しているそうだった。和やかな雰囲気で大一郎は思わず本音を口にした。

出ています。東京に転勤できることがあるので「僕も東京生まれの東京育ちで東京の大学をしようか？」

「そんな日が来ると良いね。まずは大阪で実績を上げることだよ。勉強して色んな資格を取らないと何も始まらないぞ。ところで、今週は部長がずっと東京渋谷の本社に出張中なんだ。明日から四日間の研修は支社の警備管理部の指導教育課長と私と巴係長の三人でやるよ。受講生はたった一人で勿体ないけど、支社長のお声がかかりじゃしうがないや。配置先を教えておこう。南海電車で通える堺のP大学だ。昼飯は学食（学生食堂）を利用でき

るから、又学生気分を味わえて良いじゃないかね。」と言つて、巴係長に声をかけた。

「係長、鉄君とご飯食べて帰らないかい？大型ルーキーの歓迎会をやつてやろうよ。」

いつの間にか「鉄君」と渾名を付けられていた。「大型」とは身体付きを言っているのか、大卒の大物という意味か、大一郎は訝つた。

「ご飯だけならお付き合いしますわ。その後

の片言の日本語を話す女の人のお店はご遠慮しますわ。」と澄ました顔をした。

外にはまだ残照があつた。もう真夏が来たのか街路に夾竹桃の紅い花が咲いていた。歩いて着いた北新地の料理屋は見るからに値が張りそうな奇麗な店だった。

「課長様、おいでやす。巴様もいつもお綺麗で羨ましいですわ。」

あらかじめ電話予約していたのか、この店の女将が愛想よく出迎えて四畳半の和室に案内された。大一郎には「お背がお高いよつて鴨居に氣いつけて下さい。」と艶やかな笑みを見

せた。

「お客さまですか？ちよつと怖そう。」と案内途中の廊下で女将が課長にそつと囁いているのが聞こえた。

「そうだよ。支社長の親戚筋の若い人なんだ。」と課長がふざけたのを真に受けて、部屋に入るやすぐに大一郎に小振りだが金張りの名刺をくれた。『割烹 寿美』の女将は、その昔は徒（あだ）な姐さんという風情で色白の肌に陰のある美貌が残り火のように光っていた。課長が「とりあえずビール！」と顔を和ませると、何か和食膳のコース料理を注文した。お通しをツマミにビールで乾杯した。

「鉄君、ビール管は美味しい仕事だよ。俺の隣の席のビル管理課長は宴席で自分のことを会社のビール管理課長と紹介してはしゃぐからね。売上の十パーセントは経費で落とせるから、月に五〇万遣つても誰も文句言わへんで。」支店では午後七時を過ぎて残業をする場合、勝手に冷蔵庫の缶ビールを飲んで良いこ

とになつてゐるそうだった。

「課長、又けつたいな大阪弁交ぜて！今ここにゐるのは東京の人だけでしよう。」と巴係長が言う、「あんたもしつかり交ぜてるやんけ。」と返して二人で肩を叩き合つて大笑いしていた。

大一郎は勘ではあるが、この二人に男女の境の一線を越えているような危うさを覺えた。

「鉄君、巴ちゃんはお姉さんみたいな感じだけど、実は奥様なんだよ。」と酒が入つたら「ちやん」付けで呼び、ますます怪しかつた。最初の膳に杏酒のような甘いグラスがあつた。

神田課長は一口つけると「ウワツ、甘ッ！」とそのグラスを巴係長に渡した。係長は躊躇なくそれを飲み干し、「美味しいわ。」と言つた。

。間接キッスを人前で平気でする二人を大一郎はいよいよ出来ている仲だ、と確信に近い疑いの目で見ながら、出されたお造りなどの料理に黙々と箸をつけていた。二膳目が運ばれて来た時だった。それまで課長と係長は

大 一 郎 を 無 視 し た よ う に 雑 談 を し て い た が 、
突 然 彼 に 話 を 振 り 向 け て 来 た 。

「 鉄 君 、 君 は 用 心 棒 に 向 い て い る よ 。 喧 嘩 が

強 い か ど う か は 知 ら な い け ど 、 そ の 鉄 の 仮 面

と 人 を 見 お ろ す 上 背 は ボ デ イ ガ ー ド 向 き だ よ 。

商 品 と し て 見 て く れ が 良 い じ ゃ な い か 。

「 課 長 、 勉 強 し て 四 号 警 備 （ 身 辺 警 備 ） の 資 格

を 取 っ て 下 さ い 。」 と 係 長 が 進 言 し た 。

「 何 言 っ て る の だ い 。 巴 ち ゃ ん こ そ 頭 も 良 い

し 、 体 力 も 拔 群 じ ゃ な い の 。 大 股 を 開 い て 高

い バ ー を 飛 び 跳 ね て い た の だ ろ う 。」

「 ち ょ っ と 、 課 長 ！ 今 の は レ ッ ド カ ー ド 、 退

場 よ 。」 と 口 は 勇 ま し か っ た が 、 彼 女 の 頬 は ビ

ー ル の 酔 い の せ い か 妙 に 色 つ ぽ く 赤 味 を 帯 び

て い た 。 そ の 場 は 、 お 茶 漬 け と お 新 香 に デ ザ

ー ト の メ ロ ン が 出 て お 開 き と な っ た 。 巴 係 長

は 、 「 後 は お 二 人 で ご ゆ っ く り 、 で は お 休 み 。」

と 笑 顔 を 向 け る と 、 さ つ さ と 御 堂 筋 方 向 へ 去

っ た 。 彼 女 の 背 中 に 向 か っ て 課 長 は 、 み っ ち

ゃ ん 、 氣 い っ け て 帰 り や 、 と 愛 称 で 叫 ん だ 。

係長の巴三智子はちよつと振り向いて手を振った。二人ともフロアは違うが、堺市内の同じ会社借り上げのマンション住まいだそうだった。神田課長は支払いを済ませると女将にタクシーを呼ぶように言いつけた。

「トンボリ！」

神田課長は運転手に一言ぶっきら棒に告げた。タクシーの運転手も無言でアクセルを踏んだ。タクシーは御堂筋の夥しい車の列をかき分けてミズスマシのようにスイスイと南へと走った。道頓堀橋の手前で運転手が尋ねた。

「何処で降りはりまつか？」

「宗右衛門町や。」

「ぎょうさんが歩いてまんねん。わてら歩行者の邪魔になりまっせ。」と運転手は不服そうに後座席を振り返った。

「いいから近くまでやつてくれ。」と課長はカエルの面に小便のようにつれなく命じた。

道頓堀のネオン街は人の洪水だった。小さなスナックが詰め込まれたコテコテのネオンが

眩しい雑居ビルのエレベーターに乗った。降りた廊下は森閑としていた。一軒の店の扉を開けたら、「うわぁ、神ちゃん、嬉しい！」と若い女が二人すり寄って来た。他に客らしい姿はなかった。課長は背の高い女の方を、もう抱き締めて唇を吸っていた。大一郎は小柄な女に手を引かれてカウンターに座らされた。すぐに課長がキープしたウイスキーのボトルと氷とミネラルウォーターのキャップが抜かれ、水割りがカウンターに置かれた。「鉄、今夜はガンガン歌うぞ！」とうとう鉄君の渾名も鉄と呼捨てになった。「チャールハン、食べれるか。」と小柄な女は日本語が下手で、この春来日したばかりの留学生という。背の高い子は、日本語が上手だった。だが、後で日本の漢字を教えてね、と大一郎に媚びた。課長と二人、水割りを舐めながら黙々と乾き物を口に運んでいたら、小柄な女の方が、「歌、歌！」と分厚いカラオケ帳をカウンターの上にドサンと落とした。課長はす

ぐに立ち、その女の子とデュエットした。昔流行った越路吹雪の『愛の讃歌』だそうだった。その子は、日本語は下手だが歌う日本語は不思議と完璧だった。♪頬と頬よせ燃えるくちづけ交わすよろこび♪と歌ったら、歌うのを止めて本当に抱き寄せて愛おしく口づけをするのだから、課長も相当な好き者だった。神田課長は、今夜はガンガン歌うぞ、と言った通りのマイクを握ったら離さない性質（たち）で、カラオケのさほど好きでない大一郎は救われた思いだった。とにかく課長は愛だの恋だのの文句ばかりの歌謡曲を歌いに歌った。レパートリーも広く、郷ひろみの『よろしく哀愁』を♪一緒に住みたいよ：と歌ったら、裕次郎の『夜霧よ今夜もありがとう』、美空ひばりの『おまえに惚れた』を、♪惚れた惚れたよおまえに惚れた：と歌った時には、これは巴三智子さんの面影に向かつて歌っている、ように大一郎は感じた。」「神ちゃん、一緒に歌ってよ。」と背の高い女

の子の方にデュエットをせがまれ、マヒナス
ターズの『愛しちゃったのよ』を身振り手振
りを交ぜて愛嬌たっぷりに歌った。課長はま
だマイクを離さなかった。森山良子の『禁じ
られた恋』、長渕剛の『激愛』を♪舌を噛み切
ったからみあう口唇の中二人はよじれ合
い：と身悶えさせて歌う時はもう完全に酔い
痴れてしまっていた。これでカウンターに戻
って来るかと思っただけ、小柄な女の子の方
に水割りを持って来い、と言いつけて、更に歌
い続けた。伍代夏子の『戻り川』♪愛しても
ふたり渡れない 戻り川：、大月みやこの『乱
れ花』♪乱れて咲いても 花は花、あなたひ
とりが好きだから：と続け、♪愛しても 愛
しても ああ、ひとの妻：と『さざんかの宿』
まで辿りついたら、語るにおちるといふか、
歌うにおちたというべきか、完全に巴係長に
道ならぬ恋情を抱いていることが確信できた。
課長は意気揚々とカウンターに戻って来るな
り背の高い女の子を椅子に押し倒し唇を奪う

と、大一郎に何か歌って来いと言いつけた。
課長の熱唱にほだされたように、大一郎は『中
の島ブルース』をやけくそに歌った。一番の
札幌の街を歌う時は、不細工な美香の顔や温
泉猿女の顔などの嫌な思い出が次々と脳裏を
駆け巡った。二番を歌う時は、この酔っ払い
上司と先に帰った女性の上司の関係が気にな
った。

♪ 水の都にすてた恋

泣いて別れた淀屋橋

ほろり落とした幸せを

あなたと二人拾う街

ああここは大阪

中の島ブルースよ

(作詞 齊藤保)

三番を歌う時は、♪小雨そぼふる 石畳 あ

なたと二人濡れた街 ああここは長崎

中の島ブルースよ♪と、いずれ自分に長崎で

仕事する運命が待っているのだろうか、と杞

憂をしていた。スナックを出た時は午前様だ

った。課長が強引に人混みをかき分けてタク
シーを拾った。酔客の群れが文句も言わずに
避けたのは、すぐそばで用心棒さながらに従
っている頭一つ高い大一郎の鉄仮面に圧倒さ
れていたのであらう。課長は、走り出した運
転手に大一郎を『長居駅』で降ろすように言
い、自分は堺の市街地に着いたら起こしてく
れと言いつけて寝込んでしまった。大一郎の
住まいの社員寮はワンルームマンションで、
警備職員、設備職員、マンション管理職員、
清掃職員、リニユール職員など、いわゆる
ブルーカラーの独身者用だった。内勤幹部の
神田課長や巴係長は堺市内の会社が借り上げ
た家族用マンション住まいだった。彼は、単
身赴任同士の両者がフロアは違うとはいえ、
同じマンションに暮らして大丈夫かなと、イ
ビキの音を立てる課長の脇で心配していた。
大一郎を堺市内のP大学に配置するの、日
勤の日を狙って夕方近く現場指導監督に来て、
そのまま直帰にして堺の繁華街を二人で飲み

まわる算段があり、そんな気がして来た。
二十三、不倫の現場
鯨詰め、の地下鉄に揺られながら、新梅田を目
指した。昨夜の酒の精分が頭の芯に溜まって
いて、疼痛と時々吐気がしたが、息を止めるよ
うにして、我慢した。九時前には指定されてい
た支社の研修室に滑り込めた。二十人程度収
容できる広さがあつたが、研修を受けるのは
大、一郎一人だつた。若い事務員が四日間頑張
つて下さい、と言つて、『教育カリキュラム』
と、『警備員新任教育教本』というテキストを
くれた。その後、教育は十時から始まるとの
ことで、入社手続き書類の指示を細々と聞か
され、色々と書類のチェックをさせられた。
それでも三十分位で済んでしまい、しばらく待
機をさせられた。大、一郎は訓練用の防災機器
などが壁際に設置されて、いたのを眺めまわし
ながら過ごした。機器に勝手に触ると、非常
ベルやサイレンや警報音が鳴るので、触れない
ように、事務員から釘を刺されて、いたので、怖

くてあまり近づかないようにした。一通り見たら第一列の真ん中の席に座って、まっさらな大学ノートの第一頁を開いて講師を待った。先程の事務員から最前列の中央に座るように指示されていた。午前中は「警備業法全般」の演題だった。カリキュラムでは支社の指導教育課長の講義の番になっていたが、入室して来たのは小太りの警備管理部長だった。面接の時の言葉のように、自分は警備に疎いが、と前置きしていきなり話を始めた。大一郎が立って敬礼しようとするのを、いいよと手で制止した。先ず、壁に貼られた『社訓十則』を朗読させられた。「一つ、社会に奉仕する企業責任を忘れないこと。二つ、仕事には全力を尽くして陰日向なく励むこと。三つ、常に創造の精神を念頭に切磋琢磨すること：」と澀みなく読み上げた。「さすがは大卒だね。」と誉められた。部長の講義は、話が अच्छ へ飛び、こっちへ飛びの感じで次第に退屈になり、彼の酔いの残った頭の回転は鈍く、部長

の 声 は 頭 上 を 飛 ん で 行 き 、 と に か く 眠 気 を こ
ら え る の が 精 一 杯 に な っ た 。 気 が つ く と ホ ワ
イ ト ボ ー ド に 守 ・ 破 ・ 離 と 大 き な 字 が 書 い て
あ っ た の で 、 と り あ え ず ノ ー ト に メ モ を し た 。
研 修 す る 者 に と っ て 、 師 で あ る 講 師 の 教 え を
守 り 、 技 術 を 身 に つ け る の が 「 守 」 と い う ら
し い 。 「 守 」 の 字 か ら 乱 雑 に 矢 印 で 枝 葉 分 か れ
の 色 ん な 言 葉 が 崩 し た 字 で 書 い て あ り 、 何 だ
か よ く 読 め な か っ た 。 こ う し て 基 本 を 覚 え 、
更 に 応 用 を は か る の が 「 破 」 ら し い 。 「 破 」 の
字 か ら も 枝 分 か れ の 言 葉 が 縦 横 無 尽 に 崩 し 字
で 書 か れ て ボ ー ド の 大 半 が 埋 ま っ た 。 基 本 を
離 れ た 応 用 動 作 は 間 違 い の 元 と 言 い た い よ う
だ 。 「 離 」 に つ い て も 気 が つ い た ら 同 様 に 言 葉
が 枝 分 か れ し 、 ホ ワ イ ト ボ ー ド が ブ ラ ッ ク ボ
ー ド の よ う に 真 っ 黒 く な っ て い た 。 話 は 全 く
覚 え て い な い の で 、 目 を 開 け た ま ま 脳 は 眠 っ
て い た の か も 知 れ な い 。 「 で は 、 頑 張 っ て く
れ 。 」 と 部 長 は 出 て 行 っ た 。 皮 肉 な こ と に 一 人
に な る と 頭 脳 が 冴 え 、 二 日 酔 い も だ い ぶ 治 っ

て来た。いつの間にか一時間も経っていたが、ノートには、守・破・離としか書き写していない。なかった。しばらくして夕べの酔いどれ課長が入って来た。割と真面目な顔になっていた。大一郎が立って敬礼をしたら、「おい、気が利くじゃないか。」と褒めてくれた。

「全く一時間も無駄話をして、これを消してしまえ！」と忌々しそうに支社の警備管理部長が真っ黒に水性インクペンで書き込んだボードの汚い字を消すように命じられた。

「警備員教育は、警備員指導教育者のみができるという警備業法の規則を無視して困ったものだ。警備員教育は法定教育で「教育実施簿」に記録し警察の査察を受けるものなんだ。

さっきの部長の長話なんか警備員教育にならないから、私の「警備業法全般」の中に組み込んでしまおうしかないのだ。私の時間を食って何になるんだ。残りの一時間で警備業法を語れって、無理だよ。」とにかくビデオを見てくれと『警備業法の解説』というビデオを見

せられた。鈴蘭警備保障の入社日に見せられ
たビデオと同じ物だった。再生と撒き戻しが
終わったら、正午五分前で午前中の講義は終
わりとのことだった。
「全く部長の話は思いつきで、何の本からか
パクって来た話ばかりなんだ。こういうのを
語部（かたりべ）と言うのだ。」と神田課長はま
だ憤懣やるかたない様子だった。
「午後からの警備員の礼式と護身術は、私と
巴さんで教える。これは四日間の昼食手当
だ。」と茶封筒をくれた。千円札が四枚入って
いた。大一郎はビルの外に出て食堂をのぞい
たが、丁度昼時でどの店も満員だった。高級
そうな構えのレストランでは、一食千円の手
当では足が出そうだったから研修室で食べよ
うと考え、目に入ったコンビニに飛び込み唐
揚弁当とサラダとペットボトルの日本茶を買
って戻った。彼は研修室のドアを開いて、目
に入った中の光景に驚いた。そっと閉めると、
再び外に出て、近くのビルの芝生の広場の縁

石に腰かけて弁当を広げた。暑い盛りであつたが、ちょうどケヤキの大樹の木陰になつていた。男女のサラリーマンの群れがしきりに行き来していた。大半が弁当を食う。大一郎を無視していたが、中にはこの安月給取りがと侮蔑したように横目で見ていく男女もおり、彼はそそくさと二、三分で弁当を食へ終え、ゴミ箱を探しながら街中を散策した。研修室には講義開始の一時までは戻れないと思つた。さつき垣間見た研修室内の景色はショックだつた。神田課長が巴係長を長机に押し倒して重なり合い、熱い接吻を交わし合つていたのだ。お互いに世帯持ちの身でダブル不倫をしないで平気なものだ。ほかに誰もいない静寂な空間が、返つて二人の性的欲望を刺激したのだ。ろうか。单身赴任の気軽さと侘しさが相俟つて大胆なことをさせたのだろうか。住居が同じマンション内という二人が平素何をしてい

るのか、と大一郎は妄想と嫉妬と失望を覚え

た。午後の講義開始の一時きっかりに研修室

に入った。机と椅子が後方に移動され、実技用の広さの空間が出来ていた。神田課長と巴係長が前に立ったので自然と敬礼をした。巴係長は昨日と違って白のパンツルックで身軽にしていた。――私は警察に十五年いたから、一通りの礼式も護身術もできる。今から本格的な日本一の模範を示して見せる。」と神田課長が自信満々に張り切った。課長は自己紹介から始めた。そう言えば、昨夜の午前様まで続いた飲酒時にはも一切課長の履歴は聞いてなかった。東京で二つの警察署と機動隊の勤務経歴とのことだった。剣道は二段の腕前という。何でも生来の競輪競馬のギャンブル大好き人間で、すっかりのめり込みかなりのお金をサラ金に負ってしまったそうである。そんな折り、たまに浮気を嘆かれたのを切っ掛けに色々相談を受けていていつか昵懇の仲に陥り、お金をもらっているうちに、男女の一線を越えて

しまったという。同僚の巴係長を横にしてそこまで言うのかと思ったが、彼女はとつくに承知のことなのだと思つた。
「いやあ、無線機を切つて奥様の家にしけ込み長居をしていたら、とんでもないことになるつていたんだよ。管内でひき逃げ事件が発生していてな、それで緊急配備がかかつていたんだなあ。私から何の応答もなかったとかやら、後でどこにいたのか幹部に散々油を絞られ追求されてな、面倒になつてすべて吐いてやったよ。これで警察ではどうせ出世しないと分かつたからね。」もう過去のことと割り切つている話し振りに聞こえた。大一郎の頭のの中には先程の課長と係長のラブシーンが焼きついており、課長のこれからの人生も危ういような気がした。
「課長、もう始めましようよ！」と清艶な巴係長が少しうんざりした顔で実技に入るよう促した。
「帽子を被つてくれ。」と課長は自分も被つた。

私服に警備帽は似合わないものである。お互いに滑稽な姿だった。特注の制服はP大学配置までには間に合わせるとのことだった。係長の、気を付け、休め、右向け右、回れ右、右へならえなどの号令に合わせて課長は基本動作を示した。次は大一郎がそれにならって動作した。曲がりなりにも体育会系出身の大一郎には造作もない容易なことだった。同じように各種の敬礼の動作を練習した。次は護身術だった。課長と係長で時々微笑みを交わし合いながら、各種の徒手の構え、前突き、前蹴り、防御技の体さばき、離脱技の片手外回しなど、それからダンスでもするように嬉しそうに互いに体を密着させ手や腕を組み合っ
て、逆技の小手返し、脇固め、制圧技の大腰など投げ技の模範演技を示した。巴係長も元陸上競技の選手で運動神経が抜群で二人の術義はピタリと意気があっていた。しかし、先程の二人の濡場を見てしまった大一郎には、二人が嬉々として戯れ合いながら、演じてい

るようにしか思えなかった。課長と大一郎で組んで同じように訓練を繰り返したが、背の高さが違い過ぎチグハグで何とも無様な実技の様子に、「もう終わりにしましょう。」と巴係長があきれたように水を入れて制した。神田課長は最後に、お客様の安全を守るのが警備員の使命だけど、自分の身にも怪我などしないように受傷事故の防止には十分気をつけてくれ、と締め括った。いつの間にか一時間が過ぎていた。十分間の休憩の後は、支社の指導教育課長の講義を受けた。大一郎がきちんと敬礼するのを見終えて、自分も頭を少し垂れて講義に入った。『警備業務実施の基本原則』という演目であつた。最初に自己紹介で、近畿管区の某県警で警察署の刑事課長だった。が定年になり、今のポストに迎えられたと言った。先ずはビデオを見せられた。良い警備員と悪い警備員を対比させる寸劇に解説を加えたもので、やはり札幌の鈴蘭警備で見たものと同じ筋だと途中から気がついた。

「要するにビデオで見た通り、警備業法がで
きる以前は警備員が労働争議に駆り出されて
組合員に乱暴したり、警備員に応募する人材
の資質も悪く、不良警備員が警備先の金品を
窃取したりして社会的信用を失ったのだ。そ
れで警備員が、仕事で憲法が保障する人権を
侵害するような事案が絶対に発生しないよう
に教育を徹底するのだ。とにかく何の権限も
ない一般人として警備の仕事をするのだ。」な
どと強い口調で述べたので、大一郎は何か悪
いことをして取り調べを受けているような錯
覚に陥った。色んな講釈を聞いているうちに、
この講師は警備業の実務を知らないで、警察
官時代の事件取扱いの自慢話ばかりをしてい
るように思った。警備派遣隊は警察の出先機
関の一種だから、すっかりした仕事をして治
安維持に協力する社会的責任があるとも言
う。理念ばかりで警備の実体の説明が欠けて
いると大一郎は思った。警察官のような権限
もない一般人がどのようにして怪しい人間に不審

尋問したら良いのかテクニクを知りたがつた。警備員は一般人と違い犯罪を見て見ぬ振りには出来ない。と講じるからには、その辺のテクニクのことを聞きたかったが、課長の顔が怖いので黙っていた。指導教育課長の話は突然自分が先日受けたというハローワーク主催の講習会への憤懣へと変わった。――ハローワークの所長は狂っている。というより、この国の役人はどうかしている。国家破壊の悪意を持っている輩が故意に詭弁で理想をいうのに操られ、情ない根性なしのヘタレばかりだ。下の役人にはしつかりしたのもいるが、ヘラヘラと組合員の顔色ばかり伺っているが血気を帯び、引き攣ったように見えたので、大一郎はわけもなく目を逸らしていた。――俺が所轄の刑事課長の時の話だ。管内の質屋のオッチャンが盗品を持って来た奴がいるとツウしてきたのだ。ツウは符牒で来るんだ。何しろ犯人の目の前で電話するんだから、例

え ば 『 ラ ー メ ン 一 丁 出 前 た の ん ま っ せ 』 な ど
と 上 手 に 伝 え な い と ズ カ れ る だ ろ う 。 刑 事 用
語 が 多 く な っ た が 意 味 は 分 か っ た 。 デ カ が す
っ 飛 ん で い っ て フ ン 捕 ま え た ら 、 大 阪 の 警 備
員 だ っ た ん だ 。 夜 勤 中 に 社 員 の ノ ー ト パ ソ コ
ン 二 台 を 盗 み 、 バ ッ ク れ て 盗 難 届 を 出 し て ふ
ざ け た 野 郎 だ っ た 。 そ い つ に は 前 科 も よ う け
あ っ た ん や 。 」 と 社 内 で は 標 準 語 を 遣 う と 言 い
な が ら 関 西 弁 が 交 じ る よ う に な っ た 。
「 そ の 警 備 会 社 の 顧 問 の 名 刺 を 持 っ た 元 府 警
の 署 長 が 真 っ 青 な 顔 を し て 、 俺 の と こ ろ に 謝
り に 来 た よ 。 い き な り 、 マ ス コ ミ 発 表 は し な
い で く れ 、 と 机 に お で こ を 擦 り 付 け て 頼 む の
だ 。 パ ソ コ ン 二 台 程 度 の 窃 盗 事 件 に 元 警 察 署
長 が 大 袈 裟 な こ と を す る も の だ と 呆 れ た よ 。
そ ん な ち ん け な 事 件 を 誰 が わ ざ わ ざ マ ス コ ミ
発 表 す る か ね 。 当 時 、 俺 は 警 備 業 法 に 疎 か っ
た か ら 、 警 備 員 が 客 先 の 品 物 を 盗 む と い う こ
と に 重 大 な 悪 質 さ が あ る こ と に 気 が つ か な か
っ た の だ 。 今 は 、 わ が 身 に 置 き 換 え る と 身 に

沁みてぞっとするよ。施主から警備契約を切
られたらパーだからな。公安委員会の耳に入
ったなら、特別査察を受けて是正勧告や営業停
止の行政処分を受けると、こっちの首も危な
いよ。まだ下の子なんか大学に行っているか
ら首を切られたら養育費に影響するからな。
だから、特に常駐警備の警備員を雇う際はき
ちんと身元調査をしないと、ビルの夜間の留
守番は警備員だけになり、泥棒される恐れが
あるのだ。本人がドロボウしなくとも不良仲
間を手引きしてやったらどうする。鍵を預か
っているから、仲間に盗みをさせることも出
来るのだ。とにかく人の財産を預かっている
商売で、他の業種といっしょくたんにするな、
と私は言いたいのだ。こんなのもいたぞ。履
歴書に書いてある住民登録地に住んでなくて
空き部屋なんだ。そいつを問い詰めたらサラ
金の借金取りから逃げて、女のところへ転が
り込んでいやがったのだ。えっ、こんな奴ら
にお客様の大切な財産を預けられるか？なあ、

そうだろう！ハローワークの講習の最後にア
ンケートを書かされたから、講義した職安の
所長宛てに『身元調査を怠って警備業が成り
立つと思うのか、このド阿呆、てめえのシヨ
ンベンでツラでも洗って考えてみろ！』と書
いて提出してやった、と初めて破顔して大声
をあげて笑った。ハローワークの批判は次に
は関西弁を交えて又続いた。
「男女雇用均等法は間違っていないけど現実
を見ていない。法を運用する役人が阿呆なん
や。うちの会社にはガードウーマンが仰山い
るんや。そいで女やから色んな訳ありで退職
届けを言つて欠員がしょっちゅう出るんや。
困るでえ。女だけを募集でけへん。女性に向
いている仕事ですと注釈を入れても、まだ、
つまらん男がようけ応募して来るよつて断る
口実に苦労するんや。本当に阿呆臭いことを
させくさつて、応募する男にも余計な履歴書
を書かせたり写真を撮らせたりして、社会に
大迷惑をかけているのが役所の実態だ。まあ

な、だからうちの会社では退職する女性には、
早めに友人や知り合いを紹介してもらって対
処しているけどな。」

ここで丁度時間が来て指導教育課長は出て行
った。

二十四 続く講師の嘆き節

再び神田課長が現れた。講義する方はとも
かく、受ける側は入れ替わり立ち代り人が入
って来て疲労を感じた。

「五時で終わる。あと三十分だけの締めめの講
義だ。『警備業の社会的役割』という演目だけ

ど質疑応答にしてもいい。まあ、折角だから
十分位は講義しよう。」と危機管理の心得を身

振り手振り話してくれた。警備の現場でヒヤ
リとしたこと、ハットしたことを放っておか

ないで上司に報告し、皆で対策を考え講じる
「ヒヤリ・ハット」の心得が大切だという話

だった。何でも良いから質問を受けるとのこ
とで、しばらく二人の間に沈黙が続いたが、

大一郎は何も喋らないのも気まずくなつて敢

えて発言した。

「指導教育課長さんの警備業の基本原則の話はピンと来なかったのですが、見せてもらったビデオで良く分かりました。」

「そうだろう。あの方は警察の世界のとしか知らないのだよ。防犯や法律の話は良いけど、常駐警備の現場で防犯の出番は一割もないさ。ほとんどが消防計画や訓練や防災対策、それに建物の電気関係や水回りや空調の設備補助業務、簡単な清掃、それに国旗や社旗の掲揚、新聞や郵便類の部署別分けなどの周辺サービス、自転車のパンクの修繕までやるところがあるのだ。警察を定年で辞める際に資格者証を取って来た指導教育責任者なんて、使いものにならないって、警備業界ではすっかり悪い評判が定着してしまったよ。」

「でも大抵の会社にはいるのでしよう。」

「そうだよ。他のものが警備員指導教育責任者になるには、警備員をこの五年間に三年以上やっつて、やっつと申し込んで高い費用を払っ

て講習を受け、それでも考查試験で相当落第するし、会社は大変なのだ。中身は未知数でもお手軽な警察出身者に頼っているのが現状だよ。それに警察官が業務査察で定期に立入に来るので、何かとOBを置いておくと便利なんだよ。」と口を尖らせて喋っていたが、最後の方だけは口元が緩み複雑に歪ませた。「結局、理屈じゃないんだよ。電線に雀が三羽止まっていた、それを空気銃で一羽打ち落としたら二羽残るか。正解はゼロ匹になるだろう。算数が成り立たない世界もあるんだ。現実には、残りの二羽は飛んで逃げちまうだろう。机上で計算したってしようもないのだ。現実的な生きた警備員教育は、警備員の経験者が一番向いているのだよ。」実務のことは明日以降に詳しく教えるということで、この日はお開きとなった。

二日目、初日と同じ時間に長居駅に入った。始発直後に人身事故があったという放送がしつっこく繰り返されダイヤが乱れていた。

地下鉄は動いていたが、だいぶ遅れて梅田駅に着いた。暑い中を新梅田の支社まで汗だくで走ったが、研修室に辿り着いた時は十分の遅刻だった。午前中の『巡回』『出入管理』を講義する神田課長はすでに講師席に座っていた。

「すみません。地下鉄の遅れで遅刻しました。」と弁解し頭を下げた。

「世間では何が起こるか判らないから、大切な研修期間中はそれを見込んで家が出るのが警備員という職業だ。どこか途中で遅れると支店に電話するのが報告連絡という警備員の仕事の中軸をなすものだろう。違うか？」といきなり怒鳴られた。続いて、「昨日、ビデオデッキの待機電源を切らずに帰ったろう！」と詰問された。

「すみません。誰もスイッチを切るように指示してくれませんでした。」

「指示待ち人間とは情けないと思わないか。いいか、警備員は最後の火気点検とかスイッチ

チの消し忘れとかを確認するのが当たり前と心得ておけ！」と赤く爛れた目で叱られた。「君が北海道で一年間以上警備員実務をしていたら、二日間の特例教育で今日の午後にも現場に配置できたのだぞ。講師一人に受講生一人とは勿体ない贅沢なことだ。警備業法なんて商売の邪魔だ。民間の営利企業に役人が口を挟んでどうなる。自由経済の原則に反している。民間の活力を弱めるだけだ。」と小さな溜息をついた。酒の臭いが漂っていた。夕べも午前様まで何処かのスナックで酔い痴れたのに違いなかった。『巡回警備』のビデオが上映された。課長は最初のうちしきりに欠伸していたが、終いにはビデオの音声を子守唄に寝込んでしまった。終了したので大一郎が気を利かせて巻き戻しをしたら目を覚まし、「終わったか。札幌で巡回勤務をしただろう。その通りに五感を働かせて建物の内外を回れば良いのだ。但し、落ちた古新聞とか犬の糞とか見つけたら、いちいち清掃員を呼ばず、

そのくらい自分で始末しろ。」というところ、次は
十時四十分から『出入管理』をやるからと彼
に待機を命じて、さっさと室外へ出て行った。
腕時計を見たらそれまでまだ四十分もあった。
課長はどこかで休憩し、飲み過ぎと歌い過ぎ
から少々回復した様子で戻って来ると、二時
限目の講義が始まった。やはり、『出入管理』
のビデオを見せられた。今度はさすがに課長
も居眠りせず、一緒に画面を眺めていた。
今度はテキストの項目に沿って説明がなされ
た。特に鍵管理に力点を置いているようだった。
「鍵管理はしつかり原則を守ってくれよ。G
M K（グレートグラนด์マスターキー）とい
う鍵の親玉は、警備会社では預からないのが
規則だが、施主さんにどうしても頼まれた
ら金庫に保管することになっている。グラン
ドマスターキーもそうだ。現場ではマスター
キーと個別キーで仕事をするにしている。
鍵の盗難とか紛失は本当に会社の信用をなく

すからな。うちの会社でも、きちんとした「鍵
管理要綱」を作成するまでは、何度も鍵の紛
失事故の発生でいっぱい苦い汁を飲んでい
んだ。大体がマスターキーを手に握って巡回
したり、ポケットに入れたままの巡回だった
り、鍵箱の出し入れの記録さえ残していなか
ったのだ。何度も紛失事故が起きて当然だっ
たんだ。」と課長は苦い青汁でも飲んでい
るような表情をした。

「鍵の親玉って、それ一本で何箇所くらい開
けることができるのですか？」と大一郎は興
味本位で訊いてみた。

「全館すべての部屋を開けられるのがそうさ。
ホテルなんかだったら、それ一本の鍵で五百
箇所以上開くのだぞ。昔のことだが、うちの
会社でもグラントマスターキーやGGMKの
紛失や盗難があつて大変だった記録が残つて
いる。当時は便利だからという理由で警備員
が日常の巡回業務に使つていたのだ。質の悪
い警備員にそんな大層な鍵を持たせていたら、

「いつか悪さを企む奴も出るさ。」

「その結末はどうなったのですか？」

「どっちも見つからないさ。当社持ちで施錠

という施錠を全部取り替え、その工事の一ヶ

月間は警備員を増強して大赤字だぞ。電子錠

は一箇所五万円もするからな。グラントマス

ターキーの方は紛失して一週間後に退職した

警備員がいてな、そいつが一番怪しい奴だな。

GGMKは、誰か設備員が作業着のポケット

に仕舞い込んだまま家に持って帰り、翌朝職

場が蜂の巣を突いたような大騒ぎになってお

り、出すに出されなくなった可能性が高いな

あ。」

「そんな時は警察に被害届を提出するのです

か？」

「そんなことをしたら、一流ホテルや有名病

院のことだから、新聞記事になって会社の社

会的信用が失墜してしまうだろう。営利企業

で営業に影響することは死活問題だ。だから

内々でしか調べられないよ。」

そんな話をしているうちに昼食休憩となった。
午後からは巴係長の講義や実技になっていた。
大一郎はコンビニ弁当を買って研修室で食べ
たかったが、昨日の神田課長と巴係長のラブ
シーンを思い出すと、これから二人がここで
一緒に落ち合うような気がして、戻るべきで
はないと考えた。広場の縁石にしゃがんで食
べるのも、今日は人目が恥ずかしくなったの
で、一計を案じ大阪駅の待合室で駅弁を買っ
て食べた。千円の昼食手当では少し足が出た
が仕方なかった。一時に部屋に戻ったら、黒
いワンピース姿の巴係長と白髪ででっぷり肥
えた色の浅黒い六十配の男がいた。元消防
署長で支社の防災担当の顧問だとのことだっ
た。消防関係の講義で、最初にビデオ教育を
受け、次は顧問による実技指導で訓練用の消
火器の操作、防火防災盤鳴動と操作、非常放
送盤の操作と放送訓練、屋内消火栓の操作訓
練、送受話器の設置、緩降機設定、避難器具
設定、排煙設備作動、非常灯の点検、避難経

路の確認、非常口開放、担架の組立などの実技を繰り返し返し訓練し、最後に各種感知器（センサー）の原理を説明してもらい、アツという間に二時間が過ぎていた。口述講義を受けるのは長く感じられるが、実技は知らない間に時間が消えているものである。十分間の休憩の後には、巴係長の『報告連絡』の講義だった。さっきには巴係長が憂鬱そうな顔付をしていたので、アンネの日かと思っていたが、今度はいつもの澁刺とした巴三智子に戻っていた。『さっきはご苦労さん。本当はわたしだって防火管理の一部受託者の講習を受けて考査に合格し、『消防教育担当者証』の資格があるのよ。それをド素人の警備管理部長は信用しないで消防OBにやらせるの。これって警備業法に抵触するの。警備業の法定教育が出来るのは、警備員指導教育責任者と該当する警備業務の検定合格者に限定されているのよ。だから、さっきの『消防教育』だって、『教育実施簿』に教育実施者として署名押印するのは

わたしの氏名だけなのよ。おかしいでしょう。
消防のOBさんが警備員を法定教育したいの
なら、三年間警備員をやって講習を受けて試
験に合格し、きちんと『警備員指導教育責任
者』の資格を取らなければいけないのよ。」と
声を若干荒げたので、大一郎は先程彼女が終
始浮かない顔をしていた理由が分かった。『報
告・連絡』の講義もやはり札幌で一度見たよ
うなビデオを見せられ、テキストに基づいて
報告・連絡の重要性について講義を受けた。
今朝の遅刻について、神田係長から報告がな
かったと叱られたのを思い出して一瞬だけ嫌
な気分になった。この講義の最後の部分で、
一一〇番と一一九番の警察、消防への緊急通
報要領の実技訓練を受けた。巴係長の甘い声
が耳にくすぐったく、これで朝に課長から叱
られた嫌な気分も晴らされた。この日の最後
は三十分間の『不審者・不審物の取扱い要領』
だった。テキストに沿って講義されたが、最
後に怖い顔の指導教育課長に質問できなかつ

たことを彼女に訊いてみた。

「何の権限もない警備員が不審尋問をしても良いのですか？」

「それは、相手に直に疑われていると悟られるような質問の仕方はいらないで下さい。怪しい人を見つけたら、それとなく様子をしばらく観察し、本当に怪しかつたら、例えば、何かお困りでしょいか？どこかお具合が悪いのですか？ご案内いたしまししょうか？何かお手伝いしまししょうか？と婉曲にあくまでも遠まわしに尋ねながら相手の不審点を見つける心の余裕が大切です。その間に何か無線機の暗号を決めていて応援要請とかができれば、もっと効果的です。」と優等生的な回答があつた。

「怪しい人って、具体的にはどんな格好をしていいますか？」と素朴な疑問をぶつけてみた。

「まさか鼠小僧みたいな装束はしていないわね。その場に適（そぐ）った服装をするのよ。

例えば、あなたが以前に勤務したことのある病院だったら、病院荒しのドロボウは白衣を

着けてドクターの振りをしたり、お菓子の箱を抱えて見舞客に化けたりするから、見つけるのは口で言うほど簡単ではないのよ。要するに、ウロウロ、キョロキョロする者は不審者を見つける糸口で、よく動きを観察するところね。それにしても、不審車両には、すつごく嫌な思いが忘れられないわ。渋谷の本社の重役よ。わたしの担当物件で深夜に特別にシヤッターを揚げ、駐車場を出庫させてやる自動車があったの。警備員が嘘をついていたのよ。シヤッターの下をその車が出ようとしていた時に、ちょうど別の車が道路から入れ違ててシヤッターを降ろし、その出ようとしていた車の屋根にぶつけてしまつて壊したと言いた張るのよ。マンガを読みながら遠隔操作のシヤッターの揚げ降ろしのレバーを操作していたつて、他の警備員が後で証言してくれたの。駐車場出入口のモニター画面に、ろくに注目していなかったのよ。」彼女は、当時の事

故を思い出したのか、眉間に皺を寄せて頬を
紅潮させ怒って話続けた。
「支店から支社、それから東京本社管理セン
ターへの第一報が警備員の嘘の『深夜の不審
車両侵入事件』だったから、それがそのまま
社長の耳に入り、即座に『不審車両侵入防止
対策要綱』を作成し、その物件の警備指令書
にも盛り込めと厳命があり、施主に謝りに重
役さんが来阪したの。わたしが調べたの。そ
の警備員は、マンガを読みながらレバーを操
作してミスをしましたって。女房と子供を養
っているからクビにしないでくれって、わた
しに涙をこぼして詫びたのよ。深夜の不審車
両侵入なんて大嘘だったのよ。だって表の通
りから駐車場に入ると、すぐに踏み切りのバ
ーがあって、その駐車券を抜かないとバー
は上がらない仕組みになっているの。駐車券
は閉館時に必ず百五十枚にしておくのよ。事
件明けの朝、別の警備員が念のためにその駐
車券を数えたら、ちやんと百五十枚あったっ

て証言も得たわ。もし不審車が深夜に侵入し
てしたら、一体どこに停められるのよ。駐車
券を抜かないとバーは上がらないのよ。駐車
券を抜いた形跡は全くないのだから、お化け
みたい。に車が一台宙に消滅したっていうの。
バカバカしいの一語に尽きるわ。それを言っ
ても、支社の警備管理部長も元警察の指導教
育課長も、社長の耳に一旦入れたことは、も
う覆せないの一点張り、本社の重役さんは訳
も分からず、今後は二度と再び不審車を侵入
させるような不手際は天地神明に誓って犯さ
せはしません、警備員の指導者にも警備員に
も厳重に注意し徹底致します、とビルオーナー
にペコペコしてばかりで情けなかつたわ。
こんな重役なんていないわ。不二家のペコ
ちゃん人形でも役員室に飾っておいたらいい
のよ。ことの真相を究明もしないで、的外れ
な対策を指示して、オーナーに謝罪して呆れ
果てたわ。それでその重役さんったら、支店
長のご接待で大阪見物し、鉄チリ・鉄サでお

酒をたらふくご馳走になって、浪花まんじゅ
うをお土産にご機嫌さんで帰ったわよ。」

「先生、時間が過ぎたようです。」黙って巴係
長の熱弁を傾聴していた大一郎も堪りかねて
口を挟んだ。

「あら、そうだったわ。もうこんなに時間が
経っていたのね。悪かったわ。でも本当は、
警備員を信用し、少しでも良いから警備
員に強制力のある権限を与えたら、警備員の
資質もずっと向上し、もっと社会貢献のでき
る業界になると思いますわ。」と言う黒のワン
ピース姿の講師を清楚な人だと大一郎は思っ
た。「オイ、いつまで講義しているのだ。」と
神田課長が入って来た。壁の時計は五時半に
なろうとしていた。

教育三日目も大阪の街は、朝から夏空の良
い天気だった。しかし、地下鉄は混雑し生き
埋めになった心地で梅田まで着いた。但し、
大一郎は頭一つ背が高い分ましで、背の小さ
な女の子なんか本当に人体の洪水に埋没し、

生き地獄の心地だったかも知れない。「全く毎日暑いなあ。今年は空梅雨かなあ。」と呟きながら怖い顔をした指導教育課長が九時きっかりに入って来た。午前中は彼の講義ばかりだった。大一郎がいつものように敬礼すると、彼も礼を返し、開口一番「君は本当に鉄のお面を被ったような怖い顔をしているなあ。札幌の病院で幽霊に怯えて便所に潜んでいたって信用できないよ。」と笑った。大一郎は苦笑いするだけで返す言葉もなく頭を掻いた。警備業界の情報網の凄さに舌を巻くしかなかった。こんな顔に生んだ親に文句を言うしかないと思った。午前中は『憲法の基本的な権利』『遺失物法』『銃刀法、薬物取締法』の法律ばかり三科目だった。指導教育課長の講義は、法律用語や警察用語がいっぱい、大一郎には理解不能なことばかりに思えた。課長は警察官を前に講義しているのと勘違いしているように思った。辛うじてテキストの文字を目で追い、警備員教育用ビデオを見て、

講義内容をおぼろげに把握する有り様だった。
「警備員とは夜も寝ないで人のために働くサ
ービス業なのに、人権侵害なんてありうるの
ですか？」憲法の時間に質問してみた。
「ビデオにあっただろう。類似行為は禁止な
のだ。職務質問は禁止、交通整理は禁止、取
調べは禁止だ。施設管理権に基づいての質問
は良い。運転手の協力を得ての任意の交通誘
導は良い。容疑者から回答を強制しない事情
聴取は出来る、というのが警備業務というも
のだ。」と回答してくれた。大一郎にも、この
人は実務を知らないで教科書に載っているこ
とをお題目みたいに言っているだけと分かつ
たので、それ以上は訊かなかった。遺失物法
は、自分も子供の時に落とし物をしたり、逆
に財布を拾って交番に届けたりした経験があ
たので、ビデオが良く理解できた。警備員
が仕事中にお金などを拾っても、謝礼も所有
権の移転もないと分かって、がっかりもした
し納得もした。薬物取締法も講義は面白くなく、

さっぱり理解出来なかったが、お愛想に一つだけ質問した。

「警備員が麻薬を発見した実例はありますか？」と大一郎は退屈しのぎに質問した。

「そうだなあ。警備員については知らないが、清掃の小母さんが植込みの中に隠してあった白い粉の入ったビニール袋を見つけたことがあったなあ。警察の保安係が臨場し検査したらほんまもんの覚醒剤やった。」と教えてくれた。

午後からは神田課長がすべての講義を担当することになっていた。午後だったら二日酔いの講義はないだろうと安心して一時間の昼食休憩をとった。

「午前中の授業は退屈だったろう。警備員の仕事も知らないで、警察のことばかり話して困ったもんだ。法律関係の講義しか任せられないが、警察官を相手に講義するような内容では駄目なんだ。」

「はい、でもこのテキストを読み、ビデオを

見て理解できませんでした。」と正直な感想を言った。
午後からは、『警備現場での諸注意』『大震災
時の行動』『救急法』『現場保存』と盛り沢山
だった。
「支店の警備は支店長の直轄だよ。支店には
警備部長というポストは置いていない。警備
業法があるから、俺はビル管理部長の配下に
ならないで良いのだ。」と課長は我が世の天下
と云った口振りだった。支店長は東京の本社
の営業会議で出張中とのことだった。これか
ら講義をさっさと流して、堺のP大学の現場
を見せてやる予定にしたと説明した。『警備現
場での諸注意』では、警戒心、サービス精神
を発揮して仕事に積極的に取り組み、人間関
係に気をつけてくれ、という内容だった。
「俺の経験だが、ある私立学校の警備でのこ
とだ。年末のボーナスのことで夜遅くまで教
職員組合と学校側が団交で揉めていたんだな。
その警備員さんはもともと『金魚え、金魚
お！』と金魚売りの行商をしていた人で、無

学だがお人好しのお爺さんだったんだよ。それで、労使が夜遅くまで騒いでなかなか仮眠がとれないから、寝たくてたまらず巡回で現場を通った時に『先生方、いい加減にして今夜は帰ってよ。』と言っただけなのだ。教職員組合はこれを逆手にとって、『今、学校側が警備員を使って正当な労働運動の権利行使を妨害した！』と大騒ぎにしたんだ。もちろん、会社にも学校側から抗議が来て、その警備員さんは配置換えしたけど、本人がこんな馬鹿げた仕事は阿呆臭いと自分から辞めてしまっただよ。君はどう思うかね。」と質問された。

「ええ、難しいですね。まあ、警備員と労働爭議のことは、昔からのトラウマがあり過剰反応とちがいますか？」

「みんなずるいから、悪意はなくとも人の失言があつたら、それつとばかりに利用して自分を有利な立場にするのだ。警備員は何でも紛争の中に入ったら、厳正公平という心構えで

いてくれ。」と諭された。

次は休憩抜きで『大震災時の行動』というビデオを見せられた。

「関西地方は、すでに阪神淡路大震災が来てしまったので、大地震が来るのはこの先千年後とも二百年後とも言われているから参考だな。東海や関東は気をつけにやらんな。」と言ってトイレ休憩になった。『救急法』もビデオを見ただけで終わりだった。

「今流行のAED（体外式心臓除細動器）なんて、うちの現場に設置のものは全自動式だから、意識不明で息をしていないような人が倒れていたら、落ち着いて上半身を裸にし、音声ガイドの言う通りにパッドさえ貼ってやれば大丈夫だ。心配無用！」と締め括った。最後の『現場保存』もビデオ教育だけだった。「警備現場で殺人事件とか飛び降り自殺があれば、周りを立入禁止にして警察を呼べば済むことだ。何も難しいことはないだろう。さあ、出かける仕度をしてくれ。」と堺のP大学

見学に向かうとのことだった。ちょうど三時半だった。堺市郊外のP大学に着いたら夕方、下校の学生とこれから受講の二部の夜学生が行き交い警備員が二人校門まで出て、学生証のチェックに余念がなかった。正門から大学本部などのある本館まで青々とプラタナスの並木道が続いていた。正門脇の小ぶりな二階建の守衛所に入った。二階が休憩所と仮眠所になっていた。警備はここの勤務がメインだけど、中央監視室の中にも警備員の詰める窓口と防災センターがあり、そこを拠点に巡回もあるんだ。日によって防災センターに当務もあるからな。勤務は、日勤、日勤、当務、明番、公休と続くのが基本だけど、なかなかうまくシフトが組めないから隊長は苦労しているのだ。」

「正門守衛所に勤務する日と、中央監視室に入る日とあるのですね？」

「そうだよ。だから、隊長は頭が痛いのだ。」

夜間の巡回は二人で回るから心配するなよ。
学校の裏手には小山があり草むらにマムシがい
るから長靴で回れよ。君の足は昔のジャイア
ント馬場の十六文キック並だろう。隊長に金
を渡しておくから、配置になつたらどつかの
靴屋で買いなさい。かえつて釣道具屋を探し
た方が長靴は見つかるかもしれないなあ。」と
課長は教えてくれた。大一郎は夜間巡回と聞
くと、札幌の病院の夜間騒動を思い出し、暗
い気分になり落ち込んだ。この老警備員達は、
今度配置になつて来る背の高い鉄仮面みたい
な顔の若い新人に好奇心をチラチラと向け
ていた。隊長の岡本さんに紹介されたので、
きちんと敬礼をした。ガツチリした体格で、
以前は高校の体育教師だったと言つた。そば
に帽子を脱いで腰巾着のうにいた、短足の
坊主頭の警備員が、「あんたの鉄のお面は顔面
配備に良いなあ。たまに綺麗な女子大生のネ
エチャンがバス停まで送つてくれ、と頼むん
だ。待ち伏せのナンパがいたり、ストーカー

する奴がいて嫌だから頼まれるんだ。」と冗談とも真面目ともつかぬ発言をした。守衛所には一応中古の応接椅子があり、課長と隊長が世間話するのを大一郎は退屈そうに聞いていた。守衛室の時計の針が五時を少し回ったのを課長が目敏く見つけた。「では、明後日（あさって）になるけど、鉄甲君を連れて来るからシフトを頼んだよ。」と隊長は隊長に告げて立ち上がった。「警備業とは厄介な商売ですね。たった一人が欠けても、その穴埋めが来るまで現場の警備員に連当（連続当務）や公休返上や公休延期の過酷な勤務を強いるのですからね。安い給料で、明日のことも落ち着かない生活をさせて、なにが警備業法ですか。錦の御旗じゃあるまいし、権限を振りかざして偉そうに説教分かっていないですね。警備員の貸し借りが後を絶たないのも当然ですよ。お巡りさんにこんな商売が分かるはずがないでしょう。明

治の昔、士族が武士の商法とやらをして、こ
とごとく失敗したのを反省しろ、と言いたい
ですよ。高邁な警備業法を説いても、企業は
金儲けをしないことには倒産してしまうので
しよう。法令規則一点張りで世の中がうまく
回ったなら世話がないですよ。」と岡本隊長は吐
き棄てるように言った。大きな顔が赤みを帯
び、相当に血圧が上がっている感じがした。
課長は無言で隊長の肩をなだめるように軽く
叩いた。
二十五 又もや酔いどれ課長の犠牲
神田課長に連れられ校門の警備員の敬礼を
受けて学校を後にした。「ちよつと一杯やって
いこうぜ。」と課長の顔色に生気がさした。や
っぱり、これが目的で自分は今日ここに連れ
て来られたのだと思った。バス停に待機して
いたタクシーに乗り込むと、「堺東まで頼みま
っせ。」と告げる課長の声は弾んでいた。
「この前も大変なご馳走になって、僕は余り
お金の持ち合わせがないのですけど：」

「金のことなら全く心配無用だ。俺の小遣いは月に五十万とこの前言っただろう。」と言うと、そつと大一郎の耳元に、大学の理事達を接待したことにするのだよ、と囁いた。南海高野線の『堺東駅』界隈は、規模は狭いが大阪の道頓堀のネオン街のような様相をしていた。まだネオンはあまり点いていない時刻だった。だが、大衆酒場からは勤め帰り風の男達のがわめくような声が通りまで聞こえて来た。「何といつてもトンボリは高いからなあ。ここは安いし、綺麗な姉ちゃんがいる店が一杯あるのだ。」と一軒の日本料理店に入った。中年の和服の女将が愛想よく出迎えたが、大男の大一郎にはちよつとたじろいだ素振で「いらつしやいませ」と深々とお辞儀をした。課長は常連の上得意客でこの店一番の個室に通され、まさにVIP級の持て成しを受けた。涼しげな色合いの和服を着た白塗りの化粧が濃い若い女が、ビールとお絞りを持ってきていそいそと課長にお酌した。

「麗花ちゃん、相変わらず別嬪さんやね。」と課長が相好を崩した。

「課長さん、お世辞をいっても、今日はお付き合いませんからね。この前みたいにお店を三軒も梯子で連れまわされるのご免ですわ。」と早々に目論見を外された。大一郎も、明日も講義を受けねばならないし、何とか口実を見つけて早く帰宅したかった。

「お客さん、九州のご出身ですか？お顔がごつつうお強そうで素敵ですわ。」とその娘さんは変な誉め言葉で大一郎にもお酌をしてくれた。課長は、「そいつは俺の用心棒だ。東京生まれだけど三代遡ったら、どつかの馬の骨か豚の足だよ。無理して世辞を言うな。」と素っ気なかった。和食のコースを食べたら、課長はそそくさと店を出た。次の店はロシアンパブだった。この店が課長の狙いだったのかと悟った。骨格が逞しく胸肉がはち切れそうに膨らみ、腰の太いロシア美人が揃って待っていた。ロシア娘のブルーネットの髪に清らか

な湖のようなブルーの瞳が、大一郎には吸い込まれ溺れそうに魅惑的だった。一人の女が近寄って来て、大一郎の顔を大きな手で挟み、お面を外すような仕草をして、皆で肩をど突き合いながら転げまわらんばかりに爆笑した。無邪気なのだろうか、腹の底には日本人への侮蔑がロシア人にはあるように感じられた。『鉄、ここならお前の体格に似合った女がゴロゴロいるだろう。けどな、この娘さん達、今はよだれが垂れてきそうな素晴らしいプロポーションだけど、三十を過ぎて中年になる頃には、たいていがブクブクと脹（は）れて、ビア樽かドラム缶みたいな相撲取り顔負けの体になるんだからな。』と課長は余計な講釈を得々とした。課長はカウンターに座ったまま、宗右衛門町のチャイニーズスナックの時と同じように両脇に雪肌の豊満な女を侍らせて、マイクを握りっ放しで愛だの恋だの不倫だのと演歌を熱唱し始めた。ロシアの女の子達は、金の出所は課長にあるとつくに承知してい

たので、若年の鉄のお面みたいな顔付の大一郎にはさして興味も示さなかった。一度だけ別のやや年長の肉感的な女にダンスを誘われたが、彼は踊れないので断った。ロシア女には、トンボリのチャイニーズナックのようという日本語もろくに通じず、ブラッディマリーと、黙々と重ねながら課長の歌がやむのを待って、いた。杯を飲み干したら、その時だけ間髪も入れない素早さで「ハイ、血まみれマリーちゃんよ。」とお代わりを差し出された。大一郎はすっかり退屈し、明日も講義があるから早めに帰るよう課長に何回も懇願を繰り返した。が、地元で飲んでいるのだからいいじゃないかと聞かなかった。――課長、質問宜しいですか？――と酒の力の勢いで怪しげな呂律ながら、思い切つて問いかけた。訝な顔で大一郎に酔眼を向けた。――あのう、巴係長が好きなんですか？――

「鉄、お前、俺達の何かを見たのだな。ああ、
そうだよ。单身赴任者同士の遊びだよ。お互
いにガス抜きをして淋しさを紛らわせたって
いいじゃないか。どっちも家族の方が大事だ
から本気にはならないよ。大人の恋をするだ
けさ。」と不機嫌そうに言うと、カラオケ帳の
ページをめくり始めた。ホステスにかまわれ
ず退屈しのぎにウオッカの杯を重ねてしまっ
た大一郎は、結局酔いつぶれてカウンターに
顔を伏せて寝込んでしまった。「オイ、帰ろう
ぜ。」と揺り起こされて時計を見たら午前零時
を過ぎていた。課長が呼んだタクシーが二台、
店の前に横付けされていた。大一郎は課長か
らもらったタクシー券を手にも、朦朧とした意
識で車内に乗り込み『長居』とだけ告げた。
車が走り出すと急激に吐気を催したので窓を
開けて夜風に当たり必死に堪えた。運転手に
濁った頭脳で描いたうろ覚えの道を指図しな
がら散々回り道をして、やっこのことで長居
の社員寮の前で降ろされたが、その途端に道

路脇にその日飲食したもののすべてのような大量の吐瀉をしてしまった。翌日は警備員新任教育の最終日だった。地下鉄の中でも吐気がしたが、何とか支社の研修室まで我慢できた。すぐにトイレに入り込み酸っぱい胃液を吐き出した。脳髓が痺れ時折に鈍痛が走った。午前中は、法律の講義ばかりだった。当然に支社の警察OBの指導教育課長の出番で、『刑法』『刑事訴訟法』だった。しかも、刑法は二時間もかけて行うようにカリキュラムはなっていた。今朝は顔色が悪いな。鉄じゃなくて銅の錆びみみたいな面（つら）で大丈夫か？」

「すみません。飲み過ぎました。」と正直に言った。その方が無難な気がした。

「君は警備員としての心掛けがなっていない。今は研修中の身だぞ。分かっているのか。支社長の知り合いっちゃうことを鼻にかけて、羽根を伸ばすんじゃないぞ。研修とはいえ、これは勤務で会社は日当を払っているんだ。」

二日酔いで勤務するとは何事だ。後で支店長に伝えておくからな。」と叱られた。

「すみません。」好きで飲んだ酒でもないのに、何とも理不尽な言い草をされて、彼は腹が立つのもブツ飛んで、ただただ情けなく泣きたくなつた。『刑法』の総論の違法性阻却事由とか犯罪成立が構成要件に該当する有責違法な行為とか聞かされながら、テキストに目を落としていているうちに意識が遠退き居眠りをしてしまつていた。

「おい、立っていたら眠くならないだろう。」と立ちっぱなしでビデオを見せられた。ビデオが済んでも、立ったまま話を聞くように命じられた。それでも睡魔に襲われ時々よろけた。強姦は親告罪で告訴がないと起訴されないが、告訴に備えて警察は捜査だけはしておかねばならないとか、いわゆる「食い逃げ」は、詐欺罪に当たると、単に民事上の債権でしかないものがあるとか、強盗と恐喝の違いとか、正当防衛と緊急避難の違い、刑法

の責任能力つまり年令問題や犯人の心神の状態で犯罪の成立が左右されるところか、指導教育課長は得意の刑事警察分野を鼻高々と講義してくれたが、大一郎には難しく苦痛で拷問にしか感じなかった。警備員に大事なことは、休憩時間に目を通したテキストに、住居侵入とか、建造物侵入とか、軽犯罪法の立入禁止場所侵入の事案の成立かどうかだと書いてあった。二時限目の『刑事訴訟法』も初っ端から立って講義を受けるように命じられた。最初のビデオで現行犯逮捕の問題点は何となく理解できた。しかし、指導教育課長は、現行犯人として、誰何され逃走する者、衣服などに犯罪の顕著な痕跡がある者、犯人として追われている者、盗品や犯行に使った凶器などを所持する者も現行犯人と同様に逮捕できるとして、犯行と時間的接着性が認められ、犯人として追っかけられている以外の場合には、犯行場所と容疑者を見つけた所の場所的接近性も問題になり誤認逮捕もあり得るから、警備

員は目撃した目前の明白な現行犯事案以外は、警察に緊急通報して警察に協力するだけで良いとややこしい説明をして、大一郎が訝えない頭の中でようやく整理した知識を又もや混乱させてしまった。更に、警察官や検察官にしか出来ない緊急逮捕、通常逮捕手続きの説明をくどくど講義され辟易とした。明やっと昼休みになったが、午後も指導教育課長の『警察官職務執行法』だと思うと、全く食欲が萎えて、立ち食いの素うどん一杯で済ませた。卵を落として月見にする気も、見せびらかすように目の前の小皿に盛られた稲荷寿司をつまむ気も起きなかった。午後の第三時限目の『警察官職務執行法』の講義は、権限を持つ警察官と何の権限もない民間人である警備員の職務執行の違いの講義であつた。今度は席に座ったままで受講してよいと着席を許可された。ビデオはなく、テキストの項目を追って講義がなされた。警察比例の原則、警察公共の原則、警察の民事

不介入の原則について、警察OBの舌鋒は冴えていたが、大一郎には難し過ぎた。テキストを読みながら、警察権力は社会公共の秩序維持のために必要な最小限度で公権力を発動するものだ。と理解できた。警備員には権限はないが、施設管理規則や誰にでも許されていない。現行犯人逮捕権を活用して、警察に協力すれば良いのかと理解した。

「警察権の限界ってわかるか。警察官じゃないから、鼻が乾いていないからね。」

突然課長が質問した。

「ええ、警察犬も犬ですから、鼻が乾いていたら臭いが嗅げなくて限界でしょう。」と答えたら、そっちの警察けんじやないよ、と笑われた。課長も馬鹿馬鹿しくて笑うしかなかった。のだろう。先程の三つの原則を警察権の限界というのだそうだ。最後に総括的に締め括った話は耳に残った。空港の保安警備で手荷物検査をガードマンがするが、あれは航空運送約款に基づいて、航空会社が契約の警備会

社に業務委託するもので、警察官にはあのよ
うに無差別に職務質問や所持品検査はやれな
いそうだ。何か怪しい物を持っているという
合理的理由がある場合だけ、警察官職務執行
法或いは警察法二条に基づいて質問したり調
べたりするのだという。さらに付け加えて話
し続けた。
「ビルメン業では、常駐警備の契約書に「保
安警備料」と記載するが、警備業法では、『保
安警備』とは、警備員による量販店やスーパ
ーマーケットの万引取締りのことを言う用語
で、この業界には混乱がある。」と怖い顔に戻
った。指導教育課長も徐々に警察官の制服を
脱いで、民間人に脱皮しているのじゃないか、
と大一郎は思った。そう言えば、労働者派遣
業が絶対禁止の警備業でありながら、施設に
配置する警備員の送り状みたいな書類を『警
備員派遣届』、警備隊長以下を『警備派遣隊』
など、と臆面もなく派遣という言葉を使用し
て妙なことである。この後は巴係長の『応接

要領一般』になつていた。いつもながら花の芳香が漂つて来るように清楚な巴係長が入室して来た。薄いブラウスはブラジャーなど下着が透けて刺激が強過ぎると、大一郎は股間が熱くなるのを覚えた。指導教育課長からやられたように彼女にも立たされたら。股の張り方を隠すために前屈姿勢をとるしかないだろう、と杞憂した。

「夕べは何処で飲んだの？課長が鉄甲さんに散々飲まされたと言ひ訳していたわよ。」とコケチツシュに睨まれ、大一郎は思わず目を伏せた。しかし、散々飲まされたはないだろうと思ひ反発した。

「僕は課長に誘われただけです。気がついたら前後不覚で、やつこのことで寮に帰れたのです。何度も課長に帰りましょう、と言つたのは僕です。堺東のロシアンパブでのことです。」大一郎は開き直つて弁解した。

「やっぱりねえ、そうでしょうねえ。昨晚は大変だったのよ。たまたま遅くまで調べもの

して起きていたら、課長が部屋を間違えて、わたしの玄関の鍵をガチャガチャさせていたのよ。借上げ社宅だからネームプレートは出していないし前にも何度かあったわ。神田さんは一階下の部屋だから連れて行こうとしたら、螺旋の非常階段でよろめいて顔から転んでしまったの。血がいつぱい出て大騒ぎよ。放っておけないから救急車を呼んで病院に搬送したわ。」と顔を顰めた。

「入院されたのですか？」
「軽傷よ。血止めして赤チン塗って絆創膏張ってお終いよ。でも今日はみつともないからとお休みされていくわ。これから最後までわたしの講義よ。明日からは現場でしょう。良かったわね。人の話を聞いてばかりも大変だったでしょう。研修生が多いと互いに討論させたり、作文を書かせたり、礼式や護身術の実技を増やして退屈させないのだけど、あなた一人だったから仕方がないわ。」と矢継ぎ早にぼやいているようだった。大一郎がようやくや

く気を落ち着けてよく観察したら、彼女は睡眠不足の目にアイラインを強く描き、肌の荒れを濃い化粧で誤魔化していた。『応接一般要領』は電話での言葉遣いが中心だった。日時は、曜日と絡めて聞いておく、時間は午前と午後も確かめておく、人の名前を確認する時は、例えば、安田さんなら安心の安に田園調布の田ですかで、間違っても安物の安に田んぼの田ですか、ではないなどと、ごもつともなお説ばかりだった。礼式でやってなかったからと、部屋の入退室の動作、書類の受取の手付きや動作など反復して指導を受けた。エレベルター乗りのエチケット、施主側の人との挨拶の仕方、上司や同僚同士の挨拶の励行など、巴係長の講義はすんなりと頭の中に吸い込まれた。小休憩の後、いよいよ最後の『警備員の使命と心構え』の講義だった。『この講義は管理職の人がやるべきことよ。本当はカリキュラムに記載の通り神田課長の番なのですわ。』と彼女は前置きした。大一郎

は、女狂いのカラオケ狂い、酔いどれ課長のやるべきことなのか、と可笑しいような、腸が悶え蠢くように腹立たしいような、何ともミスマツチな哀れみも交じった複雑な心境になっただが、ともかくも最後の授業になるので神妙な顔をして講義に入るのを待った。

「信頼される警備員であること：、人権を尊重して職務に当たること：、勤務規律、警備指令書を厳守すること：、服務は厳正であること：、心身をよく鍛錬すること：、機敏な動作で行動すること：」気がついたら、彼女はただテキストに書いてあることをゆっくりと読んでいただけだった。

「鉄甲さんも眠そうですね。今のところを読んで下さい！」と同じところの朗読を命じられた。大学を出たばかりなのに小学生みたいな真似をさせるなと腹は立ったが、渋々声に出して文字を読み上げた。今は大学卒といつても、ろくに漢字を読めない人間が多いのだから仕方ないと思った。

「事務の方から時間を下さいって言われているから、早めに切り上げますわ。最後に大切なことを一つだけ教えておきます。ハイソリッヒの法則って聞いてないでしょ。一つの大きな事故が発生の裏には、日常から見逃しているか、面倒だからと分かって無視しているマニユアル違反が三十はあり、更にその陰には三百のイレギュラーが存在しているという統計上の事実を忘れないで、明日からしっかかり仕事をして下さい。」と最後に講師らしいしっかかりした口調で締め括った。大一郎が、この講義の初日に偶々見てしまった彼女と神田課長の淫靡な接吻の光景を忘却させるほど、この瞬間だけ巴三智子は、ティアラの髪飾りをしたような貴婦人の絵のように気高く清く輝いて見えた。あっけなく四時前に講義は済んだ。例の若い事務員が制服一式を持って入室して試着してくれと言う。巴係長は、「頑張ってね。」とだけ言い残して部屋を出て行った。制服はピツタリと出来上がっていた。試用期

間中だけの暫定のネームプレートを制服の胸に止めた。鏡で制服姿の自分に見惚れていたに、自然に勇気と責任感が湧いて来た。とにかく札幌での出鱈目な警備員教育に較べたら、正確な法定時間数の実施はともかく、カリキュラムだけはきちんと履修しており、彼の全身に自信がみなぎっていた。帰る前に事務員に案内され研修終了の挨拶を支社の警備管理部長にした。部長は何か忙（せわ）しそうに電算機のキーを叩きながら、細かい数字を表に書き込んでいたが、手を休めて大一郎を見上げると「若手だから期待しているよ。」と微笑を見せた。渉外担当も兼ねた指導教育課長は、越前屋支社長と一緒に警備業協会の会合に出席し戻って来ないとのことだった。階下の大阪支店にも研修終了の挨拶に行かされたが、支店長は営業で外出中であつた。すでに巴係長の姿もなく、ビル管理部員達が背の高い鉄のお面を付けたような大一郎の顔に、何か奇異なものでも見るかのように一斉に不躰な視

線を浴びせた。彼はその視線を背中に感じなが
ら、支店のドアを開け支社に戻ると帰路に
ついた。神田課長は明朝P大学の守衛所で待
っているそうだった。課長に渡す封筒に入っ
た『警備員派遣届』を事務員から預かると西
日本支社を後にした。今日は寮に着いたらす
ぐにシャワーを浴びて寝ようと思った。
二十六電灯も消せない警備員
翌朝、指示された通り七時半前に堺市郊外
のP大学に着いた。まだ早朝なのに葛城山を
主峰とする和泉山脈の上には、真つ青な夏空
が広がっていた。大一郎は季節がすっかり春
から夏に移ってしまったのを実感した。守衛
所に入ると、すでに奇態な顔をした神田課長
がいた。
「鉄、あの晩マンションの階段で転んで、こ
んな顔になっちゃったよ。」と自嘲した。課長
は右頬に赤く擦り傷の痕があり、おでこには
絆創膏がまるで×印に貼られて色男台無し
滑稽な顔になっていた。大一郎は課長が転ん

だ真相を知っているの、笑い飛ばす訳にいかず、「大変ご馳走になりました。大変でございました。」と何も知らん振りをし、腹の底で笑いを必死に堪えて殊勝に挨拶をした。巴三智子の部屋のドアを間違えて開けようとしたと聞いたが、課長の深層的な助平心がおのずと彼女の部屋を訪れさせた、と大一郎が思っても邪推ではないだろう。更衣室で制服・白帯姿に着替えて来るように岡本隊長に言われた。門番として詰めるのはいわゆるロートルの高齢警備員が多く、シルバー人材センターから紹介されて来たパート勤務の警備員がほとんどだった。彼らはシフトで大学本館地下にある中央監視室の受付窓口にも勤務するそうだった。後で設備の所長へ挨拶に行くとのことであるから、礼式に則りきちんと敬礼するようには言われた。隊長が朝礼で皆に大一郎を紹介した。こちらは社長の親戚の鉄甲君だ。ただ一人

の若手だから仲良くしてやってくれ。鉄甲君、
もここにいるのは皆人生の達人ばかりだから、
何でも遠慮なく相談してくれ。」と隊長はいつ
の間にも勘違いしたのか、大一郎は恐れ多くも
東京本社社長の親類縁者になつていた。神
田課長はそのことを知つてか知らずか黙つて
いるので、どうでも良くなつて大一郎も知ら
ぬ顔の半兵衛を決め込んだ。皆が勝手に勘違
いしてくれるなら、それなりにメリットがあ
るだろう。誰かがしつこく突っ込んで来た
ら、そんなじゃないと曖昧に否定すれば済
む訳だし、虚偽を貫き通す気はサラサラなか
つた。皆が、彼をすっかり社長の縁者と勘違
いしてしまつたので、大一郎は特段に大事に
された。弁当の注文とか正門近辺の清掃など
の雑用を彼に言いつける者はいなく、ニコニ
コと愛嬌たつぷりに接してくれた。札幌の病
院での冷ややかで底意地の悪い対応とは、天
と地ほどの差があるように有頂天になり幸せ
を覚えた。出入管理は簡単だった。学生証や

大学職員証をチラッと確認して通せば良いのである。自動車の内場も大学当局があら
かじめ発給した通行証の提示を確認すれば良
かった。それらのない者には『出入管理簿』
に所要事項を記載してもらい、通行許可証を
交付し、帰りに回収すればよいだけのことで
ある。新任警備員教育の『出入管理』そのま
まの勤務をすれば良かった。これまで悪戯で
「爆弾を仕掛けた。」とかの脅迫電話は何度か
あったそうであるが、警察に通報して警察官
と一緒に館内や構内を案内して廻れば済んだ
そうである。体育祭や文化祭の開放期間はノ
ーチェックだから、無用の者が紛れ込まない
ように目を光らせるそうである。一番困るの
は、行事の打ち上げで飲酒した学生が酔っ払
って、屋内消火栓の火災通報ボタンを押して
大騒ぎしたこともある。そうで、事前に大学当
局や主催の学生自治会執行部との警備打合せ
会議を通じて釘を刺したり、当日も巡回を密
にしておいて警備員の姿を多く見せ悪戯の抑止効果

を 図 る の で 、 一 年 で 一 番 忙 し い 時 期 に な る そ
う で あ る 。 『 不 審 者 ・ 不 審 物 対 策 』 の 講 義 を し
て く れ た 巴 係 長 の 清 楚 な 姿 を 想 い 浮 か べ た 。
彼 女 と 神 田 課 長 の 関 係 は ど ん な 具 合 な の だ ろ
う か 。 案 外 課 長 は 彼 女 に 適 当 に あ し ら わ れ 、
精 々 浮 気 の 真 似 事 く ら い で 、 全 く 本 気 の 相 手
に さ れ て い な い よ う に 大 一 郎 は 思 っ た 。 巴 係
長 の キ ッ パ リ と し た 顔 の 輪 郭 に は 、 そ の よ う
に 信 じ さ せ る 、 い わ ば 強 い 顔 力 が 感 じ ら れ た 。
年 配 の 警 備 員 達 は 、 若 く て 大 学 卒 で 社 長 の 縁
者 と 伝 え ら れ た 大 一 郎 に 、 遠 慮 が ち に 声 を か
け た 。 彼 は す っ か り 良 い 気 分 の ま ま 初 日 の 勤
務 を 終 え 、 二 日 目 の 門 番 勤 務 に な っ た 。 皆 、
親 切 だ っ た が 何 と な く よ そ よ そ し か っ た 。 そ
の 中 で 、 警 備 員 に し て は 異 色 の 京 都 大 学 卒 の
学 歴 の あ る 浜 山 警 備 員 だ け は 、 親 身 に 雑 談 を
し て く れ た 。 定 年 ま で は 大 手 商 社 で 商 品 マー
ケ ティ ン グ の 業 務 に 就 い て い た と 語 っ た 。 現
役 中 は ず っ と 関 西 を 離 れ て 仕 事 を し て い た そ
う で 、 綺 麗 な 標 準 語 で 話 し 掛 け て く れ た 。

「鉄甲さん、知っていると思うけど、堺はその昔自由貿易都市で栄え、鉄砲鍛冶も大勢いただろう。あなたの珍しい苗字も鉄砲に関連している気がするなあ。」

「そうですか。先祖は『あかかぶと』と名乗っていたとも聞いています。」

「そうか、「あか」なら銅かも知れないね。銅は赤金とも言い、銅月代（あかがねさかやき）

とって、髪の手剃り跡が立派なことをさす言葉もあるから、やっぱ甲に関係しているよ。」と博学振りを披露したが、大一郎には意味がよく分からず、苦笑ではぐらかすしかなかった。それにしても、この先輩は若輩の大一郎を「さん付け」で呼ぶなんて、随分丁寧な人だと感心させられた。

「僕は生まれも育ちも堺なので、定年後はここに帰って来たのだよ。昔馴染からは何で警備員やってるのかって顔をされるけど、学生のさんの顔を見たり挨拶をし合って、毎日楽しいよ。旧帝大系の大学卒が警備員をやっている

たら可笑しいのかねえ。そういう職業の貴賤意識こそ滑稽千萬なことだよ。特に定年後なんだから、好きなようにしたっていいのさ。」と微笑む先輩の目の色にも侘しさは宿っていらるようだった。

「僕のご先祖が、堺に由縁があるかも知れませんが、ね。」と大一郎は親しげにしてくれる先輩の侘しさが心の琴線に触れたように慰めの言葉を返した。

「堺と言えば、千利休だよ。鉄甲さんは、いつまでもここで仕事するのではないだろうから、思い立ったら休みの日に利休さんの事跡を見物したり、市の図書館にはごまんと研究書があるから勉強してみなさい。利休さんの和敬静寂の教え位は覚えていた方が良くと思いますよ。」

「不調法で初めて聞く言葉です。」と大一郎は恭しく恐れ入った。

「何事も平和の和の心が大切だろう。人を敬う敬の心があれば、あらゆる差別の心も起き

ないよ。清とは、自分の心を綺麗に保ち、寂
とは、何だろう。茶道の侘び寂びを超えた死
ぬことでも平穩に迎え入れ、泰然と生きる心
境だろうかね。」と浜山さんは仏様のように悟
ったような顔に見えた。
「でも、利休さんの教えで、警備に役に立つ
ことってないでしょう？」
「と　　ころがあるんだよ。『茶の七則』の中に、
降らずとも雨の用意とか刻限は早めに、とあ
るんだ。何事も先を予測し手を打っておくな
んて正に危機管理で警備の極意だろう。人間
はミスを犯すものという前提こそが大切なの
だよ。時間にきちんとするなんて規律や礼式
を重んじる警備員の常識じゃないかね。」と利
口なことを言う。浜山さんこそ警備員の指導
者であるべき人で、助平で酔いどれの神田課
長の無様さが情けなく思えた。講義時間によ
って学生の出入りには大波小波があつた。彼
らの服装の薄着が夏休みの近いことを示して
いた。

「女子大生の方に冷え性が大勢いて、冷房が肌寒いと学校職員に苦情をいう者もいるのだよ。そういう学生には、何か羽織るものを持参するようには学校側から指導してもらっている」と所長が言っていたね。」

「明日は、先輩と中央監視室に入ることになった。聞いていますよ。」と大一郎はシフトを口にした。

「そうだね。中央監視と言ったって、防災センターを兼ねているからね。警備は窓口で有事に備えて待機し、あとやることは深夜の巡回しかないよ。色々な防犯、防災、身障者トイレ、設備機器の異常警報があつたら、所長の指揮で警備員だけが駆けつけたり、設備員と一緒にだったり色々だよ。」

「そんなに警報って鳴るのですか？」と大一郎は札幌の病院の防災センター勤務を思い出した。

「警報はしょっちゅうと言っているくらいさ。でも例えば清掃員が掃除で防火戸を開け閉めする時に鳴るとか、あらかじめ分かっている

ことがほとんどだよ。今年の五月にあわてたのが、業者が殺虫剤を焚いた時、煙センサーが感知して誤報のサイレンが構内に鳴り響いたことだね。前日の午後に業者はクスリを焚くと電話に出た警備員に通知していたからね。

それを聞いた者が日誌で翌日の勤務員に申し送りさえしておけば、あらかじめ防災盤のその区域の地区ベルを停止しておいて、火事騒ぎにならなかったね。本当は煙感（煙センサー）をビニールで覆っておいたら一番良かっただね。とにかく日曜日だったけど講義室を船舶振興財団に貸していて、小型船舶操縦の学科テスト中だったから、済みませんでは済まなかったな。支店長が始末書を書き、その警備員が配置換えされて一件落着かな。もちろん再発防止のマニュアルも作成されたけど、もう日にちが幾分経って来たから喉元過ぎれば何とやらで、警備は誰も気にしている風はないよ。」

「単なる連絡ミスですか。」と新任教育の『報

告連絡』の講義を思い出しながら、大一郎は緊張を覚えた。これまで派遣されて行っただけで数々の事故のトラブルに巻き込まれた思いでいっぱいの大一郎の胸に一抹の不安が過ぎった。

防災センターを兼ねた中央監視室の朝礼は八時に始まった。この日の設備員の当直は二人、当務の警備員は浜山先輩と大一郎で計四人が泊まりこむ体制になっていた。他に日勤の設備員が三人詰めていた。明番の設備員・警備員はそれぞれの持ち場について話しを聞いていた。海上自衛隊のOBという相良所長を中心、中心に部屋の真ん中に適当に椅子を持ち寄つて座った。所長は小柄な人だったが陰では『チビ子ギャング』と仇名で呼ばれていた。え、あの張った将棋の駒みたいな顔が特徴で、細かいことに神経質でうるさいという評判を耳にしていた。一度噛み付いたらスッポンみたい雷が落ちても離さない執念深さもあるそうだった。朝礼の内容は、大学構内の電気設

備の不具合やら給排水管のメンテナンスの進捗状況とか難しい専門用語ばかりで大一郎にはさっぱり理解できない説明ばかりだった。本日の設備業者の来訪と作業工程の話が済むと、最後に大一郎は新任警備員だと紹介された。お前さん、でつけえなあ。脚立いらすじゃないか。蛍光灯の取替え、手伝ってくれよな。」

「溶接のお面もいらねえなあ。」

「鉄甲って、鉄砲武者みてえだだなあ。落ち武者になるなよ。」

設備員から口々に冷やかされ爆笑が起きた。相良所長が、朝から騒がしいぞ、と一喝したので室内にやっと静粛が戻った。静粛が戻ったというより、色んな機器の作動音だけになった。低い地鳴りのような音をベースに、それぞれの機器が勝手に色んな音を突如立てたり、大一郎はその度に何事が起きたのかと緊張が走った。浜山先輩は警備員の定位置の窓口の力

ウンターに行き、大一郎だけがチビツ子所長のそばに残された。俺もそう「あんたも東京の生まれだったな。俺もそうだよ。定年後に本社に採用されたが、大阪支店で総合所長をやってくれないかと頼まれて引き受けたんだよ。仕事はともかく関西弁は苦手だよ。」と少し頬を緩めて話し続けた。

「この学校に警備員は二十数人いるが、本当に警備が出来て頼りになるのは浜山さんだけだから、きっちり仕事を教えてもらえよ。とにかく『らしくしてくれ』と言いたい。警備員は警備員らしくするだけで十分なんだ。ところが、この門番達は、防災機器の仕組みも知らないのばかりだ。そんなのは警備員じゃないんだよ。単なる門番、守衛じゃ警備業法が泣くぞ。えっ、そうは思わないかね。ここにシフトで色んなお方が変わりばんこに詰めるけど使い物にならないよ。困ってしまい、支店長に相談したばかりなんだ。俺は総合所長だから、警備も含めて管理責任があるから

な。やつとこさ、この春の異動から三ヶ月が
過ぎて仕事にも慣れて来たけど、まだ五月の
警備の『殺虫剤誤発報事件』のせいで、毎朝
報告で事務局長のところへ顔を出すのも億劫
なのだぞ。それだけじゃないんだぞ。」と怖い
顔で睨まれた。
「他に何があったのですか？」と大一郎は声
が掠れた。
「何があったもへチマもあるかい。隊長は何
も言っていないのかね。困ったもんだ。警備の
アホロートルどもが雁首揃えて当務していた
んだよ。この理事長さんが明け方ゴルフ用
具を取りに寄ったのだよ。外から見えたのだ
なあ。大会議室の電灯が付けっ放しになって
いるのを見つけたのだ。その時間起きて
いるのは警備だけだから、そのアホロートル
に会議室の電気をすぐ消すように注意したの
だ。そうしたら、シャアシャアと電気の消し
方を教わってないから、消し方を知らない、
と口答えをしたんだ。後で事務局長から巡回

で電気の消し忘れに気が付いていながら、な
ぜ一晩中電気をつけっぱなしで無駄使いをし
た、と頭から湯気を立てて怒鳴られたよ。」
「結末はどうなったのですか？」「大一郎自身
も失敗を連ねて北海道から大阪に来た経緯が
あり他人事ではなかった。
「口答えした当事者は、支店長に言つてクビ
にしてももらったよ、それと電気の消し方とい
うか、スイッチの位置確認と点灯と消灯の実
技指導もしたけど、どいつもこいつも物覚え
が芳しくなく馬鹿馬鹿しい限りで、とうとう
設備が灯りの点灯も消灯もする羽目になつて
しまったぞ。あんたには、若いし大卒だし社
長の縁者だから期待しているぞ。」と相良所長
まで勘違いしているのは閉口したが、今更
それを否定するのも変になり放つておいた。
「とにかく、ここはローカルシステムといつ
て、機械警備のセンサーも含めて警報はすべ
てこの部屋に入つて来るのだ。それに真っ先
に対応するのが警備の仕事だからな。ここに

一日いて、立ったり座ったりフラフラ動き回
っているだけで金になるなんて考える、不埒
な奴になるなよ。」と念を押され、やつと所長
から解放された。
警備の窓口では、何か警報でも発報しない
限り昼間の出番はなく待機の態勢であつた。
十一時になつたら浜山さんが設備員に断つて
窓口を任せて二人で昼食に出た。
「食堂を学生が来る前に利用するのさ。お昼
近くなると混雑するからね。ここは安いし学
生時代を思い出して懐かしいだろう。」
言われてみると、ついこの前まで大一郎も学
食のお世話になつた身であつたが、何だか遠
い過去のことのようにも思えた。学生食堂は
三階にあり、キャンパスのグラウンドの彼方
の森の緑を借景にして、なかなかの良い眺め
であつた。
「夜は、巡回であの森の手前辺りを歩き回る
からな。二人で廻るから大丈夫だよ。」と大一
郎と同じようにハンバーグ定食を口に運びな

がら先輩は静かな微笑みを見せた。札幌の病院の夜勤で惨々なめにあって来た大一郎は、夜勤と聞いただけでトラウマを覚える程だった。
「先輩は最初からここに配置されたのですか？」
「いいや、最初は淀川河口のテナントビルだったね。凄い目にあったよ。こんな話をしたら折角の飯がまなくなるけどね。」と言いよどんだ。大一郎は興味深々という顔をして話の続きを待った。
「いやね、営業が獲得した新規管理物件のビルでね。一緒に配置で行った相棒が新任教育の時から顔色がどす黒いし変だとは思っている。たんだ。一度だけ顔の黒さを尋ねたら、家庭菜園の草むしりで日焼けしたと誤魔化されたよ。そのビルに配属されても朝っぱらから酒臭いし、昼過ぎにも五分位抜け出すことが多いいから、そつと後をつけたら自販機でワンカップの清酒をキュツとやっていたんだよ。ア

ル中だったんだね。」

「アル中は警備員になれないでしょう？ 僕も診断書を出しましたよ。」

「医者もいい加減なんだ。ろくに調べもしないで三千円から五千円位とか色々だけど、ペラッと一枚紙切れを書くだけで丸儲けだからね。例えば二ヶ月位経っていたね、夜勤で交代に起番をしたり巡回をしていたんだ。朝方の四時に起番交代で起こしに行ったら様子が変なんだ。」と先輩は話に夢中になり、定食のハンバーグにはほとんど手をつけていなかった。た。大一郎は、ちゃっかり食事を平らげ、学生姿もぼつぼつ目立つようになっていた。「名前を呼んだって返事もないし、試しに揺すつてもピクリとも反応がなかったの、怖くなつて設備の人達を起こしに行ったよ。誰かが毛布をはいだら、ベッドが真っ赤に血だらけなんだ。下血だったんだけど、万が一にも殺人事件だったら大変だから、すぐに警察を呼んだら検視をすると運んで行ったよ。後

は課長から聞いたことだけど、行政解剖され
慢性肝炎で、直接の死因は心不全という病名
で一件落着いたことがあったよ。」と語ると大
急ぎでハンバーグを口に運び始めた。大一郎
は大きな会社に入っても、警備員の質は大し
て変わらない、と複雑な思いに身をつまされ
た。中央監視室に戻りながら、今夜の勤務態
勢について先輩に尋ねた。
「夜の十時半頃に門番の泊まりの者から、夜
間部の学生が全部出たとの連絡が来るよ。そ
うしたら、後で操作を教えるけど機械警備を
セットし、構内への侵入をシャットアウトし
てしまうよ。その時点で教職員の残業者名簿
をもらうから、それ以後に帰宅する者には個
別にリモコンで通用口を解除してやるのさ。
簡単な操作だけど、後で教えてやるから心配
はいらない。」今夜は浜山先輩が自分でその対
応をすると言う。大一郎は十時になつたら仮
眠してよいと気軽に言われて、すっかり恐縮
してしまった。

「二人で深夜巡回があると聞いていますが
：」と大一郎は不安そうに聞いた。
「二時になったら起こすから一緒にパトロー
ルしよう。なあに、三十分もあれば終わるよ。
外周のフェンスが悪戯されてないかチェック
して巡る程度だよ。ただ、草むらを歩くから
マムシに気を付けるだけだ。長靴はあるよ
な。」
「はい、特寸の特大を買って来ました。」
「大阪は大会だから何でもあるだろう！」
「それが靴屋にはなくて、釣具屋にありまし
た。」と大一郎は可笑しそうに言った。
「そうかね。でも見つかって良かった。ここ
は何しろ最新鋭の機械警備がかかっているか
ら、塀を乗り越えて不法侵入しようとする者
がいたら非常ベルが鳴ったり、いきなりサー
チライトが煌々と照らし出して賊も退散する
さ。防犯カメラにはその映像が残るから、こ
の学校は堅固な城砦みたいに守られている
よ。」

「先輩はそれから仮眠ですか？」

「そうさ、二時半過ぎから六時半まで寝せておくれ。七時になったら機械警備を解除するだけさ。ここは照明や空調など何から何までコンピュータを使ってリモートコントロールなんだから、設備員が何度も機器に不具合がないか設備巡回して、ついでに火気点検もしてくるから警備は楽なんだよ。この五月までは照明の点灯・消灯をする館内巡回があったけど、色々あつてそれも今は設備員の仕事になったよ。」

「ええ、朝一番に所長から電気の消し方も知らない警備員がいた、と叱られました。警備は館内巡回しないそうですね。」

「今はそうなんだ。警備は深夜の屋外巡回だけとは、考えようによっては情けないことだね。警備の存在価値の問題だよ。」と浜山先輩は渋面を作った。

「施錠・開錠もリモコン操作できるのですね。」

「そうだよ。鍵管理もほとんど機械ですから、本物の鍵はキーボックスに眠っているよ。鍵管理もしない警備なんだから、そのうちいらないと言われそうだな。」と浜山先輩は、今度は顔を崩して笑った。しかし、何か異常警報の発報があった場合に、第一確認の責任者は警備員だから決して油断をしてはいけないと、すぐに先輩は顔を引き締めた。やっぱりマンパワーの警備員は絶対に必要なのだ、と大一郎は妙に安心した。二十七大活躍のガス漏れ大騒動午後八時四十分を回った頃だった。その日は二部（夜間部）の学生五百人程度が講義を受けていた。ピーと甲高い警報音がした。居合わせた設備員二人も防災盤の前に集まった。大一郎は遠慮して後ろに立ったが、背が高いから十分に表示が見えた。『ガス漏れ・B1F倉庫・検知器番号・6273』と読めた。「このフロアじゃないか！警備さん、一つ走り頼むよ。」と当直責任者のA設備員が主音響

だけを止めて指図した。浜山先輩が鍵箱を開けマスターキーの鎖を腰のベルトに結着すると、大一郎は無線機を持たされて現場の地下一階の倉庫へと走った。先輩が現場の倉庫の扉をそっと開けても、ガスの臭いは何もしない。大一郎から無線機を引っ手繰ると、先輩は落ち着いた声で「地下一階倉庫異常なし！」と連絡した。中央監視室に戻ると、「又誤報かね。新しい建物は一年か二年のうちは誤報だらけで苦勞するんや。」とB設備員が呟いた。A設備員は、「それもそうだな。うるさいから止めよう。」と館内の一階と地下に鳴動している地区ベルを止めた。一階の講義室でも講義は行われていたから、あまり長く鳴らすと苦情が来るからであつた。

「寢酒のつまみにウイナーのキムチ炒めでも作ろうぜ。」とB設備員は部屋の隅の冷蔵庫からソーセージの袋を取り出した。正門の警備員から副受信盤にガス漏れの警報が出ていると内線電話があつたが、何でもない誤報だ

よ、と彼は電話を切るとタマネギとキムチも取り出した。

「いや、念には念を入れ、地下一階の部屋は全部開けてみましょうよ。」と浜山先輩は主張した。彼の言葉は柔和だったが、顔付は厳しいものになっていた。

「ああ、そうしてくれるかね。」とA設備員は、誤報の再確認でもするようにおざなりな言い方だった。大一郎達は、片っ端から地下一階の部屋を開けて巡ったが、ガス洩れの部屋はなかった。戻った。「誤報だよ。心配したら体が持たないよ。」と奥のガス台の方からB設備員の声がして、タマネギとソーセージとキムチを炒める刺激の強い匂いが漂って来た。

納得のいかない顔をした浜山先輩は『警戒区域一覧図』を取り出して、地下一階のページを開き、大一郎にも、検知器番号の『6273』を捜すように命じた。地下一階の図面に該当する検知器番号はなく、念のため先輩が地下二階をめぐったら、大一郎の眼にその番

号が飛び込んで来た。
「先輩、ここにあります。ガスエンジン室と書いてあります。」と大一郎は叫んだ。
「大変だ。おい、設備さん！何やってるんだ。ガスエンジン室だ。ここの真下じゃないか！」
と浜山さんの大声は怒気を帯びていた。
「俺が行ってくる」
ガスエンジン室の個別キーを常時携帯している当直責任者のAが、顔色を変えて中央監視室と直接つながっている階段を転げるように降りて行った。この大学の設備では、ガスタービン発電と商業電気電源を併用していた。よくあるんだ。ポケエツとしたオペレーターが間違って入力をすると、こんなことが起こるんだ。阿呆が寝ぼけてコンピュターをいじったり、余計な考え事をして集中力を欠くから間違った場所が表示されたのだ。しかし、こんなことは定期の防災設備点検をしつかりやっていたいれば、とつくに入力ミスが見つかっていたはずだ。」と先輩は憤懣遣り方ない

険しい表情だった。
「大変だ！ガスエンジン室でガス漏れだ。」A
は一気に階段を駆け上がって胸を押さえ床に
倒れこみ、何度もゴホゴホと咳き込んだ。眼
からは涙をポロポロこぼしている。Bも血相
を変えて飛んできた。
「中には入れない。ドアは閉めて来た。早く
ガス会社を呼べ！」とAは苦しそうな息づか
いで顔を上げ辛うじて言うのと、又床に伏せつ
て咳き込んだ。Bがガス営業所に電話したら
留守番電話に切り替わっていた。無機質のコ
ンピューター音声で本日の営業は終了しまし
た。御用のある方は：と流れるしろものであ
る。
「何が明日の朝八時半に電話しろだ。アホち
やうか、学校がぶっ飛んでしまうぞ。」と受話
器をガチャンと乱暴に切ると、書棚から電話
帳を取り出し、タウンページをめくり始めた。
浜山警備員は、呆れたという顔をして、その
電話を取ると慣れた様子で一一九番へガス漏

れ事故の緊急通報をした。
「Bさん、消防からガス会社にホットライン
で連絡してもらいましたよ。すぐこちらに向
かうそうです。」
「その手があったね。警備さん、それじゃガ
スの緊急遮断をしてくれ！」とBは今更思
ついたように言った。浜山先輩は部屋をキョ
ロキョロと見渡した。大一郎は札幌の病院の
防災センターを思い描いた。同じように部屋
の隅にガスの緊急遮断弁の装置があるのを見
つけた。黙ってそこへ駆けつけると、札幌の
病院の大口班長の説明を思い出しながら、見
様見真似で必死に二段操作のハンドルを扱い
確かな手応えを覚えた。ガス遮断済みの信号
が点滅しその警報が鳴った。
「やった、止まったぞ。ガス遮断の発報だ。
これで大丈夫だ。換気扇がガスを外へ出して
しまう。後は消防とガス会社に任せよう。警
備さんは玄関に出て、消防を出迎えてくれな
いか。」やっとA設備員の顔に生氣が戻った。

もう夏休み前で九時過ぎの講義は休講にな
っていったので、何も知らない学生達がぞろぞ
ろと校門の方向へと歩いていった。遠くで聞こ
えていたサイレンの音が次第に大きくなり、
派手に赤色灯を回しけたたましいサイレン音
をたてて、消防車が正門から構内に入って来
たので、学生達の中には何事が起きたのかと
顔色を変えて寄って来て尋ねる者もいた。ほ
ぼ同時にガス会社の車もサイレン音と赤いラ
ンプを回しながら到着した。浜山先輩は、消
防署員とガス会社の調査員に、大量のガス漏
れがあり、すでに元栓を遮断した旨を説明し
ながら彼等を中央監視室へと案内した。
「警備さんは本社の夜間センターに状況を一
報し、相良所長も呼び出してくれないか。そ
れから緊急連絡網で学校の事務局長と次長に
事故の報告を頼むよ。俺達は消防さんとガス
会社の調査に立ち会うから後は任せたよ。」と
AはBと一緒に臨場してきた消防隊員とガス
会社の調査員を連れてガスインジン室へと降

りて行った。
「何が今から本社や所長へ報告だ。手前らは
今まで何をやっていたのか。」と先輩は忌々し
そうに呟いたが、大一郎に向かつて、「今夜は
徹夜になるぞ。」と言いながら机の中から緊急
連絡先一覧表を取り出した。大一郎は、新任
教育で受けた『報告連絡』の實務に早々に直
面したと神妙な感想を覚えながら手伝おうと
したが、先輩は自分がやるからそばで見習っ
ているだけでよいと制した。彼は、改めて警
備とは給料は安いが責任は重く、体力のいる
仕事だと自覚した。小一時間も経たないうち
に、チビツ子ギャングの相良所長も大学の事
務局長も次長も相ついでやって来た。三人と
も地下二階のガスエンジン室に向かつて降り
て行った。やがて事務局長と所長の二人が戻
って来ると、渋い顔でヒソヒソと相談を始め
た。何でもガスの復旧は明日の午後になる見
通しとのことで、当面学生食堂の厨房が使え
ないから、朝食用のパンを製パン工場と緊急

に交渉し確保するようだった。電気の配線を切り替えて、商業電気でスープレットは温めることが出来るようにする、とも聞こえた。昼食はケータリングで乗り切るか、冷凍食品を仕入れての解凍でやるか、長いこと二人は鳩首会談をしていた。

「警備さんは交代で休憩しながらの起番で良いよ。」と相良所長がぶっきら棒に言ったら、浜山先輩は「その通りにさせて頂きますが、ガスを止めたのは鉄甲さんのお陰ですよ。爆発の危険もあったのでしよう。」と少し憤慨した口調で言い返した。

「浜山さん、分かっていきますよ。」と所長は苦虫を噛み潰したような表情を少し和めると、大一郎の所へ歩み寄って、「有り難う。これから調べることにがいっぱいあるから、後で改めて御礼を言うよ。」と大一郎生来の鉄の皮膚のようにな固そうな顔を見上げて握手をしてくれたい。チビツ子ギャングにも優しい面があると思っただけ。

大 一 郎 は 言 わ れ た よ う に 、 仮 眠 室 で 取 り あ
え ず 横 に な っ た が 、 気 が の ぼ せ て 眠 れ る は ず
も な く 、 二 時 近 く ま で 待 つ と 制 服 を 羽 織 っ て
浜 山 先 輩 の も と へ 行 っ た 。
「 興 奮 で 眠 れ な か っ た の か ？ 今 晩 の 巡 回 は や
め と こ う 。 消 防 さ ん は 調 査 が 済 ん で 引 き 揚 げ
た け ど 、 ガ ス 会 社 は 徹 夜 に な る そ う だ 。 設 備
は ガ ス エ ン ジ ン 室 の こ と で 戻 っ て 来 な い か ら
こ こ を 明 け ら れ な い よ 。 」 と 先 輩 は 悟 っ た よ う
に 言 う 。
「 僕 が 新 米 で す み ま せ ん 。 」 と 大 一 郎 は 申 し 訳
な さ で 胸 が 詰 ま っ た 。
「 そ ん な こ と よ り 、 壁 の 暦 を め く っ て く れ な
い か 。 午 前 零 時 き っ か り に め く る の だ が 、 う
っ か り し た よ 。 」 と 大 一 郎 に 日 暦 を 更 新 す る よ
う 指 図 し た 。 こ の 人 は 本 当 に 几 帳 面 な 人 だ と
舌 を 巻 い た 。
「 先 輩 、 寝 な く て 大 丈 夫 で す か 。 」 と 大 一 郎 は 、
も う 若 く は な い 浜 山 さ ん を 心 配 し た 。
「 う ー ん 、 全 然 大 丈 夫 じ ゃ な い け ど 、 あ ん た

一人をここに残して寝られる状況じゃないだろう。ちよつと行儀が悪いけど座ったまま目を閉じさせてもらうから、何かあったらすぐ起こしてくれよ。」と前傾姿勢で目を瞑った。時々事務局長が頭髪をせわしげにかきむししながら入って来ては、相良所長に何か質問した。所長はデスクに二、三冊の設計図面類を几帳面に広げ、平家蟹みたいなしかめっ面で何やらしきりに調べては、A設備員やB設備員を呼びつけ、現場を調べさせていた。ガス会社の調査員も一晩中出たり入ったりして、どこか外部とせわしく電話連絡をしているうちに、夏の夜はやがて底まで深まってしまい、大一郎はまんじりともせず朝を迎えた。B設備員は、警備は座っているだけ、楽でいいなあ、と皮肉に呟いて早朝の館内巡回に出かけた。

「支店長からの電話が目覚し時計になったよ。夏はまさに短夜だなあ。」と朝の七時半に神田課長が大学に直行して来た。

「警備にはまだよく知らされていないのですけど、重大なガス設備の欠陥があったようです。八時の朝礼で所長が説明することになっていきます。何ととっても鉄甲さんの活躍がなかったら、ガス爆発で学校が吹っ飛んでしまっていたのですよ。なにしろ、この中央監視室の真下のことですからね、我々もバラバラ死体になってしまふところでした。」と浜山先輩は呑気な顔の課長を戒めるように言った。「いやあ、ご苦労様だねえ。朝っぱらから暑くてたまないね。」

課長に少し遅れて大阪支店のビル管理部長が、ハンカチを額の汗に当てながら、太った体軀を運ぶようにやって来た。朝方になって、ガス会社からも一人、二人と増員の職員が訪れて来ていた。相良所長は、机上いつぱいに散らかったメモの紙片を整理しながら、部長に会釈すると、後で説明する旨を伝えレポートの下書きに余念がなかった。

八時の定刻に朝礼が始められた。いつもと

違い支店ビル管理部長も警備課長も立ち会っている。すっかり赤眼に充血した所長は、明番の者にも集合するよう命じた。人に命令する時は、本当にチビツ子ギャングのボスの雰囲気があった。うして無事にいるけど、最悪だったら学校が大爆発で木っ端微塵に吹き飛ぶ危機一髪の状態だった。」

「そりゃ、幾らなんでも大袈裟ですよ。所長！」と今日の当直のC設備員が口を挟んだ。「君は職業訓練所で一体何を勉強して来たのかね！」話の腰を折られた所長が睨みつけたので、Cはあわてて首をすくめた。再度、所長の説明が始まった。「ガス爆発があったら、ガスパ管が破壊され噴出したガスに引火し、瞬時に大火災発生の際災害となる。設備や警備で飯を食っている者には常識だろう。エッ、違うか！」と全員を一喝した所長の興奮した様子に、立会いの

部長・課長をはじめ皆の顔に緊張が走った。
「昨晚のガス漏れ時に五百人からの学生が講義を受けていたのだ。結果オーライの面はあったが、警備さんが咄嗟の機転でガスの大元を止めたので、大事に至らなかったのだ。」と所長は、コンピューターの入力ミスで防災盤の表示箇所と実際のガス漏れ箇所が全く異なっていたこと、ガス営業所が留守電になっていたので消防本部経由で連絡したこと、ガスの緊急遮断弁を遅滞なく操作したことなどをあげつらい、警備員の活躍を誉めた。
「たいしたもんだ。たまには警備もやるねえ。」とビル管理部長が警備課長の肩を軽く小突いて囁いた。そんなことは無視して所長の話は核心へと向かった。
「直接の原因は、ボイラー系ガスブロースタの安全器内にある、ゴムパッキンが亀裂破損していたことにある。だから、ガスが突然噴き出したのだ。」
「徐々に漏れ出したのじゃなくて、いきなり

大量に噴出したのだね。」と部長が確かめた。
所長は頷きながら話続けた。ガスブースタ
ーとは、低圧ガスを中圧に昇圧する装置であ
る。
「ゴムパッキンを押さえている金属部品が、
なぜか突然壊れてしまつてパッキン側に折れ
曲がり、鋭く尖がつた先っぽが突き出して、
パッキンが上下運動するたびに接触するのだ
から、当然パッキンはすぐにベリッと破れて
しまうがな。」と所長は言葉の結びを故意に関
西弁に砕けさせ、夕べから抑えていた内心の
怒りを露出させたようだ。
「そりゃ、おかしいぞ。簡単に壊れるものじ
ゃないだろう。」と部長が声を荒げた。
「そうなんですよ。ガス会社が謝りました。
これは施工当初からの欠陥器具なんです。普
通は二十年も耐久性があるのに、それがたつ
たの二年で壊れたのですから異常としか言い
様がありません。」と所長は少し落ち着いて、
部長の顔を直視して言った。

「分かった。事務局長に良く言っとこう。うちはビル管理として良くやったじゃないか。悪いのはガスの施工の方だよ。メーカーの製品ミス責任も追及できるよな。」ようやく部長の顔色に安堵感が顕われた。

「今日の午前中の早い時間に器具の取替えは終わりますので、午後には復旧の見込みです。」と所長は説明した。

「爆発の危険度はどの程度だったのですか？」と課長は真剣そうな顔で尋ねた。

「これからガス漏れの総量をガス会社とするのです。ガスエンジン室の天井では、換気扇が回って強制排気をしていますから、空気よりも軽い天然ガスは上昇して排出されるので、ガス漏れの総量は推定でしか分からないのです。ガス濃度は爆発の下限界の二百分の一あったら検知して警報を出すのです。最初は微量のガス漏れだったと思うのですが、パッキンの上下運動が続くうちに亀裂がたちまち大きく拡がり、大量のガスが一気に噴き出して、

いきなり警報を出したのでしょう。発報から緊急遮断まで十五分位かかっています。A君がガスエンジン室の扉を開けた時には、息も出来ない程のガスが充滿していたのですから、当然、濃度は爆発下限界の五パーセントを大幅に超えており、電気火花やスパークで、いつ爆発してもおかしくない状況でした。」

「後、何分間で爆発していたとかは分かりませんか？」と更に課長は食い下がった。

「そうですね。もう十五分か二十分緊急遮断が遅かったら、爆発の危険性が高かったと

思っています。ガス会社がこれから詳しく調べますから、そのレポートを読めば色々と問題点が洗い出されるでしょう。現時点ではここまでしか言えませんね。」と所長が答えたら、ビル管理部長が青ざめて俯いた。朝礼が済んだら、警備の方は解放された。ビル管理部長と相良所長は、大学事務局へ報告に向かった。

課長と当務明けの警備員二人は、構内の並木道を正門詰所へと向かった。時折、夏の朝の

青葉からの木漏れ日が宝石でも光るように三人の顔を照らした。稍ではクマゼミの声が狂ったように辺りの空気を振動させていた。「浜山さん、鉄甲君、ご苦労さんでしたね。」今日はこれからぐっすり休んで下さいよ。」と課長が猫撫で声を出した。「課長、今回の最高殊勲選手は鉄甲さんですよ。」と浜山先輩は、課長に事の重大性を悟らせようとする口振りだった。「最初から設備員は誤報と決め付け、ソーセージとキムチとタマネギを炒めて酒のつまみを作っていたんですよ。」と大一郎も不満に口を尖らせた。「ほんまに鉄が怒った顔は怖いなあ。」と課長はおどけた。「課長、もし鉄甲さんの大手柄がなかったら、ガス管から火が入って学校は大火事になり、五百人からの学生がパニックって右往左往していたんですよ。怪我人や死人もようけ出てまっせ。想像できるでしょう。これは表彰も

のですよ。設備はこれまでも事なかれ主義で
隠し事ばかりしていたから心配なんですよ。」
と呑気そうな課長の様子に浜山先輩はいらつ
いたのか言葉に関西弁が交じった。
「心配無用！私から支店長にきちんと報告す
るよ。これは越前屋支社長を跳び越して東京
本社の社長表彰ものだな。社報にも掲載し、
我が社の全社員三千人に読ませてやるさ。」と
課長は自信たっぷりに言った。
「課長、鉄甲さんのようなバリバリの生え抜
き警備員が、将来の我が社の警備部門のトッ
プクラスに昇りつめるような組織づくりを頼
みますよ。課長もいずれ東京に戻る身で
すからお願いしますよ。」と浜山先輩は、なお
も大一郎を推挙した。ちよつと休憩しようと
課長が言い出し、大学のそばの喫茶店に入っ
た。課長がモーニングセットを三つオーダー
した。
「課長、眠気覚ましで有り難うございます。」
と浜山さんがようやく相好を崩して礼を言っ

た。
「浜山さんの言う通りだね。鉄よ、お前さんは大学を出ているのだから、総合職の内勤になつて内側から警備部門を見れば改善点はいつぱいあるぞ。警備職は資格が要らないといふ理由から冷遇されているようだ。これは、うちの会社だけのことじゃない。給与体系が朝三暮四になつているからさ。浜山さんみたいに聡明な人には、とつくにお見通しのことでしょう。」
「ハッハッハッ、警備員は猿ですか。木の實を朝に三つ、暮れに四つやろうと言つたら猿達が歯を剥いて怒つたので、朝に四つ、夕方に三つやつたら、おとなしくなつたなんて、言いてて妙ですよ。」と先輩は眠そうな目をこすりながら大笑いした。
「最初に結論ありきで、給与を二十万程度に設定し、辻褄合わせに警備員の正社員登用時の基本給を十万から始め、日勤、当務の変動給も調整し、現場手当、食事手当、超勤手当

なんか含めて、ちょうどその程度の金額にす
るからくりなんて、利口な人間ならすぐ見破
るだろうなあ。」
「課長、それだけじゃないですよ。うちの会
社に限らず、警備員は高齢者が多いから、ど
うしても病気がちで欠勤が多く、その間は一
動給を支払わなくて良いので、合理的といえ
ば合理的ですが、ちよつと警備員の待遇とち
やいますか。もっと会社経営に血の通った温
かい人間性が欲しいですね。」と先輩の言葉に
又関西弁が交じった。
「それはどうか。会社は慈善事業とちやう
から、欠勤分はそのポストを穴埋めした者に
支払って然るべきでしょう。警備員には警備
技能検定制度が充実して来たから、これから
はそんな常駐や交通誘導や輸送や空港保安な
どの有資格の専門の者を給与面で優遇しなけ
ればならん時代やね。」と課長もつられて関西
弁を交えて反論した。
「ちやう、ちやう、課長、わてははなから二

十万と決めてあるのが、けつたいやちゅうん
ですう。」と先輩もやや興奮したのか、丸つき
り関西弁になったので、大一郎は思わず吹き
出してしまった。
「おい、鉄よ。お前さんの笑い顔は、ガチャ
ガチャ金属の擦れ合うような音がするみたい
だなあ。笑い顔、怒り顔、泣き顔、悲しい顔、
淋しい顔なんて幾つも付け替えるお面を用意
できないから大変だなあ。」と課長も大笑いし
た。
二十八お釈迦様も知らない仏様
翌日は久しぶりの公休日だった。北海道で
稼いだ金があるとは言え、給料日は二五日だ
から、まだだいぶ間があつて派手に遊ぶこと
は出来ない。しかし、大一郎の気持ちは浮つ
いていた。五月に親元を離れて以来散々な目
にあつてばかりの気持ちだが、この度のガス
漏れ騒動の評価で、自分にも良い運がめぐつ
て来そうな気がした。ワnlームの寮に燻ぶ
つていられなかった。昼前の暑い最中だった

が、いそいそと外出した。長居陸上競技場の
ある公園の方からセミの声がしていた。ユニ
バーサルスタディオ、大阪城など行く先は何
処でも良かった。とにかく外出することが目
的で、興奮気味の気持ちに紛らわせたかった。
地下鉄御堂筋線の車内に揺られながら、自分
の懐具合を相談してみると、やはり難波で降
りて大衆食堂で昼飯を胃袋に流し込み、お笑
いの殿堂『難波グランド花月』に入った。彼
は図抜けて背が高いので、他の客に迷惑をか
けないように最後列に座った。吉本芸人伝統
の大袈裟なずっこけなど、コント、漫才、落
語に、これまでの憂さも何もかも忘れて大笑
いした。自分は生まれて以来、こんなに沢山
笑った日はないだろうと思った。人が笑うか
ら自分もつられて笑っていることも自覚でき
た。だが、劇場を出てから千日前、道頓堀、
戎橋、心斎橋筋の雑多な人波の中に揉まれる
ように身を置いてみて、今度は先程の大笑い
の反動のような遣る瀬無い孤独感に身を襲わ

れた。ここは大都市ではあるけど異郷の街の大阪であり、生まれ育った東京の街ではない。幼馴染の友人も住んでない。職場に警備員仲間はこちら出来るかも知れないか、どちらかと言えば高齢者の方が多い中高年ばかりの年齢層には違和感を覚えた。P大学警備派遣隊の浜山先輩のような仕事上の師はいても、この先、真に腹を割って話が出る同輩が現れるとは信じられなかった。神田課長のような酔いどれ上司は論外に思った。清楚な巴係長も人妻であり、高嶺の花どころか、彼女は別世界の人とは思えない。結局、自分は一人ぼっちなのである。やはり、東京へ帰りたいと里心が湧くのを禁じえなかった。しかし、一瞬の後には神田課長から誉められたことが頭を過ぎった。今回の大活躍が認められ、何としてもJ社の東京本社の内勤に栄転したい、と彼の白昼夢がどんどん膨らんでいった。警備事務でも3年やれば、『警備業務従事証明書』をもらって『警備員指導教育責任者講習』

を受けて考査に合格すれば、晴れて指導教育者になつて幹部登用へと道も拓けて行くのだ。警備業界へ身を投じたことが、花開き実を結ぶのだ。大一郎はもう一度道頓堀に戻ると、法善寺横町の水掛け不動さんに願掛けのお参りをした。ようやく、すっかり幸せな気分になり立ち返り、浪花座の近くで奮発して特大のお好み焼きを食べて寮へ帰つた。長居駅に着いたのは、夕映えにはまだ早い時間だったが、民家の生垣の夾竹桃の紅がやけに目に沁みた。すると大一郎は又もや♪いずれの日にか国に帰らん♪と柄にもなくセンチメンタルな心へと揺れ動いた。浮かれ心と感傷の心が入り混じつた、何とも複雑な心境で藤村の『椰子の実』の一節を口ずさんでいたら、どつと全身が汗まみれなことに気がついた。翌朝、大学正門勤務に就く日だった。朝礼では、年寄りの警備員達から拍手喝采をもつて迎えられた。多分、彼らには日頃、中央監視室勤務で設備員から一段低く見つめられて

いる僻みがあったのだろう。」「鉄甲君の大活躍で警備の株が上がった。」と岡本隊長が口を開いた途端、誰かが「前に警備員は設備員の指揮を受けて動け、設備員の下で働けと言われたよ。」と茶々を入れた。「そうかね。それは遺憾なことだ。それなら相良所長に厳重に申し入れておくよ。常々から支店長は、警備員と設備員はあくまでも対等の協力関係を保って、相乗的効果でより良いい物件管理をして、顧客満足を獲得するようにおっしゃっているからね。」と制して通常朝礼になった。言葉遣いは親切にしつつも、学生証や教職員証などの身分証明書類の確認はおろそかにしないように、とのワンパターンの内容だった。この正門勤務で気を使うのは、学長や理事長、それにあらかじめ通知される重要なお客様が正門を車で出入りする際の敬礼であつた。学生でも身体の不自由な者の送り迎えには、構内通行許可証が発給されていたので、車の出入りには結構気を遣つた。

そんな中で、学長らの出入りに欠礼など失礼がないように皆で気を配っていた。この日、浜山先輩は公休を取っていた。彼がいたら、先の中央監視室勤務の雑談で盛り上がったかも知れなかった。大一郎はまだ見習い中の身で、大先輩方に言われるままに、正門に立番したり詰所で座哨という見張り勤務をしていた。年令・世代のギャップのせいで話題に事欠くのか、それとも背の高い大一郎を見上げて話すのは首が疲れるせいなのか、高齡の警備員同士は無駄口を叩き合っていたが、大一郎に雑談を仕向ける者はほとんどいなかった。それでも大一郎の気分は軽かった。手柄を立てた新人に先輩達は一目置いたようで、勤務交代などを指図する口調は、例えば「大ちゃん、見張り代わってや。」などと柔らかいものであった。ここでの仕事は慣れてしまえば、退屈極まりないものに思えた。やはり、大一郎は何か会社に認められて、総合職の内勤勤務に就きたいと希望を膨らませていた。和

泉山脈の上空に夏雲が湧いていた。雲は青春の象徴のように重なり大きな積乱雲になっていった。大一郎の若い瞳は、あたかも自分の望みが叶いつつあるように、頻繁に空の遠くの方へ向けられた。夕刻近くなつて、神田課長が巡回指導でやって来た。

「鉄、暑いなあ。夕立雲でも来て一降りあつたら助かるのによ。」と額にハンカチを当てながら詰所に入り扇風機の前に立った。

「課長、お疲れ様です。」と奥のデスクの椅子から、岡本隊長は立ち上がると律儀に敬礼をした。課長がこんな遅い時間にやって来るとは直帰であり、又、堺東の飲み屋街を連れまわされるかも知れない、と大一郎に警戒心が生じた。

「隊長、参ったよ。ガス漏れ騒動は封印だよ。」課長の声に大一郎は耳を疑った。

「エッ、警備員の活躍は表彰してもらえるんでしよう。」と隊長は吃驚した顔で課長のそばに来た。

「昨日の午後、越前屋支社長を囲んで幹部会議があったんだ。支社の指導教育課長、防災担当顧問の元消防署長に、支店からはビル管理部長と私、それにこの相良所長というメンバーだった。」

「鉄甲君を表彰する話もあったでしょう。」と隊長が念を押した。

「それはあったよ。反省会という主旨でガス漏れ事故の究明結果説明と今後の対策をいかにするか。がテーマだったからねえ。」と課長は表彰の件については言葉を濁した。

「今後の対策と言ったって、設備の方がしつかりしていたら、こんな騒ぎにならなかったでしょう。設備が誤報と決め付けソーセージを炒めていたのに、警備は懸命に感知器番号からガス漏れ箇所を探し出したのですよ。それがなかったら、確実に爆発していたでしょう。相良所長からは何の情報もないですからね。」と隊長は不服そうな顔に変わった。

「そうなんだけど、ガス会社の施工ミスは、この大学を建てたうちの親会社の施工ミスでもあるから、事を顕（あらわ）にして不名誉なことで迷惑を及ぼすなど、本社の営業本部長から越前屋さんに釘を刺すクレームの電話があつたのだよ。」と課長は堪えていた胸の痞（つか）えを吐き出すように言った。

「営業本部長って、親会社から下りて来た人でしよう。親元から下って来たら、もう二度と戻れないのに、親の方ばかり見ていて情けないですよ。子会社に骨を埋める気概はないのですかね。」と隊長は不満顔だった。

「仕方がないだろう。うちの営業はほとんど親から仕事をもらってばかりだからね。親が建て子が管理する。親鳥から餌を食わせてもらう雛鳥みたいなもんさ。営業本部の情報活動と管理物件獲得が、うちの会社の生命線だから誰も文句は言えないよ。」

「浜山さんによると、ガスエンジン室から戻って来た設備員は、氣息奄々で床に倒れこん

でしまったそう、そりゃ、ごつついガス濃
度だったと思いますよ。鉄甲君が緊急遮断し
ていなかったら、マスコミが仰山押しかける
大事故発生で、名誉もへチマもないですよ。
西日本支社も大阪支店もいつぺんに吹っ飛ん
でいますよ。」と隊長が我が事のように怒りを
顕わにした。普段は温厚な人が、珍しく仁王
さんのように目の玉をひん剥いたので、課長
も思わず顔をそむけた。
「何事も未然に防ぐと結果オーライで、後は
人も企業も保身に走るのだよ。世の中って、
そんなもんじゃないか。隊長さん、分かって
下さいよ。」と課長は隊長を懐柔しようと必死
の形相になった。
「鉄甲君、それで良いのかね。何とか言えよ。
浜山さんは第二の人生だからご褒美なんか
は拘らないかも知れないけれど、こっちは大
卒で前途洋々なんですよ。ここで表彰して盛
り上げて、警備のプロパーを育て上げるべき
ですよ。東京本社警備管理部長も支社の警

備管理部長も親会社から下ってきただけの警備の素人で、警備の指導教育の資格者でもななく、警備員教育では頓珍漢で的外れの、まるで現場監督が人夫に対してするようない、滑るな、転ぶない、遅れるない、ばかりの講義をしていて評判悪いのですよ。」と隊長も意地になつた。

「中間管理職の悲哀だよ。私如きが本社のお偉いさんに逆らえるわけがないだろう。なあ、鉄よ、分かつてくれよ。子供に飴玉みたいな表彰なんて諦めてしまえ！」神田課長の言葉は刃があるようにブンと一太刀斬り回され、大一郎は喉元を搔っ切られ息の根を止められた心境になった。

「僕はどうでも良いです。新人の分際で意見は言いません。」と初めて大一郎は二人の会話の間に割って入り、心の中と裏腹の言葉を口にしました。

「鉄甲君、もっと欲を出せよ。人生ではそうそうチャンスは巡って来ないのだぞ。こんな

ことで潰されるな。」と隊長から発破を掛けられた。
「鉄よ、ご苦労さんだった。これから堺東辺りで一杯奢ってやるよ。岡本さんも一緒にどうですか。」と課長が静かに言った。
「私は今晚用事がありますから、時間になつたら失礼させてもらいます。」と隊長はにべもなく課長の誘いを断つた。
「僕もこれから用事があります。」と大一郎も不愉快な気分になり、すげなく断つた。
「鉄、お前みたいなチンピラに何の用事があるんだ！」
「僕にだって用事くらいあります。」と咄嗟のことで具体的に断る口実を思い付かなかつた。
ただ飲兵衛課長に連れまわされるのは、もう懲り懲りで反射的に出た科白だった。先程来の二人の会話を聞いて、自分のガス緊急遮断弁操作の功労が表彰されないことは分かつた。曲がりなりにも経営学を勉強した大一郎には、親会社と子会社の力学的関係など百

も承知のこと、神田課長の力不足を恨んで
も詮無いことは理解している。しかし、千載
一遇の雲居の女神の姿が遠ざかって行くのは
口惜しかった。だがガス爆発を未然に防いだ
ことで、今、自分もここに無事に生きている
という現実がある。未然に防いだことで順調
に事が運び、欠陥ガスブースターが内々で素
早く取り替えられ、もう何事もなかったかの
ように完全復旧し稼動している。Jサービス
の上層部は、ガス爆発という現象が発生しな
かったのをもっけの幸いとばかり、親会社と
ガス会社の施工責任という罪証を闇から闇へ
と葬り去り平常を装おって、ひたすら時間の
経過を待っているのだ。人の噂も七十五日と
いう。この現状のジレンマはどうにもならな
かった。せめて課長の飲酒の誘いを袖にして、
ささやかに溜飲を下げて自己満足しているだ
けであつた。神田課長は、青二才めが生意気
言いやがつて、と呟くと忌々しそうに外に出
て唾を吐くと、中央監視室のある大学本館の

方へ歩み去った。五時半を回った頃、大学正門で立番中の大一郎には目もくれず、課長は仏頂面で一足先に帰って行った。間もなく本日の日勤勤務を終え、長居駅で降りた大一郎は、コンビニでロング缶のビール一打のパックとツマミにピザ、それにハンバーグ弁当を買って寮へ帰った。部屋には、代々の住人が申し送りのように置いていった旧式の小さな冷蔵庫や古いテレビや古い扇風機があった。冷蔵庫の中は、たちまち缶ビールで一杯になった。テレビを点けたら、古い写真のようなザラザラと荒い画面に巨人・阪神戦が映っていた。東京っ子の彼は大学の巨人最良だったが、試合は序盤から阪神が大量リードのワンサイドゲームの様相だった。何だか癪に障り缶ビールの一気飲みをした。彼はアルコールに特別強い体質ではない。頭の芯が痺れる心地になリ、すぐにもう一本ビールを取り出した。その間に又、巨人と阪神の点差が広がった。又もや缶ビールを一気飲みすると乱暴にテレ

ビのスイッチを平手で叩いて切った。静寂の
戻った部屋に扇風機の回る雑音だけが残った。
三本の缶ビールを取り出した。アルコール
のだいぶ沁み込んだ脳に課長の声が木霊した。
何がチンピラだ、青二才だ、部下の偉大な功
労を隠して平気なのか。警備員教育で、士気
の高揚とか信賞必罰とか言っただけだ。能無
しの自分こそがチンピラ以下、青二才以下じ
やないか、と怒りが込み上げると、ビールを
口に運ぶピッチがますます早くなった。やが
て思考が朦朧とし、夢心地で札幌の街を想っ
た。深夜の病室でのピカソの女と若いナース
の修羅場、彼をもぐりと馬鹿にしたイタチや
らキューリやらお結びやらの変な顔をした警
備員達、リストカットした少女を亡霊と間違
いトイレに逃げ込んだ情けない自分の姿、思
い浮かべる度に、冷えの悪い冷蔵庫の扉を開
けて生温いビールを喉に流し込んだ。ビール
は一日一本の晩酌のつもりでケース買いした
ことも忘れてしまっていた。札幌駅近くの駐

車場勤務が酔い痴れた脳裏に浮かんだ。料理
学校の学生でアルバイトの女ガードマン美香
の厚化粧の顔が記憶のスクリーンにクローズ
アップされた。美香の夜のバイト先、ススキ
ノのキャバクラでぼったくられた十万円は痛
かった。痛かったと言え、日暮れのカムイ
コタンの山中で美香に放り出され、大蛇に怯
えて帰途を躊躇しているうちに真つ暗闇にな
った山路で、妖怪や浮遊霊・地縛霊に襲われ
た妄想で転げ廻り、飯場仲間の青い目の親父
さんや辰つつあんに擦り傷だらけの身を救
助されたことが思い浮かんだ。美香が今でも
恨めしい。「ドブス美香の糞ッタレ！」と酩酊
して大声を上げた時には、冷蔵庫の缶ビール
は残り一本になっていた。一本きり残しても
しようがないと最後の一本を喉に流し込みな
がら、北海道でただ一人、偶然だが鉄甲家の
檀家寺の縁で親切にしてももらった山下さん
の優しい顔を思い出すと、彼の目に自然と涙が
こぼれ、しばらく嗚咽をもらした。鉄仮面の

大男の忍び泣きなんてマンガそのものじゃないかと思うと、今度は、大一郎は一人可笑しくなつて声を上げて笑つた。泣き上戸、笑い上戸とは聞いた言葉だが、自分は泣き笑い上戸か、それとも下戸なのかと考えているうちにやたらと眠気を催し面倒くさくなつて、押入から枕と毛布を引っ張り出し、蛍光灯の紐を引っ張つて消灯すると、そのまま倒れこむように畳に直に寝込んだ。夜中にトイレに起きたか記憶も曖昧だつた。いつの間にか蟬の聲がうるさい。窓外はもう明るくごく自然に目が覚めた。先代の住人が置いていた安物の置時計の針はちょうど八時を指していた。大学正門勤務の日勤の日だつた。もう、とつくに朝礼が済んだ時刻で今更ジタバタしても仕方ない。頭の全体にズキズキと鈍痛があり、喉は渴いて吐気もした。尿意を催したのでトイレに入つて吃驚した。床がビショビショに濡れて小便臭かつた。夜中、電柱に小便を垂れる夢を見たような気がする。夢現に朦朧た

る意識でトイレに起きて、便器の蓋に向けて小便をジャジャアひっつけたのだろうが全く記憶にない。とにかく職場に電話をしななければならぬ。警備員教育の『報告連絡』や『警備員の使命と心構え』で、口酸っぱく指導を受けたことを覚えている。顔も洗わずに表へ出て、最寄の公衆電話からP大学正門の警備員詰所に電話した。最初に電話に出たのは、隊長の腰巾着の坊主頭の声に違いなかった。今日は休もうと思った。理由を聞かれたら体調不良のせいにしようと考えていた。「鉄甲ですが、今日は休ませて下さい。」「何やて！見習の分際で欠勤するのかい！毎日、事務局から上番の警備員の数を見に来るんだぞ。ポスト数が足らなかったら警備契約不履行になるんだぞ。今からすぐに出て来い。」と頭ごなしに怒鳴られた。売り言葉に買い言葉、大一郎はまだ宿酔いもあつて理性が麻痺していた。何が何でも休んでやる。こういう時は、親を殺せば一番効き目がある、と

学生時代に仲間と笑い合っていたのを思い、
反射的に悪知恵を働かせた。
「実は母が今朝死んだのです。忌引にして下
さい。」咄嗟に聞いた嘘である。さすがの茶坊
主もちよつと息を呑んだようで、すぐに隊長
が代わって電話口に出た。
「鉄甲君、おかんが亡くならはったのか。そ
れは気の毒にご愁傷様。君は試用期間中だか
ら、忌引休暇はないけど、七日間の休みは認
められるよ。但し、欠勤扱いだからな。」と母
親の名前、享年、実家の住所、電話番号を聴
取された。
「病名は何だったのかね。葬儀の日取りも分
かっていたら、支店の方に報告しといてやる
よ。」と言われたが、そんなことはまだ分から
ないと答えるしかなかった。とにもかくにも
久方振りに東京に帰られる、と気分が落ち着
いた。朝から蒸し暑かったが、昨日までの強
烈な日差しはなく、大阪の空は濁ったような
曇天だった。御堂筋線一本で新大阪に着き、

十時過ぎの新幹線に乗った。太平洋側から小型台風が近づいていくと、車内の電光ニュースに流れた通り、名古屋を過ぎたあたりから空が薄暗くなり、時折激しい雨が窓に打ちつけたが、列車の運行は順調のようだった。気分的には家を出てから半年ほど経っている心地がした。考えてみたら、五月の連休明けに札幌に向かっていた、今日までまだたったの二ヶ月位しか過ぎていなかった。食欲は全くなく新大阪駅のホームの自販機で買ったペットボトルのオレンジジュースに時々口をつけた。自由席車両であり名古屋で空いていた隣席に若いサラリーマン風の客が一旦座ったが、すぐに嫌な顔をして別の空席に移った。大一郎は初めて自分の汗臭い体臭に気がついた。昨夜は酔い潰れてシャワーも浴びずに寝込んでしまった。昨日は猛暑の中で一日働いていたから、朝には乾いて気がつかなかったが、一度は汗ビツシヨリになっってしまった。下着を付けていたのだ。一日中、警備帽をかぶ

つていたから、頭髮も悪臭をプンプンと周囲に放っているのだろう。体臭は意外と自分には気がつかないものである。茶坊主の言い草に腹が立ち、そそくさと寮を出たから下着の着替えも忘れていた。次は終点の東京だから、もう誰も隣席に来ないと安堵した。熱海を過ぎトンネルを抜け出た辺りから雨脚は弱くなつたが、木々の枝は風に激しく揺れていた。もう二日酔いの悪寒はほとんど消えかかつていた。自分のこの約二ヶ月間の警備員生活を思った。呑気な学生時代に較べたら、激しく揺れた生活を過ごして来たと述懐した。たつた二ヶ月余の体験で警備業界を語るのは不遜だとは思ふが、実態は五十歩百歩に違いないと思う。新任教育で、今や全国の警備員数は四十数万人と講師が言っていた。自衛隊員・警察官数・消防署員、消防団員数を遥かに凌駕する一大勢力だ。しかし、札幌の美香のようなアルバイト警備員、元女子プロレスラーの豆タンク小母さんのようなパート警

備員、旭川で経験した二号警備（交通誘導・雑踏警備）には、登録制により自宅で仕事を待機している者が大勢いるそう、これらの数字はどうなっているのだろうか。その他、二つ以上の警備会社に登録して稼いでいる者もいて、公称の警備員四十数万にはダブルカウンセトが、結構含まれているように思う。講師が言う、警備員の常駐するところは警察の出先機関だ、はいかなものか。何の権限も与えられなくて何が出来るというのだろうか。一〇番、一一九番だけなら誰でも出来る。上手に通報するのがプロだなんて、プロでなくても国民なら誰でも要領よく緊急通報すべきだ。警備員を信用しなくて、資質の向上なんてあり得ないだろう。大一郎の想念は頭の中を駆け巡った。電光掲示板に『小田原駅通過中』の文字が流れた。雨は止んでいるが、どんよりした灰色の白昼の光りの中で、相変わらず木々の枝が激しく風に揺れていた。警備員教育を実施することが出来るのは、規則で警備

員指導教育者の有資格者や教育内容に該当する警備員検定合格者に限られているが、それでも教育実施者本人が警備員登録されていたら、自分にも現任教育の受講義務があるというから、このややこしさは一体何だろう。現実に、そんな空疎な法解釈を厳しく守っていない会社があるのだろうか。あっても教育実施簿という紙の上だけのことではないのか。今日は講師で、明日は受講生として同じ講義を聞くのかい？ 昼過ぎて、大一郎の身体からアールコールの精分が抜け出てしまったようで、ようやく正気になった大一郎の頭脳は冴えていた。消防設備に通じた元消防署員や施設・建築物の構造に精通した建築家や設備施工の専門家が何ゆえに警備員教育をしても法定警備員教育と認めないのか？ 警備員が年に数回だけ、現任教育会場で一堂に会すれば、経営者の社長・重役や警備管理の部長クラスは何か挨拶して当たり前だし、ついでに当面の警備環境や警備財務状況を訓示して、警備員の意

識変革、士気の高揚を図って然るべきである。

それでも警備員教育にならず、教育実施簿に記載されないとは面妖に思った。大体が『教育実施簿』に記載されている通り、教育が実施されたのか、甚だ怪しげであった。列車は新横浜駅を定時に通過した。いよいよ終着の東京駅が近づいたのに、大一郎の頭から警備業への思念は消えなかった。警備業は、いわゆる労働者派遣が禁止されて、請負契約になつているそうだった。だから、現場施設の警備派遣隊という名称自体に違和感を覚える。警備員に対する指揮命令は、請負の警備会社側にあるはずだ。それにも係わらず、施主自らが警備員を自分の配下において指揮命令を下しているところが多いようだ。また警備会社にしても、採用の警備員を配置のしつぱなしにして、ろくすっぽ現場巡回指導にも来ないのだから、実態は請負業務ではないだろう。

結局、警備員という名の労働者を現場に派遣しているのだ。志して入った警備業界だった

が、輝かしい将来性があるのか疑問だ。警備員の年令構成が変だ。若年層を裾野に中年層、高年令層と積み上げたピラミッド型こそが安定した構造なのに、当初からまるつきり逆さまの高年令者が一番多い逆三角形に立っている、安定がとても危うい。これでは警備員四十数万、眠れる獅子なら目覚めて咆哮する日もあろうが、張子の虎では永遠に救われる日は来ないだろう。「間もなく終点、東京」のアナウンスがあった。鉄甲大一郎は、ようやくく警備員を辞めて八百屋の跡取りになろうと決心がついた。何も実家に大阪土産を買わなかったことに気がついて後悔した。後悔先に立たずだが、荷物の整理や退職の手続きで、もう一度大阪には行かねばならず、その時のことにしようと思いを取り直した。やはり札幌の山下さんが紹介してくれた仕事をないがしろには出来ない。彼は若輩者だが、まだ飛ぶ鳥跡を濁さずの常識は持ち合わせていた。東京駅から山手線の西日暮里へ、西日暮里から

地下鉄千代田線で町屋へ、町屋から都電荒川線の三ノ輪橋行の懐かしいチンチン電車に乗車した。いつの日か警備業界がまともな姿になっっていたら、八百屋をやめて警備業を立ち上げてみようかと、と大一郎は、又もやいつも癖の白昼夢に浸りながら電車の中で揺れていた。

時に午後二時過ぎ、実家の八百屋の店先では、『ご母堂様のご逝去の報に接し、謹んでお悔み申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。』Jサービス大阪支店長海野栄作』の弔電に続き、Jサービス西日本支社長越前屋勇一名義の弔いの花輪が届いて、父母が目を白黒させていた。

終